Dell[™] NetVault[™] Backup Plug-in for Oracle[®] 10.0.5 ューザーズ・ガイド



Copyright[©] 2015 Dell Inc. All rights reserved.

本製品は米国および国際的な著作権法および知的財産保護法によって保護されています。Dell[™]、Dell ロゴ、および NetVault は米国またはその他の司法管轄区域における Dell Inc. の商標です。Oracle は、米国またはその他の国、あるいはその両方にお ける Oracle の登録商標です。Linux は、米国、他国、またはその両方における Linus Torvalds の登録商標です。Windows、お よび Windows Server は、米国および他国における Microsoft Corporation の登録商標です。商標や商品名を有する事業体、ま たはそれらの商品を表すために、他の商標および商品名が本書で使用されている場合があります。Dell は、第三者の商標や商 号の独占的所有権を否認いたします。本書に記載されたその他のすべてのマークおよび名称は、各社の商標である可能性があ ります。

凡例

△ 注意:注意アイコンは、指示に従わなかった場合に、ハードウェアの損傷やデータの損失につながる可能性があることを表しています。

▲ 警告:警告アイコンは、物的損害、人身傷害、または死亡事故につながるおそれがあることを示します。

① **重要、メモ、ヒント、モバイル、**またはビデオ:情報アイコンは、サポート情報を表しています。

NetVault Backup Plug-in for Oracle ユーザーズ・ガイド 更新 - 2015 年 7 月 ソフトウェアのバージョン - 10.0.5 OAG-101-10.0.5-EN-01

目次

Dell [™] NetVault [™] Backup Plug-in for Oracle [®] - はじめに8
Dell NetVault Backup Plug-in for Oracle: 概要 8
主な利点
機能概要
対象ユーザー
参考資料
パックアップ計画の策定
バックアップ計画の定義:概要11
利用可能なバックアップ方法11
ユーザー管理によるバックアップ方法12
Recovery Manager (RMAN) によるバックアップ方法
サポートされる Oracle ファイル・タイプ14
RMAN によるバックアップ計画の定義15
RMAN リポジトリの場所の選択
RMAN テーブルスペースおよびデータファイルのバックアップ・タイプの確認16
制御ファイルのバックアップ・タイプ17
その他のバックアップ・タイプ18
リカバリ・カタログのバックアップ計画19
バックアップ・シーケンス例
バックアップ格納先の計画定義21
Oracle Flashback Technology
プラグインのインストールと削除
前提条件 23
NetVault Backup サーバーおよびクライアント・ソフトウェア
ARCHIVELOG モードのデータベース
RMAN バックアップの前提条件
Windows のローカル管理者グループへの Oracle ユーザーの追加
非 RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレクトリの識別
RMAN リポジトリの作成
ターゲット・データベースの登録
制御ファイルの自動バックアップ有効化
Flashback Database の有効化
Enabling Block Change Tracking の有効化
シングル・インスタンスの非 RAC 環境の推奨構成
プラグインのインストール
プラグインの削除
プラグインの設定

RMAN バックアップ用デフォルト・ターゲット・セットの定義
デフォルト設定の構成
データベースの追加
データベース情報の編集
データベースのパスワード設定40
保存したパスワードの消去40
データベースの削除
データベースの詳細表示....................................
RMAN のポストバックアップ・スクリプトを使用する.................42
言語サポート
ユーサー管理バックアッフの実行
バックアッフ対象テータの選択
ハックアッフ・オフションの選択
RMAN バックアップの実行
バックアップ対象データの選択
バックアップ・オプションの設定
ジョフのファイナライズと実行
Oracle ACFS のバックアップ
Oracle [®] Flashback Database の使用 58
Oracle [®] Flashback Database の使用
Oracle® Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要
Oracle® Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要
Oracle® Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要
Oracle® Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要
Oracle® Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 キプラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストアとリカバリ: 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61
Oracle® Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 .58 フラッシュバック・ログ .58 Flashback Database ステータスを表示する .58 Flashback Database のオプション .59 Flashback Database の制約 .59 本プラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア .60 データのリストア .61 データのリストアとリカバリ : 概要 .61 ユーザー管理リカバリ .61 RMAN リカバリについて .63
Oracle® Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 .58 フラッシュバック・ログ .58 Flashback Database ステータスを表示する .58 Flashback Database のオプション .59 Flashback Database のオプション .59 Flashback Database の制約 .59 ギプラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア .60 データのリストア .61 データのリストアとリカバリ : 概要 .61 ユーザー管理リカバリ .61 RMAN リカバリについて .63 ユーザー管理リストアの実行 .67
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 Flashback Database の制約 59 ボプラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 ボータのリストアとリカバリ : 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 ユーザー管理リストアの実行 63 ユーザー管理リストアの実行 67 リカバリ対象データベースの準備 67
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 本プラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 データのリストアとリカバリ : 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 ユーザー管理リストアの実行 67 リカバリ対象データベースの準備 67 リストア対象データの選択 67
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 オプラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 データのリストアとりカバリ: 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 スーザー管理リカバリ 63 ユーザー管理リストアの実行 67 リカバリ対象データベースの準備 67 リストア対象データの選択 67 ジョブのファイナライズと実行 68
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 マラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 データのリストアとリカバリ : 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 スーザー管理リストアの実行 67 リカバリ対象データの選択 67 リストア対象データの選択 67 ジョブのファイナライズと実行 68 データベースのリカバリ 68
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 キプラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 データのリストアとリカバリ : 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 スーザー管理リカバリ 61 スーザー管理リカバリ 61 スーザー管理リカバリ 61 スーザー管理リカバリ 61 マリカバリ対象データの実行 67 リカバリ対象データの選択 67 ジョブのファイナライズと実行 68 データベースのリカバリ 68 データベースを開く 68
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 キプラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 データのリストアとりカバリ : 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 スーザー管理リカバリ 63 ユーザー管理リストアの実行 67 リカバリ対象データベースの準備 67 ジョブのファイナライズと実行 68 データベースのリカバリ 68 データベースを開く 69 その他のユーザー管理リストア手順 69
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュパック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 本プラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 ボーダのリストアとリカバリ : 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 RMAN リカバリについて 63 ユーザー管理リストアの実行 67 リカバリ対象データベースの準備 67 リカバリ対象データベースの準備 67 ジョブのファイナライズと実行 68 データベースを開く 68 データベースを開く 69 その他のユーザー管理リストア手順 69 制御ファイル、データファイル、または個々のアーカイブ・ログ・ファイルの 69
Oracle [®] Flashback Database の使用 58 Flashback Database : 概要 58 フラッシュバック・ログ 58 Flashback Database ステータスを表示する 58 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database のオプション 59 Flashback Database の制約 59 ホプラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア 60 データのリストア 61 ボータのリストアとリカバリ: 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 アータのリストアとリカバリ: 概要 61 ユーザー管理リカバリ 61 アータのリストアとリカバリ: 概要 61 ユーザー管理リストアの実行 63 ユーザー管理リストアの実行 67 リカバリ対象データベースの準備 67 リストア対象データの選択 67 ジョブのファイナライズと実行 68 データベースのリカバリ 68 データベースを開く 69 その他のユーザー管理リストア手順 69 制御ファイル、データファイル、または個々のアーカイブ・ログ・ファイルの 69

リストア対象データの選択 .71 リストア・オブションの設定 .72 ジョブのフィナライズと実行 .80 非 RAC環境で使用可能な RMAN リカバリ・タイプ .80 自動パックアップからの制御フィルのリストア .80 同一サーバーへの個別データファイルおよびテーブルスペースのリカバリ .81 データペース全体を同一サーバーにリカバリする .82 RMAN を使用した障害復旧の実行 .82 RMAN を使用しただきの他のリストア手順 .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 アーブル・レベルのリカバリの実行 .98 サカパリ・カタログの管理 .103 リカバリ・カタログの専同期化 .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 RMAN CLI の使用 .105 SBT TAPE チャネル値立の確認 .105 SBT TAPE チャネル値立の確認 .107 その他のパラメータ:「format」節 .107 その他のパラメーク:「format」節 .107 その他のパラメーク:「format」節 .107 その他のパラメーク:「format」節 .107 その他のパラメーク:「format」節 </th <th>RMAN リストアの実行</th> <th>70</th>	RMAN リストアの実行	70
リストア・オブションの設定	リストア対象データの選択	71
ジョブのファイナライズと実行 .80 非 RAC 環境で使用可能な RMAN リカバリ・タイブ .80 自動パックアップからの制御ファイルのリストア .80 同一サーバーへの個別データファイルおよびテーブルスペースのリカバリ .81 データベース全体を同ーサーバーにリカバリする .82 RMAN を使用した障害復旧の実行 .82 RMAN を使用したた障害復旧の実行 .82 RMAN を使用したその他のリストア手順 .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 アイルの名前またなる中ーダースの複製 .89 アーブル・レベルのリカバリの実行 .98 リカパリ・カタログの専同期化 .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 RMAN CLI の使用 .105 CLI ベースの RMAN パックアップおよびリストアの事前要件 .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .107 適切な RMAN 案行可能ファイル使用の確認 (Linux のみ) .107 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「send」節および「PARMS」節 .109 NetVault Backup メディア名の照会 .116 CLI ペースのリストアを実行する .117 Oracle® RAC 環境におけるブラグインの使用 .118 Oracle® RAC 環境におけるブラグ	リストア・オプションの設定	72
非 RAC 環境で使用可能な RMAN リカバリ・タイプ .80 自動バックアップからの制御ファイルのリストア .80 同一サーバーへの個別データファイルおよびテーブルスペースのリカバリ .81 データベース全体を同ーサーバーにリカバリする .82 RMAN を使用した標書復旧の実行 .82 RMAN を使用したその他のリストア手順 .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 アーブル・レベルのリカバリの実行 .98 サイン・レベルのリカバリの実行 .98 リカパリ・カタログの再同期化 .03 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .105 CLI ベースの RMAN パックアップおよびリストア 概要 .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .107 CLI 基本パックアップを実行する .107 CLI 基本パックアップを実行する .107 その他のパラメータ:「format」節 .107 その他のパラメータ:「format」節 .107 その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 .109 NetVault Backup メディア名の照会 .116 CLI ベースのリストアを実行する .117 Oracle® RAC 環境におけるブラグインの使用 .118 Oracle RAC: 振要 .18 参	ジョブのファイナライズと実行	80
自動パックアップからの制御ファイルのリストア .80 同ーサーパーへの個別データファイルおよびテーブルスペースのリカパリ .81 データペース全体を同一サーパーにリカパリする .82 RMAN を使用した障害値旧の実行 .82 RMAN を使用したた障害値目の実行 .82 RMAN を使用したたで他のリストア手順 .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 アーブル・レスルのリカパリの実行 .98 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .89 アーブル・レベルのリカパリの実行 .98 リカパリ・カタログの再同期化 .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 CLI ベースの RMAN パックアップおよびリストア: 概要 .105 ごロベースの RMAN パックアップおよびリストアの事前要件 .105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ) .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .106 CLI ペースのパックアップを実行する .107 Cul 基本パックアップを実行する .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .109 NetVault Backup メディア名の照会 .116 CLI ベースのリストアを実行する .117 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Oracle [®] RAC 環境におけるプラググインの使用 .119	非 RAC 環境で使用可能な RMAN リカバリ・タイプ	80
同一サーバーへの個別データファイルおよびテーブルスペースのリカバリ .81 データペース全体を同一サーバーにリカバリする .82 RMAN を使用した障害復旧の実行 .82 RMAN を使用したに障害復旧の実行 .82 RMAN を使用したになの他のリストア手順 .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .89 デーブル・レベルのリカバリの実行 .98 リカバリ・カタログの管理 .103 リカバリ・カタログの専両期化 .103 CROSSCHEKコマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 RMAN CLIの使用 .105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア * 概要 .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .107 CLI ペースのパックアップを実行する .107 CLI ペースのリストアを実行する .107 その他のパラメータ: 「send」節および「PARMS」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .117 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの大・レール .122 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プ・プロセス .121	自動バックアップからの制御ファイルのリストア	80
データベース全体を同一サーバーにリカバリする .82 RMAN を使用した障害復旧の実行 .82 RMAN を使用した障害復旧の実行 .82 RMAN を使用したになの他のリストア手順 .88 フィルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 フィルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 アイルの名前または場所の変更(またはその両方) .89 フィルの名前または場所の変更(またはその両方) .89 フィルの名前または場所の変更(またはその両方) .89 フィルの名前または場所の変更(またはその両方) .89 フィルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 非れる(環境におけるプータベースの複製) .98 フィルシベルのリカバリの実行 .98 ワインレベルのリカバリの実行 .98 ワイル・レベルのリカバリの実行 .98 ワイレ・レベルのリカバリの実行 .98 アーブル・レベルのリカバリの実行 .98 マーブル・レベルのリカバリの実行 .98 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア: 概要 .105 適切な RMAN 実行可能フィノル使用の確認 (Linux のみ) .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティリティの実行 .107 CLI ベースのバックアップ・「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメディアを実行する	同一サーバーへの個別データファイルおよびテーブルスペースのリカバリ	81
RMAN を使用した障害復旧の実行 .82 RMAN を使用したその他のリストア手順 .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 非 RAC 環境におけるデータベースの複製 .89 テーブル・レベルのリカパリの実行 .98 リカパリ・カタログの管理 .103 リカパリ・カタログの管理 .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .105 CLI ベースの RMAN パックアップおよびリストア 概要 .105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ) .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nytuginaccess」ユーティリティの実行 .106 NetVault Backup 「nytuginaccess」ユーティリティの実行 .106 NetVault Backup 「nytuginaccess」ユーティリティの実行 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Oracle RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Øracle RAC 環境におけるプラグインの使用 .122 RAC 環境用 RMAN パックアッブ・ブロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境用 RMAN パックアッブ・ブロセス .121 ライセンス取得 <td< td=""><td>データベース全体を同一サーバーにリカバリする</td><td>82</td></td<>	データベース全体を同一サーバーにリカバリする	82
RMAN を使用したその他のリストア手順 .88 ファイルの名前または場所の変更(またはその両方) .88 非 RAC 環境におけるデータベースの複製 .89 デーブル・レベルのリカバリの実行 .98 リカバリ・カタログの管理 .103 リカバリ・カタログの再同期化 .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 RMAN CLI の使用 .105 CLI ペースの RMAN パックアップおよびリストア:概要 .105 CLI ペースの RMAN パックアップおよびリストアの事前要件 .105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認 (Linux のみ) .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .106 NetVault Backup ジアップ後実行する .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「format」 .117 Oracle® RAC 環境におけるブラグインの使用 .118 Oracle® RAC 環境用 RMAN パックアップ・プロセス .120 RAC 環境用 RMAN パックアップ・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境用 RMAN パックアップ・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境内 RMAN リ	RMAN を使用した障害復旧の実行	82
ファイルの名前または場所の変更(またはその両方)	RMAN を使用したその他のリストア手順	88
非 RAC 環境におけるデータペースの複製	ファイルの名前または場所の変更(またはその両方)	88
テーブル・レベルのリカバリの実行 .98 リカバリ・カタログの管理 .103 リカバリ・カタログの専同期化 .103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する .103 RMAN CLIの使用 .105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア:概要 .105 ご切な RMAN バックアップおよびリストア:概要 .105 適切な RMAN メデックアップおよびリストアの事前要件 .105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ) .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .106 CLI ボースのパックアップを実行する .107 CLI 基本パックアップの側 .107 その他のパラメータ:「format」節 .107 その他のパラメータ:「format」節 .107 その他のパラメータ:「format」節 .117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 .117 Oracle RAC: 概要 .118 Øradt RAC: 概要 .119 RAC 環境用 RMAN パックアップ・プロセス .120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境の プラグインのインストール .122 RAC 設定の要件 .122 RAC 設定の要件 .122 アンストールの前提条件 .122 アンストールの前提条件 .126 プラグインの役 ンス	非 RAC 環境におけるデータベースの複製	89
リカバリ・カタログの管理 103 リカバリ・カタログの再同期化 103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する 103 CRMAN CLI の使用 105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア:概要 105 ご切な RMAN メックアップおよびリストア:概要 105 適切な RMAN メデクアップおよびリストア: 概要 105 ご切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ) 105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 CLI ベースのパックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップを実行する 107 その他のパラメータ: 「format」節 107 その他のパラメータ: 「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 118 Oracle RAC: 概要 118 参考資料 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境の プラグインのインストール 122 RAC 環境の のプラグインのインストール 122 RAC 環境の のブラグインのインストール	テーブル・レベルのリカバリの実行	98
リカバリ・カタログの専同期化 103 リカバリ・カタログの再同期化 103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する 103 RMAN CLI の使用 105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア: 概要 105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認 (Linux のみ) 105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 CLI ベースのパックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップ例 107 その他のパラメータ: 「format」節 107 その他のパラメータ: 「format」節 107 その他のパラメータ: 「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 118 Ørade RAC: 概要 118 Øraj資料 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境のプラグインのインストー・ 122 RAC 環境へのブラグインのインストー・ 122 インストールの前提条件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126		
リカパリ・カタログの再同期化 103 CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する 103 RMAN CLI の使用 105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア: 概要 105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認 (Linux のみ) 105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess] ユーティリティの実行 106 CLI ベースのパックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップ例 107 その他のパラメータ: 「format」節 107 その他のパラメータ: 「format」節 107 その他のパラメータ: 「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 118 Øracle RAC: 概要 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境の プラグインのインストール 122 RAC 環境の プラグインのインストール 122 RAC 環境の プラグインのインストール 122 アインストールの前提条件 122 プラグインの設定 126	リカバリ・カタロクの管理	103
CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リボジトリを更新する .103 RMAN CLI の使用 .105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア:概要 .105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストアの事前要件 .105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ) .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .106 CLI ベースのバックアップを実行する .107 CLI 基本バックアップ例 .107 その他のパラメータ:「format」節 .107 その他のパラメータ:「format」節 .109 NetVault Backup メディア名の照会 .116 CLI ベースのリストアを実行する .117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Ø考資料 .119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス .120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境の プラグインのインストール .122 RAC 設定の要件 .122 インストールの前提条件 .122 プラグインのインストール .126 プラグインのみンストール .126	リカバリ・カタログの再同期化	103
RMAN CLI の使用 .105 CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア 部i 要件 .105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ) .105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 .106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 .106 CLI ベースのバックアップを実行する .107 CLI 基本バックアップ例 .107 CLI 基本バックアップ例 .107 その他のパラメータ: 「format」節 .107 その他のパラメータ: 「send」節および「PARMS」節 .109 NetVault Backup メディア名の照会 .116 CLI ベースのリストアを実行する .117 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 参考資料 .119 配備計画の定義 .119 RAC 環境用 RMAN パックアップ・プロセス .120 RAC 環境用 RMAN パックアップ・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境のプラグインのインストール .122 RAC 設定の要件 .122 AC 環境へのプラグインのインストール .122 アンストールの前提条件 .122 プラグインのインストール .126 プラグインの設定 .126	CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更新する	103
CLI ベースの RMAN パックアップおよびリストア: 概要	RMAN CLIの使用	105
CLI ベースの RMAN パックアップおよびリストアの事前要件 105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認 (Linux のみ) 105 SBT_TAPE チャネル確立の確認 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 CLI ベースのバックアップを実行する 107 CLI 本バックアップ例 107 その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 118 Oracle RAC: 概要 118 Sh ま た いックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 RAC 設定の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインの改定 126	CII ベースの RMAN バックアップおよびリストア・概要	105
CLI マイル体用の確認 (Linuxのみ) 105 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 CLI ベースのバックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップ例 107 その他のパラメータ: 「format」節 その他のパラメータ: 「format」節 インの他のパラメータ: 「send」節および「PARMS」節 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 118 Oracle RAC: 概要 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 RAC 設定の要件 124 プラグインのみ 124 プラグインのみ 126	CLIベースの RMAN バックアップお上びリストアの東前亜性	105
Ale Sy & MIAN (ス) 9 He D (The Chick Color) 100 SBT_TAPE チャネル確立の確認 106 NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 CLI ベースのバックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップ例 107 その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 118 Oracle RAC: 概要 118 Ø racle RAC: 概要 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス 120 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 RAC 設定の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126	適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認 (Linux のみ)	105
NetVault Backup 「nvpluginaccess」ユーティリティの実行 106 CLI ベースのバックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップ例 107 その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 117 Oracle RAC: 概要 118 参考資料 119 配備計画の定義 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 設定の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126		106
CLI ベースのバックアップを実行する 107 CLI 基本バックアップ例 107 その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 118 Oracle RAC: 概要 118 Oracle RAC: 概要 118 Oracle RAC: 概要 119 配備計画の定義 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 設定の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126	SBT_IALE / (AFV) Lago Lago Lago Lago Lago Lago Lago Lago	106
CLI 基本バックアップ例 107 その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 117 Oracle RAC: 概要 118 参考資料 119 配備計画の定義 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 インストールの前提条件 124 プラグインの設定 126	(ロベースのバックアップを実行する)	107
その他のパラメータ:「format」節 107 その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle® RAC 環境におけるプラグインの使用 117 Oracle RAC: 概要 118 参考資料 119 配備計画の定義 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 インストールの前提条件 124 プラグインの設定 126	CII 其本バックアップ例	107
その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節 109 NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 117 Oracle RAC: 概要 118 ⑦racle RAC: 概要 118 参考資料 119 配備計画の定義 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126	その他のパラメータ・「format」節	107
NetVault Backup メディア名の照会 116 CLI ベースのリストアを実行する 117 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 117 Oracle RAC: 概要 118 S*考資料 119 配備計画の定義 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 RAC 環境の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126	その他のパラメータ: [send 節および [PARMS 節	109
CLI ベースのリストアを実行する .117 Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Oracle RAC: 概要 .118 Oracle RAC: 概要 .119 配備計画の定義 .119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス .120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境へのプラグインのインストール .122 RAC 環境へのプラグインのインストール .122 RAC 環境へのプラグインのインストール .122 アラグインの前提条件 .124 プラグインの設定 .126	NetVault Backup メディア名の照会	116
Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Oracle RAC:概要 .118 参考資料 .119 配備計画の定義 .119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス .120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境へのプラグインのインストール .122 RAC 設定の要件 .122 インストールの前提条件 .124 プラグインの設定 .126	(川ベースのリストアを実行する	117
Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用 .118 Oracle RAC:概要 .118 参考資料 .119 配備計画の定義 .119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス .120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス .121 ライセンス取得 .122 RAC 環境へのプラグインのインストール .122 RAC 設定の要件 .122 インストールの前提条件 .124 プラグインの没定 .126		••••
Oracle RAC:概要118参考資料119配備計画の定義119RAC環境用 RMAN バックアップ・プロセス120RAC環境用 RMAN リストア・プロセス121ライセンス取得122RAC 環境へのプラグインのインストール122RAC 設定の要件122インストールの前提条件124プラグインのインストール126プラグインの設定126	Oracle [®] RAC 環境におけるプラグインの使用	118
参考資料 119 配備計画の定義 119 RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 RAC 設定の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126	Oracle RAC:概要	118
配備計画の定義	参考資料	119
RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス 120 RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 RAC 設定の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126	配備計画の定義	119
RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス 121 ライセンス取得 122 RAC 環境へのプラグインのインストール 122 RAC 設定の要件 122 インストールの前提条件 124 プラグインのインストール 126 プラグインの設定 126	RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス	120
ライセンス取得	RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス	121
RAC 環境へのプラグインのインストール	ライセンス取得	122
RAC 設定の要件	RAC 環境へのプラグインのインストール	122
インストールの前提条件	RAC 設定の要件	122
プラグインのインストール126 プラグインの設定	インストールの前提条件....................................	124
プラグインの設定	プラグインのインストール	126
	プラグインの設定	126
デフォルト属性の設定126	デフォルト属性の設定	126

Dell NetVault Backup Plug-in for Oracle 10.0.5 ユーザーズ・ガイド 5

RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレクトリの特定
本プラグインへのデータベース追加
データのバックアップ
ノード障害後のバックアップ実行128
RAC 環境におけるデータのリストア129
データベース全体の同一 RAC 環境へのリカバリ
RAC 環境での SPFILE のリストア
RAC 環境での制御ファイルのリストア
RAC 環境での障害復旧の実行
ノード障害後のリストアの実行136
RAC 環境でのデータベースの複製
フェイルオーバー・クラスタ環境でのプラグインの使用
Oracle サーバー・フェイルオーバー・クラスタリング:概要
重要な注意事項
プラグインのインストール
インストールの前提条件
ソフトウェアのインストール
プラグインのライヤンス 141
プラグインの設定とデータベースの追加 141
データのバックアップ $1/2$
= - 4 - 4 - 4 - 4 - 4 - 4 - 4 - 4 - 4 -
$\tau = 3000 \Lambda \Gamma $
, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用143
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard : 概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .146
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .146 システム構築 .146
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .144 システム構築 .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 143 Oracle [®] Data Guard:概要 143 配備計画の定義 144 プライマリのみからのバックアップ 144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ 144 スタンバイのみからのバックアップ 144 システム構築 146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ 147
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .144 システム構築 .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ .147 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .147
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .144 システム構築 .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ .147 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .147 マングル・インスタンス RAC .148
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .144 システム構築 .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ .147 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .147 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .148 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .149
Oracle® Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle® Data Guard: 概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 シライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 シライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 シライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 シシグル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .147 シングル・インスタンス RAC .148 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .149 Data Cuard 悪性 の の コ ラグ イン ストー 川 .150
Oracle® Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle® Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 メクマリおよびスタンバイのバックアップ .144 メステム構築 .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ .147 インスタンス .147 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .147 インスタンス RAC .147 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .148 マルチ・インスタンス RAC .149 Data Guard 環境へのプラグインのインストール .150 インスターンス RAC .150
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 プライマリンあよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .146 システム構築 .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ .147 インスタンス RAC .147 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .147 インスタンス RAC .149 Data Guard 環境へのプラグインのインストール .150 インストールの前提条件 .150 プニール .150
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 143 Oracle [®] Data Guard:概要 143 配備計画の定義 144 プライマリのみからのバックアップ 144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ 144 スタンバイのみからのバックアップ 144 システム構築 146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ 147 インスタンス 147 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ 147 インスタンス RAC 148 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ 149 Data Guard 環境へのプラグインのインストール 150 インストールの前提条件 150 プラグインのインストール 153 エーザー定義のバックアップ・タグの作成 153 判判 コーグーに、したびじょのであるい クロッチャークの アクロッチャーク アップ 153
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 .143 Oracle [®] Data Guard:概要 .143 配備計画の定義 .144 プライマリのみからのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .144 メタンバイのみからのバックアップ .144 メタンバイのみからのバックアップ .144 スタンバイのみからのバックアップ .146 システム構築 .146 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ .147 インスタンス .147 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .147 インスタンス RAC .148 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ .149 Data Guard 環境へのプラグインのインストール .150 インストールの前提条件 .150 プラグインのインストール .153 データのバックアップ .153 ゴーザー定義のバックアップ・タグの作成 .153 制御ファイルと SPFILE の手動バックアップの実行 .154
Oracle [®] Data Guard でのプラグインの使用 143 Oracle [®] Data Guard:概要 143 配備計画の定義 144 プライマリのみからのバックアップ 144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ 144 プライマリおよびスタンバイのバックアップ 144 スタンバイのみからのバックアップ 144 スタンバイのみからのバックアップ 144 スタンバイのみからのバックアップ 144 スタンバイのみからのバックアップ 146 シンブル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・ 147 インスタンス 147 シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ 147 インスタンス RAC 148 マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・ 149 Data Guard 環境へのプラグインのインストール 150 インストールの前提条件 150 プラグインのインストール 153 データのバックアップ 153 副御ファイルと SPFILE の手動バックアップの実行 154 データのリストア 154

Data Guard 環境で代替サーバーに対してリストアする
データベース全体のプライマリ・データベース・サーバーへのリカバリ155
トラブルシューティング
NetVault Backup 10.x サービス(netvault-pgsql)が Windows で開始しない157
データベースを追加できない
バックアップが失敗した
バックアップ・ジョブのハングアップ159
リストアが失敗した
用語集
Dell について
Dell へのお問い合わせ
テクニカル・サポート用リソース165

Dell[™] NetVault[™] Backup Plug-in for Oracle[®] - はじめに

- Dell NetVault Backup Plug-in for Oracle:概要
- 主な利点
- 機能概要
- 対象ユーザー
- 参考資料

Dell NetVault Backup Plug-in for Oracle:概要

Dell NetVault Backup (NetVault Backup) Plug-in for Oracle (以下、Plug-in for Oracle) は、 Oracle[®] Real Application Cluster (RAC) や Data Guard などを含む Oracle[®] 環境のリカバリ可能性に 対する信頼性を高め、複雑なスクリプトを作成する必要をなくします。本プラグインでは、Web ベースのユーザー・インターフェイス (WebUI) と自動化されたワークフロー・プロセスを使用し て、一元的に Oracle データベースのバックアップおよびリストア・ポリシーを確立、設定、定義で きます。ユーザー管理によるオンライン・バックアップ、またはフル機能の Recovery Manager (RMAN) ベースのバックアップがサポートされるため、Oracle データベースに関する詳細な知識を 習得しなくても、希望のバックアップ方法を柔軟に選択できます。本プラグインではきめ細かい制御 が可能で、データベース全体、個別のテーブルスペース、または個別のデータファイルをバックアッ プおよびリストアできるため、ダウンタイムを最小限に抑えられます。幅広いバックアップ・デバイ スが統合されるため、データの保護およびオフサイトへの保存によって障害復旧および業務継続性の 目標が満たされるという安心感を得ることができます。

Plug-in for Oracle は、リストアを高速化するとともに、柔軟なバックアップおよびリカバリ・オプ ションによって IT 要員の効率を最大化するように設計されています。また、本プラグインは、 Oracle RAC、Data Guard、自動ストレージ管理(ASM)、Flashback Database、透過データ暗号化 (TDE) などの Oracle 機能をサポートしています。本プラグインでは、ハードウェア障害やデータ損 失が発生した場合に高度なバックアップおよびリカバリ・オプションを利用できます。

主な利点

• 柔軟なバックアップおよびリカバリ・オプションによるリスクの軽減: Plug-in for Oracle は、ビジネス に不可欠な Oracle[®] データベースの簡略化されたバックアップおよびリカバリを可能にするツールを管 理者に提供します。本プラグインでは、包括的なバックアップ・ポリシーを柔軟に作成できます。また、 スクリプトを作成したり、手動でコマンドを発行したりする手間を省くことができ、Oracle データベー ス内部について理解する必要もありません。また、本プラグインでは、シンプルなユーザー管理による バックアップ、またはフル機能の RMAN ベースのバックアップを選択できるほか、自動化も増えていま す。さらに、本プラグインでは、RMAN リストア検証および RMAN トライアル・リカバリがサポートされ ており、バックアップ計画をあらかじめ確認できるので、リスクがさらに低減されます。

- リストアの高速化によりダウンタイムを最小化 必要なものだけをリストア: Plug-in for Oracle では、 データベースはバックアップ・オペレーション中もオンライン状態を維持しアクセス可能なため、ユー ザーのダウンタイムがありません。Oracle の Flashback Database と統合されたことで、物理データファ イルをリストアしなくても Oracle データベースを以前の時点まで巻き戻して、論理データの損傷やユー ザー・エラーによる問題を解決できるので、最大限の可用性を確保できます。必要に応じて、フル・リ ストア、増分リストア、時間、SCN、およびログのシーケンス・ナンバーに基づく PIT (Point-in-Time: 特定時点)リストアを実行できます。本プラグインは、きめ細かなリカバリが実現できるように設計さ れ、これにより、データベース全体、個々のテーブルスペース、または個々のデータファイルをリカバ リできます。同様に、必要に応じて読み取り専用ファイルをリストアできます。本プラグインでは、自 動化オプションにより、手動操作によってしばしば引き起こされる構文エラーを排除し、人的オペレー ションへの依存を低減します。
- ビジネス継続性を確保:ビジネス上重要なアプリケーションのデータ保護計画でオフサイト・バック アップは重要です。本プラグインは幅広いバックアップ・デバイスと NetVault Backup との統合を有効に 活用します。NetVault Backup では、バックアップの保存先バックアップ・デバイスを柔軟に選択するこ とができます。バックアップをオンラインで仮想テープ・ライブラリ(VTL)に保存できます。また、そ のジョブを複数の Oracle データベースや、その他の専用データベースで共有される物理テープ・ライブ ラリ、または一般的なバックアップ・ファイル用の物理テープ・ライブラリにも複製できます。

機能概要

- データをオンラインにした状態、すなわちアクセス可能な状態で、ユーザー管理によるデータベースの フル・バックアップを実行
- シングル・インスタンスおよびマルチ・インスタンス RAC および Data Guard 環境の保護
- データをオンラインにした状態、すなわちアクセス可能な状態で RMAN ベースのフル、差分、または累 積増分バックアップを実行
- パラメータ・ファイル、制御ファイル、アーカイブ REDO ログ・ファイル、および外部設定ファイル
- 複製データベースをバックアップしてローカルまたはリモートで複製データベースを作成
- データファイル・レベルまで保護
- Oracle[®]の ASM ファイルシステムまたは raw デバイス上に保存されたデータファイルを保護
- Flash Recovery Area (FRA) でのバックアップ・リカバリ・ファイルの保護
- パラレル・バックアップ・サポート
- 自動インスタンス設定
- Flashback Database の統合
- リストア検証とトライアル・リストアの実行
- データベース全体、個々のテーブルスペース、個々のデータファイルまたは破損データ・ブロックのみ をリストア
- 必要に応じて読み取り専用ファイルをリストア
- データファイル名の変更
- ポイント・アンド・クリック操作で、完全リカバリと、時間、SCN、およびログのシーケンス・ナンバー に基づく PIT リカバリを実行
- トライアル・リカバリ
- 代替ホストへのデータベースの障害復旧
- 幅広いバックアップ・デバイスと統合
- ポイント・アンド・クリック WebUI

対象ユーザー

ルーチン的なバックアップ操作の作成および実行に Oracle[®] データベース管理者の高度なスキルは要求されませんが、Oracle データベースのバックアップおよびリカバリ計画定義にはこのスキルが必要です。



- NetVault Backup ドキュメンテーション
 - 『Dell NetVault Backup インストレーション・ガイド』: このガイドでは、NetVault Backup サー バーおよびクライアント・ソフトウェアのインストール方法について詳しく説明しています。
 - 『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』: このガイドでは、NetVault Backup の 使用方法と、すべてのプラグインで共通の機能について詳説します。
 - 『Dell NetVault Backup CLI リファレンス・ガイド』: このガイドでは、NetVault Backup のコマン ドライン・ユーティリティについて説明しています。

これらのガイドは、http://support.software.dell.com/ja-jp からダウンロードできます。

- ① 重要: NetVault Backup は 10.0.0 から、NetVault Backup システムとインストールされているプラグインを 設定、管理、監視するための、WebUI を提供しています。このバージョンのプラグインのユーザーズ・ガ イドに記載されている手順は、この新しい WebUI の使用を前提にしています。NetVault Backup コンソー ル(NetVault Backup 9.x で使用できるユーザー・インターフェイス)による手順について詳しくは、古い バージョンのプラグインのドキュメントを参照してください。
 - Oracle[®] データベースのドキュメント
 - [Oracle® Database Backup and Recovery User's Guide]
 - [Oracle® Database Backup and Recovery Basics]
 - [Oracle® Database Backup and Recovery Reference]
 - [Oracle® Database Backup and Recovery Advanced User's Guide]

Oracle Database Documentation Library は、下記のリンクよりご確認いただけます。

- Oracle 12.1x : http://www.oracle.com/pls/db121/homepage
- Oracle 11.2x : http://www.oracle.com/pls/db112/homepage
- Oracle 11.1x : http://www.oracle.com/pls/db111/homepage
- Oracle 10.2x : http://www.oracle.com/pls/db102/homepage
- Oracle 10.1x : http://www.oracle.com/pls/db10g/portal.portal_demo3?selected=1
- Oracle 9.2 : http://www.oracle.com/pls/db92/db92.docindex?remark=homepage

2

バックアップ計画の策定

- バックアップ計画の定義:概要
- 利用可能なバックアップ方法
- サポートされる Oracle ファイル・タイプ
- RMAN によるバックアップ計画の定義
- Oracle Flashback Technology

バックアップ計画の定義:概要

データをバックアップする第一の目的は、障害によって引き起こされる損傷からリカバリし、通常の オペレーションをできる限り迅速に再開することです。このリカバリは、データを最大限に保護しな がらデータ損失を最小限に抑えるよう適切に策定されたバックアップおよびリカバリ計画があって初 めて達成されます。

効率的な計画を定義するには、まずリカバリ計画から着手し、リカバリ要件と、メディア障害、ユー ザー・エラー、データ損傷、Oracle[®] データベース・サーバーの完全な損失などさまざまな障害モー ドからリカバリするためのリカバリ技術を定義します。

各リストアおよびリカバリ要件によってバックアップ計画の要件が導き出されます。リカバリ計画の 決定後、以下のバックアップ要件を含むバックアップ詳細を定義します。

- バックアップを実行、保存、管理する Oracle 機能
- 実行するバックアップ・タイプ
- バックアップを実行する間隔
- 通常のスケジュール外にデータをバックアップする状況

通常、バックアップ計画を定義するときに、MTTR(平均リカバリ時間)と使用バックアップ容量との間にトレードオフが生じます。

以降のセクションでは、本プラグインを使用したバックアップ計画の策定に役立つ情報とガイドラインを示します。

利用可能なバックアップ方法

Plug-in for Oracle は、ユーザー管理と RMAN の2 種類のバックアップ方法を提供しています。本プラグ インは、純粋なユーザー管理によるバックアップ計画または純粋な RMAN ベースのバックアップ計画の 実装をサポートしています。つまり、バックアップ計画には、ユーザー管理バックアップか RMAN バッ クアップのいずれかを含める必要があり、両方を組み合わせて使用することはできません。

- ユーザー管理によるバックアップ方法
- Recovery Manager (RMAN) によるバックアップ方法

ユーザー管理によるバックアップ方法

Oracle[®] は引き続き、従来のユーザー管理バックアップおよびリカバリを実行する機能をサポートしています。この方法では、データベースを構成するファイルのバックアップとリストアは、ホストのオペレーティング・システム・コマンドと SQL*Plus のバックアップおよびリカバリ関連機能を組み合わせて使用することによって実行されます。

本プラグインのユーザー管理バックアップは、完全なポイント・アンド・クリック操作でフル・バッ クアップを実行する最も単純な形式のバックアップですが、Oracle データベースをリカバリする際 には、より多くの人的操作とデータベース管理者のスキルを必要とします。ユーザー管理リストア は、まずポイント・アンド・クリック操作で、さまざまなデータファイルをバックアップ・メディア から元の場所または新しい格納先にリストアすることから開始します。データファイルのリストアに 続いて、データベース全体またはその一部をリカバリします。ユーザー管理リカバリでは、リカバリ を必要とする対象を判断し、本プラグインの外で一連の SQL*Plus コマンドを実行することにより実 際のリカバリ・プロセスを手動で実行する必要があります。

ユーザー管理によるバックアップ方法は、リストア時間が長くなり、また複雑になりますが、最も単 純なバックアップ計画であるため、重要性の低いデータベースに適しています。

ユーザー管理による方法で使用できるバックアップおよびリストア計画について詳しくは、 『Oracle® Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』または『Oracle® Database Backup and Recovery User's Guide for 11g』を参照してください。

ユーザー管理バックアップは、サポートされているすべての Oracle バージョンで使用できますが、 Oracle ASM や FRA 環境ではサポートされていません。

Recovery Manager (RMAN) によるバックアップ方法

Oracle[®] が提供する RMAN は、Oracle データベース・サーバーで実行されているセッションを自動的 に統合し、さまざまなバックアップおよびリカバリ・アクティビティを実行します。また、RMAN リ ポジトリと呼ばれる、バックアップ、アーカイブ・ログ、およびそれ自体のアクティビティに関する 多数のメタデータの記録を管理することにより、バックアップ計画に関連する管理作業を軽減しま す。リストア操作では、RMAN でこの情報が使用されるため、リストアに使用するバックアップ・ ファイルを特定する必要がありません。

RMAN バックアップでは、バックアップ計画を定義する際に最大限の信頼性と柔軟性が提供されま す。本プラグインは、Oracle の RMAN ツールで使用可能な幅広いバックアップ・タイプとオプショ ンをサポートしているほか、人的操作やデータベース管理者のスキルにあまり頼ることなく多数のリ カバリ・シナリオを処理できます。リストアする対象、最新のバックアップ、また該当する場合は PIT リカバリのための時間、SCN、またはログのシーケンス・ナンバーを選択するだけで、本プラグ インが自動的にリカバリを実行するため、それ以上の操作は不要です。

RMAN は、バックアップおよびリカバリに適した Oracle ソリューションであり、非常に重要なデー タベースに最適です。リカバリ・プロセスで最大限の柔軟性が提供されるため、災害、メディア障 害、ユーザー・エラー、データベース損傷など障害の原因に関わらず、データベースを障害時点まで リカバリできます。

ユーザー管理バックアップと RMAN バックアップの機能の比較について詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery Basics』の「Feature Comparison of Backup Methods」を参照してください。同 ドキュメンテーションでは、RMAN による方法で使用可能なバックアップおよびリストア計画につい ても詳しく説明しています。

RMAN バックアップは、サポートされているすべての Oracle バージョンで使用できますが、マルチ・ インスタンス RAC データベースおよび Data Guard 環境用としては唯一サポートされているバック アップ方法です。また、Flashback Database は、本プラグインの RMAN ベースのバックアップでのみ 使用できます。 以下の図で RMAN ベースのバックアップおよびリカバリ・プロセスを説明します。

図 1. RMAN ベースのバックアップ



リカバリ・カタログ・データベース・サーバ

- 1 NetVault Backup WebUI でバックアップ・ジョブを定義します。
- 2 Plug-in for Oracle がジョブの定義を、対応する RMAN バックアップ・コマンドに変換します。
- 3 RMAN が Oracle[®] データベースのデータファイルからデータを読み込むバックアップ・コマンドを実行します。
- 4 RMAN が Oracle Media Management アプリケーション・プログラム・インターフェイス(API)を使用して、NetVault Backup サーバーの管理下にあるバックアップ・デバイスにバックアップ・ファイルを保存します。
- 5 RMAN がリカバリ・カタログ・リポジトリにバックアップ・メタデータを保存します。

図 2. RMAN ベースのリストアおよびリカバリ



リカバリ・カタログ・データベース・サーバ

- 1 NetVault Backup WebUI でリストア・ジョブを定義します。
- 2 Plug-in for Oracle がジョブの定義を、対応する RMAN リストアおよびリカバリ・コマンドに変換します。
- 3 RMAN がリカバリ・カタログ・リポジトリからバックアップ・メタデータを読み込みます。
- 4 RMAN が Oracle[®] Media Management API を使用して NetVault Backup サーバーの管理下にあるバック アップ・デバイスからバックアップを読み込みます。
- 5 RMAN が Oracle サーバーにデータファイルをリストアし、データベースをリカバリします。

サポートされる Oracle ファイル・タイプ

Plug-in for Oracle では、Oracle インスタンスの正常な操作に不可欠な以下のタイプの Oracle[®] データベース・ファイルをバックアップできます。

- データファイル:データファイルは Oracle データベースによってディスク上に作成された物理ファイル で、テーブルやインデックスなどのデータ構造を持ちます。データファイルは1つのデータベースのみ に属すことができ、OS または ASM ディスク・グループのいずれかに保持されます。
- ・制御ファイル:制御ファイルと呼ばれる物理ファイルには、データベースの物理構造が記録されます。 制御ファイルには、データベース名、関連データファイルおよびオンライン REDO ログ・ファイルの名前 と場所、データベースを作成した日時のスタンプ、カレント・ログのシーケンス・ナンバー、チェック ポイント情報が保存されます。多くのリカバリ・シナリオでは、制御ファイルを保護することが非常に 重要になります。
- パラメータ・ファイル: Oracle データベースのクライアント側初期化パラメータ・ファイル (PFILE) と、サーバー側初期化パラメータ・ファイル (SPFILE) があります。
- アーカイブ REDO ログ: Oracle データベースでは、オンライン REDO ログ・グループを、ディスク上の1 つ以上のアーカイブ・ロケーションにコピーすることができます。これらをまとめて、アーカイブ REDO

ログと言います。また、個々のファイルを、アーカイブ REDO ログ・ファイルと言います。REDO ログ・ ファイルは、アーカイブ後にディスクまたはテープ上のほかの場所にバックアップすることにより、長 期保存したり、将来的なリカバリ・オペレーションで使用できます。アーカイブ REDO ログがない場合、 データベースのバックアップおよびリカバリ・オプションは非常に限られます。データベースはバック アップ前にオフラインにする必要があります。データベースをバックアップからリストアする必要があ る場合、使用できるデータベースの内容はバックアップ時点のものに限定されます。アーカイブ・ログ がなければ、データベースを特定時点の状態に再構築することはできません。

 外部設定ファイル: Oracle データベースの操作について、ネットワーク設定ファイル(「tnsnames.ora」 および「listener.ora」)やパスワード・ファイルなど、他のファイルに依存しますが、これらのファイル を Oracle RMAN コマンドでバックアップすることはできません。これらのファイルは、損傷や障害から の復旧に備えて保護する必要があります。

メディア障害、データ損傷、災害などあらゆるタイプの障害からのリカバリ可能性を確保するには、 バックアップ計画にこれらすべてのファイル・タイプを含めることが不可欠です。

RMAN によるバックアップ計画の定義

RMAN によるバックアップ計画を定義するための最初の手順は、RMAN リポジトリの場所を決定する ことです。2番目の手順では、リカバリ要件を満たすために必要なバックアップのタイプと頻度を決 定します。以降のセクションでは、これらの手順について説明します。

- RMAN リポジトリの場所の選択
- RMAN テーブルスペースおよびデータファイルのバックアップ・タイプの確認

RMAN リポジトリの場所の選択

RMAN リポジトリは、ターゲット・データベースに対するバックアップおよびリカバリ操作に関する メタデータの集合です。RMAN リポジトリの正式なコピーは、常にターゲット・データベースの制御 ファイルに保存されます。リカバリ・カタログ(外部データベース)を使用して、この情報を保存す ることもできます。

• 制御ファイル: RMAN は、必要なすべてのバックアップおよびリカバリ操作を、RMAN リポジトリの情報 が保存された制御ファイルのみを使用して実行できます。この機能により、バックアップ計画の一環と して制御ファイルを保護することの重要性が高まります。

制御ファイルへの RMAN リポジトリの保存は、リカバリ・カタログ・データベースを別々にインストールして管理することが負担になる小規模なデータベースに特に適しています。このモードでサポートされない RMAN 機能は、本プラグインでは使用されないストアド・スクリプトのみです。

制御ファイルを使用して RMAN リポジトリを保存する場合、以下のことを強くお勧めします。

- Oracle の制御ファイルの自動バックアップ機能を有効にすること。この機能により、RMAN に よって制御ファイルが自動的にバックアップされます。また、リポジトリにアクセスしなくても、 RMAN で制御ファイルの自動バックアップをリストアできます。
- DBID を記録すること。制御ファイルが失われた場合、データベースをリカバリするために DBID が必要になることがあります。
- ・ 少なくとも2つの制御ファイルを別々のディスクに多重化またはミラー化して使用してください。
- リカバリ・カタログ:外部 Oracle データベースを使用して RMAN リポジトリを保存することもできます。 この外部データベースをリカバリ・カタログと言います。制御ファイルでは、バックアップ・アクティ ビティを記録できる容量が限られますが、リカバリ・カタログには、これより大幅に長い履歴を保存で きます。リカバリ・カタログ・データベースは管理が複雑になりますが、より長期のバックアップ履歴 を使用して、制御ファイルの履歴より前のリカバリを実行できるという利便性がもたらされます。

リカバリ・カタログを使用した RMAN リポジトリは、RMAN によって管理されます。操作後、RMAN に よってデータベース構造、アーカイブ REDO ログ、バックアップ・セット、およびデータファイルのコ ピーに関する情報がターゲット・データベースの制御ファイルからリカバリ・カタログへ伝搬されるた め、バックアップ対象のデータベースが直接アクセスすることはありません。

Oracle は、リカバリ・カタログを専用のデータベースに保存することを推奨しています。リカバリ・カ タログを他のデータと一緒にデータベースに保存すると、そのデータベースを失った場合に、リカバリ・ カタログも失うことになり、リカバリが困難になります。さらに、リカバリ・カタログをバックアップ 対象のデータベースに保存した場合、そのデータベースについてデータベース全体のリストアを実行で きなくなります。リストアするにはデータベースがマウントされた状態である必要があるため、データ ベース全体をリストアすることはできません。また、その状態では、リカバリを実行するために、本プ ラグインがリカバリ・カタログにアクセスすることができなくなります。

RMAN テーブルスペースおよびデータファイルのバック アップ・タイプの確認

Plug-in for Oracle は、以下のタイプの RMAN バックアップをサポートしています。

- フル・バックアップ
- 増分バックアップ

増分バックアップはさらに以下のように分類されます。

- Level 0 の増分パックアップ
- Level 1 の増分バックアップ
 - 差分増分バックアップ
 - 累積増分バックアップ

フル・バックアップ

RMAN によるフル・バックアップでは、ファイル内のすべての割り当て済みブロックを含むデータ ファイルがバックアップされます。データファイルのフル・バックアップをイメージ・コピーにする ことができます。この場合、すべてのデータ・ブロックがバックアップされます。また、バックアッ プ・セットに保存することも可能です。この場合、使用されていないデータファイル・ブロックをス キップできます。RMAN によるフル・バックアップを増分バックアップ計画に含めることはできませ ん。つまり、以降の増分バックアップの親または基盤にすることはできません。

増分バックアップ

データファイルの増分バックアップでは、特定時点(通常は前の増分バックアップ時点)以降に変更 されたデータファイルのブロックのイメージを取り込みます。データファイルのすべてのブロックが 変更された場合を除き、増分バックアップはデータファイルのフル・バックアップより小さくなりま す。RMAN による増分バックアップは、データファイルに対してのみ使用できます。

メディア・リカバリの実行中、RMAN は、増分バックアップのブロック・イメージを使用して、変更 されたブロックを、そのブロックが作成された SCN にあるブロック・イメージの内容で更新します。 RMAN は、このプロセスを1つの手順で実行します。増分バックアップを使用しない場合、すべての 変更を、アーカイブ REDO ログから1つずつ適用する必要があります。RMAN はダウンタイムを短縮 するために、アーカイブ REDO ログに保存された個々の変更を再適用するのではなく、常に増分バッ クアップを選択します。

複数レベルの増分バックアップ

RMAN による増分バックアップには複数のレベルがあります。各増分レベルは、0 または1 の値で表されます。

 Level 0 の増分バックアップ: Level 0 の増分バックアップは以降の増分バックアップの基盤となり、 データを含むすべてのブロックをコピーし、フル・バックアップと同様にデータファイルをバックアッ プ・セットにバックアップします。

Level 0 の増分バックアップとフル・バックアップの違いは、フル・バックアップを増分バックアップ計 画に含めることが**できない**ことのみです。

- Level 1 の増分バックアップ: Level 1 の増分バックアップは、以下のいずれかのタイプです。
 - 累積増分バックアップ:累積増分バックアップの場合、RMANは、最後に実行されたLevel0の増 分バックアップ以降に使用されたすべてのブロックをバックアップします。累積増分バックアッ プでは、リカバリ・プロセスに含める必要のある増分バックアップの数が少なくなるため、リス トア時間は短くなります。累積バックアップでは、同レベルの前のバックアップで実行された作 業も繰り返されるため、差分バックアップよりも必要な容量は大きくなり、時間も長くなります。

累積バックアップでは、リカバリ時に適用する必要のある増分バックアップの数が少なくなるため、ディスク容量よりリカバリ時間が重視される場合は、差分バックアップより適しています。

差分増分バックアップ:差分増分バックアップの場合、RMAN は、最後に実行された Level 1 または Level 0 の累積または差分増分バックアップ以降に変更されたすべてのブロックをバックアップします。

RMAN は、最後に実行された Level 1 のバックアップを判断し、そのバックアップ以降に変更され たすべてのブロックをバックアップします。使用できる Level 1 のバックアップがない場合、 RMAN は Level 0 のバックアップ以降に変更されたすべてのブロックをコピーします。

差分増分バックアップでは、リカバリ時に複数の増分バックアップを適用する必要があるため、 リストア時間が長くなります。

アーカイブ・ログのバックアップ

アーカイブ REDO ログは PIT リカバリに重要になるため、定期的にバックアップする必要があります。 アーカイブ・ログは、個別にバックアップすることも、データファイルやサポートされているその他の ファイルと一緒にバックアップすることもできます。本プラグインには、アーカイブ・ログとそのオプ ションのバックアップの前に追加ログ・スイッチを強制実行し、アーカイブ・ログを、バックアップ・ セットにバックアップした後にディスクから削除するためのオプションも用意されています。

制御ファイルのバックアップ・タイプ

多くのリカバリ・シナリオでは、制御ファイルを保護することが非常に重要になります。 Plug-in for Oracle では、手動バックアップおよび自動バックアップの2つの方法で制御ファイルを 保護できます。ただし、RMAN バックアップ方法を使用する場合には、実行できるのは制御ファイル の自動バックアップか、手動による制御ファイルのバックアップのいずれかで、両方は実行できませ ん。また、データベースに対して制御ファイルの自動バックアップが有効な場合、手動による制御 ファイルのバックアップは使用できません。

制御ファイルの手動バックアップ

制御ファイルの手動バックアップは、ユーザー管理によるバックアップ方法と RMAN によるバック アップ方法の両方でサポートされます。

• **ユーザー管理によるバックアップ方法を使用した制御ファイルの手動バックアップ**:ユーザー管理によるバックアップ方法では、本プラグインはバックアップおよびリストアにアクティブな制御ファイルを

使用しません。バックアップの実行中、本プラグインは、ユーザーが指定した制御ファイルの保存ファ イル名(フル・パス)に制御ファイルのスナップショットを保存し、このコピーをバックアップします。 このプロセスにより、制御ファイルの一貫したコピーが保護されます。リストアを実行する際は、本プ ラグインは制御ファイルを制御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)にリストアし、アクティブな 制御ファイルが誤って上書きされないようにします。このファイルは、必要に応じて元の場所に手動で コピーする必要があります。制御ファイルの最新のコピーを常に使用できるようにするには、制御ファ イルを各ユーザー管理バックアップに含めます。

 RMAN によるバックアップ方法を使用した制御ファイルの手動バックアップ:制御ファイルの自動バック アップが無効で、[NetVault Backup 選択] ページで制御ファイル・ノードを明示的に選択した場合、本 プラグインは BACKUP CURRENT CONTROLFILE コマンドを使用して制御ファイルをバックアップしま す。制御ファイルの最新のコピーを常に使用できるようにするには、制御ファイルを各 RMAN バック アップに含めます。

制御ファイルの自動バックアップ

制御ファイルの自動バックアップには、サーバー・パラメータ・ファイル(SPFILE)も含まれます。 自動バックアップは、RMAN ベースのバックアップ実行後またはデータベース構造の変更後に行われ ます。構造の変更には、テーブルスペースの追加、テーブルスペースまたはデータファイルの状態変 更、オンライン REDO ログの追加、ファイル名の変更、再実行スレッドの追加などが含まれます。

手動バックアップと自動バックアップの比較

手動による制御ファイルのバックアップを使用すると、制御ファイルの特定のコピーをリストアする ことができます。このオプションは、データ損傷が発生し、データ損傷前に最後に保存された制御 ファイルをリストアする必要がある場合に最適です。ユーザーは制御ファイルが RMAN ベースのバッ クアップ方法でバックアップされるたび、およびデータベース構造が変更されるたびに確認する必要 があります。手動による制御ファイルのバックアップにより特定の制御ファイルのバックアップが可 能である一方、この機能は障害復旧やマルチ・インスタンスの RAC 環境では使用することができま せん。

制御ファイルの自動バックアップによって、常に最新の制御ファイルがしよう可能であるため、信頼性が得られます。さらに、それらは、障害復旧やマルチ・インスタンスの RAC 環境で必要になります。

その他のバックアップ・タイプ

その他のバックアップ・タイプを以下に示します。

- 複製データベースのバックアップ
- Flash Recovery Area (FRA) バックアップ

複製データベースのバックアップ

複製データベースを使用するとソース・データベースを複製またはクローニングすることができ、これはバックアップおよびリストア手順全体によってソース・データベースが影響を受けることのないよう特殊な目的のために使用されます。RMAN は複製データベースをサポートし、データベース管理者が以下のタスクを実行する際に柔軟性を提供します。

- バックアップとリカバリ手順のテスト
- Oracle[®] データベース新規リリースへのアップグレードのテスト
- アプリケーションによるデータベース・パフォーマンスへの影響のテスト
- レポート作成

たとえば、プロダクション・データベースを hostA から hostB に複製し、次にプロダクション・デー タベースを損傷させずに hostB で複製データベースを使用してこのデータベースのリストアおよびリ カバリの演習を実施することができます。

本プラグインでサポートされる Oracle データベースの複製は、バックアップ・ベースの複製です。 Oracle の複製データベース機能について詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の「Duplicating a Database」を参照してください。

Flash Recovery Area (FRA) バックアップ

Oracle[®] 10g では、FRA が導入されています。FRA は、制御ファイル、アーカイブ REDO ログ・ファ イルおよび RMAN バックアップなどのリカバリ関連ファイル格納のために使用されるディスクの場所 です。FRA 内のファイルは、Oracle データベースと RMAN によって自動的に管理されます。

FRA はバックアップ関連ファイル用のディスク容量の手動による管理の必要性を最小化し、FRA に格納されているさまざまなファイル・タイプについて使用する容量を適切に配分します。これにより、 FRA はデータベースに対する管理を簡略化します。Oracle は、リカバリ・エリアを有効化してバック アップの管理を簡略化することを推奨しています。

FRA を有効にすると、NetVault Backup 管理下のバックアップ・メディアからファイルをリストアす るのに対し、RMAN を使用して FRA から必要なデータファイルをリストアすることでリストアを高速 化することができます。一方、FRA ヘバックアップを格納する場合、オフサイトによる障害復旧用の 保護は提供されていません。そのため、本プラグインでは、データベースで FRA が有効になってい る場合、以下のバックアップ格納先に関するオプションが用意されています。

- テープ (NetVault Backup のメディアにパックアップ)
- ディスク (FRA にバックアップ)
- ディスクとテープ両方(FRA にバックアップし、次に NetVault Backup のメディアにバックアップ)

さらに、本プラグインでは、NetVault Backup 管理下のバックアップ・メディアとは別に、FRA に格 納されたバックアップ・リカバリ・ファイルのバックアップが可能です。バックアップ・リカバリ・ ファイルには、バックアップ・セットのフルまたは増分バックアップ、制御ファイルの自動バック アップ、データファイルのコピー、アーカイブ REDO ログが含まれます。アーカイブ REDO ログが紛 失または破損した場合、RMAN はリカバリ領域外でバックアップに利用できるバックアップのコピー がないか探します。このときフラッシュバック・ログ、現在の制御ファイル、オンライン REDO ログ はバックアップされません。

リカバリ・カタログのバックアップ計画

リカバリ・カタログ・データベースは他のデータベースと似ており、バックアップおよびリカバリ計 画の重要な要素となります。

Oracle[®]は、リカバリ・カタログをターゲット・データベースと同じ頻度でバックアップすることを お勧めします。たとえば、ターゲット・データベースのデータベース全体を毎週バックアップする場 合、データベース全体のバックアップの記録を保護し、すべてのターゲット・データベースのバック アップ直後にリカバリ・カタログをバックアップします。このバックアップは、障害復旧シナリオで も役立ちます。制御ファイルの自動バックアップを使用してリカバリ・カタログ・データベースをリ ストアする必要がある場合も、ターゲット・データベースの制御ファイルの自動バックアップを使用 せずに、リストアされたリカバリ・カタログ・データベースに含まれるバックアップの全記録を使用 して、ターゲット・データベースをリストアできます。

Oracle は、リカバリ・カタログ・データベースの RMAN によるバックアップ計画で以下のガイドラ インに従うことを推奨しています。

- PIT リカバリを可能にするために、リカバリ・カタログ・データベースをARCHIVELOG モードで実行すること。
- データベースを2つの異なるメディア(たとえばディスクとテープ)にバックアップすること。
- バックアップにアーカイブ・ログ・ファイルを含めること。
- バックアップのリポジトリとして別のリカバリ・カタログを使用しないこと。
- 制御ファイルの自動バックアップ機能を ON に設定すること。

バックアップ・シーケンス例

以下に、Oracle[®] データベース・サーバーのデータ保護要件を満たすために実装可能なバックアップ・シーケンス例をいくつか示します。

- フル・バックアップのみ:要件で前日までのデータ保護が保証されている場合、フル・バックアップを 毎日実行すれば十分です。データベース管理者がリカバリする必要があるのは、最後のフル・バック アップ時点までです。
- フル・バックアップとアーカイブ・ログのバックアップの併用:要件で PIT データ保護が要求されているが、リカバリ時間は重要でない場合、フル・バックアップとアーカイブ・ログのバックアップを組み合わせることで、必要な保護を実現します。

たとえば、毎週日曜日の夜 11:00 にフル・バックアップを実行し、月曜日から土曜日の午後 11:00 にアーカイブ・ログのバックアップを実行します。

この計画では、RMANで、最後のフル・バックアップから障害時点までの間に作成された各アーカイブ・ ログのバックアップを連続してリストアし、適用する必要があります。この場合、週が進むに従ってリ カバリ時間が長くなる可能性があります。リストア時間を短縮するために、増分バックアップを含める ことができます。これにより、リストアする必要のあるアーカイブ・ログのバックアップの数は少なく なります。

 Level 0 の増分バックアップ、Level 1 の差分増分バックアップ、アーカイブ・ログのバックアップの併用:要件で PIT データ保護が要求されており、バックアップ時間をできる限り短縮する必要がある場合、 Level 0 の増分バックアップ、差分増分バックアップ、およびアーカイブ REDO ログのバックアップを併用するのが最適です。

たとえば、毎週日曜日の夜11:00 に Level 0 の増分バックアップを実行し、月曜日から土曜日の午後 11:00 に Level 1 の差分増分バックアップを実行し、5 ~ 6 時間おきにアーカイブ・ログのバックアップ を実行します。各 Level 1 の差分増分バックアップには、最後の Level 0 または Level 1 のバックアップ 以降に行われた変更がすべて含まれます。また、アーカイブ・ログのバックアップには、最後の Level 1 の差分増分バックアップ以降のトランザクション・ログが含まれます。

この計画では、RMAN で Level 0 の増分バックアップ、Level 0 の増分バックアップ以降に実行された各 Level 1 の差分増分バックアップ、最後の差分増分バックアップから障害時点までの間のアーカイブ・ロ グのバックアップをリストアする必要があるため、リカバリ時間が長くなる可能性があります。

 Level 0 の増分バックアップ、Level 1 の累積増分バックアップ、アーカイブ・ログのバックアップの併用:要件で PIT データ保護が要求されており、リカバリ時間をできる限り短縮する必要がある場合、 Level 0 の増分バックアップ、Level 1 の累積増分バックアップ、およびアーカイブ・ログのバックアップ を組み合わせるのが最適です。

たとえば、毎週日曜日の夜11:00 に Level 0 の増分バックアップを実行し、月曜日から土曜日の午後 11:00 に Level 1 の累積増分バックアップを実行し、5 ~ 6 時間おきにアーカイブ・ログのバックアップ を実行します。各 Level 1 の累積増分バックアップには、最後の Level 0 の増分バックアップ以降に行わ れた変更がすべて含まれます。また、アーカイブ・ログのバックアップには、最後の Level 1 の累積増分 バックアップ以降の REDO ログが含まれます。

この計画では、RMAN でリストアする必要があるのは、Level 0 の増分バックアップ、最後の累積バック アップ、および最後の累積バックアップから障害時点までの間に作成されたアーカイブ・ログのバック アップのみであるため、リカバリ時間は短くなります。

バックアップ格納先の計画定義

[バックアップオプション] タブのバックアップ格納先オプションサブタブ画面よりバックアップの 格納先を選択することができます。このオプションで、バックアップの格納先を選択できます。この オプションで、ニーズに最適なメディア格納先の計画を定義することができます。

- [テープ (NetVault Backup のメディアにバックアップ)]: このオプションはデフォルトです。このオプションを選択すると、RMAN が「SBT_TAPE」チャネルを開き、NetVault Backup 管理下にあり、[ターゲット] タブの [デバイスオプション] で指定されたバックアップ・メディアにバックアップ・ファイルを書き込みます。NetVault Backup はディスク・ベースのメディア、VTL およびテープ・ドライブを含むさまざまなバックアップ・デバイスを管理することができ、ディスクからディスク、ディスクからテープへのバックアップを実行することが可能です。FRA がデータベースで有効になっていた場合でも、バックアップ・リカバリ・ファイルの格納には使用されません。このオプションは、現在の制御ファイル、オンライン REDO ログあるいはフラッシュバック・ログなど FRA で管理したいユーザーに適しています。
- [ディスク(FRA にバックアップ)]: このオプションを選択すると、RMAN は「DISK」チャネルを開き、 FRA にバックアップ・ファイルのみをバックアップします。FRA にバックアップ・リカバリ・ファイルを 格納すると、RMAN はバックアップ・メディアからファイルを読み込むことなく、FRA からリストア・ ファイルを直接リストアできるようになるため、最速でリストアを実行できます。FRA は通常、データ ファイルと同様のローカルまたは共有ストレージに存在するディスク・ストレージであるため、メディ ア障害、損傷、障害復旧に対する保護には対応していません。バックアップ・リカバリ・ファイルがオ フサイト・ストレージに格納されていることを確認するには、ユーザーは[ディスクとテープ両方]オ プションを使用するか、定期的な Flash Recovery Area バックアップを実行して FRA に格納されている バックアップ・リカバリ・ファイルを NetVault Backup の管理下にあるバックアップ・メディアにバック アップすることも可能です。
- 「ディスクとテープ両方(FRA にバックアップし、次に NetVault Backup のメディアにバックアップ)]: テープとディスクへのバックアップを実行すると、高速なリストアと最適な保護が可能になります。こ のオプションを選択すると、RMAN が「DISK」チャネルを開き、FRA にバックアップ・ファイルを書き込 み、その後 FRA に格納されているバックアップ・リカバリ・ファイルを、同じバックアップ・ジョブ内 の NetVault Backup 管理下にあるバックアップ・メディアにバックアップします。このオプションによ り、隔離されたメディアの障害やデータの損傷からの素早いリカバリと、メディア障害または障害復旧 のためのオフサイトでの保護が可能になります。[ディスクとテープ両方]オプションを使用すると、 バックアップ・ジョブの間隔が長くなります。これは RMAN が同一ジョブで2種類のバックアップを実 行する必要があるためです。

高速なリストアのために FRA にバックアップ・リカバリ・ファイルを格納したり、障害復旧用のオフサ イトによる保護を実行したいが、通常のバックアップ・ジョブの間隔を長くしたくない場合に、個別の スケジュールで Flash Recovery Area バックアップを実行しながら FRA への日常のバックアップが可能 な追加オプションが用意されています。たとえば、フル・バックアップが毎週日曜日の午後 11:00 に実 行される場合、そのバックアップはディスクに対して実行されます。増分バックアップが毎週土曜日の 午後 11:00 に実行される場合、そのバックアップもディスクに対して実行されます。一方、バックアッ プ・メディアへの Flash Recovery Area バックアップは、毎週土曜日の午後 10:00 にフル・バックアップ の前に週1回の頻度で実行されます。さらに、ビジネス要求に合わせて、さまざまな間隔で Flash Recovery Area バックアップを実行できます。

 「Flash Recovery Area 機能は、Oracle[®] 9i では使用できません。Oracle 9i で [ディスクとテープ両 方] オプションを使用すると、予期せぬ Oracle エラーが発生する可能性があります。

Oracle Flashback Technology

Oracle[®] Database 10g 以降には、Oracle Flashback Technology と呼ばれる機能グループがあります。 Flashback Technology 機能には、Oracle Flashback Database、Oracle Flashback Table、および Oracle Flashback Drop などがあります。Flashback Technology を使用すると、データベースをバック アップからリストアしなくても、過去の状態のデータを表示したり、データのタイムライン上を行き 来することができます。データベースに対する変更によっては不要な変更を元に戻す場合、 Flashback Technology 機能を使用した方が、メディア・リカバリよりも短時間で済み、またデータ ベースの可用性に対する影響を抑えることができます。

Oracle Corporation によると、Oracle Flashback Database を使用して、Oracle データベースを過去の 時点まで巻き戻し、論理データの破損やユーザー・エラーによる問題を解決できます。NetVault Backup WebUI から Plug-in for Oracle を使用することで Flashback Database がサポートされ、メ ディア・リカバリに代わって、ポイント・アンド・クリックによる Flashback Database オプション が利用できるようになります。

FRA が構成され、Flashback Database 機能が使用可能な場合、FLASHBACK DATABASE コマンドを使用 して、データベースを過去のある時点に戻すことができます。Flashback Database は、物理データファ イルのリストアを行わないため、真のメディア・リカバリではありません。Flashback Database は、処 理が迅速で簡単なだけでなく、データベース全体のリストアを必要としないので、RESTORE および RECOVER コマンドを使用する方法よりも、Flashback Database の方が好まれる場合があります。

FLASHBACK DATABASE を使用したデータベースの巻き戻しに要する時間は、さかのぼる時間の長さ とその目標時点以降のデータベースのアクティビティの量に比例します。データベース全体のリスト アおよびリカバリには、さらに長時間かかる可能性があります。Flashback ログ内のビフォア・イ メージは、データベースを過去のある時点までリストアするためにのみ使用され、データベースを過 去のある時点の一貫性のある状態にまで戻すにはフォワード・リカバリが使用されます。Oracle Database は、データファイルを以前の時点まで戻しますが、初期化パラメータ・ファイルなどの補 助ファイルは特定時点まで戻されません。

管理者がデータベースを Flashback して論理データの損傷やユーザー・エラーによる問題を解決でき るように、Oracle 10g 以降のデータベースで Flashback Database を使用可能にすることを推奨して います。Dell 詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の「Oracle Flashback Technology in Oracle Database Concepts」と「Configuring Oracle Flashback Database and Restore Points」セクションを参照してください。

プラグインのインストールと削除

- 前提条件
- RMAN バックアップの前提条件
- シングル・インスタンスの非 RAC 環境の推奨構成
- プラグインのインストール
- プラグインの削除

前提条件

本プラグインをインストールする前に、Oracle[®] データベース・サーバーとして指定されたマシンで 以下の前提条件が満たされていることを確認します。

NetVault Backup サーバーおよびクライアント・ソフト ウェア

本プラグインをインストールするマシン上には、少なくともクライアント・バージョンの NetVault Backup をインストールする必要があります。シングル・インスタンスの非 RAC 環境では、本プラグ インは Oracle[®] データベースが存在するサーバー上にインストールされます。マルチ・インスタンス の RAC 環境では、RAC 対応データベース用のいずれかのインスタンスをホスティングするノードの いずれかに本プラグインがインストールされます。

3

ARCHIVELOG モードのデータベース

データベースが ARCHIVELOG モードで稼働していることを確認してください。REDO ログ・ファイル のグループのアーカイブを有効にする手順について詳しくは、『Oracle[®] Administrator's Guide』を参 照してください。

データベースがこのモードに正しく設定されていることを確認するには

1 SQL*Plus を起動し、管理者権限で データベースに接続します。

sqlplus SYS/<パスワード>@<接続 ID> AS SYSDBA

2 SQL> プロンプトで以下のコマンドを入力します。

ARCHIVE LOG LIST

現在のモードが出力されます。Automatic archival プロパティに Enabled のステータスが表示された場合、データベースは正しく設定されています。以下に、Database log mode が Archive Mode に設定されている例を示します。

SQL> archive log list	
Database log mode	Archive Mode
Automatic archival	Enabled
Archive destination	e:\oraclelogs
Oldest online log sequence	11
Next log sequence to archive	13
Current log sequence	13
SQL>	

RMAN バックアップの前提条件

以下のセクションは、RMAN バックアップを実行するための要件について説明しています。

- Windows のローカル管理者グループへの Oracle ユーザーの追加
- 非 RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレクトリの識別
- RMAN リポジトリの作成
- ターゲット・データベースの登録
- 制御ファイルの自動バックアップ有効化
- Flashback Database の有効化
- Enabling Block Change Tracking の有効化

Windows のローカル管理者グループへの Oracle ユー ザーの追加

Oracle[®] 12.x 以降を使用していて、インストール時に Oracle 管理ユーザーを作成した場合、この ユーザーを Windows[®] のローカル管理者グループに追加する必要があります。この手順により、 RMAN バックアップから NetVault Backup プロセス・マネージャ (nvpmgr) にアクセスできるように なります。以下の手順では、Windows Server 2008 R2 でユーザーを追加する方法について説明しま す。各自の環境については、適切なシステム・ドキュメントを参照してください。 Windows Server 2008 R2 でユーザーを追加するには

- 1 [スタート] > [管理ツール] > [コンピュータの管理] をクリックします。
- 2 [コンピュータの管理] ウィンドウで、[システム ツール] を開き、[ローカル ユーザーとグループ] を 選択して [ユーザー]を選択します。
- 3 右パネルで、Oracle ユーザーを右クリックし、[プロパティ]を選択します。
- 4 [プロパティ]ダイアログ・ボックスで、[所属するグループ]タブを選択し、[追加]をクリックします。
- 5 ローカル管理者グループを追加し、[OK] をクリックします。
- 6 もう一度 [OK] をクリックします。

非 RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレクト リの識別

Oracle[®] システム ID (SID) とホーム・ディレクトリを識別するには、Oracle データベース・サー バーで稼働中の OS に応じて以下のいずれかの手順に従います。

Windows

Windows[®] では、SID と Oracle[®] ホームをレジストリから識別できます。

- 1 Oracle データベース・サーバーでレジストリ・エディタを起動します。
 - a タスクバーで [スタート] をクリックして、[ファイル名を指定して実行] をクリックします。
 - b [ファイル名を指定して実行] ダイアログ・ボックスで regedit と入力して、[OK] をクリックし ます。
- 2 以下のレジストリ・キーを探します。

My Computer\HKEY LOCAL MACHINE\SOFTWARE\ORACLE

さまざまなディレクトリが表示されます。「KEY_」が付いた各フォルダは、ターゲット・マシン上にイン ストールされた Oracle を表します(マシン上に複数の Oracle がインストールされている場合)。

- 3 Oracle のターゲット・インストールに該当する「KEY_<Oracle_Home>」という名前のフォルダを開く と、右側のフレームにレジストリ・アイテムのリストが表示されます。
- 4 [名前] カラムで以下のアイテムを探し、対応する [データ] カラムのエントリをメモします。
 - ORACLE_HOME
 - ORACLE_SID
- 5 Registry Editor を閉じます。

Linux および UNIX

Linux[®] および UNIX[®] では、「oratab」ファイルを使用して SID と Oracle[®] ホームを識別できます。

- 1 ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを実行して、「oratab」ファイルを開きます。 more /etc/oratab
- 2 「oratab」ファイルで、アプリケーション情報をメモします。

ファイルには、サーバーで稼働中の各 Oracle データベースが以下の形式で含まれます。

<ORACLE SID>:<ORACLE HOME>:<追加情報>

たとえば、「oratab」には以下の情報が含まれます。

PROD:/u03/app/oracle/product/10.2.0/db 1:N

これは以下の内容を示します。

- 「PROD」が ORACLE_SID であり、
- 「/u03/app/oracle/product/10.2.0/db_1」が ORACLE_HOME です。

RMAN リポジトリの作成

RMAN リポジトリの場所の選択で説明したとおり、RMAN によるバックアップ計画では、まず RMAN リポジトリの場所を選択する必要があります。デフォルトでは、このリポジトリは制御ファイルに保 持されます。ただし、より大規模または重要性の高いデータベースの場合、制御ファイルより多くの 履歴を保存可能なリカバリ・カタログ・データベースを作成します。

リカバリ・カタログの作成は、3つの手順から成るプロセスです。つまり、リカバリ・カタログを保 持するデータベースを設定し、リカバリ・カタログの所有者を作成し、その後リカバリ・カタログ自 体を作成します。

リカバリ・カタログ・データベースを設定する

リカバリ・カタログを使用する場合、リカバリ・カタログ・スキーマの管理はユーザーが行う必要が あります。リカバリ・カタログは、このスキーマのデフォルト・テーブルスペースに保存されます。 SYS をリカバリ・カタログの所有者にすることはできません。リカバリ・カタログ・スキーマのイン ストールに使用するデータベースを決定してください。リカバリ・カタログ用に別のデータベースを 作成し、カタログ・データベースを ARCHIVELOG モードで実行することをお勧めします。

次に、カタログ・スキーマで使用する容量を割り当てます。リカバリ・カタログ・スキーマのサイズ は、カタログで管理するデータベースの数によって異なってきます。また、アーカイブ REDO ログ・ ファイルおよび各データベースのバックアップの数に伴って大きくなります。リカバリ・カタログ・ スキーマのサイズについて詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「Planning the Size of the Recovery Catalog Schema」を参照してください。

リカバリ・カタログの所有者を作成する

リカバリ・カタログ・データベースを選択し、必要な容量を作成したら、以下の手順に従ってリカバ リ・カタログの所有者を作成し、このユーザーに必要な権限を与えます。

- 1 SQL*Plus を起動し、リカバリ・カタログが保持されているデータベースに管理者権限で接続します。 sqlplus SYS/<パスワード>@<接続 ID> AS SYSDBA
- 2 リカバリ・カタログのユーザーとスキーマを作成します。

たとえば、以下のように入力します。

CREATE USER rman IDENTIFIED BY **イパスワード>** TEMPORARY TABLESPACE temp DEFAULT TABLESPACE tools QUOTA UNLIMITED ON tools;

3 スキーマの所有者に RECOVERY_CATALOG_OWNER のロールを与えます。

このロールにより、リカバリ・カタログの管理と照会に必要なすべての権限がユーザーに与えられます。 GRANT RECOVERY_CATALOG_OWNER TO rman;

4 rman ユーザーに CONNECT のロールを与えます。

GRANT CONNECT TO rman;

リカバリ・カタログを作成する

カタログの所有者を作成したら、RMAN の CREATE CATALOG コマンドを使用してカタログ・テーブ ルを作成します。このコマンドにより、カタログの所有者のデフォルト・テーブルスペースにカタロ グが作成されます。

1 カタログを保持するデータベースにカタログの所有者として接続します。

例:

- > rman CONNECT CATALOG rman/<パスワード>@<カタログ用接続 ID>
- 2 CREATE CATALOG コマンドを実行してカタログを作成します。

カタログが作成されるまで数分間かかることがあります。

カタログ・テーブルスペースがこのユーザーのデフォルト・テーブルスペースである場合、以下のコマ ンドを実行できます。

CREATE CATALOG;

CREATE CATALOG コマンドで、カタログのテーブルスペース名を指定することもできます。例:

CREATE CATALOG TABLESPACE <テーブルスペース名 >;

ターゲット・データベースの登録

リカバリ・カタログをターゲット・データベースで使用するための最初の手順は、このデータベース をリカバリ・カタログに登録することです。

ターゲット・データベースを登録するには

するには、以下のコマンドを実行します。

リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。
 たとえば、rman ユーザー(カタログ・スキーマの所有者)としてカタログ・データベース catdb に接続

> rman TARGET / CATALOG rman/**<パスワード >@<カタログ用接続 ID>**

- 2 ターゲット・データベースがマウントされていない場合は、そのデータベースをマウントするか開きます。 STARTUP MOUNT;
- 3 接続したリカバリ・カタログにターゲット・データベースを登録します。

REGISTER DATABASE;

RMAN により、ターゲット・データベースに関する情報を保持するための行がカタログ・テーブルに作成 されます。その後、ターゲット・データベースのすべての関連データが制御ファイルからカタログにコ ピーされ、カタログと制御ファイルが同期されます。

エしく登録されたことを確認します。
 REPORT SCHEMA

リカバリ・カタログに複数のデータベースを登録する

DBID が重複していなければ、複数のターゲット・データベースを1つのリカバリ・カタログに登録 することができます。RMAN では、DBID によってデータベースが識別されます。

Data Guard 環境では、プライマリ・データベースだけがリカバリ・カタログに登録されます。

制御ファイルの自動バックアップ有効化

制御ファイルの自動バックアップは、本プラグインを使用した障害復旧で必要になります。制御ファ イルの自動バックアップについて詳しくは、「制御ファイルのバックアップ・タイプ」を参照してく ださい。マルチ・インスタンスの RAC データベースについて詳しくは、RAC 環境における制御ファ イルの自動バックアップの有効化を参照してください。

自動バックアップ機能を有効にするには、RMAN コマンドライン・ユーティリティから以下のコマンドを実行します。

リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。

たとえば、カタログ・データベースに接続するには、以下のコマンドを実行します。

> rman TARGET / CATALOG rman/<パスワード>@<接続用カタログ ID>

オプションで、以下のコマンドを使用して、自動バックアップの形式を変更できます。制御ファイルの 自動バックアップのデフォルト形式は「%F」です。

CONFIGURE CONTROLFILE AUTOBACKUP FORMAT FOR DEVICE TYPE < デバイス・タイプ > TO '<文字列 >'

- または -

SET CONTROLFILE AUTOBACKUP FORMAT FOR DEVICE TYPE <デバイス・タイプ> TO '<文字列>'

設定されている自動バックアップ形式が SET CONTROLFILE AUTOBACKUP FORMAT コマンドによって上書 きされるのは、現在のセッションのみです。

自動バックアップのデフォルト形式を変更する場合は、リストア中に同じ形式を指定する必要があります。

2 デフォルト・デバイス・タイプを "SBT_TAPE" に設定します。

CONFIGURE DEFAULT DEVICE TYPE TO 'SBT_TAPE';

- 3 制御ファイルの自動バックアップを有効にします。
 CONFIGURE CONTROLFILE AUTOBACKUP ON;
- 4 RMAN の設定を確認して制御ファイルの自動バックアップが有効になったことを確認します。 SHOW ALL;

Flashback Database の有効化

Flashback Database を使用すると、データファイルが損傷していない限り、Oracle[®] データベースを 過去の時点まで巻き戻して、論理データの破損やユーザー・エラーによる問題を解決できます。 Flashback Database について詳しくは、Oracle Flashback Technology を参照してください。

Flashback Database は、独自のロギング・メカニズムを使用して、Flashback ログを作成し、それを FRA に格納します。Flashback Database は、Flashback ログが使用可能な場合にのみ使用できます。 この機能を利用するには、Flashback ログを作成するようにあらかじめデータベースを設定しておき ます。

Flashback Database が有効になっているかどうかを判断するには

1 SQL*Plus を起動し、管理者権限で データベースに接続します。

sqlplus SYS/<パスワード>@<接続 ID> AS SYSDBA

SQL> プロンプトで以下のコマンドを入力します。

select flashback_on from v\$database;

これで、Flashback Database のステータスが表示されます。

Flashback Database を有効にするには、まず FRA を構成します。詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の「Enabling the Flash Recovery Area」セクションを参照してください。

FRA が構成されていることを確認した後、以下の手順に従って、Flashbackの保存ターゲットを設定 します。この保存ターゲットでは、Flashback Database で過去のどの時点までデータベースを巻き戻 せるようにするかを指定します。この目標時点以降、データベースでは、データファイルで変更され た各ブロックのイメージが定期的に Flashback ログにコピーされます。

1 SQL*Plus を起動し、管理者権限で データベースに接続します。

```
sqlplus SYS/<パスワード> AS SYSDBA
```

2 SQL> プロンプトから、データベースをいったんシャットダウンしてからマウントします。

```
shutdown immediate;
startup mount;
```

3 オプションで、DB_FLASHBACK_RETENTION_TARGET を、適切な Flashback の期間(分単位)に設定し ます。

デフォルトでは、DB_FLASHBACK_RETENTION_TARGET は、1日(1440分)に設定されます。 Flashbackの期間を設定するには、以下のコマンドを実行します。

alter system set db_flashback_retention_target=1440; alter database flashback on;

4 データベースを開きます。

```
alter database open;
```

これで Flashback Database が有効で使用可能になりました。

Enabling Block Change Tracking の有効化

この機能を有効にすると、RMAN では変更追跡ファイルを使用して各データファイル内で変更されたブロックを記録します。この機能により、増分バックアップの実行時にデータファイル内のすべてのブロックをスキャンする必要がなくなり、結果として増分バックアップ・ジョブの性能が向上します。

 ① 重要:通常のデータベース・オペレーションでは、最小性能オーバーヘッドが発生するため、Block Change Tracking は、Oracle[®] 10g 以降のデフォルトによって無効に設定されています。ただし、特にバッ クアップ間に変更されたデータ・ブロックの割合が少ない場合は、増分バックアップ中にデータファイル 全体のスキャンを回避できることは大きな利点となります。増分バックアップのパフォーマンス向上につ いて詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery Basics』の「Change Tracking」セクションを参照 してください。

変更追跡機能は、データベースが開いているまたはマウントされている場合に有効にすることができ ます。

変更追跡設定を変更するには

1 SQL*Plus を起動し、管理者権限でターゲット・データベースに接続します。

sqlplus SYS/<パスワード>@<接続 ID> AS SYSDBA

- 2 以下のいずれかの場所に、Block Change Tracking ファイルを保存します。
 - デフォルトの場所に保存する
 - ターゲット・データベースに DB_CREATE_FILE_DEST パラメータを設定します。
 - ブロック・チェンジ・トラッキングを有効にするために、以下の SQL ステートメントを入力します。

ALTER DATABASE ENABLE BLOCK CHANGE TRACKING;

• **ユーザーが定義した場所**に保存するには、以下の SQL ステートメントを入力します。

ALTER DATABASE ENABLE BLOCK CHANGE TRACKING USING FILE '/< 宛先へのパス >/rman_change_track.dat' REUSE;

REUSE オプションを指定すると、指定した名前を持つファイルが存在する場合にそれが上書きされます。

① **重要:** RAC 環境で変更追跡ファイルは、クラスタ内のすべてのノードからアクセス可能な共有ストレージに保存されている必要があります。

以下の例で Block Change Tracking ファイルは、RAC 環境の共有ストレージ用に使用されている ASM ファイルシステムに保存されています。

ALTER DATABASE ENABLE BLOCK CHANGE TRACKING USING FILE '+DATA/ol0grac/block change tracking.dat' REUSE;

シングル・インスタンスの非 RAC 環境の推奨 構成

1 つのマシンを NetVault Backup サーバーおよび Oracle[®] データベース・サーバーの両方として設定 する(つまり、すべてのソフトウェアのインストールおよび設定を1つのマシンで実行する)ことは できますが、これらのエンティティは別々のマシンで実行することをお勧めします。RAC 環境での Plug-in for Oracle のインストールについて詳しくは、インストールの前提条件を参照してください。

図 3. シングル・インスタンスの非 RAC 設定



Plug-in for Oracle

① **重要**:設定した環境(NetVault Backup サーバーと Oracle データベース・サーバーのマシンを個別に用意 するか、両方を1つのマシンで設定するか)に関係なく、本プラグインは、Oracle データベース・サー バーが存在するホストにインストールする必要があります。

プラグインのインストール

プラグインをインストールするには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、**[クライアント管理]**をクリックします。
- 2 **[クライアント管理]**ページで、Oracle[®]データベース・サーバーがあるマシンを選択して、**[管理]**をク リックします。
- 3 [プラグインのインストール] ボタン (💽) をクリックします。
- 4 [プラグイン・ファイルの選択]をクリックして、プラグイン用の.npk インストレーション・ファイル の場所(インストール用 CD または Web サイトからファイルをダウンロードして保存したディレクトリ など)を探します。

インストール CD では、このソフトウェアのディレクトリ・パスは OS によって異なります。

- 5 ファイル「ora-x-x-x.npk」(ここで、xxxx は、バージョン番号とプラットフォームを示します)を選択し、[開く]をクリックします。
- 6 インストールを開始するには、[プラグインのインストール]をクリックします。

プラグインが正常にインストールされると、メッセージが表示されます。

 ① 重要:Windows[®]に Plug-in for Oracle をインストールする場合、本プラグインは、ダイナミック・ リンク・ライブラリ (DLL) ファイル「ORASBT.DLL」を「…\system32」ディレクトリにコピーし ます (32-bit バージョンのプラグインを 64-bit の Windows マシン上にインストールする場合は、 ディレクトリ名は「…\sysWOW64」です)。この DLL は、Oracle と、NetVault Backup が使用する メディア管理ユーティリティ間のリンクとして機能し、本プラグインが正しく機能するために必要 です。ORASBT.DLL がこのディレクトリにあることを確認する必要があります。

プラグインの削除

プラグインを削除するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、**[クライアント管理]**をクリックします。
- 2 [**クライアント管理**]ページで、利用可能なクライアントを選択して、[**管理**]をクリックします。
- 3 **[クライアント表示]** ページの [Installed Software] テーブルで、[Plug-in for Oracle] を選択して [Remove Plugin] ボタン () をクリックします。
- 4 [確認] ダイアログ・ボックスで、[削除] をクリックします。



プラグインの設定

- RMAN バックアップ用デフォルト・ターゲット・セットの定義
- デフォルト設定の構成
- データベースの追加
- 言語サポート

RMAN バックアップ用デフォルト・ターゲッ ト・セットの定義

Oracle[®] RMAN の CLI から開始するバックアップ用のターゲット・デバイスを指定するために、デフォルトのバックアップ・ターゲット・セットを定義できます。デフォルトのバックアップ・ター ゲット・セットは、本プラグインのデフォルト属性の設定で指定します。

デフォルトのターゲット・セットを作成するには

1 [ナビゲーション] パネルで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

[ガイド付き設定] リンクからウィザードを開始することもできます。[ナビゲーション] パネルで、[ガ イド付き設定] をクリックします。[NetVault 設定ウィザード] ページで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

- 2 [ターゲット・ストレージ] リストの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- 3 [デバイス・セレクション]をクリックして、[デバイス指定]オプションを選択します。
- 4 制御ファイルの自動バックアップが格納されるデバイスを選択して、[セット]をクリックします。
- 5 [Backup Job Wizard Create Target Set] ページで、[保存] をクリックします。
- 6 [新規セットの作成] ダイアログ・ボックスで、ユーザー定義名を指定し、[保存] をクリックします。

デフォルト設定の構成

プラグインでは、バックアップおよびリストア・ジョブのデフォルト・オプションを設定できます。 これらのオプションは、ジョブごとに上書きできます。

- 重要:データベースのサイズおよび複数バックアップのリストア見込みによって、NetVault Backup Process Manager (nvpmgr) に割り当てる共有メモリ・サイズの調整を考慮する必要があります。この手 順により、NetVault Backup のプログレス・バッファの容量不足が原因でバックアップ・ジョブおよびリス トア・ジョブが失敗するのを防ぎます。共有メモリの設定について詳しくは、『Dell NetVault Backup アド ミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。
 - 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リストの隣りにある [新規作成] をクリックします。
 - 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開き、[Plug-in for Oracle]を選択します。
 - 3 [アクション] リストから、[設定] を選択します。

- 4 以下のデフォルト設定オプションを指定します。
 - [Oracle のパスワード・ファイルを認証に使用する]: Oracle[®]は、DBA または SYSDBA ユーザーの認証方法として、OS 認証とパスワード・ファイル認証をサポートしています。パスワード・ファイルによる認証方法を有効にするには、このオプションを選択します。Oracle の OS 認証は、パスワード・ファイル認証より優先されます。つまり、OS 認証の要件が満たされていれば、パスワード・ファイルを使用しても、ユーザーは OS 認証によって認証されます。

このオプションを選択した場合、本プラグインは Oracle パスワード・ファイルの SYSDBA 認証の 詳細を使用して、RMAN で Oracle ターゲット・インスタンスに接続します。

connect target <SYSDBA ユーザー名 >/<パスワード >@< 接続 ID>

このオプションを選択解除した場合、本プラグインは Oracle ターゲット・インスタンスへの接続時に OS 認証を使用します。

CONNECT TARGET /

- [Flash Recovery Area 使用可能]:本プラグインがインストールされている Oracle データベー ス・サーバー内のすべてのデータベース用に FRA が使用可能な場合、このオプションを選択しま す。このオプションを選択すると、[Flash Recovery Area バックアップ] および [バックアップ 格納先]オプションが使用可能になります。使用可能な Flash Recovery Area 機能について詳しく は、その他のバックアップ・タイプおよびバックアップ格納先の計画定義を参照してください。
- [Oracle SYSDBA ユーザー名]:本プラグインがデータベースに接続する際に使用する、SYSDBA 権 限を持つデフォルトの Oracle ユーザーを指定します。
- [NLS_LANG]: NLS (National Language Support) 言語に適合する文字セットまたはこの Oracle データベース・サーバー上にあるデータベースの NLS_LANGUAGE パラメータを選択します。 NLS_LANGUAGE はデータベースのデフォルト言語を指定します。この言語は、メッセージ、日付 および月の名前、AD、BC、a.m.、および p.m. を表すシンボル、デフォルトのソート・メカニズ ムに使用されます。

データベースの現在の NLS_LANGUAGE パラメータを特定するには、SQL*Plus から SYSDBA ユー ザーとして以下のコマンドを実行します。

select * from v\$NLS_PARAMETERS where PARAMETER = 'NLS_LANGUAGE' or PARAMETER = 'NLS TERRITORY' or PARAMETER = 'NLS CHARACTERSET';

リストで使用可能な選択肢に合わせて、結果が以下の形式で組み合わされます。

<NLS LANGUAGE> <NLS TERRITORY>. <NLS CHARACTERSET>

本プラグインでサポートされる言語のリストと、それに対応する NLS_LANG の値については、 言語サポートを参照してください。

・[選択したすべてのアイテムのバックアップが不完全の場合]:複数のアイテムがバックアップに 含まれており、RMANが選択されたアイテムのいくつかを正常にカタログ化しても、選択された アイテムのうち本プラグインで正しくバックアップできないアイテムがある場合、本プラグイン では、バックアップで実行するアクションを指定できます。たとえば、ジョブに複数のテーブル スペースとアーカイブ REDO ログが含まれており、テーブルスペースは正しくバックアップされ たが、アーカイブ・ログのバックアップに失敗した場合、バックアップ・ジョブによって実行す るアクションを指定できます。

このエラー状態が発生した場合、Plug-in for Oracle は以下のいずれかを実行できます。

- [警告で終了 セーブセットは保持されます]: ジョブが [警告で完了] というステータス を返し、正常にバックアップされたアイテムからなるバックアップ・セーブセットが作成 されます。
- 「警告なしで完了 セーブセットは保持されました]:ジョブが完了し、「ジョブ終了]というステータスを返します。エラーは NetVault Backup バイナリ・ログに記録され、「ジョブ・ステータス]ページでは無視されます。バックアップされたアイテムからなるバックアップ・セーブセットが作成されます。

- [失敗 セーブセットは保持されます]:バックアップ・ジョブは、[バックアップ・ジョブ失敗]というステータスを返しますが、正常にバックアップされたアイテムからなる バックアップ・セーブセットが作成されます。
- [失敗 保存セットは保持されませんでした]:バックアップ・ジョブは、[バックアップ 失敗] いうステータスを返し、バックアップされたオブジェクトのセーブセットは保持 されません。選択された一部のオブジェクトが正しくバックアップされた場合も削除され ます。
- [RMAN ベースのバックアップ用カタログを使用]: リカバリ・カタログ・データベースを使用して、このプラグインで実行したすべての RMAN バックアップおよびリストア・オペレーションの記録を保持するよう指定するには、このオプションを選択します。
- [Catalog Instance Name]: デフォルトのリカバリ・カタログ・データベースの Oracle インスタンス名(Oracle Net Service 名とは異なる場合があります)を入力します。このインスタンス名は、本プラグインがリカバリ・カタログ・データベースに接続できるように、Oracle データベース・サーバー上の「tnsnames.ora」ファイルで定義されている必要があります。
 - 7.0より前のバージョンのプラグインからアップグレードした場合、[Catalog Instance Name] フィールドにはラベル「カタログ・ネットサービス名」が付けられています。
- [**カタログの所有者**]: カタログの所有者として定義され、RECOVERY_CATALOG_OWNER のロー ルが与えられたユーザーを指定します。
- [ユーザー管理、ローデバイス・ブロッキング係数(KB)]: ユーザー管理バックアップの場合に限り、このフィールドでは、Raw デバイスのユーザー管理バックアップを高速化するために、ブロック読み取りユニットを設定できます。「1~64」キロバイト(KB)の値を指定できます。このフィールドに「8」KBを入力した場合、本プラグインはバックアップの実行中にデータを「8」KBの単位で読み取ります。
- **[NetVault Backup サーバー]** (RMAN バックアップに必須): Oracle データベース・サーバーが NetVault Backup クライアントとして追加された NetVault Backup サーバーの名前を指定します。
- [NetVault Backup サーバーからリストアを実施する](RMAN バックアップに必須): Oracle デー タベース・サーバーが NetVault Backup クライアントとして追加された NetVault Backup サーバー の名前を指定します。
- [NetVault Backup クライアントからのバックアップをリストアする]: このフィールドは、ター ミナル・セッションから本プラグインを使用してリストアを実行する場合の、元のバックアップ 実行元の NetVault Backup クライアントを示します。クライアント名を何も入力しないと、リス トア・コマンドはリストア実行元の NetVault Backup マシンに対してローカルに実行されます。 この機能について詳しくは、CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア: 概要を参照して ください。
- [CLI バックアップ/自動バックアップ用の詳細設定セット]: このオプションを設定するには、先 に [詳細設定] タブで目的のオプション・セットを作成し、これを特定の名前で保存しておく必 要があります。このオプション・セットに指定した詳細設定をすべての CLI ベースの RMAN バッ クアップで自動的に使用するには、このオプション・セット名をテキスト・ボックスに入力しま す。セット名を入力しない場合、すべての CLI ベースの RMAN バックアップでデフォルトの詳細 設定が使用されます。

[CLI バックアップ詳細設定セット]オプションを設定する場合、[詳細設定]タブの [バックアップ寿命]フィールドで [フル・バックアップ]ではなく、[期間指定日/週/年]オプションを指定する必要があります。CLI ベースの RMAN バックアップでは、フル・バックアップ用の世代管理はサポートされていないため、[フル・バックアップ]が指定されている場合、バックアップが予期せず期限切れになる可能性があります。

 [CLI バックアップ/自動バックアップ用のターゲット・セット](RMAN バックアップに必須): RMAN バックアップ用デフォルト・ターゲット・セットの定義で作成されたターゲット・セットの名前を指定します。

- ① 重要:該当するフィールドに指定したターゲット・セットまたは詳細設定セットは、コマンド・ラインで構文の変数として別のセット名を指定することにより上書きします。CLI構文におけるセット名の指定について詳しくは、CLIベースのRMANバックアップおよびリストア:概要を参照してください。
- [スレーブ接続タイムアウト(分-0=タイムアウトなし)]: このオプションを使用して、本プ ラグインと Oracle データベースの間の接続タイムアウト時間を設定します(分単位)。本プラグ インでのバックアップ時に、アクティビティ未検出の時間がこのオプションでの指定値に達する と、タイムアウトになり、バックアップとの接続が切断されます。このオプションのデフォルト 値はゼロ(0)で、タイムアウトは設定されません。
- [スクリプトのデフォルト・ディレクトリを生成]: RMAN によって生成されたスクリプトが格納 されるデフォルト・ディレクトリの完全パス名を入力します。このディレクトリは、すべての バックアップ・オプションおよびリストア・オプションのタブで使用できる [RMAN スクリプト の生成]機能のデフォルト・ディレクトリとして使用されます。
- [Oracle ダンプ・ディレクトリへ sbt トレースを生成]: このオプションを選択すると、Oracle ダンプ・ディレクトリへ System Backup to Tape (SBT) トレース情報が送信されます。このログ・ファイルを参照して Oracle サーバーが実行したトレース・コマンドのシーケンスを確認することができます。
- [CLI は Dell NetVault Backup サーバー名をチェックしません]: RMAN CLI に、指定した NetVault Backup サーバーが利用可能で通信できることを検証させたくない場合は、このオプションを選択 します。不明な NetVault Backup サーバーのジョブの処理中に、バックアップ・ジョブをタイム・ アウトさせたくない場合は、このオプションを選択しないようにする必要があります。
- [Preferred Phase for Restores] (0 = デフォルト): [バックアップ・ジョブ作成] ページの [詳細設定] セクションでは、[複製] または [データ・コピー] オプションを使って、バック アップのセカンダリ・コピーを作成することができます。RMAN バックアップのリストア時に、 このフィールドを使って、フェーズからの適切なバックアップ・セットを利用可能な場合に、リ ストアを完了するために使用するバックアップ・フェーズを指定することができます。デフォル トの「0」の場合、NetVault Backup はアクセスが簡単なコピーを自動的に選択します(フェーズ 1 またはフェーズ 2)。利用可能な場合にオリジナルのバックアップ(フェーズ 1) を使用するように、NetVault Backup に指示する場合は、「1」を入力します。利用可能な場合にデータ・コ ピー・バックアップのセカンダリ・コピー(フェーズ 2) を使用するように、NetVault Backup に 指示する場合は、「2」を入力します。
 - ① **重要**: データ・コピー・バックアップの場合、「2」を入力しない限り、NetVault Backup は 常にオリジナル(フェーズ 1)のバックアップからリストアを実行します。
- [コンテンツ優先リストのオブジェクトの最大数(x100-0=すべて)]: このフィールドを使用して、本プラグインによって[リストア・オプション]の[バックアップ・コンテンツ] タブに表示されるアイテムの最大数を指定します。本プラグインによってバックアップ・インデックスが生成される場合、アイテム数を制限することで、実行時に使用されるメモリ容量が減少します。入力値は100倍されます。たとえば、「50」を入力した場合、最大数は5000になります。制限しない(すべてのアイテムを表示する)場合、「0」を入力します。「0」を入力し、バックアップ中にバックアップ・インデックス([リストア・オプション])を生成するときに本プラグインでエラーが発生した場合にのみエントリを変更することをお勧めします。
- 5 設定を保存するには、[OK] をクリックします。

データベースの追加

バックアップおよびリストア用プラグインの使用を開始するには、まずプラグインにターゲット Oracle[®] データベースを追加する必要があります。データベースを追加するには、本プラグインで保 護する Oracle サーバー上のデータベースごとに以下の手順に従います。

データベースを追加するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リス トの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開き、[Plug-in for Oracle]を選択します。
- 3 [アクション] リストから、[データベースの追加] を選択します。
- 4 [Oracle インスタンス詳細] タブで以下のパラメータを設定します。

Oracle インスタンスに関するすべてのパラメータは、バックアップ方法として RMAN およびユーザー管 理のどちらを使用する場合も必要です。

- [Oracle SID]: ターゲット Oracle データベースの SID を入力します。Oracle SID の特定方法については、非 RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレクトリの識別を参照してください。
- [Oracle ホーム]:ターゲット・データベースのインストール・ディレクトリのフル・パスを入力 します。Oracle ホームの特定方法については、非 RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレ クトリの識別を参照してください。
 - ① 重要: Oracle エラーを回避するため、Linux[®] および UNIX[®] の ORACLE_HOME ディレクトリの最後にスラッシュを入れないよう注意してください(ただし、Windows[®] でバックスラッシュを使用しても、エラーは起こりません)。
- [Oracle SYSDBA ユーザー名]:本プラグインがデータベースに接続する際に使用する、SYSDBA 権限を持つ Oracle ユーザーを指定します。
- [Oracle SYSDBA パスワード]:上のフィールドに指定した名前に対応するパスワードを入力します。
 - ① Plug-in for Oracle の認証の詳細は、データベース・パスワードの設定機能にアクセスして後 で設定することもできます。詳しくは、データベースのパスワード設定を参照してください。
 - ① 重要: [Oracle データベースを追加する] ダイアログ・ボックスで、または [データベース・パスワードを設定] を使用して本プラグインの認証の詳細を設定していない場合、データベースへの接続が必要になるたびに、プロンプトが表示されます。
- Linux および UNIX のみ:以下のパラメータを設定します。
 - [Oracle ソフトウェアの所有者]: すべての Oracle ソフトウェアを所有している Linux または UNIX ユーザーの名前を指定します。このユーザーは、プライマリ・グループとして Oracle Inventory グループ (oinstall)、またセカンダリ・グループとして OSDBA および OSOPER グループを持っている必要があります。通常、このユーザーには oracle という名前が付けられます。
 - [Oracle ソフトウェア・グループ]:システムにインストールされているすべての Oracle ソフトウェアのカタログである Oracle inventory を所有している Linux または UNIX グルー プの名前を指定します。通常、このグループには oinstall という名前が付けられます。
- [NLS_LANG]: NLS 言語に適合する文字セットまたはこの Oracle データベース・サーバー上にあるデータベースの NLS_LANGUAGE パラメータを選択します。NLS_LANGUAGE はデータベースのデフォルト言語を指定します。この言語は、メッセージ、日付および月の名前、AD、BC、a.m.、および p.m. を表すシンボル、デフォルトのソート・メカニズムに使用されます。

データベースの現在の NLS_LANGUAGE パラメータを特定するには、SQL*Plus から SYSDBA ユー ザーとして以下のコマンドを実行します。

select * from v\$NLS_PARAMETERS where PARAMETER = 'NLS_LANGUAGE' or PARAMETER = 'NLS_TERRITORY' or PARAMETER = 'NLS_CHARACTERSET';

リストで使用可能な選択肢に合わせて、結果が以下の形式で組み合わされます。

<NLS LANGUAGE> <NLS TERRITORY>.<NLS CHARACTERSET>
本プラグインでサポートされる言語のリストと、それに対応する NLS_LANG の値については、 言語サポートを参照してください。

このリストで、SQL*Plus クエリで特定した現在の設定に正確に一致する NLS_LANG が見つからな い場合、リストに正確な値を入力(またはコピーして貼り付け)できます。また、完全な一致は 必要ありません。互換性のある一致で十分です。たとえば、文字セット 1252 は文字セット WE8MSWIN1252 と互換性があります。

[パラメータ・ファイル・パス]: Oracle インスタンスを開始すると、初期化パラメータ・ファイル内で指定されたパラメータによってインスタンスの特性が設定されます。これらの初期化パラメータは、PFILE または SPFILE に保存されます。

ユーザー管理バックアップ方法を使用する場合、パスを指定する必要があります。RMAN による バックアップ方法を使用する場合、SPFILE のバックアップには3つのオプションがあります。以 下のオプションが含まれます。

- [RMAN の詳細] タブで [制御ファイルの自動バックアップを使用する] オプションを選択 し、SPFILE の自動バックアップを含む制御ファイルの自動バックアップを有効にする。
- [RMAN の詳細] タブで [SPFILE のバックアップに RMAN コマンドを使用] オプションが 選択されている場合、制御ファイルの自動バックアップを無効にし、SPFILE のバックアッ プに RMAN コマンドを使用する。
- 制御ファイルの自動バックアップを無効にし、[パラメータ・ファイル・パス] フィールドに SPFILE ファイルへのパスを入力することによりファイルシステム・ベースのコマンドを使用して SPFILE をバックアップする。

ユーザー管理または RMAN によるバックアップ方法を使用しており、SPFILE 用にファイル・シス テム・ベースのバックアップを使用したい場合は、PFILE または SPFILE のいずれかが使用されて いるかによって、そのディレクトリおよびファイル名を含む完全パスを指定してください。 SPFILE と PFILE を両方使用する場合は、両方の詳細を指定します。

以下の表にデフォルト・オプションを示します。

初期化ファイル	プラットフォーム	デフォルト名	デフォルトの場所
PFILE	Windows®	initSID.ora	%ORACLE_HOME%\dbs\
	Linux [®] および UNIX [®]	initSID.ora(SID は ORACLE_SID を表し ます)	\$ORACLE_HOME/dbs
SPFILE	Windows	spfileSID.ora (SID は ORACLE_SID を表 します)	%ORACLE_HOME%\dbs\
	Linux および UNIX	spfileSID.ora (SID は ORACLE_SID を表 します)	\$ORACLE_HOME/dbs

区切り文字としてカンマまたは改行を使用すると、複数のパラメータ・ファイル・パスを入力できます。デフォルトでは、このフィールドの長さは 2048 文字です。

- [自動ディスカバリ]:残りのデータベース設定フィールドを自動的に完了するには、[Oracle SID]、[Oracle ホーム]、[Oracle SYSDBA ユーザー名]、および [Oracle SYSDBA パスワード]の 各フィールドを入力した後で、このボタンをクリックします。
 - ① **重要:** [自動ディスカバリ] オプションを使用する場合は、すべてのデータベース設定 フィールドが正確であることを確認することを推奨します。Dell
- 5 RMAN によるバックアップ方法を使用する場合は、[RMAN の詳細] タブで、以下のパラメータを設定し ます。

リカバリ・カタログについて詳しくは、RMAN バックアップの前提条件を参照してください。

 [制御ファイルの自動バックアップを使用する](手動での制御ファイルと SPFILE のバックアップ を無効にする):このデータベース用に制御ファイルの自動バックアップが有効になっている場合 このオプションを選択します。制御ファイルの自動バックアップは、障害復旧およびマルチ・イ ンスタンスの RAC 環境で必要です。このオプションを選択すると、手動による制御ファイルの バックアップが無効になり、[NetVault Backup 選択] タブにある制御ファイル・ノードが使用不 可になります。マルチ・インスタンスの RAC 環境での制御ファイルの自動バックアップについて 詳しくは、RAC 環境における制御ファイルの自動バックアップの有効化を参照してください。

- [SPFILE のバックアップに RMAN コマンドを使用]: [制御ファイルの自動バックアップを使用する] が選択されていない場合のみ使用可能です。このオプションが選択されると、SPFILE のバックアップに RMAN コマンドが使用されます。[Oralce インスタンス詳細] タブの [パラメータ・ファイル・パス] フィールドで指定された SPFILE のファイルシステム・ベースのバックアップが実行されます。
- [RMAN ベースのバックアップ用カタログを使用]: このデータベースの RMAN リポジトリをリカ バリ・カタログ・データベースに保存する場合、このオプションを選択し、次に以下のパラメー タを設定します。
 - [Catalog Instance Name]: リカバリ・カタログ・データベースの Oracle インスタンス名 (Oracle Net Service 名とは異なる場合があります)を入力します。このインスタンス名は、 本プラグインがリカバリ・カタログ・データベースに接続できるように、Oracle データ ベース・サーバー上の「tnsnames.ora」ファイルで定義されている必要があります。
 - [カタログの所有者]:カタログの所有者として指定され、RECOVERY_CATALOG_OWNER のロールが与えられたユーザーを指定します。
 - [**カタログのパスワード**]:前述のフィールドに指定したカタログの所有者に対応するパス ワードを指定します。
 - 重要:リカバリ・カタログが有効でない場合、プラグインは自動的に RMAN リポジトリ情報 をデータベースの制御ファイルに保存します。
- 6 [ユーザー管理の詳細]タブで以下のパラメータを設定します。

このタブはユーザー管理によるバックアップ方法**専用**です(マルチ・インスタンスの RAC または Data Guard 環境ではサポートしていません)。

ユーザー管理によるバックアップ方法でバックアップできるのはファイル・システムのオブジェクトだけです。ASM ストレージに保存されているアーカイブ・ログはバックアップできません。
 [ユーザー管理の詳細] タブの [アーカイブ・ログ・デスティネーション・ディレクトリ] フィールドは、ブランクのままにしても構いません (ASM ストレージ内のデータベースのバックアップは、RMAN バックアップ方法でのみ使用できます)。

制御ファイルおよびアーカイブ REDO ログに対してユーザー管理バックアップを実行するには、以下の情報を指定します。バックアップおよびリカバリ計画に RMAN が選択されている場合、これらのフィールドをブランクのままにしても構いません。

[制御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)]:本プラグインでユーザー管理によるバックアップ方法を使用する場合、制御ファイルのバックアップおよびリストアを実行する際にアクティブな制御ファイルは使用されません。制御ファイルのスナップショットが作成され、[制御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)]フィールドに入力したファイル名付きで保存され、さらに制御ファイルのスナップショットまたはコピーがバックアップされます。この手順により、制御ファイルの一貫したコピーが保護されます。

制御ファイルのリストアが含まれるユーザー管理リストア・シーケンスでは、制御ファイルが制 御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)にリストアされます。この手順により、アクティブ な制御ファイルが上書きされなくなります。ユーザー管理リカバリ・プロセスの実行中、必要に 応じて制御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)から元の場所に制御ファイルを手動でコ ピーする必要があります。

制御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)では、制御ファイルのコピーを保存する Oracle データベース・サーバー上のディレクトリのフル・パスと固有のファイル名を含むフル・パスを 指定し、本プラグインが指定先およびそのファイルへの読み書き可能権限を持っていることを確 認します。

 [アーカイブ・ログ・デスティネーション・ディレクトリ]:パラメータ・ファイルで LOG_ARCHIVE_DEST または LOG_ARCHIVE_DEST_n パラメータに設定されているアーカイブ・ ログ・ディレクトリのフル・パスを入力します。REDO ログを複数の場所にアーカイブする場合は、このフィールドにプライマリ・アーカイブ先ディレクトリのみを指定します。

- ① 重要:ユーザー管理バックアップ方法は、アーカイブ・ログの格納先ディレクトリに毎日作 成されるサブフォルダのような動的パス名をサポートしていません。
- [アーカイブ・ログ・フォーマット]:アーカイブ・ログ・ファイルの拡張子を指定します。アーカイブ・ファイル・パターンは、パラメータ・ファイルの LOG_ARCHIVE_FORMAT 設定の内容によって異なります。以下に例を示します。
 - LOG_ARCHIVE_FORMAT = "%t_%s_%r.dbf"の場合、アーカイブ・ファイル・パターンは *.dbfです。
 - LOG_ARCHIVE_FORMAT = "%t_%s.arc"の場合、アーカイブ・ファイル・パターンは*.arc です。
 - LOG_ARCHIVE_FORMAT = "arc%s.%t"の場合、アーカイブ・ファイル・パターンは arc*.* です。
- 7 [外部設定] タブで以下のパラメータを設定します。

データベースは、オペレーションで、ネットワーク設定ファイルやパスワード・ファイルなど、他のタ イプのファイルに依存しますが、これらのファイルを Oracle RMAN コマンドでバックアップすることは できません。ただし、障害復旧を実施する場合、または Oracle の設定作業中にユーザー・エラーからの リカバリを行う場合、これらのファイルは便利です。

[Oracle ネットワーク設定ディレクトリ、またはファイル・パス*] フィールドおよび [Oracle パスワー ド・ディレクトリ、またはファイル・パス*] フィールドでは、以下を1つまたは複数入力できます。

- ディレクトリ・パス:ディレクトリ・パスを入力すると、本プラグインによって、Oracle ネット ワーク設定ファイルまたは Oracle パスワード・ファイルに対応するファイル名の検索のために ディレクトリがスキャンされます。ディレクトリ内の残りのファイルは無視されます。
- ファイルの完全修飾パス:パスにディレクトリとファイル名が含まれます。

[外部設定]フィールドは以下のようになります。

- [Oracle ネットワーク設定ディレクトリ、またはファイル・パス]: Oracle ネットワーク設定ファ イルがあるディレクトリ、または Oracle ネットワーク設定ファイルのリストを入力します。
- [Oracle パスワード・ディレクトリ、またはファイル・パス]: Oracle パスワード・ファイルがあ るディレクトリ、または Oracle パスワード・ファイルのリストを入力します。
- 8 [任意の OS 認証の詳細] タブ(Windows[®] ベースの OS のみ)で、以下のパラメータを設定します。

以下のフィールドを使用して、Windows インストールが Oracle SYSDBA ユーザーに「なりすます」ための Windows 管理者ユーザー名を指定します。このログイン方法は、ORA-01031 insufficient エラーによりバックアップが失敗した場合にのみ必要です。

- [Windows 管理者のユーザー名]:本プラグインを実行するアカウントの Windows 管理者ユー ザー名を入力します。このフィールドで指定する名前は、すでに Windows OS で作成されている 必要があります。
- [パスワード]:上のフィールドで指定した名前に関連付けられているパスワードを入力します。
- [Windows ドメイン]: このユーザーが属するドメインを指定します。これがローカル・ドメインの場合は、ブランクのままにします。
- 9 設定を保存するには、[OK]をクリックします。

データベース情報の編集

データベース詳細を再設定するには

1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リス トの隣りにある [新規作成] をクリックします。

- 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開き、[Plug-in for Oracle] をダブルクリック します。
- 3 適切なデータベース名をクリックして、それをハイライトします(チェック・ボックスは選択しないようにする必要があります)。
- 4 **[アクション]**リストから、**[データベースの編集]**を選択します。

[Oracle データベースを編集する] ダイアログ・ボックスに、データベース・インスタンスに設定された 値が表示されます。

5 必要に応じてパラメータを再設定します。

このダイアログ・ボックスの各フィールドに関する情報については、データベースの追加を参照してください。

- 6 変更を保存するには、[OK] をクリックします。
 - ① 重要: [Oracle データベースを編集する] ダイアログ・ボックスのパスワード・フィールドはブランクです。パスワードを再度設定する必要があります(変更しない場合も同様です)。この手順を行わないと、更新した情報を保存するときに、既存の値がリセットされブランクになります。本プラグインの認証のアカウント名、パスワードを更新するには、[データベースを編集] ではなく、[データベース・パスワードを設定] オプションを選択します。

データベースのパスワード設定

Plug-in for Oracle では、データベースに自動的に接続する際に使用する Oracle[®] 認証のアカウント 名およびパスワードを保存できます。アカウント情報を保存しておくと、データベースへの接続が必 要になるたびにアカウント情報を入力する必要がなくなります。これらのアカウント情報は、データ ベースを追加するとき、または後で [データベースパスワードを設定] オプションを使用して保存で きます。

追加されたデータベースについてアカウント名およびパスワードを設定するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リス トの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開きます。
- 3 [Plug-in for Oracle] をダブルクリックして、適切なデータベースを選択します。
- 4 [アクション] リストから、[データベース・パスワードの設定] を選択します。
- 5 以下の情報を入力します。
 - [アカウント名]: SYSDBA 権限を持つ Oracle ユーザーの名前を入力します。
 - [パスワード]:上のフィールドで指定した名前に関連付けられているパスワードを入力します。
- 6 設定を保存するには、[OK] をクリックします。
 - ① **重要**:設定済みの SYSDBA ユーザーのパスワードを Oracle データベースで変更した場合、本プラグ インでパスワードを更新する必要があります。

保存したパスワードの消去

データベースに設定された認証の詳細を消去するには

- [ナビゲーション] パネルで、[バックアップ ジョブ作成] をクリックして、次に [セレクション] リストの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開きます。

- 3 [Plug-in for Oracle]をダブルクリックして、適切なデータベースを選択します。
- 4 [アクション] リストから、[保存されたパスワードのリセット] を選択します。
- 5 **[ログインのリセット]** ダイアログ・ボックスが表示されたら、**[はい]** をクリックして認証の詳細を消 去します。

データベースの削除

以前に設定したデータベースが不要になった場合、本プラグインから削除できます。

データベースを削除するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リストの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開きます。
- 3 [Plug-in for Oracle] をダブルクリックして、適切なデータベースを選択します。
- 4 [アクション] リストから、[データベースの削除] を選択します。
- 5 [Oracle **データベースを削除する**] ダイアログ・ボックスが表示されたら、[はい] をクリックしてデー タベースを削除します。

データベースの詳細表示

前回データベースに設定した有効なオプションや、本プラグインに必要な前提条件など、データベー スの詳細を見るには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リストの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開きます。
- 3 [Plug-in for Oracle] をダブルクリックして、適切なデータベースを選択します。
- 4 [アクション] リストから、[詳細表示] を選択します。

[詳細]ダイアログ・ボックスに、以下の情報が表示されます。

- [データベース名]: sys.v\$database v\$ テーブルの NAME カラムで識別されるデータベースとして 選択されたデータベース名。
- [DBID]:選択したデータベース用の Oracle[®] DBID。DBID はデータベースを識別するために内部的 に、それぞれ固有に生成された番号で、これは障害復旧プロセスで必要です。
- [Oracle バージョン]:選択されたデータベースの Oracle のバージョンまたはリリース番号。選択 されたデータベースが Oracle Enterprise Edition の場合、その情報も表示されます。選択された データベースがその他の Oracle Database 製品エディションの場合、Oracle のバージョンのみが 表示されます。
- NLS_LANGUAGE: データベースのデフォルト言語を表示します。この言語は、メッセージ、日付および月の名前、AD、BC、a.m.、および p.m. を表すシンボル、デフォルトのソート・メカニズムに使用されます。
- [Flash Recovery Area デスティネーション]: FRA が有効な場合の FRA の保存先を表示します。
- [Flashback Database 使用可能]: Flashback Database 機能が有効な場合は「YES」、無効な場合は「NO」が表示されます。
- [Real Application Clusters]: インスタンスがマルチ・インスタンスの RAC 環境の一部の場合には は[TRUE] が表示され、インスタンスがシングル・インスタンス環境の場合は[FALSE] が表示 されます。

- [**ブロック・メディア・リカバリ**]:選択されたデータベースにブロック・メディア・リカバリが 使用可能な場合、Oracle Database 製品エディションに基づいて [**TRUE**] が表示されます。
- [Block Change Tracking]: Block Change Tracking がデータベース用に使用可能な場合
 [ENABLED] が表示され、Block Change Tracking が無効の場合は [DISABLED] が表示されます。
- [Control File Autobackup]:制御ファイルの自動バックアップがデータベース用に使用可能な場合は[ON]が表示され、無効な場合は[OFF]が表示されます。
- [Log Mode]: データベースに使用可能な REDO ログの自動アーカイブがある場合は [ARCHIVELOG]、ない場合は [NOARCHIVELOG] と表示されます。
- 5 ダイアログ・ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

RMAN のポストバックアップ・スクリプトを使用する

本プラグインは、RMAN コマンドが含まれるスクリプトをバックアップ・ジョブの完了時に実行する 機能を備えています。たとえば、この機能を使用して、RMAN リポジトリのクロスチェックを実行で きます。このクロスチェックでは、適切な RMAN コマンドが含まれるポストバックアップ・スクリプ トを実行し、RMAN リポジトリ内のバックアップについてのデータが、NetVault データベース内にあ る対応するデータと同期されていることを確認します。この機能は、RMAN およびスクリプトに関す る高度なスキルを持つ Oracle[®] データベース管理者用に設計されています。

RMAN ポストバックアップ・スクリプトを作成するには

- ① 重要: RMAN ポストバックアップ・スクリプトを追加する場合は、データベースの選択はサポートされていません。バックアップ・ジョブに RMAN ポストバックアップ・スクリプトを使用する場合、データベース・ノードを選択することはお勧めできません。これは、データベース・ノードを選択すると、すべての事前定義スクリプトを含むすべてのサブファイルがデフォルトで選択されるためです。このため、バックアップ・ジョブを実行する前に、ポストバックアップ・スクリプトが1つだけ選択されていることを確認する必要があります。
 - 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リストの隣りにある [新規作成] をクリックします。
 - 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開きます。
 - 3 [Plug-in for Oracle] をダブルクリックして、適切なデータベースを選択します。
 - 4 [アクション] リストから、[RMAN ポストバックアップ・スクリプトの追加] を選択します。

このコマンドは以下の方法でもアクセスできます。

- a データベース・ノードを開きます。
- b [ポストバックアップ・スクリプト] アイテムをダブル・クリックし、ポップアップ・メニューから [RMAN ポストバックアップ・スクリプトの追加]を選択します。
- 5 [RMAN ポストバックアップ・スクリプトの追加] ダイアログ・ボックスで、スクリプトの詳細を入力し ます。
 - [スクリプト名]:ポストバックアップ・スクリプトの名前を指定します。ただし、スクリプト名には以下の文字を使用しないよう注意してください。
 - コロン(:)
 - 感嘆符(!)
 - パイプ(|)

これらの文字を含めると、エラー・メッセージが表示されます。

- [スクリプト]: スクリプトで使用するターゲット、カタログ、または補助データベースに接続するために必要な接続文字列など、RMAN コマンドを入力します。
- [「catalog」の使用 / 「nocatalog」の使用]:カタログにスクリプトをこれらのオプション付きで 接続するか選択します。
- 6 [保存]をクリックしてスクリプトを保存し、このダイアログ・ボックスを閉じます。

ポストバックアップ・スクリプトを更新するには

- データベース・ノードを開き、[ポストバックアップ・スクリプト] ノードの下にあるスクリプトをダブ ルクリックします。
- 2 必要な変更を行い、[保存]をクリックします。

ポストバックアップ・スクリプトを削除するには

- データベース・ノードを開き、[ポストバックアップ・スクリプト] ノードの下にあるスクリプトを選択します。
- 2 [アクション] リストから、[ポストバックアップ・スクリプトの削除] を選択します。
- 3 確認ダイアログ・ボックスで [はい] をクリックします。

言語サポート

以下の表に、本プラグインで使用可能なデフォルト言語と、それぞれに対応する NLS_LANG の値を 示します。

表 1. 値

言語	NLS_LANG の値
アラビア語	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
ポルトガル語(ブラジル)	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8MSWIN1252
	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.UTF8
	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8ISO8859P1
	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8ISO8859P15
カタルーニャ語	CATALAN_CATALONIA.WE8ISO8859P1
	CATALAN_CATALONIA.WE8MSWIN1252
	CATALAN_CATALONIA.WE8ISO8859P15
簡体字中国語	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16CGB231280
	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.UTF8
	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK
繁体字中国語	TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16BIG5
クロアチア語	CROATIAN_CROATIA.EE8MSWIN1250
チェコ語	CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250
デンマーク語	DANISH_DENMARK.WE8ISO8859P1
	DANISH_DENMARK.WE8MSWIN1252
	DANISH_DENMARK.WE8ISO8859P15
オランダ語	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8ISO8859P1
	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8MSWIN1252
	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8ISO8859P15

表 1. 値

言語	NLS_LANG の値	
英語	AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8	
	AMERICAN_AMERICA.US7ASCII	
	AMERICAN_AMERICA.UTF8	
	AMERICAN_AMERICA.WE8ISO8859P1	
	AMERICAN_AMERICA.WE8ISO8859P15	
	AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252	
	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8ISO8859P1	
	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8ISO8859P15	
	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8MSWIN1252	
フィンランド語	FINNISH_FINLAND.WE8ISO8859P1	
	FINNISH_FINLAND.WE8MSWIN1252	
	FINNISH_FINLAND.WE8ISO8859P15	
フランス語	FRENCH_FRANCE.UTF8	
	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P1	
	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P15	
	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252	
ドイツ語	GERMAN_GERMANY.UTF8	
	GERMAN_GERMANY.WE8ISO8859P1	
	GERMAN_GERMANY.WE8ISO8859P15	
	GERMAN_GERMANY.WE8MSWIN1252	
ギリシャ語	GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253	
ヘブライ語	HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255	
	HEBREW_ISRAEL.UTF8	
ハンガリー語	HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250	
イタリア語	ITALIAN_ITALY.UTF8	
	ITALIAN_ITALY.WE8ISO8859P1	
	ITALIAN_ITALY.WE8ISO8859P15	
	ITALIAN_ITALY.WE8MSWIN1252	
日本語	JAPANESE_JAPAN.JA16EUC	
	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS	
	JAPANESE_JAPAN.UTF8	
韓国語	KOREAN_KOREA.KO16KSC5601	
	KOREAN_KOREA.KO1616KSCCS	
	KOREAN_KOREA.UTF8	
ノルウェー語	NORWEGIAN_NORWAY.WE8ISO8859P1	
	NORWEGIAN_NORWAY.WE8ISO8859P15	
	NORWEGIAN_NORWAY.WE8MSWIN1252	
ポーランド語	POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250	
ポルトガル語	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8ISO8859P1	
	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8ISO8859P15	
	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8MSWIN1252	
ルーマニア語	ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250	
ロシア語	RUSSIAN_CIS.CL8MSWIN1251	
スロバキア語	SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250	

表 1. 値

言語	NLS_LANG の値
スペイン語	SPANISH_SPAIN.UTF8
	SPANISH_SPAIN.WE8ISO8859P1
	SPANISH_SPAIN.WE8ISO8859P15
	SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252
スペイン語(ラテン・アメ	LATIN AMERICAN SPANISH_AMERICA.WE8ISO8859P1
リカ)	LATIN AMERICAN SPANISH_AMERICA.WE8ISO8859P15
	LATIN AMERICAN SPANISH_AMERICA.WE8MSWIN1252
スウェーデン語	SWEDISH_SWEDEN.WE8ISO8859P1
	SWEDISH_SWEDEN.WE8ISO8859P15
	SWEDISH_SWEDEN.WE8MSWIN1252
トルコ語	TURKISH_TURKEY.WE8ISO8859P9



- ユーザー管理バックアップの実行
- RMAN バックアップの実行
- Oracle ACFS のバックアップ

ユーザー管理バックアップの実行

ユーザー管理バックアップには、以下の手順が含まれます。

- バックアップ対象データの選択
- バックアップ・オプションの選択
- ジョブのファイナライズと実行

バックアップ対象データの選択

バックアップ・ジョブを作成するには、セット(バックアップ・セレクション・セット、バックアッ プ・オプション・セット、スケジュール・セット、ターゲット・セット、および詳細設定セット)を 使用する必要があります。

バックアップ・セレクション・セットは、増分および差分バックアップに必要です。フル・バック アップを実行中には、バックアップ・セレクション・セットを作成してからフル、増分、差分バック アップに使用する必要があります。増分または差分バックアップにセレクション・セットが使用され ていない場合、バックアップ・ジョブがエラーをレポートします。詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。

バックアップ・セレクション・セットを作成するには

1 [ナビゲーション]パネルで、[バックアップ・ジョブ作成]をクリックします。

[ガイド付き設定] リンクからウィザードを開始することもできます。[ナビゲーション] パネルで、[ガ イド付き設定] をクリックします。[NetVault 設定ウィザード] ページで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

2 [ジョブ名] に、ジョブの名前を指定します。

ジョブの進捗状況の監視やデータのリストア時にジョブを識別しやすくするため、分かりやすい名前を 割り当てます。ジョブ名には英数字と英数字以外の文字を使用できますが、非ラテン語系の文字を含め ることはできません。Linux[®]の場合、名前は最大で 200 文字です。Windows[®]の場合、長さ制限はあり ません。ただし、すべてのプラットフォームで、40 文字以内にすることをお勧めします。

- 3 [セレクション] リストの隣りにある、[新規作成] をクリックします。
- 4 プラグインのリストから [Plug-in for Oracle]を開いて、次にバックアップするデータベースを開きます。
- 5 本プラグインの認証詳細を設定していない場合、プロンプトが表示されたら必要な情報を入力して、 [OK] をクリックします。
 - [アカウント名]: SYSDBA 権限を持つ Oracle[®] データベース・ユーザー名を指定します。

- [パスワード]: 上のフィールドで指定した名前に関連付けられているパスワードを入力します。
- プラグインをデータベースに接続し、サポートされているファイル・タイプのリストを表示したら、 バックアップするデータを選択します。

本プラグインは、ユーザー管理バックアップの対象として以下のファイル・タイプをサポートしています。

- [パラメータ・ファイル]: Oracle データベースの PFILE または SPFILE を含めるには、この チェックボックスをオンにします。このノードを開いてファイル名を確認することは可能ですが、 そのレベルでファイルを選択することはできません。
- [制御ファイル]:このチェックボックスをオンにした場合、本プラグインは制御ファイルのス ナップショットを作成し、[Oracle データベースを追加(または編集)する]ダイアログ・ボッ クスの[制御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)]フィールドに指定されたパスおよびファ イルに保存します。その後、制御ファイルのスナップショット・コピーがバックアップ・デバイ スにバックアップされます。
- [アーカイブ・ログ]: [ユーザー管理の詳細] タブの [アーカイブ・ログ・デスティネーション・ディレクトリ] フィールドに指定された場所にあるすべてのアーカイブ REDO ログをバックアップするには、このオプションを選択します(本プラグインは、アーカイブ REDO ログをバックアップ後に自動的に削除しません)。
- [全テーブルスペース]: このノードを選択すると、データベース内のすべてのテーブルスペース をバックアップできます。または、このノードを開き、個々のテーブルスペースを選択してバッ クアップに含めることができます。現在本プラグインはユーザー管理によるバックアップ・セレ クションに対する個別データファイルのバックアップはサポートしていませんが、リストア対象 として個々のデータファイルを選択することは可能です。
- [外部設定ファイル (RMAN バックアップ方法に対してのみ)]: このオプションは、RMAN による バックアップ方法に適用されます。ユーザー管理によるバックアップ方法の選択に外部設定ファ イルが含まれている場合は、警告メッセージが NetVault Backup バイナリ・ログに表示されます。 ただし、この警告1つだけでバックアップ・ジョブのステータスがバックアップが警告付きで完 了に設定されることはありません。つまり、バックアップ・タスクでは、ログに記録された警告 は無視されます。
- [ポストバックアップ・スクリプト]: このオプションは、RMAN によるバックアップ方法で使用 します。
 - 重要:ユーザー管理によるバックアップ方法で行うバックアップに個別のデータファイルを 選択すると、バックアップ・エラーが発生し、NetVault Backup のバイナリ・ログに、「ユー ザー管理バックアップ方法では個別データファイル・レベルのバックアップはサポートされ ていません」と表示されます。

Oracle の ASM に保存されているファイルがユーザー管理バックアップ方法でバックアップ されるよう選択されている場合、バックアップ・ジョブは失敗に終わります。この選択に は、すべてのデータファイル、SPFILE、制御ファイルまたは ASM に保存されているその他 のファイルも含まれます。ASM がデータベースで有効になっている場合、RMAN バックアッ プ方法を使用する必要があります。

7 [保存]をクリックして、[新規セットの作成]ダイアログ・ボックスに名前を入力し、[保存]をクリックします。

名前には英数字と英数字以外の文字を使用できますが、非ラテン語系の文字を含めることはできません。 Linux[®]の場合、名前は最大で200文字です。Windows[®]の場合、長さ制限はありません。ただし、すべ てのプラットフォームで、40文字以内にすることをお勧めします。

既存のバックアップ・セレクション・セットを使用するには

1 [ナビゲーション] パネルで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

[ガイド付き設定] リンクからウィザードを開始することもできます。[ナビゲーション] パネルで、[ガ イド付き設定] をクリックします。[NetVault 設定ウィザード] ページで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

2 [選択] リストで、既存のバックアップ・セレクション・セットを選択します。

Oracle テーブルスペースが含まれるバックアップ・セレクション

大規模な Oracle[®] データベースを多数の個別バックアップ・ジョブに分割している場合は、これらの ジョブの内容が、明示的に定義されているのが普通です(テーブルスペースには、大きい緑色の チェック・マークが付けられて、明示的に、または手動で選択されています)。Oracle インスタンス 内に新しいテーブルスペースが作成された場合、それらは既存のどのバックアップ・ジョブにも含ま れません。これは、テーブルスペースは手動で選択されており、新しいテーブルスペースはバック アップ対象のテーブルスペースのリストに含まれていないからです。

新しいテーブルスペースが確実にバックアップに含まれるようにするには、別のバックアップ・ジョ ブを作成し、ここで【**全テーブルスペース】**ノードを明示的または手動で選択します。この手順で、 新たに作成されたテーブルスペースは、バックアップ・ジョブの一環としてバックアップされます。

例

データベースに、以下のテーブルスペースがあります。

- China_Sales
- Japan_Sales
- Korea_Sales
- LA_Sales
- London_Sales
- NY_Sales
- SD_Sales
- UK_Sales
- ASIA_TS バックアップ・ジョブを作成して、[China_Sales]、[Japan_Sales]、および [Korea_Sales]
 テーブルスペースを明示的に選択します。
- 2 US_TS バックアップ・ジョブを作成して、[LA_Sales]、[NY_Sales]、および [SD_Sales] テーブルス ペースを明示的に選択します。
- 3 EMEA_TS バックアップ・ジョブを作成して、[London_Sales] および [UK_Sales] テーブルスペースを 明示的に選択します。
- 4 All_TS バックアップ・ジョブを作成して、[全テーブルスペース] ノードを明示的に選択し、他のバック アップ・ジョブに含まれるテーブルスペースをすべて選択解除します。

バックアップ・オプションの選択

次の手順には、バックアップ・オプション・セットの作成または既存のセットの選択が含まれています。

バックアップ・オプション・セットを作成するには

- 1 [プラグインオプション]リストの隣りにある、[新規作成]をクリックします。
- 2 ユーザー管理バックアップを実行するには、[バックアップ方法] セクションで、[ユーザー管理] をオンにします。
- 3 必要に応じて、以下のオプションから選択します。
 - [読み込み専用およびオフライン・テーブルスペースを含める]:本プラグインはデフォルトで、 [NetVault Backup 選択]ページで明示的に選択されていても、読み取り専用およびオフライン・ テーブルスペースをバックアップしません。通常、読み取り専用データが更新されるか、オフラ イン・テーブルスペースがオンラインになった場合を除き、読み取り専用およびオフライン・ テーブルスペースをバックアップする必要はありません。これらのテーブルスペースをユーザー 管理フル・バックアップから除外することにより、バックアップ時間を短縮できます。読み取り

専用およびオフライン・テーブルスペースをバックアップに含めるには、このオプションを選択 します。

 [バックアップ完了後にアーカイブ・ログを削除する]: このオプションでは、アーカイブ・ログ をバックアップ後に自動的に削除します。これにより、これらのログを手動で削除する必要がな くなります。このオプションは、アーカイブ・ログをバックアップ・メディアにバックアップす る場合に便利です。

本プラグインは、ログの各シーケンス・ナンバーをバックアップしてから、バックアップした ファイルを削除します。REDO ログのアーカイブ先が複数ある場合、ログのシーケンス・ナンバー が同じでもほかのコピーは削除されません。

- ① 重要: [バックアップ完了後にアーカイブ・ログを削除する]オプションを使用すると、 バックアップ・ジョブが失敗してもアーカイブ・ログが削除されます。したがって、[選択 したアイテムのバックアップが不完全の場合] で選択するオプションに、バックアップ・ セーブセットの保持が含まれ、アーカイブ・ログのリストアが可能であることを確認する必 要があります。
- 4 [**選択したアイテムのバックアップが不完全の場合**] リストから、本プラグインに対するデフォルト・ア クションを選択します。

複数のアイテムがバックアップに含まれており、選択されたアイテムのうちプラグインでバックアップ できないアイテムがある場合、本プラグインでは、バックアップで実行するアクションを指定できます。 たとえば、ジョブに複数のテーブルスペースとアーカイブ・ログが含まれており、テーブルスペースは 正しくバックアップされたが、アーカイブ・ログのバックアップに失敗した場合、バックアップ・ジョ ブによって実行するアクションを指定します。

- [警告で終了 セーブセットは保持されます]: ジョブが [警告で完了] というステータスを返し、正常にバックアップされたアイテムからなるバックアップ・セーブセットが作成されます。
- 「警告なしで完了 セーブセットは保持されました]:ジョブが完了し、「ジョブ終了]というステータスを返します。エラーは NetVault Backup バイナリ・ログに記録され、「ジョブ・ステータス]ページでは無視されます。バックアップされたアイテムからなるバックアップ・セーブセットが作成されます。
- [失敗 セーブセットは保持されます]:バックアップ・ジョブは、[バックアップ・ジョブ失敗] というステータスを返しますが、正常にバックアップされたアイテムからなるバックアップ・ セーブセットが作成されます。
- [失敗 保存セットは保持されませんでした]:バックアップ・ジョブは、[バックアップ 失敗] いうステータスを返し、バックアップされたオブジェクトのセーブセットは保持されません。選 択された一部のオブジェクトが正しくバックアップされた場合も削除されます。
- 5 [保存]をクリックして、セットを保存します。
- 6 **[新規セットの作成]**ダイアログ・ボックスで、セットの名前を指定して、**[保存]**をクリックします。

名前には英数字と英数字以外の文字を使用できますが、非ラテン語系の文字を含めることはできません。 Linux[®]の場合、名前は最大で200文字です。Windows[®]の場合、長さ制限はありません。ただし、すべ てのプラットフォームで、40文字以内にすることをお勧めします。

既存のバックアップ・オプション・セットを使用するには

[プラグイン・オプション]リストで、使用する既存のバックアップ・オプション・セットを選択します。

ジョブのファイナライズと実行

バックアップ・ジョブをファイナライズおよび実行するには

- 1 [スケジュール]、[ターゲット・ストレージ]、および[詳細設定]リストを使って、その他の必要なオ プションを設定します。
- 2 [保存] または [保存 & 実行] の、どちらか適切な方をクリックします。

Dell NetVault Backup Plug-in for Oracle 10.0.5 ユーザーズ・ガイド

① **ヒント**: すでに作成、保存しているジョブを実行するには、[ナビゲーション] パネルで [ジョブ 定義管理] を選択し、目的のジョブを選択して、[今すぐ実行] をクリックします。

[ジョブ・ステータス]ページで進捗状況を監視したり、[ログ参照]ページでログを表示したりできます。詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。

RMAN バックアップの実行

RMAN バックアップには、以下の手順が含まれます。

- バックアップ対象データの選択
- バックアップ・オプションの設定
- ジョブのファイナライズと実行

バックアップ対象データの選択

バックアップ・ジョブを作成するには、セット(バックアップ・セレクション・セット、バックアッ プ・オプション・セット、スケジュール・セット、ターゲット・セット、および詳細設定セット)を 使用する必要があります。

バックアップ・セレクション・セットは、増分および差分バックアップに必要です。フル・バック アップを実行中には、バックアップ・セレクション・セットを作成してからフル、増分、差分バック アップに使用する必要があります。増分または差分バックアップにセレクション・セットが使用され ていない場合、バックアップ・ジョブがエラーをレポートします。詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。

バックアップ・セレクション・セットを作成するには

1 [ナビゲーション]パネルで、[バックアップ・ジョブ作成]をクリックします。

[ガイド付き設定] リンクからウィザードを開始することもできます。[ナビゲーション] パネルで、[ガ イド付き設定] をクリックします。[NetVault 設定ウィザード] ページで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

2 [ジョブ名] に、ジョブの名前を指定します。

ジョブの進捗状況の監視やデータのリストア時にジョブを識別しやすくするため、分かりやすい名前を 割り当てます。ジョブ名には英数字と英数字以外の文字を使用できますが、非ラテン語系の文字を含め ることはできません。Linux[®]の場合、名前は最大で 200 文字です。Windows[®]の場合、長さ制限はあり ません。ただし、すべてのプラットフォームで、40 文字以内にすることをお勧めします。

- 3 [セレクション] リストの隣りにある、[新規作成] をクリックします。
- 4 プラグインのリストから [Plug-in for Oracle] を開いて、次にバックアップするデータベースを開きます。
- 5 本プラグインの認証詳細を設定していない場合、プロンプトが表示されたら必要な情報を入力して、 [OK] をクリックします。
 - [アカウント名]: SYSDBA 権限を持つ Oracle[®] データベース・ユーザー名を指定します。
 - [パスワード]:上のフィールドで指定した名前に関連付けられているパスワードを入力します。
- プラグインをデータベースに接続し、サポートされているファイル・タイプのリストを表示したら、 バックアップするデータを選択します。

本プラグインは、RMAN バックアップの対象として以下のファイル・タイプをサポートしています。

- データベース・ノード:このノードが選択され、個々のサブ・ノードは選択されていない場合、 RMAN の BACKUP DATABASE PLUS ARCHIVE LOG コマンドと同様に、Oracle データベース全体が バックアップされます。パラメータ・ファイル、制御ファイルまたはアーカイブ・ログについて のみ個別に特殊なバックアップを実行するのでない限り、フルまたは増分バックアップを実行す る際、このノードを選択することをお勧めします。Dell
- 「パラメータ・ファイル]: このオプションは、[Oracle データベースを追加(または編集)する] ダイアログ・ボックスの[RMANの詳細]タブで[制御ファイルの自動バックアップを使用する] オプションが選択されていない場合のみ使用可能です。バックアップにOracle データベースの PFILE または SPFILE を含めるには、このノードを選択します。[Oracle データベースを追加 (または編集)する]ダイアログ・ボックスで[制御ファイルの自動バックアップを使用する]ま たは [SPFILE のパックアップに RMAN コマンドを使用する]オプションが有効になっている場 合、[パラメータ・ファイル]ノードは拡張されません。[パラメータ・ファイル]ノードが拡張 されている場合は、パラメータ・ファイル名が表示されます。
- ・ [制御ファイル]:このオプションは、[Oracle データベースを追加(または編集)する]ダイアログ・ボックスの[RMANの詳細]タブで[制御ファイルの自動バックアップを使用する]オプションが選択されていない場合のみ使用可能です。制御ファイルの手動バックアップを実行するには、このノードを選択します。制御ファイルの最新のコピーを常に使用できるようにするには、制御ファイルを各 RMAN ベース・バックアップに含めます。リカバリ・カタログを使用しない場合、本プラグインで制御ファイルの手動バックアップをリストアすることはできません。制御ファイルの手動バックアップおよび自動バックアップについて詳しくは、制御ファイルの手動バックアップを参照してください。
- [アーカイブ・ログ]:アーカイブ REDO ログは PIT リカバリに不可欠であるため、定期的にバッ クアップする必要があります。このノードを選択して、フルまたは増分バックアップ・ジョブに アーカイブ・ログを含めることをお勧めします。さらに、アーカイブ・ログは Archive Log バック アップ・タイプによって個別に保護することが可能です。
- [全テーブルスペース]: このノードを選択すると、データベース内のすべてのテーブルスペース をバックアップできます。または、このノードを開き、個々のテーブルスペースを選択してバッ クアップに含めることができます。また、個々のテーブルスペースを展開して、個々のデータ ファイルを選択できます。このオプションは、データファイルのサブセットをバックアップする 場合に便利です。データベース全体のバックアップを実行すると許容されるバックアップ期間よ りも時間がかかるからです。
- [外部設定ファイル (RMAN バックアップ方法に対してのみ)]: 外部設定ファイルをバックアップ に含めるには、このノードを選択します。または、ノードを開いて個々の Oracle ネットワーク設 定ファイルまたは Oracle パスワード・ファイルをバックアップ対象として選択します。 Plug-in for Oracle は、Dell NetVault Backup Plug-in for FileSystem (Plug-in for FileSystem) 機能 を使用して、Oracle ネットワーク設定ファイルおよび Oralce パスワード・ファイルをバックアッ プおよびリストアします。
- [ポストバックアップ・スクリプト]:本プラグインを使用して生成されたポストバックアップ・ スクリプトをバックアップするには、このノードを開いて個々のスクリプトを選択します。ポス トバックアップ・スクリプトの詳細については、RMANのポストバックアップ・スクリプトを使 用するを参照してください。
 - ① **重要:**テーブルスペースおよびデータファイルをバックアップするには、データベースは OPEN 状態である必要があります。一方、制御ファイル、SPFILE およびアーカイブ・ログ は、データベースが MOUNT 状態であってもバックアップすることが可能です。
- 7 [保存]をクリックして、[新規セットの作成]ダイアログ・ボックスに名前を入力し、[保存]をクリッ クします。

名前には英数字と英数字以外の文字を使用できますが、非ラテン語系の文字を含めることはできません。 Linux[®]の場合、名前は最大で200文字です。Windows[®]の場合、長さ制限はありません。ただし、すべ てのプラットフォームで、40文字以内にすることをお勧めします。

既存のバックアップ・セレクション・セットを使用するには

1 [ナビゲーション] パネルで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

[ガイド付き設定] リンクからウィザードを開始することもできます。[ナビゲーション] パネルで、[ガ イド付き設定] をクリックします。[NetVault 設定ウィザード] ページで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

2 [選択] リストで、既存のバックアップ・セレクション・セットを選択します。

バックアップ・オプションの設定

次の手順には、バックアップ・オプション・セットの作成または既存のセットの選択が含まれています。

バックアップ・オプション・セットを作成するには

- 1 [プラグインオプション]リストの隣りにある、[新規作成]をクリックします。
- 2 RMAN バックアップを実行するには、[バックアップメソッド] で [RMAN] オプションをオンにします。
 - ① 重要:バックアップに RMAN バックアップ方法を使用する場合は、[ターゲット・ストレージ] タブにある [必ずメディアの先頭に書き込む] オプションを選択しないよう注意する必要があります。RMAN バックアップ方法では、複数のデータ・ストリームが生成されるため、これらのバックアップで [必ずメディアの先頭に書き込む] オプションを選択すると、各データ・ストリームはメディアの先頭にバックアップされるよう、別々のメディアをターゲットとする結果となります。
- 3 バックアップ先を選択します。

Flash Recovery Area が [Oracle データベースを追加(または編集)する] ダイアログ・ボックスで有効になっている場合、このオプションでバックアップの格納先を選択できます。

- テープ(NetVault Backup のメディアにバックアップ): このオプションを選択すると、[ター ゲット] タブで指定した任意のメディア(物理テープ、ディスク上に格納された NetVault Backup VTL または NetVault Backup SmartDisk など)にバックアップを送信します。このオプションを選 択すると、本プラグインはバックアップの実行に「SBT_TAPE」チャネルを割り当てます。
- ディスク(FRA にバックアップ): このオプションを選択すると、NetVault Backup メディアでは なく、Oracle[®] ドライブにバックアップが送信されます。このオプションを選択すると、本プラグ インはバックアップの実行に「DISK」チャネルを割り当てます。
- ディスクとテープ両方(FRA にバックアップし、次に NetVault Backup のメディアにバックアップ): このオプションを選択すると、Oracle ドライブにバックアップが送信され、次に NetVault Backup の[ターゲット] タブで指定した任意のメディアに送信されます。
- [テープへのバックアップ完了後にディスクからファイル・コピーを削除する]: FRA バックアップ・タイプが選択されている場合のみ使用可能。選択すると、RMAN によりリカバリ・ファイルがバックアップ完了後に FRA から削除されます。このオプションを選択すると、以下の RMAN コマンドと同じ結果を生じます。

BACKUP BACKUPSET ALL NOT BACKED UP SINCE TIME 'SYSDATE' DELETE INPUT;

① 重要: [バックアップ完了後にディスクからファイル・コピーを削除する] オプションを選 択すると、バックアップ・ジョブが失敗しても FRA 内のリカバリ・ファイルが RMAN によ り削除されます。したがって、[選択したアイテムのバックアップが不完全の場合] で選択 したオプションに、バックアップ・セーブセットの保持が含まれ、ディスクへのバックアッ プのリストアが可能であることを確認する必要があります。

[バックアップ格納先]の[ディスク(FRA にバックアップ)]は、[Oracle データベースを 追加(または編集)する]ダイアログ・ボックスに手動で追加された[外部設定ファイル] または[パラメータ・ファイル]ではサポートされていません。サポートされていないの は、FRA が、Oracle によって管理されるディスクの一部であるからです。[Oracle データ ベースを追加(または編集)する]ダイアログ・ボックスで手動で入力された[外部設定 ファイル]および[パラメータ・ファイル]は、Plug-in for FileSystem 機能によってバック アップされます。

このオプションにより、ユーザーは高速なリストアを実現できると同時に、要求に適したメディア格納 先計画を実現することができます。詳しくは、バックアップ格納先の計画定義を参照してください。 Flash Recovery Area を有効にする手順については、デフォルト設定の構成の「Flash Recovery Area 使用 可能」を参照してください。

- 4 バックアップ・タイプを指定します。
 - ・ フル
 - レベル0増分
 - レベル1差分
 - レベル1累積
 - アーカイブ・ログ
 - 複製データベース
 - Flash Recovery Area (Oracle 10g 以降でのみ使用可能)
 - [バックアップ完了後に Flash Recovery Area からリカバリ・ファイルを削除する]: Flash Recovery Area バックアップ・タイプが選択されている場合のみ使用可能。選択すると、RMAN に よりリカバリ・ファイルがバックアップ完了後に FRA から削除されます。このオプションを選択 すると、以下の RMAN コマンドと同じ結果を生じます。

BACKUP RECOVERY AREA DELETE INPUT

BACKUP RECOVERY FILES DELETE INPUT

これらのバックアップ・タイプについて詳しくは、「RMAN によるバックアップ計画の定義」を参照して ください。

 ① 重要:前回のバックアップが、[バックアップ格納先]フィールドで[ディスク]または[ディス クとテープ両方]オプションを使用して実行されなかった場合、Flash Recovery Area バックアップ は失敗に終わります。Flash Recovery Area バックアップ・タイプのバックアップを実行する前に、 FRA をバックアップ格納先として使用する必要があります。

NetVault Backupで、ディスク(FRA にバックアップ)へのバックアップが行われる場合は、増分 レベル0バックアップ(INCR LVL0)が個別のバックアップセットに格納されます。また、初回の 増分レベル1バックアップ(INCR LVL1、差分または累積)では、増分レベル1バックアップ・コ ピー・イメージとともに、ベースの増分レベル0バックアップ・コピー・イメージを生成します。 それ以降の増分レベル1バックアップでは、必要なレベル1バックアップ・コピー・イメージだけ が更新生成されます。ディスク(FRA にバックアップ)への増分バックアップの場合、NetVault Backup は、セレクション・セットに含まれるデータファイルの累積更新コピーを維持するために、 Oracle 推奨バックアップ計画のイメージ・コピー・バックアップ方法を使用します。ディスクへの 増分レベル0バックアップ(FRA へのバックアップ)の場合、NetVault Backup は、Oracle にバッ クアップセット・バックアップ・タイプの実行を指示します。

- 5 RMAN バックアップ・オプションを設定します。
 - [バックアップ完了後にアーカイブ・ログを削除する]: このオプションでは、アーカイブ・ログ をバックアップ後に自動的に削除します。これにより、これらのログを手動で削除する必要がな くなります。このオプションは、ディスク上のアーカイブ・ログをテープにバックアップする場 合に便利です。このオプションは、以下の RMAN コマンドと同じ結果を生じます。

BACKUP ARCHIVELOG ALL DELETE ALL INPUT;

本プラグインは、ログの各シーケンス・ナンバーをバックアップしてから、バックアップした ファイルを削除します。REDO ログのアーカイブ先が複数ある場合、バックアップしたアーカイブ 済み REDO ログは、すべてのログのアーカイブ先から削除されます。

- ① 重要: [バックアップ完了後にアーカイブ・ログを削除する]オプションを使用すると、 バックアップ・ジョブが失敗してもアーカイブ・ログが削除されます。したがって、[選択 したアイテムのバックアップが不完全の場合] で選択するオプションに、バックアップ・ セーブセットの保持が含まれ、アーカイブ・ログのリストアが可能であることを確認する必 要があります。
- [アーカイブ・ログのバックアップ前にその他のログ・スイッチを強制実行]: このオプションを 選択すると、SQLステートメントの発行によってアーカイブ REDO ログのバックアップが開始される前に、別のログ・スイッチが実行されます。

ALTER SYSTEM ARCHIVE LOG CURRENT

- [オフライン・テーブルスペースをスキップする]:本プラグインでオフライン・テーブルスペースを無視し、バックアップから除外する場合は、このオプションを選択します。
- [読み込み専用テーブルスペースをスキップする]: 更新後に読み込み専用テーブルスペースを バックアップしますが、以降のバックアップではスキップして、バックアップのサイズを小さく することができます。本プラグインで読み取り専用テーブルスペースを無視し、バックアップか ら除外する場合は、このオプションを選択します。
- [アクセスできないテーブルスペースをスキップする]: Oracle 内部のオペレーションにより、 テーブルスペースがアクセス不可能であると表示されることがあります。たとえば、データファ イルがオペレーティング・システム・レベルで削除されたが Oracle データベース内部で削除され ていない場合、または Raw デバイスのマウント・ポイント・リンクがマウント解除された場合、 テーブルスペースはアクセス不可能になることがあります。このオプションを選択すると、本プ ラグインは、バックアップ・ジョブに失敗することなく、[NetVault Backup 選択] ページで選択 されたデータベースのうちアクセスできないものをスキップできます。
- [ユーザー定義のバックアップ・タグ]:バックアップ・セットのタグ名を作成するには、このオ プションを選択します。タグを指定しない場合、RMAN はバックアップに対して TAGYYYYMMDDTHHMMSS 形式のデフォルト・タグを作成します(制御ファイルの自動バックアッ プは除きます)。RESTORE コマンドを実行するときに、ファイル名ではなくタグを指定できます。 タグは、入力時の大文字 / 小文字に関係なく、大文字で保存されます。タグの最大長は 30 バイト です。

また、ターゲット・ファイル・システムのファイル名には、サポートされている文字のみを使用 する必要があります。たとえば、ASM では、内部で使用されるハイフン(-)をファイル名に使用 できないため、バックアップを ASM ディスク・グループに保存する場合、タグ名にはハイフンを 使用できません(weekly-incremental など)。

Data Guard 環境におけるこのオプションの使用法について詳しくは、「ユーザー定義のバック アップ・タグの作成」を参照してください。

「バックアップ・セットごとのファイル]:バックアップ情報は、バックアップ・セットと呼ばれる論理構造に保存されます。バックアップ・セットには、1つ以上のデータファイル、アーカイブREDO ログ、制御ファイル、または SPFILE のデータが保持されます。データファイルとアーカイブ・ログを同じバックアップ・セットに保存することはできません。デフォルトでは、各バックアップ・セットには、4つ以下のデータファイルまたは16個以下のアーカイブ・ログが保持されます。[テーブルスペースとデータファイル用]および[アーカイブ・ログ用]の各フィールドを使用して、本プラグインが作成する各バックアップ・セットに含める最大ファイル数を指定します。

デフォルト値であるゼロ(0)を指定した場合、本プラグインはチャネルの使用を最適化するため にバックアップ・セット間でファイルを分配します。このとき、バックアップされるファイルの 合計数をチャネル数で割ります。その結果が64未満(64)の場合、各バックアップ・セットにこ の値と同じファイル数が分配されます。64以上の場合、各バックアップセットに64ファイルが 分配されます。

- [チャネル数]:目的のチャネル数を割り当てることにより、バックアップ・ジョブ内の並行処理の度合いを制御できます。同時に複数のチャネルを割り当てると、1つのジョブで複数のバックアップ・セットをパラレルに読み取りまたは書き込むことができます。チャネル数は、[ターゲット] タブで指定したバックアップ・デバイスのドライブ数以下(=)に指定します。たとえば、ターゲットのVTLに2つのドライブが設定されている場合、チャネル数を2以下に指定します。[テーブルスペースとデータファイル用] および [アーカイブ・ログ用] の各フィールドを使用して、チャネル数を指定します。
- [チャネル速度(0=最大)]: この設定を使用して、バックアップに使用するジョブ固有のチャネ ルに対する RATE を指定します(RATE は、ALLOCATE CHANNEL コマンドの一部です)。ここで定 義する RATE は、実際に使用される RATE を決定する訳ではありませんが、転送最大レベルを定義 します。これにより、RMAN が帯域幅を過剰に消費したり、それが原因によるパフォーマンスの 低下を防ぐことができます。[テーブルスペースとデータファイル用] および [アーカイブ・ログ 用] フィールドとその関連単位数を使用して、上限を指定します。デフォルトでは、この単位 フィールドは空白で、B(バイト)単位で指定します。また、K(キロバイト)、M(メガバイト)、 G(ギガバイト)を選択することもできます。
- [圧縮バックアップセットとしてバックアップ]:「AS COMPRESSED BACKUPSET」節を RMAN の BACKUP コマンドに追加するには、このチェックボックスをオンにします。これにより、RMAN は バックアップ・セットのバイナリ圧縮を実行することができます。圧縮されたバックアップ・ セットについて、その他リカバリ中に必要な手順は特にありません。
- 「バックアップ < セレクション > が(数日前より)バックアップされていません]: このオプションを選択して、中断発生後、自動的にバックアップを再開するよう本プラグインを強制実行させることができます。さらに、日数を指定して(デフォルト値は「1」、「0~90」の範囲で指定)、最後のバックアップ完了時まで遡ってチェックを実行することができます。この機能は、バックアップが大規模で、中断が発生しやすい場合に有効です。
- 6 [選択したアイテムのバックアップが不完全の場合] リストから、本プラグインに対するデフォルト・ア クションを選択します。

複数のアイテムがバックアップに含まれており、RMANが選択されたアイテムのいくつかを正常にカタロ グ化しても、選択されたアイテムのうち本プラグインで正しくバックアップできないアイテムがある場 合、本プラグインでは、バックアップで実行するアクションを指定できます。たとえば、ジョブに複数 のテーブルスペースとアーカイブ・ログが含まれており、テーブルスペースは正しくバックアップされ たが、アーカイブ・ログのバックアップに失敗した場合、バックアップ・ジョブによって実行するアク ションを指定します。

- [警告で終了 セーブセットは保持されます]:ジョブが [警告で完了] というステータスを返し、正常にバックアップされたアイテムからなるバックアップ・セーブセットが作成されます。
- 「警告なしで完了 セーブセットは保持されました]:ジョブが完了し、[ジョブ終了] というステータスを返します。エラーは NetVault Backup バイナリ・ログに記録され、[ジョブ・ステータス] ページでは無視されます。バックアップされたアイテムからなるバックアップ・セーブセットが作成されます。
- [失敗 セーブセットは保持されます]:バックアップ・ジョブは、[バックアップ・ジョブ失敗] というステータスを返しますが、正常にバックアップされたアイテムからなるバックアップ・ セーブセットが作成されます。
- [失敗 保存セットは保持されませんでした]:バックアップ・ジョブは、[バックアップ 失敗] いうステータスを返し、バックアップされたオブジェクトのセーブセットは保持されません。選 択された一部のオブジェクトが正しくバックアップされた場合も削除されます。
- 7 RMAN スクリプトの生成オプションを設定します。

熟練したデータベース管理者を対象とした[RMAN スクリプトの生成]機能を使用すると、WebUI を経由して RMAN スクリプトの大部分を生成できます。その後、スクリプトを使用する前にスクリプトを編

集してオプションまたはパラメータを追加できます。このオプションを使用すると、スクリプトを一か ら作成しなくても済むので、スクリプトの構文エラー、またはバックアップを正しく実行できないリス クを最小限に抑えることができます。

[ファイルへの RMAN スクリプト出力] オプションを選択すると、本プラグインが自動的に RMAN に送信 するコマンドが、[設定] ダイアログ・ボックスで指定したディレクトリ内のファイルに保存されます。 Oracle データベース管理者は、後で必要に応じてスクリプトを編集し、RMAN CLI 経由でスクリプトを実 行できます。生成された RMAN スクリプトを使用して実行されるバックアップ・ジョブは、NetVault Backup ジョブ・データベースに格納されます。

[RMAN スクリプトの生成]機能では、以下のオプションを設定できます。

- [ファイルへの RMAN スクリプト出力]: この機能を使用して、その他のオプションを使用可能に するには、このオプションを選択して、RMAN スクリプトの書き込み先となるファイルの名前を 入力します。
- [RMAN スクリプト・ディレクトリ]: RMAN スクリプトが保存されるディレクトリの名前を入力します。[スクリプトのデフォルト・ディレクトリを生成] フィールドのデフォルトは、本プラグインの[設定]ダイアログ・ボックスで指定されたディレクトリです。ただし、バックアップ・ジョブごとにフィールドを変更することもできます。RMAN スクリプトの保存先の完全パスは、 [RMAN スクリプト・ディレクトリ]の入力内容と、[ファイルへの RMAN スクリプト出力]フィールドに入力されたファイル名を結合して作成されます。
- [すでに存在する場合、格納先ファイルを上書き]: このオプションを選択すると、ファイルがすでに存在する場合に、RMAN スクリプトを出力する格納先ファイルを上書きできます。ファイルがすでに存在するが、このオプションが選択されていない場合は、[RMAN スクリプトの生成]は失敗し、出力は既存のファイルには書き込まれません。このオプションは、既存のファイルの上書きをはっきり望んでいる場合にのみ選択します。
- [RMAN スクリプト生成後、ジョブを実行]: このオプションを選択すると、指定したファイルに RMAN スクリプトを出力するだけでなく、NetVault Backup ジョブがスケジュールされ実行されま す。このオプションの選択を解除すると、本プラグインではスクリプトが生成されるだけで、 データベース管理者はそれを NetVault Backup 以外で編集および実行できます。

ジョブのファイナライズと実行

バックアップ・ジョブをファイナライズおよび実行するには

- 1 [スケジュール]、[ターゲット・ストレージ]、および[詳細設定]リストを使って、その他の必要なオ プションを設定します。
- 2 [保存] または [保存 & 実行] の、どちらか適切な方をクリックします。
 - ① **ヒント**: すでに作成、保存しているジョブを実行するには、[ナビゲーション] パネルで [ジョブ 定義管理] を選択し、目的のジョブを選択して、[今すぐ実行] をクリックします。

[ジョブ・ステータス]ページで進捗状況を監視したり、[ログ参照]ページでログを表示したりできます。詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。

Oracle ACFS のバックアップ

Oracle[®]の自動ストレージ管理クラスタ・ファイル・システム(Oracle ACFS)は、Oracle ASM 機能 を拡張して、非データベース・ファイルをサポートしています。これらのファイルには、Oracle バ イナリ、トレース・ファイル、アラート・ログ、レポート・ファイル、その他のアプリケーション・ データ・ファイルなどが含まれます。

これらの非データベース・ファイルは RMAN ではバックアップできませんが、Plug-in for FileSystem を使用して、Oracle ACFS ボリュームに保存されたデータをバックアップすることができます。

Plug-in for FileSystem を使ってデータをバックアップするには

- 1 ACFS ボリュームをマウントします。
- 2 [ナビゲーション] パネルで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

[ガイド付き設定] リンクからウィザードを開始することもできます。[ナビゲーション] パネルで、[ガ イド付き設定] をクリックします。[NetVault 設定ウィザード] ページで、[バックアップ・ジョブ作成] をクリックします。

3 [ジョブ名] に、ジョブの名前を指定します。

ジョブの進捗状況の監視やデータのリストア時にジョブを識別しやすくするため、分かりやすい名前を 割り当てます。ジョブ名には英数字と英数字以外の文字を使用できますが、非ラテン語系の文字を含め ることはできません。Linux[®]の場合、名前は最大で 200 文字です。Windows[®]の場合、長さ制限はあり ません。ただし、すべてのプラットフォームで、40 文字以内にすることをお勧めします。

- 4 [セレクション] リストの隣りにある、[新規作成] をクリックします。
- 5 [NetVault Backup セレクション] ページの [バックアップ・セレクション・セット] ボックスにセット の名前を入力して、次に Oracle データベース・サーバーとして設定されている NetVault Backup クライ アントを開きます。
- 6 プラグインのリストから、[Plug-in FileSystem]を開きます。
- 7 ACFS ボリュームを選択するか、ACFS ノードを開いて必要な項目を選択します。
- 8 残りのバックアップ・オプションを適宜設定します。

詳しくは、『Dell NetVault Backup Plug-in for FileSystem ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- 9 [スケジュール]、[ターゲット・ストレージ]、および[詳細設定]リストを使って、その他の必要なオ プションを設定します。
- 10 [保存] または [保存 & 実行] の、どちらか適切な方をクリックします。
 - ① | **ヒント**: すでに作成、保存しているジョブを実行するには、[ナビゲーション] パネルで [ジョブ | 定義管理] を選択し、目的のジョブを選択して、[今すぐ実行] をクリックします。

[ジョブ・ステータス]ページで進捗状況を監視したり、[ログ参照]ページでログを表示したりできます。詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。

Oracle[®] Flashback Database の使用

- Flashback Database:概要
- Flashback Database ステータスを表示する
- Flashback Database のオプション
- Flashback Database の制約
- 本プラグインと Flashback Database を使用したデータのリストア

Flashback Database: 概要

Oracle[®] 10g で導入された Flashback Database は、データファイルが損なわれていない限り、Oracle データベースで、論理データの損傷やユーザーによって発生した問題を収集した以前の時間に遡るこ とができます。Flashback Database は、物理データファイルのリストアを行わないため、真のメディ ア・リカバリではありません。Flashback Database は、処理が迅速で簡単なだけでなく、データベー ス全体のリストアを必要としないので、RESTORE および RECOVER コマンドを使用する方法よりも、 Flashback Database の方が好まれる場合があります。

Flashback Database について詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の「Configuring Oracle Flashback Database and Restore Points」セクションを参照してください。

フラッシュバック・ログ

Flashback Database は独自のログ・メカニズムを使用しています。フラッシュバック・ログは、FRA で生成されて保存されます。Flashback Database を有効にすると、代替データファイルのデータ・ブ ロックが、フラッシュバック・ログにコピーされます。これらのデータ・ブロックは、後でデータ ファイル内容を再構築する時に使用できます。フラッシュバック・ログは通常の時間間隔で取り込ま れるため、フラッシュバック・ログからリストアされたデータ・ブロックは、目的のターゲット時間 の前に直ちに保存されます。フラッシュバック・ログが適用されると、REDO ログが再度適用され、 ターゲット時間にリカバリを完了します。

Flashback Database ステータスを表示する

FRA と Flashback Database が有効になっているかどうかを含め、すでに設定されたデータベースの詳細を表示するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リストの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- 2 セレクション・ツリー内で適切なクライアント・ノードを開きます。
- 3 [Plug-in for Oracle]をダブルクリックして、適切なデータベースを選択します。

4 [アクション] リストから、[詳細表示] を選択します。

[詳細] ダイアログ・ボックスには、以下の詳細が含まれます。

- [Flash Recovery Area デスティネーション]: FRA が有効な場合の FRA の保存先が表示されます。
- [Flashback Database 使用可能]: Flashback Database 機能が有効な場合は「YES」、無効な場合は「NO」が表示されます。

また、本プラグインを使用したバックアップには、リストア・ジョブ作成時の**[セレクション・セット 作成]**ページに、Flashback Database ノードが表示されます。**[Flashback Database]** ノードでは、リス トアやリカバリではなく、Flashback Database を実行できます。

5 ダイアログ・ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

Flashback Database のオプション

本プラグインで Flashback Database を選択することは、RMAN または SQL の FLASHBACK DATABASE コマンドと同等です。

Flashback Database には以下のオプションがあります。

「指定リストア・ポイントまで]:データベースを特定のリストア・ポイントまでフラッシュします。リストア・ポイントは、特定時点で名前が付けられ、フラッシュバック・ターゲットとして使用できます。リストア・ポイントを作成する場合、現在の SCN (System Change Number)の名前が付けられます。2048 までリストア・ポイントに名前を付けることができ、「通常 (Normal」)」または「保証付き (Guaranteed)」のいずれかになります。保証付きリストア・ポイントは Flashback Database に使用されます。

リストア・ポイントは **CREATE RESTORE POINT** コマンドを使用して作成できます。詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery User's Guide』の「Creating Normal and Guaranteed Restore Points」セク ションを参照してください。

- [指定時刻まで]:データベースを指定した時刻の状態に戻します。
- [指定 SCN まで]: データベースを指定した SCN の状態に戻します。
- [指定時刻より前]:データベースを指定したタイムスタンプの1秒前の状態に戻します。
- [指定 SCN より前]: データベースを指定した SCN より以前のシステム変更番号の状態に戻します。
- 「指定リセット・ログより前](Oracle[®] 10.2.x 以降のバージョンでのみ使用可能): RESETLOGS が発生した
 た直前の SCN にデータベースを戻します。

Flashback Database の制約

Flashback Database の選択には2つの制約があります。

データベース全体と Flashback Database ノードを同時に選択することはできません。選択すると、リストア・ジョブが失敗し、NetVault Backup バイナリ・ログに以下のエラー・メッセージが表示されます。

[データベース全体] と [Flashback Database] を同時に選択することはできません

 「セレクション・セット作成]ページで、パラメータ・ファイル、制御ファイル、テーブルスペース、 データファイルなど、他のノードと一緒に Flashback Database を選択することはできません。選択する と、リストア・ジョブが失敗し、NetVault Backup バイナリ・ログに以下のエラー・メッセージが表示さ れます。

リストア選択エラー。[Flashback Database] と個別のデータファイルを同時に選択することはできません。

本プラグインと Flashback Database を使用 したデータのリストア

Flashback Database を実行するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[リストア・ジョブ作成] をクリックします。
- [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]ページで、[プラグイン・タイプ] リストから [Plug-in for Oracle] を選択します。
- オーブセットのテーブルに表示されている項目をさらにフィルタリングするには、[クライアント]、 [日付]、[ジョブID] リストを使用します。
- 4 セーブセットの表から、RMAN ベースのバックアップ・セーブセットを選択して、**[次へ]** をクリックします。
- 5 【セレクション セット作成】ページで、[Flashback Database] ノードを選択します。
- 6 [プラグインオプションの編集]をクリックし、次に [リストア・オプション] タブをクリックします。
- 7 [データベース全体のリストア]、[リストア前にデータベースをマウント]、[先にデータベースを強制終了] を選択します。

① Flashback Database を実行するには、データベースがマウント状態である必要があります。

- 8 [ポスト・リカバリ] タブで [リカバリ後にデータベースを開く] および [ログの読み書きおよびリセット] を選択します。
- 9 [Flashback Database] タブで目的の [Flashback Point Type] を選択します。 たとえば、[指定時刻まで] を選択し、フラッシュバックを行うデータベースに時間を入力します。
- 10 [Ok]をクリックして設定を保存し、[次へ]をクリックします。
- 11 デフォルト設定を使用しない場合は、[ジョブ名]に、ジョブの名前を指定します。
- 12 [クライアント指定] リストで、データをリストアするマシンを選択します。
- 13 [スケジュール]、[ソース・オプション]、および [詳細設定] リストを使って、その他の必要なオプ ションを設定します。
- 14 [保存] または [保存&実行]の、どちらか適切な方をクリックします。



データのリストア

- データのリストアとリカバリ:概要
- ユーザー管理リストアの実行
- その他のユーザー管理リストア手順
- RMAN リストアの実行
- 非 RAC 環境で使用可能な RMAN リカバリ・タイプ
- RMAN を使用したその他のリストア手順

データのリストアとリカバリ:概要

通常、バックアップからデータベースのすべてまたは一部の内容を再構築するには、リストアおよび リカバリの2つの手順を実行します。リストアとは、バックアップからデータファイルのコピーを読 み込むプロセスです。また、リカバリとは、バックアップ以降にファイルに対して行われた変更を アーカイブおよびオンライン REDO ログから再適用し、データベースを目的の SCN(通常は現在また は障害時点の状態)にするプロセスです。

Plug-in for Oracle を使用してデータのリストアを正常に実行するには、使用するバックアップ方法 に応じて、関連するセクションの手順に従います。

ユーザー管理リカバリ

ユーザー管理によるバックアップ計画を実装する場合、リカバリ・プロセスを管理する必要がありま す。このプロセスには以下のタスクが含まれます。

- リカバリの対象を特定する
- プラグインを使用して必要なファイルをリストアする
- リカバリ・プロセスを、一連の SQL*Plus コマンドを実行して本プラグインの外で手動で実行する

以降のセクションでは、ユーザー管理リカバリ・プロセスについて概説します。詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「About User-Managed Restore Operations」セクションまたは『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の 「Performing User-Managed Backup and Recovery」セクションを参照してください。

- リカバリが必要なデータファイルを特定する
- データファイルとアーカイブ・ログのリカバリ
- 制御ファイルをリストアする

リカバリが必要なデータファイルを特定する

メディア障害またはデータ損傷が発生した場合、以下の SQL*Plus クエリを使用して、リカバリが必要なデータファイルを特定できます。このコマンドは、データベースが OPEN 状態の場合のみ機能します。

SELECT FILE#, ERROR, ONLINE_STATUS, CHANGE#, TIME FROM V\$RECOVER_FILE;

データファイルとアーカイブ・ログのリカバリ

損傷したデータファイルを識別したら、そのデータファイルの最後のフル・バックアップと、最後の バックアップからターゲットのリカバリ時点までの間に生成されたすべてのアーカイブ・ログのバッ クアップをリストアします。データファイルをリストアすると、既存のファイルはバックアップされ たコピーで置換されます。逆に、アーカイブ・ログをリストアする場合、これらのファイルは元の場 所にコピーされるため、リカバリ・プロセス中もデータベースで使用できます。

損傷したデータファイルおよびアーカイブ・ログのリカバリでは、以下の手順を実行します。

1 SQL*Plus ユーティリティを使用して、SYSDBA 権限でデータベースに接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

 データベースが開いている場合、以下のコマンドを使用して、リカバリするすべてのテーブルスペース を変更します。

ALTER TABLESPACE <テーブルスペース名 > OFFLINE;

3 本プラグインを使用して、損傷したデータファイルを最新のユーザー管理フル・バックアップ・セーブ セットからリストアします。

データファイルを別の場所にリストアするには、リストア中に新しいパスを指定します。

4 本プラグインを使用して、ユーザー管理フル・バックアップ以降に完了したすべてのアーカイブ・ログのバックアップをリストアします。

ログは、プライマリ・アーカイブ先ディレクトリにリストアします。容量に制約がある場合は、**[名前変更]** オプションを使用して、ログを別のディレクトリヘリストアします。詳しくは、その他のユーザー管理リス トア手順を参照してください。

5 リストアが完了したら、SQL*Plus を使用して、リカバリが必要なすべてのテーブルスペースについて以下のコマンドを実行し、手動でリカバリを実行します。

RECOVER TABLESPACE <テーブルスペース名>

6 以下の SQL*Plus コマンドを使用して、リカバリしたテーブルスペースをオンラインにします。

ALTER TABLESPACE <テーブルスペース名 > ONLINE;

制御ファイルをリストアする

制御ファイルは、以下のいずれかの方法でリカバリできます。

- 多重化された制御ファイルの失われたコピーをリストアする:永久的なメディア障害によってデータベースの1つ以上の制御ファイルが損傷し、少なくとも1つの制御ファイルがメディア障害による損傷を受けていない場合に、この手順を使用してデータベースをリカバリします。詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「Restore Lost Copy of a Multiplexed Control File」セクションまたは『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide for Oracle 11g』の「Responding to the Loss of a Subset of the Current Control Files」セクションを参照してください。
- すべての現在の制御ファイルの損失後にバックアップから制御ファイルをリストアする:永久的なメディア障害によってデータベースのすべての制御ファイルが損傷し、制御ファイルのバックアップがある場合に、この手順を使用して制御ファイルのバックアップをリストアします。

すべての現在の制御ファイルの損失後にバックアップから制御ファイルをリストア する

制御ファイルにアクセスできない場合、インスタンスは開始できますが、データベースをマウントすることはできません。制御ファイルが使用不可のときにデータベースをマウントしようとすると、以下のエラー・メッセージが表示されます。

ORA-00205: 制御ファイル識別エラー。詳細はアラート・ログをチェックしてください。

制御ファイルがアクセス可能になるまで、データベースをマウントしたり開くことはできません。

本プラグインは、制御ファイルのスナップショットを、[Oracle データベースを追加(または編集す る)]ダイアログ・ボックスで指定された制御ファイルの保存ファイル(フル・パス)に保存します。 すべての現在の制御ファイルが失われた場合、この場所から制御ファイルをコピーできます。制御 ファイルの保存ファイル名(フル・パス)のスナップショットを使用できない場合は、以下の手順に 従って、制御ファイルをバックアップからリストアできます。

1 本プラグインを使用して、制御ファイルの最新のバックアップから制御ファイルをリストアします。

本プラグインは、制御ファイルの保存ファイル名(フル・パス)に制御ファイルをリストアします。リ ストアされたファイルには「.SAV」拡張子が付けられます。

2 SQL*Plus ユーティリティを使用して、SYSDBA 権限でデータベースに接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

- 3 データベースをシャットダウンします。
- 4 Oracle[®] パラメータ・ファイルに指定されているとおりに、リストアされたファイルの名前を変更し、指 定の場所にコピーします。
- 5 データベースをマウントします。

STARTUP MOUNT;

6 データファイルに保存されている現在の SCN と同じ時点までデータベースをリカバリするには、USING BACKUP CONTROLFILE コマンドからリカバリを実行します。

データファイルに保存されている最新の SCN と同じ時点までデータベースをリカバリするには、追加の リカバリが必要です。たとえば、比較的古いバックアップからリストアする場合、制御ファイルには、 現在のデータファイルとは異なる SCN が含まれます。したがって、どのログ・シーケンスがアーカイブ され、どのログ・シーケンスがアーカイブされていないかがわかりません。

例:

RECOVER DATABASE USING BACKUP CONTROLFILE;

制御ファイルのバックアップについて詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「Restoring a Backup Control File to the Default Location」を参照してください。

7 リカバリの完了後、RESETLOGS オプションを使用してデータベースを開きます。

ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS;

RMAN リカバリについて

RMAN リカバリについては、以下のセクションを確認します。

- リカバリ・オペレーションで RMAN バックアップを使用するよう選択する方法
- 増分バックアップまたは REDO ログの選択
- リストア・ソースの選択
- データファイル・メディア・リカバリ
- ブロック・メディア・リカバリ

リカバリ・オペレーションで RMAN バックアップを使用するよ う選択する方法

本プラグインで RMAN ベースのリストアを実行する場合、リストアおよびリカバリ・オペレーション は RMAN 自体が実行します。RMAN は RMAN リポジトリ内の使用可能なバックアップの記録を使用し て、リストア・オペレーションに最適なバックアップを選択します。この手順により、バックアップ のリストア順序を経験の浅い担当者が特定する必要がなくなるため、リカバリ・プロセス全体が簡略 化されます。

増分バックアップまたは REDO ログの選択

リカバリ目的を果たすために、リストアされたデータファイルに増分バックアップを適用するか、 REDO ログを適用するかを RMAN で選択できる場合、常に増分バックアップが選択されます。重複し たレベルの増分バックアップが使用可能な場合、RMAN は対象期間が最も長いものを自動的に選択し ます。

RMAN は使用可能なバックアップから必要なデータファイルを自動的にリストアし、可能な場合は増分バックアップをデータファイルに適用し、その後アーカイブ・ログを適用します。

リストア・ソースの選択

FRA が使用可能な場合、本プラグインにより、要求に適したメディア格納先の計画を定義することができ、[バックアップ・オプション] タブの [バックアップ格納先] オプションを指定することにより、高速なリストアを実現することができます。このオプションで、バックアップの格納先を選択できます。これには、以下のものが含まれます。

- テープ (NetVault Backup のメディアにパックアップ)
- ディスク (FRA にバックアップ)
- ディスクとテープ両方(FRA にバックアップし、次に NetVault Backup のメディアにバックアップ)

本プラグインには、リストア・プロセス中に**リストア元**または RMAN がリストア元として使用する場所を定義するオプションが用意されています。このオプションにより、FRA または NetVault Backup メディアから RMAN リストアを確実に実行することで高速なリストアを実現できます。このオプショ ンでは、以下の操作を実行できます。

- バックアップがディスク・ベースのメディア、VTL およびテープのような NetVault Backup メディアで有効化されている場合でも FRA からリストアを実行する。
- FRA がメディア障害やデータ損傷を持つ疑いがあるが RMAN が FRA からのリストアに対処できないこと によりリストアおよびリカバリ・プロセスの再起動を危険にさらしたくない場合においても、NetVault Backup メディアからリストアを実行する。

さらに、ディスクにチャネルを割り当てることでディスクへの CLI ベースのバックアップを実行した が、本プラグインを使用してリストアを実行したいという場合にも、同様の[リストア元]オプショ ンが使用可能です。

以下のリストア・ソース・オプションが使用可能です。

- [テープ](NetVault Backup のメディアからリストア): このオプションを選択すると、RMAN が 「SBT_TAPE」チャネルを開き、NetVault Backup 管理下にあり、[ターゲット] タブの [デバイスオプション] で指定されているバックアップ・メディアからバックアップ・ファイルを読み込みます。FRA の バックアップ格納先が実装されていない場合や、すべてのバックアップ用にテープがバックアップ格納 先として選択されている場合にこのオプションを選択します。
- [ディスク] (FRA またはディスクからリストア): このオプションを選択すると、RMAN はディスク・デバイス・タイプだけをオープンして FRA からバックアップ・ファイルをリストアするか、RMAN のディ

スク・デバイス・タイプを設定中に指定された OS 特有のディレクトリをリストアします。このオプションはデフォルトです。

「ディスクとテープ両方」(NetVault Backup のメディアと(FRA またはディスク)の両方からリストア): このオプションを選択すると、RMAN は「SBT_TAPE」チャネルとディスク・チャネルを開き、リカバリ・ファイル用に最適なソースを柔軟に選択することができます。バックアップ格納先に「テープとディスクの両方」オプションを含む場合、または異なるスケジュールで Flash Recovery Area バックアップを実行中に、FRA にリカバリ・ファイルのバックアップを格納するよう選択している場合にこのオプションを選択します。

データファイル・メディア・リカバリ

データファイル・メディア・リカバリとは、オンライン・ログ、アーカイブ REDO ログ、または増分 バックアップをリストアされたデータファイルに適用して、最新または指定された特定時点の状態に 更新することです。データファイル・メディア・リカバリ(一般にリカバリと言います)は、完全な リカバリまたは PIT リカバリ(不完全リカバリとも言います)のいずれかです。PIT リカバリは、 テーブルの削除といったユーザー・エラーや、ある時点まで気付かなかった論理的な損傷などによっ て引き起こされるデータ損失に対する対処法の1つです。

完全リカバリと Point-in-Time (PIT) リカバリの比較

完全リカバリでは、コミットされたトランザクションを失うことなく、データベースを最新の状態に リカバリします。一方、PIT リカバリでは、データベースを特定時点の状態にリカバリすることがで きます。本プラグインは、時間、ログのシーケンス番号、またはシステム変更番号に基づく PIT リカ バリをサポートしています。現時点で本プラグインがサポートしている PIT リカバリは、データベー スの PIT リカバリ (DBPITR) のみです。

- システム変更番号 (SCN) に基づく Point-in-Time リカバリ: PIT リカバリの実行時に SCN が指定された 場合、RMAN は、指定された SCN までリカバリします (ただし、その SCN は含みません)。たとえば、 SCN 1000 が指定された場合、SCN 999 までのリカバリが実行されます。
- ログのシーケンス・ナンバー(LSN)に基づく Point-in-Time リカバリ:データ損傷または障害の正確な 発生時刻が不明の場合、ターゲット SCN が含まれるログのシーケンス番号を指定することが有効な手段 となります。RMAN は、指定されたログによってリカバリを実行します。V\$LOG_HISTORY を照会して アーカイブされたログを表示し、適切なログのシーケンス番号とスレッドを特定できます。
- 時間に基づく Point-in-Time リカバリ:時間に基づく PIT リカバリは、データの損傷時刻が分かっている場合に便利です。たとえば、開発者が午前 6:00 にテーブルを削除した場合、中止時刻を午前 05:55 に設定して PIT リカバリを実行できます。本プラグインは、指定された時刻までリカバリします(ただし、その時刻は含みません)。

PIT リカバリおよびデータベース・インカネーションについて詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Basics』の「Performing Database Point-In-Time Recovery」セクションを参照してください。

ブロック・メディア・リカバリ

ブロック・メディア・リカバリは、Oracle[®] Enterprise Edition のみで使用可能な機能です。この機能 は、データファイル全体のリストアやリカバリではなく、損傷したブロックのみをリカバリするた め、ダウンタイムを短縮できます。ブロック・メディア・リカバリは、ブロックが少数でその数がわ かっている場合に発生する物理的な破損の問題に特に有効です。ブロックレベルのデータ消失は、通 常、広範囲なデータ消失は引き起こさない断続的でランダムな I/O エラーや、破損したメモリーが ディスクに書き込まれることが原因で発生します。ブロック・メディア・リカバリは、データの消失 または破損の程度が不明で、データファイル全体のリカバリが必要な場合には適していません。この ような場合は、データファイルのメディア・リカバリが最適です。 ブロック・メディア・リカバリを使用すると、データファイル内の1つ以上の破損したデータ・ブロックをリカバリできます。ブロック・メディア・リカバリには、データファイルのメディア・リカバリにはない次のようなメリットがあります。

- リカバリが必要なブロックのみがリストアおよびリカバリされるため、平均リカバリ時間(MTTR)が小 さくなります。
- リカバリ中、影響を受けるデータファイルをオンラインのままにしておくことができます。

ブロック・メディア・リカバリを使用しないと、1 つのブロックが破損した場合でも、データファイ ルをオフラインにしてバックアップからデータファイルをリストアする必要があります。バックアッ プの作成後にデータファイルに対して生成されたすべての REDO を適用する必要があります。メディ ア・リカバリが完了するまで、ファイル全体が使用不可となります。ブロック・メディア・リカバリ を使用すると、実際にリカバリされているブロックのみがリカバリ中に使用不可となります。

前提条件

Oracle[®] Enterprise Edition の実行に加え、『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の 「Performing Block Media Recovery」セクションで定義されているとおり、Oracle は以下の事前要件 を満たす必要があります。

- ターゲット・データベースが ARCHIVELOG モードで実行されており、現在の制御ファイルを使用して オープンまたはマウントされている必要があります。
- ターゲット・データベースは、スタンバイ・データベースにすることができません。
- 破損ブロックが含まれているデータファイルのバックアップは、プロキシ・コピーではなく、フルまた はレベル0のバックアップである必要があります。
- RMAN は、リカバリにアーカイブ REDO ログのみを使用できます。RMAN は、レベル1の増分バックアッ プを使用できません。ブロック・メディア・リカバリでは、アーカイブ REDO ログが欠落しているか、ま たはアクセスできない場合はリカバリを実行できません。ただし、REDO レコードが欠落している場合は リカバリを実行できる場合もあります。
- フラッシュバック・ログで破損ブロックの完全な状態に近いコピーを検索するには、Flashback Database がターゲット・データベースで有効になっている必要があります。破損していない古いバージョンの破 損ブロックが含まれている場合にフラッシュバック・ロギングが有効になっていると、RMANは、それらのブロックを使用し、リカバリに必要な時間を短縮できます。

破損ブロックの識別

V\$DATABASE_BLOCK_CORRUPTION ビューに、RMAN コマンド、ANALYZE、SQL 問い合わせなどの データベース・コンポーネントによって破損ブロックとマークされたブロックが表示されます。物理 的な破損(メディア破損とも呼ばれる)が、このビューに行として追加されます。たとえば、チェッ クサムが無効か、ブロックの内容がすべて0(ゼロ)か、またはブロック・ヘッダが分裂しているた め、ブロックがデータベースで認識されない場合などです。

V\$DATABASE_BLOCK_CORRUPTION ビューでのレポートに加えて、ブロック破損は次の場所に表示 されます。

- LIST FAILURE、VALIDATE または BACKUP ... VALIDATE コマンドの結果
- 標準出力のエラー・メッセージ
- Oracle[®] アラート・ログ
- ユーザー・トレース・ファイル
- SQL コマンド ANALYZE TABLE および ANALYZE INDEX の結果
- DBVERIFY ユーティリティの結果
- NetVault Backup など、サード・パーティのメディア管理の出力

たとえば、ユーザー・トレース・ファイルに次のメッセージが表示される場合があります。 ORA-01578: Oracle データ・ブロックに障害が発生しました(ファイル番号 7、ブロック番号 3) ORA-01110: データ・ファイル 7: '/oracle/oradata/trgt/tools01.dbf' ORA-01578: Oracle データ・ブロックに障害が発生しました(ファイル番号 2、ブロック番号 235) ORA-01110: データファイル 2: '/oracle/oradata/trgt/undotbs01.dbf'

ユーザー管理リストアの実行

Plug-in for Oracle を使用したバックアップは、以下の手順が含まれています。

- リカバリ対象データベースの準備
- リストア対象データの選択
- ジョブのファイナライズと実行
- データベースのリカバリ
- データベースを開く

リカバリ対象データベースの準備

選択したテーブルスペースをリストアするために Oracle[®] データベース全体をオフライン状態にする 必要はありませんが、リストアの実行前に、リストアする各テーブルスペースをオフラインにする必 要があります。

- 1 SQL*Plus ユーティリティを使用して、SYSDBA 権限でデータベースに接続します。 SQLPLUS SYS AS SYSDBA
- データベースが開いている場合、以下のコマンドを実行して、損傷したデータファイルが含まれるすべてのテーブルスペースをオフラインにします。

ALTER TABLESPACE <テーブルスペース名 > OFFLINE IMMEDIATE;

リストア対象データの選択

リストアするデータを選択するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[リストア・ジョブ作成] をクリックします。
- 2 **[リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]** ページで、**[プラグイン・タイプ]** リストから [Plug-in for Oracle] を選択します。
- オーブセットのテーブルに表示されている項目をさらにフィルタリングするには、[クライアント]、 [日付]、[ジョブID] リストを使用します。

表にはセーブセット名(ジョブ・タイトルとセーブセット ID)、作成日時、およびサイズが表示されます。デフォルトでこのリストは、セーブセット名のアルファベット順にソートされています。

4 セーブセットの表で、適切な項目を選択します。

セーブセットを選択すると、ジョブ ID、ジョブ・タイトル、サーバー名、クライアント名、プラグイン 名、セーブセットの日時、リタイア設定、増分バックアップかどうか、アーカイブかどうか、および セーブセットのサイズなどの情報が【セーブセット情報】に表示されます。

5 [Next] をクリックします。

6 **[セレクション セット作成]**ページで、リストアするデータを選択します。

バックアップ対象として選択されたアイテムに応じて、セーブセットには以下のものが含まれます。

- [パラメータ・ファイル]
- [全テーブルスペース]
- [バックアップ制御ファイル]
- [アーカイブ・ログ]
- 7 利用可能なアイテムを開いて、リストアに含めるデータを選択します。
 - ① ユーザー管理リストアでは、その他のオプションを設定する必要はありません([リストア・オプ ション] タブにはフィールドが表示されません)。

ジョブのファイナライズと実行

最終ステップには、[スケジュール]、[ソース・オプション]、および [詳細設定] ページの追加オプ ション設定、ジョブの実行、および [ジョブ・ステータス] と [ログ参照] ページからの進捗状況の 監視が含まれています。これらのページとオプションは、すべての NetVault Backup プラグインに共 通しています。詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してくだ さい。

リストア・ジョブをファイナライズおよび実行するには

- 1 [Ok] をクリックして設定を保存し、[次へ] をクリックします。
- 2 デフォルト設定を使用しない場合は、[ジョブ名]に、ジョブの名前を指定します。

進捗状況を監視する際にジョブを識別しやすくするため、分かりやすい名前を割り当てます。ジョブ名 には英数字と英数字以外の文字を使用できますが、非ラテン語系の文字を含めることはできません。 Linux[®]の場合、名前は最大で200文字です。Windows[®]の場合、長さ制限はありません。ただし、すべ てのプラットフォームで、40文字以内にすることをお勧めします。

- 3 [クライアント指定] リストで、データをリストアするマシンを選択します。
 - ① **ヒント: [選択]** をクリックして、**[クライアント指定選択]** ダイアログ・ボックスから適切なク ライアントを検索、選択することもできます。
- 4 [スケジュール]、[ソース・オプション]、および [詳細設定] リストを使って、その他の必要なオプ ションを設定します。
- 5 [保存]または[保存&実行]の、どちらか適切な方をクリックします。

[ジョブ・ステータス]ページで進捗状況を監視したり、[ログ参照]ページでログを表示したりできま す。詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。

データベースのリカバリ

データファイルのリストア後、データベース、テーブルスペース、またはデータファイルをリカバリ できます。

- 1 SQL*Plus ユーティリティを使用して、SYSDBA 権限でデータベースに接続します。 SQLPLUS SYS AS SYSDBA
- 2 必要な結果に応じて、以下のいずれかのコマンドを実行します。
 - データベース全体をリカバリする場合:

RECOVER DATABASE;

• 特定のテーブルスペースをリカバリする場合:

RECOVER TABLESPACE <テーブルスペース名 >

- 特定のデータファイルをリカバリする場合:
 RECOVER DATAFILE '<データファイル名とフル・パス>';
- メディアのリカバリが完了すると、データベースから通知されます。 Media recovery complete.

データベースを開く

リカバリの終了後、SQL*Plus プロンプトで以下のコマンドを実行して、データベースを開きます。 ALTER DATABASE OPEN;

その他のユーザー管理リストア手順

ユーザー管理によるバックアップ方法では、Plug-in for Oracle でリストア中に制御ファイル、デー タファイル、アーカイブ・ログ・ディレクトリまたは個々のアーカイブ・ログ・ファイルの名前を変 更できます。ファイル名の変更は、既存のバージョンを上書きしたくない場合やファイルのコピーを 作成する場合に便利です。また、プラグインでのリストア中に、ファイルを別のディレクトリに移動 することもできます。

 ① 重要:ユーザー管理バックアップを Raw デバイスにリストアする場合、データの名前変更はサポートされ ません。このオプションは、ユーザー管理バックアップをファイル・システム・ストレージにリストアす る場合のみ利用可能です。

以下のセクションでは、その他のユーザー管理リストアについて、また利用できるその他の機能に関 する情報を説明しています。

- 制御ファイル、データファイル、または個々のアーカイブ・ログ・ファイルの名前変更 / 移動
- アーカイブ・ログ・ディレクトリの名前変更または移動

制御ファイル、データファイル、または個々のアーカイ ブ・ログ・ファイルの名前変更 / 移動

リストア時のファイル名または場所(またはその両方)を変更するには

- 1 リカバリ対象データベースの準備の手順を完了します。
- [ナビゲーション] パネルで [リストア・ジョブ作成] をクリックして、[プラグイン・タイプ] リストから [Plug-in for Oracle] を選択します。
- 3 セーブセットの表から、適切な項目を選択して、**[次へ]**をクリックします。

詳しくは、リストア対象データの選択を参照してください。

- 4 [セレクション セット作成]ページで、名前の変更または場所を移動する項目を選択します。
- 5 [アクション] リストから、[名前変更] を選択します。
- 6 [名前変更 / 再配置] ダイアログ・ボックスで、適切な情報を入力して [OK] をクリックします。
 - [名前変更]:新しい名前を入力します。
 - [再配置]:新しいパスを入力します。

アイテムでは、名前および場所情報が括弧内に表示されます。

- 7 新しいまたは現在の場所にある同名の既存のファイルを上書きする場合は、以下の手順に従います。
 - a **[セレクション・セット作成]**ページで、**[プラグイン・オプションの編集]**をクリックします。
 - b **[リストア・オプション]** タブをクリックして、**[既存ファイルの上書きを許可]** を選択し、**[OK]** をクリックします。
- 8 ジョブのファイナライズと実行の説明に従い、リストア手順を続行します。
 - 重要:リストア・ジョブの実行中に個々のアーカイブ・ログ・ファイルの名前を変更する場合、 SET AUTORECOVERY OFF を使用してメディア・リカバリを実行し、変更後のアーカイブ・ログ・ ファイル名を手動で入力します。

アーカイブ・ログ・ディレクトリの名前変更または移動

アーカイブ・ログ・ディレクトリの名前を変更する場合、すべてのアーカイブ・ログが指定された ディレクトリにリストアされます。

リストア時のアーカイブ・ログ名または場所(またはその両方)を変更するには

- 1 リカバリ対象データベースの準備の手順を完了します。
- 2 [ナビゲーション] パネルで [**リストア・ジョブ作成**] をクリックして、[**プラグイン・タイプ**] リスト から [Plug-in for Oracle] を選択します。
- 3 セーブセットの表から、適切な項目を選択して、[次へ]をクリックします。

詳しくは、リストア対象データの選択を参照してください。

- 4 **[セレクション セット作成]**ページで、名前の変更または場所を移動するアーカイブ・ログ・ディレクト リを選択します。
- 5 [アクション] リストから、[名前変更] を選択します。
- 6 [名前変更 / 再配置] ダイアログ・ボックスで、適切な情報を入力して [OK] をクリックします。
 - [名前変更]:新しい名前を入力します。
 - [再配置]:新しいパスを入力します。

アイテムでは、名前および場所情報が括弧内に表示されます。

- 7 新しいまたは現在の場所にある同名の既存のファイルを上書きする場合は、以下の手順に従います。
 - a [セレクション・セット作成]ページで、[プラグイン・オプションの編集]をクリックします。
 - b **[リストア・オプション]** タブをクリックして、**[既存ファイルの上書きを許可]** を選択し、**[OK]** をクリックします。
- 8 ジョブのファイナライズと実行の説明に従い、リストア手順を続行します。
 - ① 重要:必要なアーカイブ REDO ログ・ファイルの一部またはすべてを別の場所にリストアする場合、 メディア・リカバリ前に、SQL*Plus で SET ステートメントに LOGSOURCE パラメータを指定して、 場所を指定する必要があります。

RMAN リストアの実行

Plug-in for Oracle を使用した標準の RMAN リストアには、以下の手順が含まれます。

- リストア対象データの選択
- リストア・オプションの設定
- ジョブのファイナライズと実行

リストア対象データの選択

リストアするデータを選択するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[リストア・ジョブ作成] をクリックします。
- [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]ページで、[プラグイン・タイプ] リストから [Plug-in for Oracle] を選択します。
- オーブセットのテーブルに表示されている項目をさらにフィルタリングするには、[クライアント]、 [日付]、[ジョブID] リストを使用します。

表にはセーブセット名(ジョブ・タイトルとセーブセット ID)、作成日時、およびサイズが表示されます。デフォルトでこのリストは、セーブセット名のアルファベット順にソートされています。 以下のテーブルでバックアップ・タイプごとの識別子を示します。

バックアップ タイプ	バックアップ・タイプ識別子
RMAN フル・データベース	RMAN FULL DB
RMAN の Level 0 増分	RMAN INCRMTAL LVL 0
RMAN 累積增分	RMAN CUML INCRMTAL
RMAN 差分增分	RMAN DIFF INCRMTAL
RMAN Archive Log	RMAN ARCHIVE LOG
RMAN 制御ファイルおよびパラメータ・ファイル	RMAN CTRL PARM
RMAN Flash Recovery Area	RMAN FRA
RMAN Duplicate Database	RMAN DUPL DB
その他の RMAN バックアップ	RMAN Backup

4 セーブセットの表で、適切な項目を選択します。

セーブセットを選択すると、ジョブ ID、ジョブ・タイトル、サーバー名、クライアント名、プラグイン 名、セーブセットの日時、リタイア設定、増分バックアップかどうか、アーカイブかどうか、および セーブセットのサイズなどの情報が [セーブセット情報] に表示されます。

- 5 [Next] をクリックします。
- 6 **[セレクション・セット作成]** ページで、**[データベース全体]** ノードと、バックアップ対象として選択 されたアイテムに応じてその他のノードが表示されたら、目的のアイテムを選択します。
 - [データベース全体]:データベース全体のリストアまたはリカバリ(あるいはその両方)を実行 する場合は、このノードを選択します。このオプションを選択すると、SCN、LSN、または時間に 基づく DBPITR を実行し、データベースを必要な時点まで再構築できます。

[**全テーブルスペース**] ノードまたはすべてのデータファイルおよびテーブルスペースを選択する ことと、このノードを選択することは同じ**ではありません**。

[パラメータ・ファイル]: [Oracle データベースを追加(または編集)する] ダイアログ・ボックスで[制御ファイルの自動パックアップを使用する] オプションが選択解除されている場合のみ有効です。

パラメータ・ファイルをリストアする場合、リストアするパラメータ・ファイルの特定バージョ ンが保持されているバックアップを選択します。たとえば、パラメータ・ファイルを毎週日曜日 の午後11時にバックアップするとします。今日が木曜日で、パラメータ・ファイルを火曜日の午 後6時の状態にリストアする必要がある場合、火曜日の午後6時より前に実行された最後のバッ クアップ、つまり日曜日の夜11時のバックアップからパラメータ・ファイルを選択します。

[SPFILE]: リストアでは、バックアップ・コンテンツに SPFILE のバックアップが含まれている場合に、[SPFILE] ノードをリストア・セレクションで使用できます。選択した場合は、RMAN コマンド(RESTORE SPFILE コマンド)を使用して、SPFILE がリストアされます。

 使用中の SPFILE (たとえば、データベースが SPFILE を使用して開始されている場合)を上 書きして SPFILE をリストアすることはできません。ただし、別の場所にリストアすること はできます。NetVault Backup の [リストア変更] 機能を使用し、SPFILE のリストア先の完 全パス(完全ディレクトリ・パスおよびファイル名)を入力します。

制御ファイルの損失とは異なり、SPFILE を損失しても、Oracle[®] インスタンスが即座に実行を中止 することはありません。Oracle インスタンスはシャットダウンされずにそのまま動作を続ける可能 性があります。バックアップした SPFILE は、別の場所にリストアできます。Oracle インスタンス のシャットダウン後に、リストアした SPFILE を使用して Oracle インスタンスを再起動するか、リ ストアした SPFILE をデフォルトの場所にコピーした後、Oracle インスタンスを再起動します。

[制御ファイル]: このノードをこれ以上開くことはできません。また、リカバリ・カタログを使用していない場合、WebUIから制御ファイルをリストアすることはできません。[リカバリ・カタログ] タブで [カタログの使用] を有効にしていない場合、リストア・ジョブに制御ファイルを含めようとすると、リストアが失敗します。

手動バックアップから制御ファイルをリストアする場合、必要な制御ファイルの特定バージョンが 含まれるバックアップを選択します。たとえば、制御ファイルの手動バックアップを毎晩11時に 実行するとします。今日が木曜日で、制御ファイルを火曜日の午後6時の状態にリストアする必要 がある場合、火曜日の午後6時より前に実行された最後のバックアップ、つまり月曜日の夜11時 のバックアップから制御ファイルを選択します。

- [全テーブルスペース]: このノードを選択すると、全テーブルスペースのリストアが、RMAN RESTORE DATAFILE コマンドを使用して、すべてのテーブルスペースが保存される場所で実行され ます。全テーブルスペースのリストアの実行には、MOUNT 状態にできるデータベースが必要です。
- 個々のデータファイル/テーブルスペース:[全テーブルスペース]ノードを開き、リストアに使用可能なテーブルスペースを表示させます。テーブルスペースを個別または複数選択することも、テーブルスペース・ノードを開いてテーブルスペースを個別に選択することも可能です。個別のテーブルスペースまたはデータファイルのリストアには、リストアおよびリカバリ・プロセス中に「OFFLINE」にできるテーブルスペースが必要です。
- 【外部設定ファイル】: このノードを展開して、リストアに使用できる Oracle ネットワーク設定 ファイルおよび Oracle パスワード・ファイルを表示できます。このノードを選択して、使用可能 なすべての外部設定ファイルをリストアするか、またはノードを開いて個別のファイルを選択し ます。本プラグインは、Plug-in for FileSystem 機能を使用して、Oracle ネットワーク設定ファイ ルおよび Oracle パスワード・ファイルをリストアします。

リストア・オプションの設定

この手順では、完全リカバリと PIT リカバリのどちらを実行するかを指定し、その他のリストア・オ プションを設定します。

[セレクション・セット作成] ページで、**[プラグイン・オプションの編集]** をクリックした後、以下のセクションに記載されている手順に従います。

- バックアップ・ピースの内容表示
- プレリストアおよびリストア・オプションの設定
- リカバリ・オプションの設定
- ブロック・メディア・リカバリ・オプションの設定
- ポスト・リカバリ・オプションの設定
- 格納先の詳細
- リカバリ・カタログの詳細設定
- クローン・データベース・オプションの設定
- RMAN スクリプトの生成オプションの設定
バックアップ・ピースの内容表示

続行する前に、選択したバックアップ・セットに含まれるさまざまなバックアップ・ピースの内容を 表示できます。各ピースに何が含まれているか、バックアップの開始および終了時刻、データファイ ル名、SCN 範囲(上限 SCN と下限 SCN)、およびアーカイブ REDO ログのシーケンス番号を確認でき ます。これらの詳細は、最初のタブ[バックアップ・コンテンツ]に表示されます。

プレリストアおよびリストア・オプションの設定

続行するには [リストアオプション] タブをクリックします。

- [プレリストア・オプション]:このオプションにより、本プラグインのリストア・ジョブ中に、リストア・プロセス用にデータベースまたはテーブルスペースを自動的に準備することができます。
 - [データベース全体のリストア]: このオプションは、データベース全体をリストアする場合に選択します。
 - [テーブルスペース / データファイルのリストア]: このオプションは、個々のまたは複数のテー ブルスペースまたはデータファイルをリストアする場合に選択します。
 - [リストアの前にデータベースを NOMOUNT モードで起動する]:制御ファイルをリストアする場合、 データベースが NOMOUNT 状態であることが必要です。RMAN run ブロックを実行する前に、本プラ グインでデータベースを自動的に NOMOUNT 状態にする場合、このオプションを選択します。
 - [リストア前にデータベースをマウント]: [データベース全体] または [全テーブルスペース]の リストアを実行する場合、データベースは MOUNT 状態である必要があります。リストアおよび リカバリの前に、本プラグインで自動的にデータベースをマウントする場合、このオプションを 選択します。このオプションが選択されていない場合は、ジョブが失敗しないようにするため、 リストア・ジョブの送信前にデータベースを手動で MOUNT 状態にする必要があります。
 - [先にデータベースを強制終了]: [リストア前にデータベースをマウント] が選択されている場合のみ使用可能です。データベースが OPEN 状態の場合、データベースが MOUNT 状態で開かれる前にシャットダウンする必要があります。データベースを MOUNT 状態で起動する前に、本プラグインで自動的に SHUTDOWN ABORT コマンドを実行したい場合は、このオプションを選択します。このオプションが選択されておらず、[リストア前にデータベースをマウント] オプションが選択されている場合、リストア・ジョブの送信前にユーザーによりデータベースを手動でシャットダウンしないと、このリストア・ジョブは失敗します。
 - [リストアを行う前に、リストア対象のテーブルスペースをオフラインにします]: 個々のテーブ ルスペースまたはデータファイルをリストアする場合、リストアの実行前にテーブルスペースを オフラインにする必要があります。本プラグインでリストア対象の各テーブルスペースに対して 自動的に ALTER TABLESPACE OFFLINE コマンドを実行するには、このオプションを選択します。
- [リストア・オプション]:これらは、Oracle[®]のリストアとリカバリ・プロセスのリストア手順に関する オプションです。
 - [リストア完了後に、リストア対象のテーブルスペースをオンラインにします]: 個々のテーブル スペースおよびデータファイルをリストアする場合、リストアおよびリカバリ完了後にテーブル スペースをオンライン状態に戻す必要があります。選択したテーブルスペースをリストアおよび リカバリした後に、本プラグインで自動的に ALTER TABLESPACE ONLINE コマンドを実行するに は、このオプションを選択します。このオプションは、[リカバリを実行する] が選択されている かどうかに関わらず、選択されたテーブルスペースのリカバリを強制的に実行します。
 - [RECOVR TABLESPACE 節を含める(推奨)]: [リストア完了後に、リストア対象のテーブルスペースをオンラインにします] オプションを選択すると、このオプションもデフォルトで選択されます。これにより、テーブルスペースがリカバリに含まれオンラインになります。テーブルスペースを手動でリカバリしたい場合はこのオプションを選択解除します。
 - [読み取り専用データファイルを確認して、必要に応じてリストアします]: このオプションを選択して、リストアに読み取り専用のデータファイルを含めます。読み取り専用ファイルは、完全リカバリに必要な場合のみ含められます。これらのファイルが損傷していない場合は、RMAN によって除外されます。

- [チャネル数]:目的のチャネル数を割り当てることにより、リストア・ジョブ内の並行処理の度合いを制御できます。同時に複数のチャネルを割り当てると、1つのジョブで複数のバックアップ・セットをパラレルにリストアできます。チャネル数は、バックアップ・ジョブに指定されたチャネル数以下にする必要があります。
- [ユーザー定義のバックアップ・タグからリストア / リカバリ]: このオプションを選択し、タグ 名を入力して、どこからバックアップ・セットをリストアするかを選択します。このオプション を選択することは、RMAN のリストア・オプション FROM TAG="< タグ名 >" と同等です。このオ プションは、利用可能な最新のバックアップまたはファイル・コピーでのデフォルトの RMAN リ ストア・セレクションより優先されます。また、自動セレクションの対象を入力したタグで作成 されたバックアップ・セットまたはファイル・コピーに限定します。複数のバックアップ・セッ トまたはファイル・コピーに一致するタグがある場合、RMAN は最新のバックアップ・セットま たはファイル・コピーを選択します。タグ名では大文字と小文字は区別されません。
 - ① 重要: Oracle Data Guard 環境の場合、[ユーザー定義のバックアップ・タグからリストア/ リカバリ]オプションを使用して、特定の Oracle データベース・サーバーから取得された バックアップにリストアするように制限することを推奨します。Dell 詳しくは、Data Guard 環境で代替サーバーに対してリストアするを参照してください。
- [リストア元]: RMAN がリストア元として使用する場所を選択します。これにより、バックアップ がディスク・ベースのメディア、VTL、またはテープのような NetVault Backup メディアで有効な場 合でも、FRA からの RMAN リストアを確実にすることにより、高速なリストアを実行できます。

また、FRA がメディア障害やデータ損傷を持つ疑いがある場合でも、[リストア元] オプションは NetVault Backup メディア(ディスク・ベースのメディア、VTL またはテープ)からの RMAN リス トアを確実に実行します。このオプションは、RMAN が FRA からのリストアに対処できない結果、 リストアおよびリカバリ・プロセスの再起動を危険にさらしたくない場合に有効です。

さらに、当初ディスクにチャネルを割り当てて、ディスクへの CLI ベースのバックアップを実行 した場合でも、これらと同様のオプションが使用可能です。

[リストア元] オプションが使用可能です。

- テープ (NetVault Backup メディアからリストア)
- ディスク(FRA またはディスクからリストア)
- ディスクとテープ両方(NetVault Backupメディアと(FRA またはディスク)の両方から リストア)

詳しくは、リストア・ソースの選択を参照してください。

- [リストア検証]:データをリストアせずに、リストア検証を実行します。本プラグインは、RMAN に、使用可能な既存のバックアップ・セットを選択し、それが選択したオペレーション(データ ベース全体のリストアまたは1つのテーブルスペースのリストアなど)に適切であることを確認 するように指示します。この手順により、必要なバックアップ・セットが破損しておらず使用可 能であることが確認されます。以下の[リストア検証]オプションが使用可能です。
 - [リストア検証のみ]:このオプションを選択した場合は、リストア検証だけが実行されます。
 - [検証がエラーなしで完了した場合にリストア実行]: このオプションを選択すると、リストア検証が未解決のエラーなしで終了した場合に、実際のリストアが実行されます。

リカバリ・オプションの設定

本プラグインは、以下のタイプのデータファイル・メディア・リカバリをサポートしています。 (データベースの完全および不完全リカバリについて詳しくは、データファイル・メディア・リカバ リを参照してください)。

- 個々のデータファイルおよびテーブルスペースの完全リカバリ
- データベース全体の完全リカバリ
- データベースの Pint-in-Time リカバリ (DBPITR)

[リカバリを実行する] タブで、プロセスのリカバリ手順に関するリカバリ・タイプとリカバリ・オ プションを選択します。

- [リカバリ・タイプ]: このオプションを使用して実行するリカバリ・タイプを選択します。
 - [リカバリを実行しない]:ファイルのリストアのみを実行し、リカバリをまったく実行しない場合は、このオプションを選択します。
 - [完全なリカバリを実行する]: コミットされたトランザクションを失うことなく、個々のテーブ ルスペース、複数のテーブルスペース、またはデータベース全体を最新の状態にリカバリするに は、このオプションをオンにします。
 - [テーブルスペース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する]: このオプションは使用しないようにする必要があります。1つ以上のテーブルスペースについて PIT リカバリを実行するテーブルスペースの PIT リカバリ(TSPITR)は、現在サポートされていません。
 - [テーブル・レベル・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する]:特定のテーブルを特定の時点にリカバリする場合、このオプションを選択します。リカバリする時点を指定するには、コントロール(['System Change Number'ベース]、[ログシーケンス・ベース]、または [タイム・ベース])を使用します。リカバリ・テーブル・タスクの追加オプションを設定するには [Auxiliary Destination]、[Recover table]、および [Remap table] コントロールを使用します。その他の情報と例について詳しくは、テーブル・レベルのリカバリの実行を参照してください。
 - [データベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する]: データベースを過去の特定時 点の状態に戻す必要がある場合は、このオプションを選択します。たとえば、テーブル内容の削 除などユーザー・エラーの効果を元に戻すために、データベースを削除前の内容に戻します。

現時点では、本プラグインは DBPITR のみをサポートしています。このため、このオプションは、 [セレクション・セット作成] ページの [データベース全体] ノードでしか使用できません。1 つ 以上のデータファイルまたはテーブルスペースをリストアするときにこのオプションを有効にす ると、リストア・ジョブが失敗します。

データベースを過去の特定のターゲット SCN、ログのシーケンス、または時刻の状態にリストアできます。

- DBPITR はデータベースを RESETLOGS モードで開きます。[データベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する]を選択すると、OPEN モードはすでに DBPITR の一部であるため、[ポスト・リカバリ]タブ(ポスト・リカバリ・オプションの設定で説明)のオプションは利用できなくなります。
- [ポイント・イン・タイム・コントロール]:前のオプションと以下のいずれかのオプションを 使って、リカバリする時点を指定することができます。
 - ['System Change Number' ベース]: SCN に基づく PIT リカバリを実行するには、このオプションを選択し、どのトランザクションまでリカバリする必要があるかを示す SCN を指定します。RMAN は、指定された SCN までリカバリします(ただし、その SCN は含みません)。
 - [ログシーケンス・ベース]: ログのシーケンスに基づく PIT リカバリを実行するには、このオプションを選択し、ログの終了シーケンス番号とそれが属しているスレッドを指定します。適切なログのシーケンス番号とスレッドを特定するには、V\$LOG_HISTORY を照会してアーカイブされたログを表示できます。
 - [タイム・ベース]:時間に基づく PIT リカバリを実行するには、このオプションを選択し、 付随するフィールドに日付と時刻を設定します。本プラグインは、指定された時刻までを リカバリします(ただし、その時刻は含みません)。
- [Auxiliary Destination]: Oracle[®] ベースの自動補助インスタンスが、PIT リカバリ・プロセスの ー環として使用するディレクトリ(フル・パス)を指定します。デフォルトでこのフィールドに は、ORACLE_HOME ディレクトリ内のディレクトリが記載されています。このディレクトリは、 他の任意の場所に変更することができます。このディレクトリは、リカバリ・プロセスを実行す る前に存在している必要があります。詳しくは、テーブル・レベルのリカバリの実行を参照して ください。

- [Recover table]:テーブル・レベル・リカバリに含めるテーブルのカンマ区切りリストを入力します。詳しくは、テーブル・レベルのリカバリの実行を参照してください。
- [Remap table]: テーブル・レベル・リカバリの一環として、名前を変更するテーブルのカンマ 区切りリストを入力します。詳しくは、テーブル・レベルのリカバリの実行を参照してください。
- [トライアル・リカバリの実行のみ]: Oracle 10g 以降の Enterprise Edition データベースでのみ使用可能です。このオプションを選択して、トライアル・リカバリを実行します。トライアル・リカバリを使用すると、リカバリが成功するか、問題が発生するかを判断したり、または以前のリカバリで問題が発生していたかどうかを判断できます。REDO ストリームに注目して、発生する可能性がある問題を検出できます。トライアル・リカバリは、通常のリカバリと同じ方法で REDO を適用しますが、変更をディスクに書き込まず、トライアル・リカバリの最後に変更をロールバックします。トライアル・リカバリ中にエラーが発生した場合は、テスト実行エラーとして Oracle アラート・ログに記録されます。
 - ① 重要:トライアル・リカバリはメモリ内で実行されるので、十分なシステム・リソースが必要です。トライアル・リカバリによる使用が許可された最大バッファ数が、データベースによってすべて使用された場合、トライアル・リカバリは終了します。
- [リカバリ・オプション]:これらは、リカバリ手順に関するオプションです。
 - [読み取り専用データファイルを確認して、カレントでない場合は、リカバリします]: [読み取り 専用データファイルを確認して、必要に応じてリストアします]オプションとともに使用します。 リカバリ・プロセスで読み取り専用データファイルを含める場合に、このオプションを選択しま す。読み取り専用ファイルは、完全リカバリに必要な場合のみ含められます。これらのファイル が損傷していない場合は、RMANによって除外されます。
 - [不必要なリストア済みアーカイブ・ログを削除する]: プラグインは、アーカイブ REDO ログを バックアップ元のディレクトリにコピーします。リストアされたアーカイブ・ログのうち Oracle が不要と見なしたものを削除するには、このオプションを選択します。

ブロック・メディア・リカバリ・オプションの設定

[**ブロック・メディアのリカバリ**] タブでオプションを選択し、実行するブロック・メディア・リカ バリを指定します。ブロック・メディア・リカバリを実行する場合、以下の点に注意してください。

- [セレクション・セット作成]ページで選択したオブジェクトは無視されます。
- [リストア・オプション] タブの、[リストア前にデータベースをマウント] および [先にデータベース を強制終了] オプションが優先されます。
- [ポスト・リカバリ] タブで選択したオプションが優先されます。
- その他のリストアおよびリカバリ・オプションは無視されること。

[ブロック・メディアのリカバリ] タブには、以下のオプションが含まれます。

- [ブロック・メディア・リカバリを実行]:データファイル全体ではなく、破損ブロックのみをリカバリ するには、このオプションを選択してブロック・メディア・リカバリを実行します。
- 【破損したすべてのブロックをリカバリ】: このオプションを選択して V\$DATABASE_BLOCK_CORRUPTION でレポートされたすべての破損ブロックをリカバリします。リストされた破損ブロック全体をリカバリす るには、RMAN の BLOCKRECOVERY コマンドを使用します。
- [リカバリ対象の破損ブロックを指定]:損傷したブロックの特定のサブセットのみリカバリする場合、このオプションを選択します。対応するテキスト・ボックスに、リカバリしたい破損ブロックのデータファイル番号とブロック番号を入力します。以下のフォーマットで、1つの行に1つのデータファイルブロック・エントリを入力します。

```
DATAFILE <番号> BLOCK <番号>
DATAFILE <番号> BLOCK <番号>
```

Dell NetVault Backup Plug-in for Oracle 10.0.5 ユーザーズ・ガイド 76

DATAFILE **<番号>** BLOCK **<番号>** DATAFILE **<番号>** BLOCK **<番号>**

この例で、<番号>はリカバリされるデータファイル番号とブロック番号を示します。

テキスト・ボックスは最大 4096 文字まで入力可能で、およそ 200 のデータファイルブロック・エントリの指定が可能です。ただし、構文は検証されません。

ポスト・リカバリ・オプションの設定

データベース全体、すべてのテーブルスペース、または災害復旧の各オプションを使用してリカバリ を実行する場合、リストアおよびリカバリ・プロセス中にデータベースが MOUNT 状態になります。 完了に伴いデータベースを OPEN 状態に戻す必要があります。本プラグインには、リストア中のリカ バリ・プロセス後に、データベースを自動的にオープンする柔軟性が用意されています。

[ポスト・リカバリ] タブには、以下のオプションが含まれます。

- [リカバリ後にデータベースを開く]:このオプションを選択してデータベースを自動的に開き、リストア・ジョブ中のリカバリ・プロセス後にデータベースを通常どおり使用できるようにします。このオプションを選択すると、以下のオプションが使用可能になります。
 - [読み書き可能]:データベースを読み書きモードでオープンし、REDO ログの生成が可能になりま す。プライマリ・データベースをオープンする場合は、このオプションがデフォルトとなります。
 - [ログの読み書きおよびリセット]:データベースを読み書きモードで開き、現在のログ順序番号を1にリセットします。また、すべての未アーカイブ・ログ・ファイル(現在のログも含む)をアーカイブし、リカバリ中に適用されなかったすべての REDO 情報を、以後使用されないよう破棄します。このオプションは、以下の状況で選択する必要があります。
 - 制御ファイルのバックアップを使用した、メディアの不完全なリカバリまたはリカバリを 実行した後。
 - 完了しなかった前回の OPEN RESETLOGS オペレーションの後。
 - FLASHBACK DATABASE オペレーションの後。
 - [読み取り専用]: このオプションを選択すると、ユーザーのトランザクションを読み取り専用に 制限し、REDO ログの生成を防止します。このオプションは、物理スタンバイ・データベースを オープンする場合にデフォルトの設定で、アーカイブ・ログがプライマリ・データベース・サイ トからコピーされている場合でも、クエリ用に物理スタンバイ・データベースが試用可能になり ます。読み取り専用オプションでデータベースをオープンする場合、Oracle[®]には以下の制限があ ります。
 - 使用しているデータベースが他のインスタンスによって読み書き可能モードで開かれている場合、読み取り専用モードで開くことはできません。
 - データベースのリカバリが必要な場合は、読み取り専用モードで開くことはできません。
 - データベースが読み取り専用モードで開かれている場合は、テーブルスペースをオフラインにすることはできません。一方、データベースが読み取り専用モードで開かれている場合は、データファイルをオフラインにもオンラインにもでき、オフラインのデータファイルとテーブルスペースをリカバリすることができます。

格納先の詳細

バックアップ時点以降に SYSDBA ユーザーの名前やパスワードまたはデータベースの Oracle[®] SID を 変更した場合、[**デスティネーションの詳細**] タブでリストア・ジョブの以下のオプションを設定し ます。

• **[ターゲット・サービス]**: このオプションは、Oracle DBID の現在の SID が、バックアップが取られた時 点から変更された場合に必要です。

- **[Oracle SYSDBA ユーザー名]**: SYSDBA ユーザーを変更した場合は、新しい SYSDBA ユーザー名を指定します。
- [Oracle SYSDBA パスワード]:上のフィールドに指定した名前に対応するパスワードを指定します。
 - ・
 「重要: [デスティネーションの詳細]には、格納先 DB の DBID と等しいバックアップ済みデータ ベースまたはソース・データベースの DBID が必要です。リストアの目的が、異なる DBID を持つ データベースにソース・データベースの複製を作成するというような場合、複製データベースの バックアップを使用する必要があります。詳しくは、複製データベースのバックアップを参照して ください。

リカバリ・カタログの詳細設定

バックアップのリカバリ・カタログ情報は、[設定] または [Oracle データベースを追加(または編集)する] ダイアログ・ボックスで指定しますが、特定のリストア・ジョブについてリカバリ・カタログ情報を設定する場合は、[リカバリ・カタログ] タブを使用します。

• [カタログの使用]: リカバリ・カタログの RMAN リポジトリを使用し、このリストア・オペレーション に関する情報をリカバリ・カタログに保存するには、このオプションを選択します。テスト・リカバリ を実行するときは、[カタログの使用]を選択解除します。

このオプションを選択すると、以下のフィールドが有効になります。

- [Catalog Instance Name]: リカバリ・カタログ・データベースの Oracle[®] インスタンス名 (Oracle Net Service 名とは異なる場合があります)を入力します。このインスタンス名は、本プ ラグインがリカバリ・カタログ・データベースに接続できるように、Oracle データベース・サー バー上の「tnsnames.ora」ファイルで定義されている必要があります。バックアップ中にリカバ リ・カタログが使用された場合、[インスタンス名] フィールドには、バックアップ・ジョブ中に 使用された Oracle インスタンス名がデフォルトで使用されます。
- [カタログの所有者]: リカバリ・カタログの所有者として指定され、 RECOVERY_CATALOG_OWNER のロールが与えられたユーザーを指定します。
- [カタログのパスワード]:前述のフィールドに指定したカタログの所有者に対応するパスワード を指定します。

クローン・データベース・オプションの設定

[クローン・データベース] タブは、[セレクション・セット作成] ページで RMAN DUPL DB バック アップが指定されている場合のみ使用可能です。このタブを使用して、格納先データベースに複製 データベースのバックアップをリストアする際のオプションを指定します。前提条件について詳しく は、非 RAC 環境におけるデータベースの複製または RAC 環境でのデータベースの複製を参照してく ださい。

- [**複製データベース**]:このオプションを選択して、選択した複製データベースのバックアップを、代替 格納先データベースへリストアします。
- [デスティネーション・データベース] セクション:
 - [Auxiliary Instance]:補助インスタンスの Oracle[®] Net Service 名を指定します。このフィールドのデフォルト値は「auxdb」です。
 - [Oracle ホーム]:補助インスタンス用の Oracle ホームを指定します。このフィールドのデフォル ト値は、ソース・データベースの Oracle ホームです。
 - [Oracle SYSDBA ユーザー名]:補助インスタンスの接続に使用される SYSDBA ユーザー名を指定 します。このフィールドのデフォルト値は、ソース・データベース設定時に指定された SYSDBA ユーザー名です。
 - [Oracle SYSDBA パスワード]:上のフィールドに指定した SYSDBA ユーザー名に対応するパス ワードを入力します。

[NOFILENAMECHECK オプションを使用]: このオプションを選択すると、ソース・データベース・ファイルが複製データベース・ファイルと同じ名前を使用している場合に、RMAN が、ソース・データベースのデータファイルとオンライン REDO ログが使用中かどうか確認するのを防止します。このとき、複製オペレーションで大切なデータが上書きされないよう、十分注意しながら指定する必要があります。

このオプションは、複製データベースを代替サーバーにリストアする場合に必要です。同じサー バーに複製データベースをリストアする場合は、このオプションは選択しないよう注意してくだ さい。そうでない場合は、リストアが以下のエラーを伴って失敗に終わります。

- RMAN-10035: 例外が RPC で発生しました: ORA-19504: ファイルの作成に失敗しました。
- ORA-27086: skgfglk: unable to lock file already in use
- SVR4 Error: 11: Resource temporarily unavailable (リソースが一時的に使用できません)
- RMAN-10031: ORA-19624 DBMS_BACKUP_RESTORE にコール中に発生しました RESTOREBACKUPPIECE
- [データベースから複製] セクション
 - [Target Database]: ターゲット・データベースの Oracle SID を指定します。このフィールドのデフォルト値は、バックアップに含まれるデータベースの Oracle SID です。
 - [Oracle ホーム]: ソース・データベース用の Oracle ホームを指定します。このフィールドのデフォルト値は、ソース・データベースの Oracle ホームです。
 - [Oracle SYSDBA ユーザー名]: ソース・データベースの接続に使用される SYSDBA ユーザー名を 指定します。このフィールドのデフォルト値は、ソース・データベース設定時に指定された SYSDBA ユーザー名です。
 - [Oracle SYSDBA パスワード]:上のフィールドに指定した SYSDBA ユーザー名に対応するパス ワードを入力します。

RMAN スクリプトの生成オプションの設定

熟練したデータベース管理者を対象とした [RMAN スクリプトの生成]機能を使用すると、WebUI を 経由して RMAN スクリプトの大部分を生成できます。その後、スクリプトを使用する前にオプション またはパラメータを追加できます。このオプションを使用すると、スクリプトを一から作成しなくて も済むので、スクリプトの構文エラー、またはリストアを正しく実行できないリスクを最小限に抑え ることができます。

[RMAN スクリプトの生成]機能では、以下のオプションを設定できます。

- [ファイルへの RMAN スクリプト出力]: この機能を使用して、その他のオプションを使用可能にするに は、このオプションを選択して、RMAN スクリプトの書き込み先となるファイルの名前を入力します。
- [RMAN スクリプト・ディレクトリ]: RMAN スクリプトが保存されるディレクトリの名前を入力します。
 [スクリプトのデフォルト・ディレクトリを生成] フィールドのデフォルトは、本プラグインの[設定] ダイアログ・ボックスで指定されたディレクトリです。ただし、バックアップ・ジョブごとにフィール ドを変更することもできます。RMAN スクリプトの保存先の完全パスは、[RMAN スクリプト・ディレク トリ]の入力内容と、[ファイルへの RMAN スクリプト出力] フィールドに入力されたファイル名を結合 して作成されます。
- [すでに存在する場合、格納先ファイルを上書き]: このオプションを選択すると、ファイルがすでに存在する場合に、RMAN スクリプトを出力する格納先ファイルを上書きできます。ファイルがすでに存在するが、このオプションが選択されていない場合は、[RMAN スクリプトの生成] は失敗し、出力は既存のファイルには書き込まれません。このオプションは、既存のファイルの上書きをはっきり望んでいる場合にのみ選択します。
- [RMAN スクリプト生成後、ジョブを実行]: このオプションを選択すると、指定したファイルに RMAN ス クリプトを出力するだけでなく、NetVault Backup ジョブがスケジュールされ実行されます。このオプ ションの選択を解除すると、本プラグインではスクリプトが生成されるだけで、データベース管理者は それを NetVault Backup 以外で編集および実行できます。

ジョブのファイナライズと実行

「ジョブのファイナライズと実行」の「ユーザー管理リストアの実行」に記載されている手順を実行 します。

非 RAC 環境で使用可能な RMAN リカバリ・タ イプ

以下のセクションでは、非 RAC 環境で実行できる、リカバリのタイプについて説明しています。

- 自動バックアップからの制御ファイルのリストア
- 同一サーバーへの個別データファイルおよびテーブルスペースのリカバリ
- データベース全体を同一サーバーにリカバリする
- RMAN を使用した障害復旧の実行

RAC 環境で使用可能な RMAN リカバリ・タイプについて詳しくは、RAC 環境におけるデータのリスト アを参照してください。

自動バックアップからの制御ファイルのリストア

制御ファイルのリストアは、下記の場合に限って実行する必要があります。

- 現在使用中のすべての制御ファイルのコピーが、メディア障害またはユーザーによる偶発的な削除に よって失われたり、損傷または使用できなくなった場合
- Oracle[®]のカスタマー・サポートが制御ファイルのリストアが必要と判断した場合

自動バックアップではデフォルトの形式が使用されるため、使用可能なバックアップのリストが含ま れるリポジトリを使用できなくても、RMAN は制御ファイルをリストアできます。RMAN は制御ファ イルをすべての CONTROL_FILES の場所に自動的に複製します。

1 RMAN を起動し、ターゲット・データベースに接続します。

>rman connect TARGET /

- データベースをマウントせずにターゲット・インスタンスを開始します。
 STARTUP FORCE NOMOUNT;
- 3 SET DBID を使用して、ターゲット・データベースのデータベース識別子を設定します。

RMAN は、ターゲットに接続するたびに DBID を表示します。保存された RMAN ログ・ファイルを調べる か、カタログを照会するか、または制御ファイルの自動バックアップのファイル名からも、DBID を特定 できます。たとえば、以下のコマンドを実行します。

SET DBID < Y-A DBID>;

4 制御ファイルの自動バックアップをリストアします。

```
RUN {
ALLOCATE CHANNEL CH1 TYPE 'SBT_TAPE';
RESTORE CONTROLFILE FROM AUTOBACKUP;
ALTER DATABASE MOUNT;
RESTORE DATABASE;
RECOVER DATABASE;
}
```

制御ファイルの自動バックアップのデフォルト形式が変更された場合は、リストア中に同じ形式を指定 します。

RUN { SET CONTROLFILE AUTOBACKUP FORMAT FOR DEVICE TYPE <device type> TO '<string>'

```
ALLOCATE CHANNEL CH1 TYPE 'SBT_TAPE';
RESTORE CONTROLFILE FROM AUTOBACKUP;
ALTER DATABASE MOUNT;
RESTORE DATABASE;
RECOVER DATABASE;
```

5 データベースを開き、オンライン・ログをリセットします。

ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS;

SQL*Plus から実行した場合と異なり、RMAN から ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS を実行すると、 ターゲット・データベースが自動的にリセットされるため、RESET DATABASE を実行する必要がありま せん。データベースをリセットすることにより、RMAN は新しいインカネーションをデータベースの最新 のインカネーションと見なします。SQL*Plus から ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS を実行し、その 後 RMAN プロンプトで RESET DATABASE を実行しない場合、RMAN はリカバリ・カタログへのアクセス を拒否します。これは、RMAN が RESETLOGS オペレーションと、古い制御ファイルの予測外のリストア とを区別できないためです。

① **重要**:自動バックアップから制御ファイルをリストアしたら、[NetVault Backup 選択] タブでデー タベース・ノードを選択し、フルまたは Level 0 増分バックアップの実行をお勧めします。

同一サーバーへの個別データファイルおよびテーブルス ペースのリカバリ

このタイプのリカバリは、データベースが開いているが、一部のデータファイルが損傷している場合 に実行します。データベースを開いた状態、つまりデータベースの残りの部分を使用可能にしたまま で、損傷したテーブルスペースをリカバリする場合に便利です。個々のデータファイルまたはテーブ ルスペースをリストアおよびリカバリする際は、完全リカバリのみを実行できます。個々のデータ ファイルまたはテーブルスペースについて PIT リカバリを実行することはできません。PIT リカバリを有効に すると、リストア・ジョブが失敗します。以下は、個々のデータファイルまたはテーブルスペースの リカバリ・プロセスの概要です。

- 1 [セレクション・セット作成]ページで、テーブルスペースの利用可能な最新のバックアップから損傷したデータファイルまたはテーブルスペースを選択して、[プラグイン・オプションの編集]をクリックします。
- [リストア・オプション] タブをクリックして、[リストアを行う前に、リストア対象のテーブルスペー スをオフラインにします] および [リストア完了後に、リストア対象のテーブルスペースをオンライン にします] オプションを選択します。
- 3 [リカバリを実行する] タブで、利用可能なオプションを選択します。
 - テーブルスペースを現在の時刻、つまりアーカイブおよびオンライン REDO ログで使用可能な、 最後にコミットされたトランザクションまでリカバリするには、[完全なリカバリを実行する]オ プションを選択します。
 - リカバリを実行しない場合は、[リカバリを実行しない]オプションを選択します。
 - ① | **「データベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する**] オプションを選択する と、リストア・ジョブは失敗します。
 - リストアされたアーカイブ・ログのうち Oracle[®] が不要と見なしたものを削除するには、[不必要 なリストア済みアーカイブ・ログを削除する]オプションを選択します。
- 4 [**クライアント指定**]、[スケジュール]、[詳細設定]の各タブに入力し、ジョブを開始します。

RMAN は使用可能なフル、増分、またはアーカイブ・ログのバックアップのうち最適なものを自動的に選択し、テーブルスペースのリストアとリカバリを実行します。

データベース全体を同一サーバーにリカバリする

このタイプのリカバリは、現在の制御ファイルや SPFILE は損なわれていないが、すべてのデータファイルが損傷しているか、失われた場合に実行します。完全リカバリを実行することも、データベースを特定時点にリカバリすることもできます。以下は、データベース全体のリカバリ・プロセスの概要で、データベースが MOUNT 状態のときに実行される必要があります。

- 1 **[リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]**ページで、**すべて**のテーブルスペースを含む利用可能な 最新のバックアップを選択して、**[次へ]**をクリックします。
- 2 **[セレクション・セット作成]** ページで、ソース NetVault Backup クライアントとデータベースに移動して、**[データベース全体]** ノードを選択して、**[プラグイン・オプションの編集]** をクリックします。
- 3 [リストアオプション] タブをクリックし、利用可能なオプションを選択します。
 - リストア前にデータベースをマウントするには、[リストア前にデータベースをマウント]を選択します。
 - データベースのマウント前にデータベースを自動的にシャットダウンするには、[先にデータベースを強制終了]を選択します。
 - 読み取り専用データファイルをリストアに含めるには、[読み取り専用データファイルを確認して、必要に応じてリストアします]を選択します。
- 4 データベースに対してリカバリを実行、つまりデータベースを最新の状態または特定時点まで再構築するには、[リカバリを実行する] タブで以下のいずれかのオプションを選択します。
 - [完全なリカバリを実行する]: データベースを最新状態(つまりアーカイブおよびオンライン REDO ログで使用可能な)最後にコミットされたトランザクションまでリカバリします。
 - [データベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する]:特定時点(つまり特定の時刻、 ログのシーケンス・ナンバー、または SCN)にデータベースをリカバリします。
- 5 [リカバリを実行する] タブで、利用可能なその他のオプションを選択します。
 - 読み取り専用データファイルをリストアに含めるには、[読み取り専用データファイルを確認して、必要に応じてリストアします]を選択します。読み取り専用ファイルは、完全リカバリに必要な場合のみ含められます。これらのファイルが損傷していない場合は、RMAN によって除外されます。
 - リストアされたアーカイブ・ログのうち Oracle[®] が不要と見なしたものを削除するには、【不必要なリストア済みアーカイブ・ログを削除する】を選択します。
- 6 [ポスト・リカバリ] タブで、[リカバリ後にデータベースを開く] および [ログの読み書きおよびリ セット] を選択して、自動的にデータベースを読み書きモードでオープンし、オンライン・ログをリ セットします。
- 7 [クライアント指定]、[スケジュール]、[詳細設定]の各タブに入力し、ジョブを開始します。

RMAN は、使用可能なフル、増分、またはアーカイブ・ログのバックアップのうち最適なものを自動的に 選択し、データベースのリストアとリカバリを実行します。

① **重要**: データベース全体のリストアを完了したら、**[セレクション・セット作成]** ページでデータ ベース全体を選択し、フルまたは Level 0 増分バックアップの実行をお勧めします。

RMAN を使用した障害復旧の実行

障害復旧では、ターゲット・データベース全体、すべての現在の制御ファイル、すべてのオンライン REDO ログ・ファイル、およびすべてのパラメータ・ファイルが失われた後に、データベースのリスト アおよびリカバリを実行します。FRA についても同様に失われたと仮定します。障害復旧を実行するた めに最低限バックアップ・セットに、すべてのデータファイル、バックアップ後に生成されたアーカイ ブ REDO ファイルと自動バックアップに含まれている制御ファイルが少なくとも1つ必要です。 新しいホストで使用しているターゲット・データベースのコピーを作成することが目標の場合は、これらの手順を使用するのではなく、この目的用に特化されている**複製データベース**のバックアップ・ タイプを使用します。詳しくは、複製データベースのバックアップを参照してください。

△ 注意:データベースの上書きやデータの消失を回避するために、障害復旧を実行する前に、以下のセク ションで説明するオプションについて注意して選択する必要があります。

障害復旧の実行について、以下の方法が利用可能です。

- 段階的ディザスタ・リカバリ・プロセス
- 同一サーバーへの障害復旧の実行
- 手動による制御ファイルの取得

重要

いかなる種類の障害復旧を実行する場合にも、以下の点に注意してください。

- テスト・リカバリを実行する場合は、データファイルのリストア中にリカバリ・カタログに接続しない でください。接続すると、RMANによって、リストアされたデータファイルに関する情報がリカバリ・カ タログに記録されます。これは、以後プライマリ・データベースをリストアおよびリカバリする際に障 害になります。リストアする必要のあるすべてのバックアップの RMAN リポジトリ・データを制御ファ イルに保持しきれないため、リカバリ・カタログを使用する必要がある場合、カタログをエクスポート します。カタログをエクスポートしたら、別のスキーマまたはデータベースにインポートし、リカバリ・ カタログのコピーをテスト・リストアに使用します。そうしないと、カタログで、リストアされたデー タベースが最新のターゲット・データベースと見なされます。
- 障害復旧を目的としていない Oracle[®] データベース環境で障害復旧手順を実行すると、データベース内 でデータが消失する可能性があります。個別データファイルやアーカイブ・ログのリストア / リカバリ、 または Oracle データベースの SPFILE や制御ファイルのリストアのみを目的とする場合、障害復旧手順を 実行しないよう注意してください。
- 障害復旧は、データベース、SPFILE および制御ファイル全体をリストアする場合に限り実行する必要が あります。これは、障害復旧手順がデータベースを上書きすることにより、データベース内の既存デー タが消失する可能性があるためです。
- Oracle データベース・サーバー内で障害復旧を実行するには、小規模オプション・サブセットを含む段階的ディザスタ・リカバリ機能を使用してコマンドを実行します。その他の詳細設定、または対象を絞った障害復旧については、本プラグインのドキュメントでRMAN CLI 手順に関するセクションを参照することをお勧めします。これは、段階的ディザスタ・リカバリ機能がすべてのリカバリ・オプションを使用する訳ではないため、場合によってはリカバリが正常に完了しないことがあります。リカバリが正常に完了しない場合は、RMAN CLI プロセスを実行する必要があります。

段階的ディザスタ・リカバリ・プロセス

このプロセスでは、制御ファイルのリストアを自動バックアップから実行し、同一のリストア・タス クを使用してデータベース・データファイルをリストアします。このプロセスを使用する際は、以下 の点に注意してください。

- [セレクション・セット作成]ページで選択したオブジェクトは無視されます。
- その他のリストアおよびリカバリ・オプションは無視されること。
- [段階的ディザスタ・リカバリ]タブで選択したオプションのみが実行されること。

このプロセスを使用するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[リストア・ジョブ作成] をクリックします。
- 2 **[リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]** ページで、**[プラグイン・タイプ]** リストから [Plug-in for Oracle] を選択します。

 オーブセットのテーブルに表示されている項目をさらにフィルタリングするには、[クライアント]、 [日付]、[ジョブID] リストを使用します。

表にはセーブセット名(ジョブ・タイトルとセーブセット ID)、作成日時、およびサイズが表示されます。デフォルトでこのリストは、セーブセット名のアルファベット順にソートされています。

4 セーブセットの表で、適切な項目を選択します。

セーブセットを選択すると、ジョブ ID、ジョブ・タイトル、サーバー名、クライアント名、プラグイン 名、セーブセットの日時、リタイア設定、増分バックアップかどうか、アーカイブかどうか、および セーブセットのサイズなどの情報が [セーブセット情報] に表示されます。

- 5 [Next] をクリックします。
- 6 [セレクション セット作成]ページで、任意の項目を選択します。

前述のように、このプロセスでこのページの選択内容は無視されます。

- 7 **[プラグインオプションの編集]**をクリックし、次に**[段階的ディザスタ・リカバリ]**タブをクリックし ます。
- 8 [以下のステップバイステップ・ディザスタ・リカバリを実行]オプションを選択し、さらに利用可能な サブオプションを選択します。
 - [Dbid 設定]: DBID を設定する場合は、このオプションを選択します。本プラグインは、バック アップを取得した Oracle[®] データベースの DBID を、このフィールド内に自動的に入力します。こ の DBID は、NOMOUNT 状態の Oracle データベースを起動するために必要なパラメータ・ファイ ルや SPFILE が利用可能でない場合に必要です。
 - [SPFILE を自動バックアップからリストア。日付最大値のルックバック]:スケジュールしたバックアップで Oracle 制御ファイルの自動バックアップ・オプションが有効化され、その自動バックアップから SPFILE をリストアする場合に、このオプションを選択します。(Oracle 制御ファイルの自動バックアップが無効な場合、自動バックアップから SPFILE をリストアすることはできません)。詳しくは、制御ファイルの自動バックアップ有効化を参照してください。デフォルトで、このオプションは過去7日間に実行された自動バックアップを検索し、利用可能であればそれを更新します。このオプションは、以下の RMAN コマンドを実行します。

STARTUP NOMOUNT; restore spfile from autobackup maxdays <日数>;

・【制御ファイルを自動バックアップからリストア。日付最大値のルックバック]:スケジュールしたバックアップで Oracle 制御ファイルの自動バックアップ・オプションが有効化され、その自動バックアップから制御ファイルをリストアする場合に、このオプションを選択します。(Oracle 制御ファイルの自動バックアップが無効な場合、自動バックアップから制御ファイルをリストアすることはできません)。詳しくは、制御ファイルの自動バックアップ有効化を参照してください。デフォルトで、このオプションは過去7日間に実行された自動バックアップを検索し、利用可能であればそれを更新します。このオプションは、以下の RMAN コマンドを実行します。

STARTUP FORCE NOMOUNT; restore controlfile from autobackup maxdays **<日数**>;

 [データベースのリストア]: Oracle データベース内に含まれるすべてのデータファイルをリスト アする場合は、このオプションを選択します。restore database コマンドは、Oracle データベー ス内に含まれるすべてのデータファイルのリストアを試行します。このオプションは、以下の RMAN コマンドを実行します。

RESTORE DATABASE;

 [データベースのリカバリ]: Oracle データベース内に含まれるすべてのデータファイルをリカバ リする場合は、このオプションを選択します。recover database コマンドは、Oracle データベー ス内に含まれるすべてのデータファイルのリカバリを試行します。このリカバリにはリストアが 自動的に含まれ、アーカイブされたトランザクション・ログが適用されます。このオプションは、 以下の RMAN コマンドを実行します。

RECOVER DATABASE;

• [ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS]: RESETLOGS オプション付きでデータベースを開く場合 は、このオプションを選択します。このオプションは、以下の SQL*Plus コマンドを実行します。

ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS;

- データベースをリストアすると、RMAN CLI プロンプトを開くオプションが表示され、その プロンプトからリカバリ・コマンドを発行できるようになります。このオプションにより、 [データベースのリカバリ]オプションと [ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS] オプショ ンを選択してリカバリ詳細設定オプションを実行する必要がなくなります。
- 9 「ジョブのファイナライズと実行」の手順を完了します。

同ーサーバーへの障害復旧の実行

以下の手順では、ソース・データベースと同じサーバーに障害復旧を実行する手順を詳しく説明しま す。この手順は、完全なメディア障害が発生し、損傷したホストを同じ構成で再構築するか、ホスト 名も含め元のホストの構成を模倣して新しいサーバーを設定する場合に使用します。

① 以下の手順を実行して、プロダクション・サーバーがアクティブな間も、Oracle[®] サーバーを異なるホスト(オリジナルのプロダクション・サーバーではないサーバー)にリストアすることができます。ただし、前述のように、新規ホストで現在使用中のターゲット・プロダクション・データベースのコピーを作成することが目的の場合は、この手順を使用するのではなく、[複製データベース]バックアップ・タイプを使用する必要があります。詳しくは、複製データベースのバックアップを参照してください。

RMAN リポジトリのバックアップ計画でリカバリ・カタログを使用するかどうかに関わらず、同じ手順を使用する必要があります。RMAN は常にバックアップに関する情報を制御ファイルに記録し保存 します。制御ファイルに保存されるこの情報は、RMAN によるデータベースのバックアップの正式な 記録になります。RMAN は、必要なすべてのバックアップおよびリカバリ・オペレーションを、制御 ファイルのリポジトリ情報のみを使用して実行できます。

以下の障害復旧手順のバリエーションについて詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「Performing Disaster Recovery」セクションを参照してください。

リカバリ・カタログを使用せずに障害復旧を実行するには、以下の条件を満たす必要があります。

- Oracle データベース・ソフトウェアをインストールする:損傷したサーバーと同じバージョンの Oracle データベース・ソフトウェアをシステムにインストールします。ソースとリカバリ先の Oracle サーバー で、ORACLE_HOME が同一である必要があります。ただし、データベースを作成する必要はありません。
- Oracle パスワード・ファイルが作成されている: orapwd ユーティリティを使用して Oracle パスワード・ファイルを作成します。
 - Linux[®] :

orapwd file=**<Oracle ホーム**>/dbs/orapw<SID> password=**< パスワード>**

• Windows[®] :

orapwd file=**<Oracle ホーム**>\database\orapw**<SID>** password=**< パスワード>**

 Windows で Oracle サービスを作成して開始する: Oracle の oradim ユーティリティを使用して、 Windows に Oracle サービスを作成します。Oracle SID は、元のデータベースまたはソース・データベー スと同一である必要があります。このオプションにより、同一の Oracle サービス名が作成されます。た とえば、OS プロンプトで以下のコマンドを実行します。

oradim -new -sid <SID名>

Windows サービスの作成後、OS プロンプトで以下のコマンドを実行してサービスを開始します。

net start oracleservice<SID名>

- NetVault Backup ソフトウェアと Plug-in for Oracle をインストールする: 損傷したサーバーと同じバー ジョンの NetVault Backup ソフトウェアと本プラグインをインストールし、同じように設定する必要があ ります。デフォルト設定の構成で示されているとおりプラグインのデフォルト属性が定義されているこ とを確認します。
- ソース・データベースの DBID を特定する:損傷したデータベースの DBID を特定します。
 Plug-in for Oracle の初期インストールの一部として DBID が記録されなかった場合、NetVault Backup の バイナリ・ログでソース・データベースの RMAN ベースのバックアップを調べます。DBID は、【詳細】ダ イアログ・ボックスまたは【バックアップ・コンテンツ】タブでも利用できます。
- SPFILE が格納されるデフォルトの場所: SPFILE 用にデフォルトの場所が存在することを確認します。デフォルトの場所を作成し忘れると、SPFILE のリストア中に「ORA-17502 ファイルの作成に失敗しました」というエラーが発生する結果になります。
- すべてのテーブルスペースのバックアップを使用可能にする: すべてのテーブルスペースの最新のバックアップがあることを確認します。

リカバリを実行するには

1 Oracle Net Service 設定ファイルをリストアします。

外部設定ファイルが前の RMAN バックアップに含まれていたか、Plug-in for FileSystem を使用して Oracle Net Service 設定ファイル(LISTENER.ORA、SQLNET.ORA、TNSNAMES.ORA など)をバックアップ した場合、これらのファイルをリカバリ先の Oracle データベース・サーバーにリストアします。または、 リカバリ先 Oracle サーバーに Oracle Net Service を設定します。

2 Oracle リスナーを開始します。

たとえば、OS コマンド・プロンプトで以下のコマンドを実行します。

lsnrctl start

- 3 カタログなしで RMAN を起動し、ターゲット・データベースに接続します。
 - RMAN TARGET / NOCATALOG
- 4 DBID を、損傷したデータベースの DBID に設定します。

SET DBID < Y-A DBID>;

- 5 データベースをマウントせずにターゲット・インスタンスを開始します。
 - ① 重要:以下のコマンド実行時に PFILE が利用できない場合、一連の Oracle エラーが発生することが あります。このプロセスは問題ではないため、エラーを無視しても構いません。Oracle はデフォル トの PFILE を使って、SPFILE のリストア・プロセスを継続します(「starting Oracle instance without parameter file for retrieval of spfile」)。

STARTUP NOMOUNT;

6 自動バックアップから SPFILE をリストアします。

```
RUN {
ALLOCATE CHANNEL C1 TYPE 'SBT_TAPE';
RESTORE SPFILE FROM AUTOBACKUP;
}
```

7 リストアした SPFILE を使用してデータベースを再起動します。

STARTUP FORCE NOMOUNT;

8 自動バックアップから制御ファイルをリストアします。

前回の自動バックアップから制御ファイルをリストアするには、以下のコマンドを実行します。

```
RUN {
ALLOCATE CHANNEL CH1 TYPE 'SBT_TAPE';
RESTORE CONTROLFILE FROM AUTOBACKUP;
}
```

- ① **重要**:制御ファイルの自動バックアップを取得していない場合は、継続する前に手動による制御 ファイルの取得で説明されている手順を完了する必要があります。
- 9 [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]ページで、すべてのテーブルスペースを含む利用可能な 最新のバックアップを選択して、[次へ]をクリックします。
- 10 **[セレクション・セット作成]** ページで、ソース NetVault Backup クライアントとデータベースに移動して、**[データベース全体]** ノードを選択して、**[プラグイン・オプションの編集]** をクリックします。
- 11 [リストアオプション] タブをクリックし、利用可能なオプションを選択します。
 - リストア前にデータベースをマウントするには、[リストア前にデータベースをマウント]を選択します。
 - 読み取り専用データファイルをリストアに含めるには、[読み取り専用データファイルを確認して、必要に応じてリストアします]を選択します。
- 12 障害復旧シナリオでは、リカバリを実行する必要があるため、[リカバリを実行する] タブで、[データ ベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する] オプションを選択します。

PIT リカバリはデータベースを指定した時刻、ログ・シーケンス番号または SCN にリストアします。障害 が発生した時刻あるいはログ・シーケンスが不明な場合は、SCN オプションの使用をお勧めします。Dell

13 [リカバリを実行する] タブで、[読み取り専用データファイルを確認して、カレントでない場合は、リ カバリします] を選択して、リカバリ・プロセスに読み取り専用のデータファイルを含めます。

読み取り専用ファイルは、完全リカバリに必要な場合のみ含められます。これらのファイルが損傷して いない場合は、RMANによって除外されます。

- 14 [リカバリ・カタログ] タブで、[カタログの使用] オプションを選択解除し、リカバリ・カタログがリ ストアに使用されないようにします。
- 15 [スケジュール] と [詳細設定] の各タブに入力し、ジョブを開始します。

RMAN は、使用可能なフル、増分、またはアーカイブ・ログのバックアップのうち最適なものを自動的に 選択し、データベースのリストアとリカバリを実行します。

16 RMAN で、RMAN メタデータを更新します。

CROSSCHECK ARCHIVELOG ALL;

- 17 RMAN を終了します。
 - ① **重要**: ディザスタ・リカバリが完了したら、**[セレクション・セット作成]** ページでデータベース 全体を選択し、フルまたは Level 0 増分バックアップの実行をお勧めします。

手動による制御ファイルの取得

制御ファイルの自動バックアップが利用できず、RMAN カタログも使用されておらず、[NetVault Backup 選択] ページで制御ファイル・ノードが選択されたバックアップが実行された場合、以下の 手順を使用してバックアップ・ピースから制御ファイルを抽出することができる場合があります。

バックアップ・ピースから最新(あるいは、必要であればその他の)制御ファイルを手動でリカバリ するには

- 1 **[リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]**ページで、「制御ファイルを含む」とマークされている 利用可能な最新のバックアップを探します。
- 2 制御ファイルをリカバリします。

```
SQL> STARTUP NOMOUNT;
DECLARE
  devtype varchar2(256);
  done boolean;
BEGIN
```

```
devtype := dbms backup restore.deviceallocate('sbt tape', params=>'');
  dbms backup restore.restoresetdatafile;
  dbms backup restore.restorecontrolfileto
     ('<制御ファイル名およびリストア先>');
  dbms backup restore.restorebackuppiece
     ('<先ほど識別したバックアップ・セグメント名 >', done=>done);
END;
/
例:
sqlplus /nolog
connect / as sysdba
STARTUP NOMOUNT;
DECLARE
devtype varchar2(256);
done
      boolean;
BEGIN
devtype := dbms_backup_restore.deviceallocate('sbt_tape', params=>'');
dbms backup restore.restoresetdatafile;
dbms backup restore.restorecontrolfileto
  ('C:\oracle\product\10.1.0\oradata\o10gg\control01.ctl');
dbms backup restore.restorebackuppiece
  ('ZETK2003:#3293:ZETK2003:274 578391288:010GG 1135958971',done=>done);
END;
/
```

```
3 replicate controlfile コマンドを使用して、リストア済み制御ファイルをコピーします。
```

RMAN TARGET / NOCATALOG

```
SET DBID < ソース DBID>;
connect TARGET /
RUN {
ALLOCATE CHANNEL C1 TYPE 'SBT_TAPE';
replicate controlfile from
'<制御ファイル名およびリストア元>';
}
```

RMAN を使用したその他のリストア手順

このセクションでは、Plug-in for Oracle で実行できるその他のリストア操作について説明します。

- ファイルの名前または場所の変更(またはその両方)
- 非 RAC 環境におけるデータベースの複製
- テーブル・レベルのリカバリの実行

ファイルの名前または場所の変更(またはその両方)

RMAN によるバックアップ方法では、本プラグインでリストア中に制御ファイルおよびデータファイ ルの名前を変更できます。ファイル名の変更は、既存のバージョンを上書きしたくない場合やファイ ルのコピーを作成する場合に便利です。また、プラグインでのリストア中に、ファイルを別のディレ クトリに移動することもできます。

リストア時にファイル名または場所を変更するには

- 1 リカバリ対象データベースの準備の手順を完了します。
- 2 [ナビゲーション] パネルで**[リストア・ジョブ作成]** をクリックして、**[プラグイン・タイプ]** リスト から [Plug-in for Oracle] を選択します。
- 3 セーブセットの表から、適切な項目を選択して、[次へ]をクリックします。
 詳しくは、リストア対象データの選択を参照してください。

計しては、リストノ対象ノーメの迭代を参照しててたてい。

- 4 **[セレクション・セット作成]**ページで、リストアするデータファイルまたは制御ファイルを選択します。
- 5 [アクション] リストから、[名前変更] を選択します。
- 6 [名前変更/再配置]ダイアログ・ボックスで、適切な情報を入力します。
 - [名前変更]:新しい名前を入力します。
 - [再配置]:新しいパスを入力します。

本プラグインは、set newname RMAN コマンドを使用して、RMAN バックアップのリストアまたは名前 変更(またはその両方)を行います。set newname コマンドは、DB_CREATE_FILE_DEST パラメータよ り優先されます。リストアまたは名前変更でフル・パスが指定されていない場合、プラグインは以下の ように動作します。

- SPFILE:ファイルは、「\$ORACLE_HOME/dbs」ディレクトリに、新しい名前でリストアされます。
- ・ データファイル:
 - ファイル作成時に新しい場所を指定した場合、ファイルは新しい名前で、その場所にリストアされます。
 - ファイル作成時に新しい場所を指定しなかった場合、ファイルは新しい名前で、 「\$ORACLE_HOME/dbs」にリストアされます。

フル・パスには、ASM の場所へのパスを含めることができます。例:
 +DATA/my_db/my_datafile_renamed.dbf

リストア中に制御ファイル名を変更する場合、変更後のファイル名が Oracle[®] パラメータ・ファイルの CONTROL_FILES リストに存在している必要があります。

7 変更を適用するには、[OK] をクリックします。

アイテムでは、名前および場所情報が括弧内に表示されます。

8 ジョブのファイナライズと実行の説明に従い、リストア手順を続行します。

非 RAC 環境におけるデータベースの複製

複製データベースを使用するとソース・データベースの複製またはクローンを作成することができ、 これはバックアップおよびリストア手順によってソース・データベースが影響を受けることのないよ う特殊な目的のために使用されます。RMAN は複製データベースをサポートし、データベース管理者 が以下のタスクを実行する際に柔軟性を提供します。

- バックアップとリカバリ手順のテスト
- Oracle[®] データベース新規リリースへのアップグレードのテスト
- アプリケーションによるデータベース・パフォーマンスへの影響のテスト
- レポート作成

マルチ・インスタンスの RAC データベースについて詳しくは、RAC 環境でのデータベースの複製を 参照してください。Oracle の複製データベース機能について詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の「Duplicating a Database」を参照してください。 本プラグインでは、**複製データベース**のバックアップ用に以下のリストア・シナリオが提供されています。

- 同一サーバーへの複製データベースのリストア
- 同じディレクトリ構造を持つ代替サーバーへの複製データベースのリストア
- 異なるディレクトリ構造を持つ代替サーバーへの複製データベースのリストア

同一サーバーへの複製データベースのリストア

以下では、ソース・データベースが存在するローカルまたは同一サーバーへの、複製データベースの リストア手順について詳しく説明します。複製データベースまたは格納先データベースが、ソース・ データベースと物理的に同じサーバーに存在することになるため、格納先データベースでは異なる ディレクトリ構造を使用する必要があります。

複製データベースのバックアップを同じサーバーにリストアするには、以下の前提条件を満たす必要 があります。

- Oracle[®] データベース・ソフトウェアのバージョンが同じであること:格納先データベースの Oracle の エディションとバージョンが、ソース・データベースで使用されている Oracle のエディションとバー ジョンと同じである必要があります。パッチのレベルも同一である必要があります。
- 複製データベースのバックアップが使用可能であること:複製データベースのバックアップが正常に完 了し使用可能になっている必要があります。
- ソース・データベースが OPEN 状態であること: ソース・データベースは、複製データベースのリストア・プロセス全体を通して OPEN READ WRITE 状態になっている必要があります。
- 補助インスタンスが用意されていること: RMAN のバックアップ・ベースの複製データベース・プロセスでは、以下で定義されているような補助インスタンスが用意されている必要があります。
 - 補助インスタンス用のOracle パスワードが作成されていること: ソース・データベースと同じホストに複製する場合、補助接続用に OS 認証を使用するのに対してパスワード・ファイルを使用したい場合に必要となります。パスワード・ファイルの作成について詳しくは、『Oracle Database Administrator's Guide』の「Creating and Maintaining a Password File」を参照してください。
 - 2 補助インスタンスへの Oracle Net 接続が確立されていること:「tnsnames.ora」ファイルにイン スタンスを追加することにより、補助インスタンスが Oracle Net で使用可能である必要がありま す。さらに、Windows[®] プラットフォームでは、次のコマンドを実行してインスタンスを開始しま す。

oradim -new -sid **<SID名>**

- 3 補助インスタンスの格納先ディレクトリが存在すること:格納先データベースが存在することに なるサーバーに、補助インスタンス用に以下の格納先ディレクトリが作成されている必要があり ます。ASM で、格納先データベースがデータファイルに格納される場合、格納先データベース用 の ASM インスタンス名がすでに存在する必要があります。
 - Control_Files
 - DB_Create_File_Dest
 - Audit_File_Dest
 - Background_Dump_Dest
 - User_Dump_Dest
- 4 補助インスタンス用に PFILE が作成されていること: クライアント側 PFILE が、補助データベー ス用に、ソース・データベースの SPFILE から作成されている必要があります。
 - SQL*Plus を起動し、ソース・データベースに管理者権限で接続します。

sqlplus sys/<パスワード>@<ソース接続 ID> AS SYSDBA

• SPFILE から PFILE を作成します。

```
create pfile = '<PFILE 宛先ディレクトリゝ/
init<補助 SID>.ora' from spfile;
```

- 5 **PFILE が補助値で更新されている**:補助インスタンス用に作成された PFILE が、補助インスタンス で指定されたパラメータ値で編集および更新されている必要があります。
 - < ソース sid>.__ で始まっているすべてのエントリを削除します。
 - *.db_name= エントリを編集して格納先データベースの名前を反映します。
 - 補助インスタンス用に格納先ディレクトリを反映させるには、以下のエントリを更新します。補助インスタンス用に格納先ディレクトリを反映させるには、以下のエントリを更新します。このディレクトリが存在する必要がありますが、ソース・データベースがデータファイルを ASM に格納する場合、格納先データベース用の ASM インスタンス名が、以下の control_files および db_create_file_dest パラメータ用にそれぞれ指定されている必要があります。
 - *.audit_file_dest=
 - *.background_dump_dest=
 - *.control_files=
 - *.user_dump_dest=
 - *.db_create_file_dest=
 - *.db_recovery_file_dest=
 - エントリの先頭に「#」(番号記号)を挿入して、以下のエントリをコメント・アウトします。

*.dispatchers='(PROTOCOL=TCP) (SERVICE=< Y-ス SID>XDB)'

以下の行を追加して、データファイル名および一時ファイル名の変換用にストリング・ペアを指定します。

*.db file name convert='<ソース・データベース作成ファイル宛先>/<ソース

'< 宛先データベース作成ファイル宛先 >/< 宛先 SID>'

例:

SID>',

- *.db_file_name_convert=' C:\oracle\oradata\prod',
 'c:\oracle\oradata\test'
- 以下の行を追加して、オンライン REDO ログ・ファイル名の設定用にストリング・ペアを 指定します。

*.log_file_name_convert='< ソース・データベース作成ファイル宛先 >/ < ソース SID>', '< 宛先データベース作成ファイル宛先 >/ < 宛先 SID>'

例:

*.log_file_name_convert=' C:\oracle\oradata\prod',
 'c:\oracle\oradata\test'

- 6 補助インスタンスが NOMOUNT 状態で起動していること:補助インスタンスが、補助インスタン ス特有のパラメータ値で更新されている PFILE を使用して NOMOUNT 状態で起動される必要があ ります。
 - SQL*Plus を起動して補助インスタンスに管理者権限で接続します。

sqlplus sys/<パスワード>@<補助接続 ID> AS SYSDBA

• インスタンスを NOMOUNT 状態で起動します。

startup nomount pfile = '<PFILE 宛先ディレクトリ>/
init<補助 SID>.ora'

7 補助ファイルが、SPFILE の PFILE を基に作成されました。

```
create spfile from pfile='<PFILE 宛先ディレクトリ>/
init<補助 SID>.ora';
```

8 SQL*Plus を終了します。

複製データベースのリストアが正常に完了するよう、SQL*Plus を終了する必要があります。

複製データベースをリストアするには

- 1 [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]ページで、利用可能な複製データベースのバックアップ を選択して、[次へ]をクリックします。
- 2 **[セレクション・セット作成]** ページで、ソース NetVault Backup クライアントとデータベースに移動して、**[データベース全体]** ノードを選択して、**[プラグイン・オプションの編集]** をクリックします。
- 3 [**クローン・データベース**] タブをクリックして、[複製データベース] オプションを選択します。
- 4 [デスティネーション・データベース]フレームで、以下を設定します。
 - **[ターゲット・サービス]** フィールドで、補助インスタンスの Oracle Net Service 名を指定します。
 - 補助インスタンス用に [Oracle ホーム] を指定します。
 - 本プラグインによって補助インスタンス接続用に使用される [Oracle SYSDBA ユーザー名] を指定します。
 - [Oracle SYSDBA パスワード] を指定します。
- 5 [データベースから複製] フレームで、以下を設定します。
 - ソース・データベース用に [Oracle SID] を指定します。
 - ソース・データベース用に [Oracle ホーム] を指定します。
 - 本プラグインによってソース・データベース接続用に使用される [Oracle SYSDBA ユーザー名] を指定します。
 - [Oracle SYSDBA パスワード] を指定します。
- 6 「ジョブのファイナライズと実行」の説明に従って、**[スケジュール]** および**[詳細設定]** リストの記入 も含めたリストア手順を続行します。

同じディレクトリ構造を持つ代替サーバーへの複製データベー スのリストア

以下の手順では、代替またはリモート・サーバー(ソース・データベースが存在する場所以外のサー バー)に複製データベースのバックアップをリストアし、ソース・データベースと同じディレクトリ 構造を使用する手順について詳しく説明します。

複製データベースのバックアップを、代替またはリモート・サーバーにリストアするには、以下の前 提条件を満たす必要があります。

- Oracle[®] データベース・ソフトウェアのバージョンが同じであること:格納先データベースの Oracle の エディションとバージョンが、ソース・データベースで使用されている Oracle のエディションとバー ジョンと同じである必要があります。パッチのレベルも同一である必要があります。
- 複製データベースのバックアップが使用可能であること:複製データベースのバックアップが正常に完 了し使用可能になっている必要があります。
- ソース・データベースが OPEN 状態であること: ソース・データベースは、複製データベースのリストア・プロセス全体を通して OPEN READ WRITE 状態になっている必要があります。

- 補助インスタンスが用意されていること: RMAN のバックアップ・ベースの複製データベース・プロセス では、以下で定義されているような補助インスタンスが用意されている必要があります。
 - 補助インスタンス用のOracle パスワードが作成されていること: ソース・データベースと同じホストに複製する場合、補助接続用に OS 認証を使用するのに対してパスワード・ファイルを使用したい場合に必要となります。パスワード・ファイルの作成について詳しくは、『Oracle Database Administrator's Guide』の「Creating and Maintaining a Password File」を参照してください。
 - 2 補助インスタンスへの Oracle Net 接続が確立されていること: ソース・サーバーと代替サーバー 両方の「TNSNAMES.ORA」ファイルにインスタンスを追加することにより、補助インスタンスが Oracle Net で使用可能である必要があります。さらに、Windows[®] プラットフォームでは、次のコ マンドを実行してインスタンスを開始します。

oradim -new -sid **<SID名>**

- 3 補助インスタンスの格納先ディレクトリが存在すること:格納先データベースが存在することに なるサーバーに、補助インスタンス用に以下の格納先ディレクトリが作成されている必要があり ます。ASM で、格納先データベースがデータファイルに格納される場合、格納先データベース用 の ASM インスタンス名がすでに存在する必要があります。
 - Control_Files
 - DB_Create_File_Dest
 - Audit_File_Dest
 - Background_Dump_Dest
 - User_Dump_Dest
- 4 **補助インスタンス用に PFILE が作成されていること**: クライアント側 PFILE が、補助データベー ス用に、ソース・データベースの SPFILE から作成されている必要があります。
 - SQL*Plus を起動し、ソース・データベースに管理者権限で接続します。

sqlplus sys/<パスワード>@<ソース接続 ID> AS SYSDBA

• SPFILE から PFILE を作成します。

create pfile = '<PFILE 宛先ディレクトリ>/ init<補助 SID>.ora' from spfile;

- 5 **PFILE が補助値で更新されている**:補助インスタンス用に作成された PFILE が、補助インスタンス で指定されたパラメータ値で編集および更新されている必要があります。
 - < **ソース sid>.__** で始まっているすべてのエントリを削除します。
 - *.db_name= エントリを編集して格納先データベースの名前を反映します。
 - 補助インスタンス用に格納先ディレクトリを反映させるには、以下のエントリを更新します。補助インスタンス用に格納先ディレクトリを反映させるには、以下のエントリを更新します。このディレクトリが存在する必要がありますが、ソース・データベースがデータファイルを ASM に格納する場合、格納先データベース用の ASM インスタンス名が、以下の control_files および db_create_file_dest パラメータ用にそれぞれ指定されている必要があります。
 - *.audit_file_dest=
 - *.background_dump_dest=
 - *.control_files=
 - *.user_dump_dest=
 - *.db_create_file_dest=
 - *.db_recovery_file_dest=
 - エントリの先頭に「#」(番号記号)を挿入して、以下のエントリをコメント・アウトします。
 - *.dispatchers='(PROTOCOL=TCP) (SERVICE=< Y-X SID>XDB)'

- 6 補助インスタンスが NOMOUNT 状態で起動していること:補助インスタンスが、補助インスタン ス特有のパラメータ値で更新されている PFILE を使用して NOMOUNT 状態で起動される必要があ ります。
 - SQL*Plus を起動して補助インスタンスに管理者権限で接続します。

sqlplus sys/<パスワード>@<補助接続 ID> AS SYSDBA

• インスタンスを NOMOUNT 状態で起動します。

startup nomount pfile = '<PFILE 宛先ディレクトリ>/
init<補助 SID>.ora'

7 補助ファイルが、SPFILE の PFILE をもとに作成されていること

create spfile from pfile='<PFILE 宛先ディレクトリ>/ init<補助 SID>.ora';

8 SQL*Plus を終了します。

複製データベースのリストアが正常に完了するよう、SQL*Plus を終了する必要があります。

 NetVault Backup ソフトウェアと Plug-in for Oracle をインストールする:格納先データベースが存在す る代替サーバーと同じバージョンの NetVault Backup ソフトウェアと本プラグインをインストールし、同 じように設定する必要があります。

本プラグインを、代替サーバーで設定する場合、以下のデフォルト属性が定義されていることを確認し てください。

- **[NetVault Backup サーバー]**: ソース・データベース・サーバーが NetVault Backup クライアント として追加されている NetVault Backup サーバーの名前を定義します。
- [NetVault Backup サーバーからリストアを実施する]: ソース・データベース・サーバーが NetVault Backup クライアントとして追加されている NetVault Backup サーバーの名前を定義します。
- [NetVault Backup クライアントからのバックアップをリストアする]: ソース・データベース・ サーバー用に NetVault Backup マシン名を指定します。

詳しくは、デフォルト設定の構成を参照してください。

 代替サーバーに NetVault Backup ソフトウェアと Plug-in for Oracle をインストールする:格納先データ ベースが存在することになる代替(スタンバイ)サーバーにインストール済みの本プラグインに、ソー ス・データベースが追加される必要があります。

たとえば、プロダクション Oracle サーバーの名前が「salesdb」だとします。本プラグインがインストー ルされている代替サーバーに、「salesdb」という名前のデータベースを追加します(既存のデータベース が代替サーバーにクローニングされていない場合でも、この手順を実行します)。この手順によってプラ グインがプレースホルダを作成し、Oracle データベースが代替(スタンバイ)サーバーにリストアされ るとき、クローニング・プロセス中にこのプレースホルダが使用されます。

データベースの追加について詳しくは、データベースの追加を参照してください。これらの手順は、オ リジナルのデータベースと、代替サーバーに作成するプレースホルダに使用します。

複製データベースをリストアするには

- 1 [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]ページで、利用可能な複製データベースのバックアップ を選択して、[次へ]をクリックします。
- 2 **[セレクション・セット作成]** ページで、ソース NetVault Backup クライアントとデータベースに移動して、**[データベース全体]** ノードを選択して、**[プラグイン・オプションの編集]** をクリックします。
- 3 [クローン・データベース] タブをクリックして、[複製データベース] オプションを選択します。
- 4 [デスティネーション・データベース]フレームで、以下を設定します。
 - [ターゲット・サービス]フィールドで、補助インスタンスの Oracle Net Service 名を指定します。
 - 補助インスタンス用に [Oracle ホーム] を指定します。

- 本プラグインによって補助インスタンス接続用に使用される [Oracle SYSDBA ユーザー名] を指定します。
- [Oracle SYSDBA パスワード] を指定します。
- [NOFILENAMECHECK オプションを使用] オプションを選択します。
- 5 [データベースから複製] フレームで、以下を設定します。
 - ソース・データベース用に [Oracle SID] を指定します。
 - ソース・データベース用に [Oracle ホーム] を指定します。
 - 本プラグインによってソース・データベース接続用に使用される [Oracle SYSDBA ユーザー名] を指定します。
 - [Oracle SYSDBA パスワード] を指定します。
- 6 **[クライアント指定]** リストで、格納先データベースが存在することになる代替サーバーの NetVault Backup マシン名を選択します。
- 7 **[スケジュール]** および **[詳細設定]** リストの記入も含めたリストア手順を続行します。 詳しくは、ジョブのファイナライズと実行を参照してください。

異なるディレクトリ構造を持つ代替サーバーへの複製データ ベースのリストア

以下の手順では、代替またはリモート・サーバー(ソース・データベースが存在する場所以外のサー バー)に複製データベースのバックアップをリストアし、異なるディレクトリ構造を使用する手順に ついて詳しく説明します。

複製データベースのバックアップを、異なるディレクトリ構造を持つ代替またはリモート・サーバー にリストアするには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Oracle[®] データベース・ソフトウェアのバージョンが同じであること:格納先データベースの Oracle の エディションとバージョンが、ソース・データベースで使用されている Oracle のエディションとバー ジョンと同じである必要があります。パッチのレベルも同一である必要があります。
- 複製データベースのバックアップが使用可能であること:複製データベースのバックアップが正常に完 了し使用可能になっている必要があります。
- ソース・データベースが OPEN 状態であること: ソース・データベースは、複製データベースのリスト ア・プロセス全体を通して OPEN READ WRITE 状態になっている必要があります。
- 補助インスタンスが用意されていること: RMAN のバックアップ・ベースの複製データベース・プロセスでは、以下で定義されているような補助インスタンスが用意されている必要があります。
 - 補助インスタンス用のOracle パスワードが作成されていること: ソース・データベースと同じホストに複製する場合、補助接続用に OS 認証を使用するのに対してパスワード・ファイルを使用したい場合に必要となります。パスワード・ファイルの作成について詳しくは、『Oracle Database Administrator's Guide』の「Creating and Maintaining a Password File」を参照してください。
 - 2 補助インスタンスへの Oracle Net 接続が確立されていること: ソース・サーバーと代替サーバー 両方の「TNSNAMES.ORA」ファイルにインスタンスを追加することにより、補助インスタンスが Oracle Net で使用可能である必要があります。さらに、Windows[®] プラットフォームでは、次のコ マンドを実行してインスタンスを開始します。

oradim -new -sid <SID名>

3 補助インスタンスの格納先ディレクトリが存在すること:格納先データベースが存在することに なるサーバーに、補助インスタンス用に以下の格納先ディレクトリが作成されている必要があり ます。ASM で、格納先データベースがデータファイルに格納される場合、格納先データベース用 の ASM インスタンス名がすでに存在する必要があります。

- Control_Files
- DB_Create_File_Dest
- Audit_File_Dest
- Background_Dump_Dest
- User_Dump_Dest
- 4 補助インスタンス用に PFILE が作成されていること: クライアント側 PFILE が、補助データベー ス用に、ソース・データベースの SPFILE から作成されている必要があります。
 - SQL*Plus を起動し、ソース・データベースに管理者権限で接続します。

sqlplus sys/<パスワード>@<ソース接続 ID> AS SYSDBA

• SPFILE から PFILE を作成します。

```
create pfile = '<PFILE 宛先ディレクトリ>/
init<補助 SID>.ora' from spfile;
```

- 5 **PFILE が補助値で更新されている**:補助インスタンス用に作成された PFILE が、補助インスタンス で指定されたパラメータ値で編集および更新されている必要があります。
 - < ソース sid>.__ で始まっているすべてのエントリを削除します。
 - *.db_name= エントリを編集して格納先データベースの名前を反映します。
 - 補助インスタンス用に格納先ディレクトリを反映させるには、以下のエントリを更新します。補助インスタンス用に格納先ディレクトリを反映させるには、以下のエントリを更新します。このディレクトリが存在する必要がありますが、ソース・データベースがデータファイルを ASM に格納する場合、格納先データベース用の ASM インスタンス名が、以下の control_files および db_create_file_dest パラメータ用にそれぞれ指定されている必要があります。

```
*.audit_file_dest=
*.background_dump_dest=
*.control_files=
*.user_dump_dest=
*.db_create_file_dest=
```

- *.db_recovery_file_dest=
- エントリの先頭に「#」(番号記号)を挿入して、以下のエントリをコメント・アウトします。

*.dispatchers='(PROTOCOL=TCP) (SERVICE=< Y-ス SID>XDB)'

以下の行を追加して、データファイル名および一時ファイル名の変換用にストリング・ペアを指定します。

*.db_file_name_convert='<ソース・データベース作成ファイル宛先 >/ <ソース SID>', '< 宛先データベース作成ファイル宛先 >/ <宛先 SID>'

例:

- *.db_file_name_convert=' C:\oracle\oradata\prod',
 'c:\oracle\oradata\test'
- 以下の行を追加して、オンライン REDO ログ・ファイル名の設定用にストリング・ペアを 指定します。

```
*.log_file_name_convert='< ソース・データベース作成ファイル宛先 >/
< ソース SID>', '< 宛先データベース作成ファイル宛先 >/
< 宛先 SID>'
```

例:

```
*.log_file_name_convert=' C:\oracle\oradata\prod',
    'c:\oracle\oradata\test'
```

- 6 補助インスタンスが NOMOUNT 状態で起動していること:補助インスタンスが、補助インスタン ス特有のパラメータ値で更新されている PFILE を使用して NOMOUNT 状態で起動される必要があ ります。
 - SQL*Plus を起動して補助インスタンスに管理者権限で接続します。

sqlplus sys/<パスワード>@<補助接続 ID> AS SYSDBA

• インスタンスを NOMOUNT 状態で起動します。

startup nomount pfile = '<PFILE 宛先ディレクトリ>/
init<補助 SID>.ora'

7 補助ファイルが、SPFILE の PFILE をもとに作成されていること

create spfile from pfile='<PFILE 宛先ディレクトリ>/ init<補助 SID>.ora';

8 SQL*Plus を終了します。

複製データベースのリストアが正常に完了するよう、SQL*Plus を終了する必要があります。

 NetVault Backup ソフトウェアと Plug-in for Oracle をインストールする:格納先データベースが存在す る代替サーバーと同じバージョンの NetVault Backup ソフトウェアと本プラグインをインストールし、同 じように設定する必要があります。

本プラグインを、代替サーバーで設定する場合、以下のデフォルト属性が定義されていることを確認し てください。

- **[NetVault Backup サーバー]**: ソース・データベース・サーバーが NetVault Backup クライアント として追加されている NetVault Backup サーバーの名前を定義します。
- [NetVault Backup サーバーからリストアを実施する]: ソース・データベース・サーバーが NetVault Backup クライアントとして追加されている NetVault Backup サーバーの名前を定義します。
- [NetVault Backup クライアントからのバックアップをリストアする]: ソース・データベース・ サーバー用に NetVault Backup マシン名を指定します。

詳しくは、デフォルト設定の構成を参照してください。

 代替サーバーに NetVault Backup ソフトウェアと Plug-in for Oracle をインストールする:格納先データ ベースが存在することになる代替(スタンバイ)サーバーにインストール済みの本プラグインに、ソー ス・データベースが追加される必要があります。

たとえば、プロダクション Oracle サーバーの名前が「salesdb」だとします。本プラグインがインストー ルされている代替サーバーに、「salesdb」という名前のデータベースを追加します(既存のデータベース が代替サーバーにクローニングされていない場合でも、この手順を実行する必要があります)。この手順 によってプラグインがプレースホルダを作成し、Oracle データベースが代替(スタンバイ)サーバーに リストアされるとき、クローニング・プロセス中にこのプレースホルダが使用されます。

データベースの追加について詳しくは、データベースの追加を参照してください。これらの手順は、オ リジナルのデータベースと、代替サーバーに作成するプレースホルダに使用します。

複製データベースをリストアするには

- 1 [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]ページで、利用可能な複製データベースのバックアップ を選択して、[次へ]をクリックします。
- 2 **[セレクション・セット作成]** ページで、ソース NetVault Backup クライアントとデータベースに移動して、**[データベース全体]** ノードを選択して、**[プラグイン・オプションの編集]** をクリックします。
- 3 [クローン・データベース] タブをクリックして、[複製データベース] オプションを選択します。
- 4 [デスティネーション・データベース]フレームで、以下を設定します。
 - [ターゲット・サービス] フィールドで、補助インスタンスの Oracle Net Service 名を指定します。

- 補助インスタンス用に [Oracle ホーム] を指定します。
- 本プラグインによって補助インスタンス接続用に使用される [Oracle SYSDBA ユーザー名] を指定します。
- [Oracle SYSDBA パスワード] を指定します。
- [NOFILENAMECHECK オプションを使用] オプションを選択します。
- 5 [データベースから複製] フレームで、以下を設定します。
 - ソース・データベース用に [Oracle SID] を指定します。
 - ソース・データベース用に [Oracle ホーム] を指定します。
 - 本プラグインによってソース・データベース接続用に使用される [Oracle SYSDBA ユーザー名] を指定します。
 - [Oracle SYSDBA パスワード] を指定します。
- 6 **[クライアント指定]** リストで、格納先データベースが存在することになる代替サーバーの NetVault Backup マシン名を選択します。
- 7 [スケジュール]および [詳細設定] リストの記入も含めたリストア手順を続行します。
 詳しくは、ジョブのファイナライズと実行を参照してください。

テーブル・レベルのリカバリの実行

テーブル・レベルのリカバリ(RECOVER TABLE)は、Oracle Database 12.1 Enterprise Edition から利用できる Oracle[®] ベースの機能です。適切なバージョンの Oracle を使用している場合、プラグインを使って特定の Oracle テーブルを特定の時点にリカバリすることができます。

Oracle サーバーは、記載されているテーブルを含むテーブルスペースを補助インスタンスにリカバ リします。次にデータ・ポンプを使って、補助インスタンスからターゲット・インスタンスにテーブ ル・データをエクスポートします。

① 重要:以下のセクションで取り上げている例は、完全自動版の補助インスタンスの使用に基づいています。
 自動化を利用することにより、補助インスタンスが完全に作成され、宛先(ファイル・システム内のディレクトリ)が指定されている場合は Oracle サーバーにより管理されます。

補助インスタンスにテーブルスペースをリストアするには、システム・テーブルスペースのバック アップ、リカバリ対象テーブルを含むテーブルスペース、およびバックアップ時に存在していた制御 ファイルを指定する必要があります。

プラグインにより、補助インスタンスを使った自動リカバリ手法を活用することができます。テーブ ル・レベルのリカバリを行うためのその他の方法について詳しくは、Oracle のドキュメントを参照 してください。その他の方法では RMAN コマンド・プロンプトを使って、プラグインが作成したバッ クアップからリカバリすることができます。

以下のセクションには、テーブル・レベル・リカバリの実行に関する情報が記載されています。

- テーブル・レベル・リカバリの使用
- テーブル・レベルの要件と制限事項
- テーブル・レベル・リカバリのチャネルの設定
- RMAN CLI からのテーブル・レベルのリカバリの実行
- NetVault Backup WebUI からのテーブル・レベルのリカバリの実行

テーブル・レベル・リカバリの使用

テーブル・レベル・リカバリでは、他のテーブルやデータベースに影響を与えることなく、1 つまた は複数のテーブルまたはテーブル・パーティションを、特定の時点にリカバリすることができます。 このプロセスのために、プラグインの RMAN バックアップを使って作成されたバックアップを使用す ることができます。他のリカバリ方法に加えて、テーブル・レベルのリカバリは、以下のようなリカ バリを行う場合に役立ちます。

- 少数のテーブルを特定の時点にリカバリする。
- 破棄、パージされたテーブルをリカバリする。
- 論理的に損傷したテーブルをリカバリする。
- Flashback Table コマンドを利用できないテーブルをリカバリする(たとえば、構造的な変更により Flashback Table で巻き戻せない、または目的の時点が元に戻せる時点よりも古いなど)。

テーブル・レベルの要件と制限事項

このタイプのリカバリを実行する場合、Oracle[®] データベース固有の制限事項と要件があります。正常にリカバリを実行するために、以下の要件と制限事項を確認する必要があります(すべての制約の一覧などその他の情報について詳しくは、Oracle ドキュメントのテーブル・レベルのリカバリ情報を参照してください)。

- テーブル・レベルのリカバリは、Enterprise Editionの Oracle Server 12.1 以降で利用できます。
- テーブル・レベルの自動リカバリを使用するには、リカバリの実行前に「Auxiliary Destination」節に指定したディレクトリが存在している必要があります。既存の空のディレクトリを使用する、またはディレクトリを作成することができます(プロセス開始前にディレクトリが存在している必要があります)。
- CONFIGURE コマンドを使って、RMAN 内にチャネルを設定する必要があります。補助データベースは、 ターゲット・データベースと同じチャネルを使用します。
- テーブルスペース SYSTEM、SYSAUX、undo (UNDOTBS1)、および SYSEXT (SYSEXT テーブルスペースが ある場合)のフル・バックアップが存在している必要があります。また、リカバリのターゲットとなる テーブルを含むテーブルスペースも存在しています。
- テーブル・レベルのリカバリを使って、SYS に所属するテーブル、SYSTEM および SYSAUX テーブルス ペースからのテーブル、またはスタンバイ・データベース上のテーブルをリカバリすることはできません。
- REMAP 句を使って、名前付き NOT NULL 制約を持つテーブルをリカバリすることはできません。

テーブル・レベル・リカバリのチャネルの設定

プラグインをリカバリに使用するには、RMAN に SBT チャネルを設定する必要があります。これらの チャネルは RMAN および NetVault Backup メディア管理ユーティリティに接続します。デフォルトの SBT チャネル、またはタイプが SBT または DISK のその他のチャネルを設定することができます。現 在の RMAN 設定を表示するには、RMAN プロンプトから以下のコマンドを実行します。

RMAN> SHOW ALL;

SBT チャネルが設定されていない場合は(DISK チャネルの設定のみが存在している)、以下のコマン ドを使って RMAN に SBT チャネル用の一連の設定を追加するように指示します。

RMAN> CONFIGURE DEFAULT DEVICE TYPE TO 'SBT TAPE';

SBT 用にこれらの設定が追加され、テーブル・レベルのリカバリが実行されると、最低1つの DISK チャネルと1つの SBT チャネルを、リカバリ・プロセスで利用できるようになります。補助インス タンスは、ターゲット・インスタンスで利用できるチャネルと同じチャネルを使用します。 また、必要に応じて以下のコマンドを使って他のチャネルを追加することもできます。 RMAN> CONFIGURE CHANNEL **<チャネル番号>** DEVICE TYPE sbt

チャネルの設定について詳しくは、Oracle[®]のドキュメントを参照してください。

RMAN CLI からのテーブル・レベルのリカバリの実行

前述のように、例は完全自動版の補助インスタンスの使用に基づいています。自動補助インスタンス またはユーザー管理補助インスタンス(これらは両方ともプラグインと一緒に使ってテーブル・レベ ルのリカバリを実行できます)の使用に関する他の例について詳しくは、Oracle[®]のドキュメントを 参照してください。以下の点に注意してください。

- テーブル・レベルのリカバリでは、until 句を使ってリカバリする状態を定義する必要があります。
- 以下の例は、ターゲット・インスタンス、および必要に応じて RMAN リカバリ・カタログに接続することを前提にしています。

例

以下の例は Oracle[®] ユーザー sales の 3 つのテーブルを、完全自動補助インスタンスを使用して、特定の SCN にリカバリします。必要なファイルはリカバリ実行前に作成した Linux[®] または UNIX[®] ディレクトリ、/oracle/nvbu_pitr_auxiliary_destination に保管されます。

RMAN> recover table SALES.NORTHSALES, SALES.SOUTHSALES, SALES.CENTRALSALES until scn 5555638

auxiliary destination '/oracle/nvbu_pitr_auxiliary_destination';

ログ・シーケンスを使用することを除いて同じ例:

RMAN> recover table SALES.NORTHSALES, SALES.SOUTHSALES, SALES.CENTRALSALES until sequence 38 thread 1 auxiliary destination '/oracle/nvbu pitr auxiliary destination';

同様だけれども特定の日時を使用し、Windows[®]サーバー環境をベースにした例:

RMAN> recover table SALES.NORTHSALES, SALES.SOUTHSALES, SALES.CENTRALSALES
until time "to_date('2013/11/23 06:59:00', 'yyyy/mm/dd hh24:mi:ss')"
auxiliary destination
'C:\app\Administrator\product\11.2.0\dbhome 1\nvbu pitr auxiliary destination';

以下の例は remap table オプションを使って、選択した 3 つのテーブルの中の 2 つを、別名の新し いテーブルにリカバリします(3 番目のテーブルはオリジナルと同じ名前でリカバリされます)。

RMAN> recover table SALES.NORTHSALES, SALES.SOUTHSALES, SALES.CENTRALSALES
until time "to_date('2013/11/23 06:59:00', 'yyyy/mm/dd hh24:mi:ss')"
remap table sales.northsales:northsales_recovered,
sales.southsales:southsales_recovered
auxiliary destination
'C:\app\Administrator\product\11.2.0\dbhome 1\nvbu pitr auxiliary destination';

共通のユーザーからテーブルをリカバリ:

RMAN> recover table "C##SALES"."NORTHSALES", "C##SALES"."SOUTHSALES"
until scn 5555638
remap table "C##SALES"."NORTHSALES":"NORTHSALES_RECOVERED"
auxiliary destination '/oracle/nvbu_pitr_auxiliary_destination';

デフォルトで RMAN は、リカバリしたテーブルまたはテーブル・パーティションをターゲット・デー タベースにインポートします。インポート前、テーブルはエクスポート・ダンプ・ファイルに保管さ れます。NOTABLEIMPORT オプションを使って、RMAN によるリカバリされたテーブルまたはテーブ ル・パーティションのインポートを防止することができます。このオプションを使用すると、テーブ ルは特定の時点にリカバリされ、エクスポート・ダンプ・ファイルは作成されますが、ターゲット・ データベースにダンプ・ファイルはインポートされません。その時点で補助インスタンスを使って、 テーブルを分析することができます。または、Oracle Data Pump Import ユーティリティを使って、 ダンプ・ファイルをターゲット・データベースに手動でインポートすることができます。

RMAN> recover table "C##SALES"."NORTHSALES", "C##SALES"."SOUTHSALES"
until time 'SYSDATE-4'
auxiliary destination '/oracle/nvbu_pitr_auxiliary_destination'
datapump destination '/oracle/nvbu_pitr_datapump_destination'
dump file 'northsales_southsales_export_dump.dat'
notableimport;

リカバリ中にエラーが発生した場合、リカバーされたテーブルがエクスポート・ダンプ・ファイルを作成していれば、それは削除されません。そのエクスポート・ダンプ・ファイルを使って、リカバリ・プロセスを手動で完了することができます。

NetVault Backup WebUI からのテーブル・レベルのリカバリの 実行

「RMAN リストアの実行」で説明している手順に加えて、テーブル・レベルのリカバリに対しては以下のオプションが適用されます。

- 1 **[リカバリの実行]** タブの **[リカバリ・タイプ]** セクションで、**[テーブル・レベル・ポイント・イン・** タイム・リカバリを実行する] オプションを選択します。
- ['System Change Number' ベース]、[ログシーケンス・ベース]、または [タイム・ベース] オプション を選択します。
 - ['System Change Number' ベース] オプションを選択した場合、プラグインは RMAN に、テーブ ル・リカバリ時に until scn 句を使用するように指示します。例: until scn 5555638
 - [ログシーケンス・ベース]オプションを選択した場合、プラグインは RMAN に、テーブル・リカ バリ時に until sequence < 番号 > thread < 番号 > 句を使用するように指示します。例: until sequence 38 thread 1
 - [タイム・ベース] オプションを選択した場合、プラグインは RMAN に、テーブル・リカバリ時に until time 句を使用するように指示します。例: until time "to_date('2013/11/23 06:59:00', 'yyyy/mm/dd hh24:mi:ss')"
- [Auxiliary Destination] フィールドに、補助インスタンスが必要なすべてのファイル(制御ファイルの コピー、アーカイブ・ログ、データファイルなど)を保管するために使用するディレクトリ(フル・パ ス)を指定します。

このフィールドの使用は、auxiliary destination '< ディレクトリのフル・パス >' 句と同等です。

- 重要:このディレクトリは、リカバリ・プロセスを実行する前に存在している必要があります。
 ディレクトリが存在しない場合、リカバリは ORA-タイプのエラーで失敗します。
- 4 [Recover table] フィールドに、テーブル・レベルのリカバリの一環としてリカバリ・テーブルに含める、テーブルのカンマ区切りリストを入力します。

oracle_user_name.table_name 構造体を使用します。Oracle[®] 12c には、共通ユーザーとローカル・ ユーザーが含まれており、ローカル・ユーザーに使用される命名規則は、前のバージョンの Oracle で使 用される Oracle データベース・ユーザー名と同様です。

共通ユーザーがあるコンテナの場合、Oracle データベースは SYS および SYSTEM 共通ユーザーを提供しています。ユーザーが作成する共通ユーザー名は、C## または c# で開始する必要があります。詳しくは、Oracle 12c Multitenant Architecture のドキュメントを参照してください。

 重要:共通ユーザーからのテーブルをリストする場合は、二重引用符を使用します。SQL*Plus は、 C## または c# を含む文字列を使用するテーブルのクエリを受け付け、二重引用符を除外しますが、 RMAN はそうではありません。

例1: sales ユーザーの3つのテーブルをリストします。

sales.northsales, sales.southsales, sales.centralsales

例2:共通のC##SALES ユーザーの2つのテーブルをリストします。

"C##SALES"."NORTHSALES", "C##SALES"."SOUTHSALES"

前の例の使用は、recover table "C##SALES"."NORTHSALES", "C##SALES"."SOUTHSALES" 句と同等です。

5 [Remap table] フィールドに、必要に応じてテーブル・レベル・リカバリの一環として、名前を変更す るテーブルのカンマ区切りリストを入力します。

このオプションにより、テーブルをリカバリして、それを分析して妥当性を検証し、オリジナルのテー ブルを上書きするかどうかを判断することができます。[Recover table] フィールドに記載されている各 テーブルにマッピングを指定する必要はありません。一時的に名前を変更するテーブルのマッピングの みを指定する必要があります。

例1: sales.northsales テーブルを sales.northsales_recovered にマップします。

sales.northsales:northsales_recovered

例 2: sales.northsales テーブルを sales.northsales_recovered にマップします。

sales.northsales:northsales recovered, sales.southsales:southsales recovered

例 3: sales.northsales テーブルを sales.northsales_recovered にマップします。

"C##SALES"."NORTHSALES":"NORTHSALES RECOVERED"

前の例の使用は、remap table "C##SALES"."NORTHSALES":"NORTHSALES_RECOVERED" 句の使用と同等 になります。

リカバリ・カタログの管理

• リカバリ・カタログの再同期化

リカバリ・カタログの再同期化

Plug-in for Oracle は、制御ファイルがマウントされリカバリ・カタログ・データベースがコマンド 実行で使用可能であれば、RMAN バックアップの実行時に自動的にリカバリ・カタログの完全または 部分再同期化を実行します。

以下の場合、RMAN の RESYNC CATALOG マンドを使用して手動による完全再同期化を実行すること ができます。

- カタログを自動に再同期するいずれかのコマンドを発行する際、リカバリ・カタログが使用不可の場合。
- データベースを頻繁にバックアップしない場合や、毎日多数のログ・スイッチが生成される場合。例:
 データベースのバックアップの間に何百ものアーカイブ・ログがアーカイブされる場合や、カタログの 再同期化の間に 1000 ものスイッチが生成される場合など。
- テーブルスペースの追加や削除などターゲット・データベースの物理構造に変更を加えた場合など。
 アーカイブ・オペレーションと同様に、スキーマが物理的に変更されてもリカバリ・カタログは自動的に更新されません。

手動による RESYNC CATALOG コマンドの実行はそれほど必要ありません。詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「Using CROSSCHECK to Update the RMAN Repository」を参照してください。

リカバリ・カタログの完全再同期化を強制的に実行するには

- 1 RMAN を起動し、ターゲット・データベースとリカバリ・カタログに接続します。
 - > rman TARGET / CATALOG rman/**<パスワード>@<接続用カタログ ID>**
- 2 ターゲット・データベースをマウントします。

STARTUP MOUNT;

3 リカバリ・カタログの再同期化

RESYNC CATALOG;

4 RMAN を終了します。

CROSSCHEK コマンドを利用して RMAN リポジトリを更 新する

RMAN リポジトリ内のバックアップに関するデータが、NetVault データベースで対応するデータと同 期しているか確認するには、CROSSCHECK を実行します。バックアップに関する RMAN リポジトリ情 報のリポジトリ・レコードが実際の物理的な状態と一致しない場合、CROSSCHECK コマンドは無効 な RMAN リポジトリ情報を更新します。たとえば、ユーザーが OS のコマンドを使用してディスクか らアーカイブ・ログを削除する際、実際にはログはすでにディスクから削除されているにも関わらず、リポジトリが依然としてログが存在すると示す場合などです。

CROSSCHECK コマンドを使用した RMAN リポジトリの更新について詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Basics』を参照してください。

アーカイブ・ログをクロスチェックするには

1 RMAN を起動し、ターゲット・データベースとリカバリ・カタログに接続します。

> rman TARGET / CATALOG rman/<パスワード>@<接続用カタログ ID>

2 アーカイブ・ログのクロスチェックを実行します。

CROSSCHECK ARCHIVELOG ALL;

3 RMAN を終了します。

9

RMAN CLI の使用

- CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストア: 概要
- CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストアの事前要件
- CLI ベースのバックアップを実行する
- CLI ベースのリストアを実行する

CLI ベースの RMAN バックアップおよびリス トア:概要

Plug-in for Oracle のインターフェイスではサポートされていない高度な RMAN 機能を使用するには、 本プラグインの代わりに、またはプラグインと組み合わせて、CLI ベースの RMAN バックアップおよ びリストアを実行できます。CLI ベースの RMAN バックアップおよびリストアの実行中、プラグイン は RMAN にメディア管理機能を提供します。

 重要:この機能を使用する前に、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』を参照 し、RMAN 内部について詳細に理解しておくことをお勧めします。

このセクションで説明されている追加の手順または異なる手順を完了する前に、プラグインのインス トールと削除およびプラグインの設定などの前のセクションで説明されている情報を確認します。

CLI ベースの RMAN バックアップおよびリス トアの事前要件

コマンド・ラインからバックアップまたはリストアを開始する前に、以下の手順を実行する必要があ ります。

- 適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ)
- SBT_TAPE チャネル確立の確認
- NetVault Backup「nvpluginaccess」ユーティリティの実行

適切な RMAN 実行可能ファイル使用の確認(Linux のみ)

Linux[®] のさまざまなインストールには、rman という名前の実行可能ファイルが複数含まれていま す。そのため、プロンプトで rman コマンドを実行したときに、Oracle[®] RMAN アプリケーションが 起動されるかどうかを確認する必要があります。この手順を実行するには、Oracle RMAN の実行可能 ファイルのパス(**\$ORACLE_HOME/bin)を PATH** 環境変数の最初の検索パスにします。

SBT_TAPE チャネル確立の確認

Plug-in for Oracle は、Oracle[®]「SBT_TAPE」チャネルを使用して Oracle データベースのバックアッ プを実行します。SBT は、通常、テープ・メディアへのバックアップで使用するバックアップ先を RMAN コマンドで指定するために使用します。SBT-TAPE チャネルの確立について詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「Configuring and Allocating Channels for Use in Backups」を参照してください。

NetVault Backup「nvpluginaccess」ユーティリティの 実行

NetVault Backup デフォルト・ユーザーのパスワードが設定されているか、またはバックアップおよ びリストアの実行にデフォルト以外の NetVault Backup ユーザーが使用されている場合は、NetVault Backup サーバーで nvpluginaccess ユーティリティを実行する必要があります。次に、本プラグイン が CLI バックアップおよびリストアを実行するために必要なセキュリティ・クリアランスを取得する 必要があります。

nvpluginaccess ユーティリティは、NetVault Backup サーバーの「**util」**ディレクトリに格納されています。

このユーティリティを実行するには

- 1 コマンドライン・セッションを開始し、「util」ディレクトリに移動します。
 - Linux[®] および UNIX[®] の場合、「util」ディレクトリは「…/netvault/util」にあります。
 - Windows[®]の場合、「util」ディレクトリは「…\NetVault\util」にあります。

「...」は NetVault Backup サーバーのインストール・ディレクトリのパスを表します。

2 以下のコマンドを実行します。

nvpluginaccess -remove -client <クライアント・マシン名 > nvpluginaccess -client <クライアント・マシン名 > -account <ユーザー名 >

<クライアント・マシン名 > は、本プラグインがインストールされている NetVault Backup クライアン ト・マシンの名前です。< ユーザー名 > は、バックアップおよびリストアを実行する NetVault Backup ユーザーです。

例:

nvpluginaccess -client DB_Server -account default

- 3 使用可能なプラグインのリストが表示されたら、本プラグイン(「Oracle RMAN プラグイン」)に対応す る番号を入力し、Enter を押します。
- 4 パスワードの入力を求められたら、指定した Net Vault Backup アカウントのパスワードを入力します。

指定した NetVault Backup クライアントへのアクセスが許可されたことを通知する確認メッセージが表示されます。

- 5 「config」ディレクトリに格納されている「hookplugs.cfg」ファイルの内容を表示して、nvpluginaccess ユーティリティが正しく設定されていることを確認します。
 - Linux および UNIX の場合、「config」ディレクトリは「.../netvault/config」にあります。

• Windows[®]の場合、「config」ディレクトリは「...\NetVault\config」にあります。

「...」は NetVault Backup サーバーのインストール・ディレクトリのパスを表します。

「hookplugs.cfg」ファイルの以下のエントリは、前述の例に対応しています。

```
[DB_SERVER]
Plug-ins=Oracle Rman!,Oracle Rman Plug-in
Account=default
Password=%G59j$#
```

 ファイルの以下のエントリは、上の例に対応しています。「hookplugs.cfg」ファイルの 「Password」フィールドには、パスワードが暗号化されて表示されます。実際のパスワードは表示 されません。

CLI ベースのバックアップを実行する

以下のセクションには、CLI ベースのバックアップの実行に関する情報が記載されています。

- CLI 基本バックアップ例
- その他のパラメータ:「format」節
- その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節
- NetVault Backup メディア名の照会

CLI 基本バックアップ例

このセクションでは、RMAN コマンドを使用して「USERS」テーブルスペースをフル・バックアップ する方法を示します。

- 1 Oracle[®] データベース・サーバーにログオンし、ターミナル・セッションを開始します。
- 2 プロンプトで、以下のように run **ブロック**を生成します。

```
run {
allocate channel c1 device type 'SBT_TAPE';
backup
tablespace USERS;
release channel c1;
}
```

上記のコマンドは、CLI ベースのバックアップを実行するために必要な最小限のコマンドです。この ほか、本プラグインには、CLI バックアップ・ジョブにさまざまなオプションを設定するための追加 パラメータが用意されています。以下のセクションでは、これらのパラメータの概略を示します。

その他のパラメータ:「format」節

「format」節は、バックアップ・ピースまたは作成されるイメージ・コピーのファイル名を作成する ためのパターンを指定します。本プラグインでは、format節で変数として使用できる追加パラメー タが用意されています。以下の3つの変数を使用することで、バックアップ・ジョブの3つのパラ メータを指定できます。

- Server Name
- Target Set

Advanced Options Set

format 節は run ブロック内で使用され、構文の backup コマンドの直後に記述します。 (「%d_%u_%p_%c」変数の前のコロンは必ず含める必要があります。また、「%d_%u_%p_%c」変数は非 常に重要です。これは通常 Oracle[®] が生成した一意の文字列を使用して NetVault Backup Media Manager が内部で個別のバックアップ・セグメントを識別するためです)。

run {
allocate channel c1 type 'SBT_TAPE';
backup
format '<変数_1>:<変数_2>:<変数_3>::%d_%u_%p_%c'
tablespace USERS;
release channel c1;

この節では、指定された順序で特定の変数が記述されます(たとえば、変数_1、変数_2、および変数 _3)。各変数は、以下の表で示すように、NetVault Backup および RMAN の特定の値に対応します。コ マンドの各変数は、コロン(:)で区切って入力し、「%d_%u_%p_%c」変数の前のコロンも含める必要 があります。

表 2. 変数

変数	説明
< 変数 _1>	NetVault Backup サーバー名 :バックアップ・ジョブの実行元である NetVault Backup サー バーの NetVault Backup マシン名。この値は必須です。
< 変数 _2>	Target Set 名:特定のデバイスをバックアップ対象にするために、Oracle [®] RMAN バック アップ用に作成された Target Set を指定します (NetVault Backup のデフォルト設定である 任意のデバイス)を使用する場合は、このオプションをそのままにします)。このオプショ ンは、[設定] ダイアログ・ボックスで指定された CLI バックアップ・ターゲット・セット より優先されます。ターゲット・セットについて詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニ ストレーターズ・ガイド』のセレクション・セットの説明を参照してください。
< 変数 _3>	詳細設定セット名 : Oracle RMAN バックアップで使用するために作成された詳細設定セット を指定します(NetVault Backup のデフォルトの詳細設定を使用する場合は、このオプショ ンをそのままにします)。このオプションは、[設定] ダイアログ・ボックスで指定された [CLI バックアップ詳細設定セット]より優先されます。
	[CLI バックアップ詳細設定セット] オプションを設定する場合、[詳細設定] タブの [バッ クアップ寿命] フィールドで [フル・バックアップ] ではなく、[期間指定日 / 週 / 年] オ プションを指定する必要があります。CLI ベースの RMAN バックアップでは、フル・バック アップ用の世代管理はサポートされていないため、[フル・バックアップ] が指定されてい る場合、バックアップが予期せず期限切れになる可能性があります。詳細設定オプションに ついて詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』のセレクショ ン・セットの説明を参照してください。
Г%d_%u_%p_% сJ	 これらの値は、固有の RMAN 識別子です(Oracle 環境変数)。Oracle はこの変数を使用して 文字列を生成し、これを使用して NetVault Backup Media Manager は個別のバックアップ・ セグメントを識別します。 %d:データベースの名前を指定します。 %u: 圧縮されたバックアップ・セットまたはイメージ・コピーの番号と、バック アップ・セットまたはイメージ・コピーが作成された時刻で構成される8文字の名 前を指定します。 %p:バックアップ・セット内のピースの番号を指定します。 %c:一連の複製されたバックアップ・ピース内のバックアップ・ピースのコピー番 号を指定します。 または「%d_%s_%t」、あるいは一意の識別子を生成する別のキーワードの組み合わせを使用 することもできます。formatSpec サブ節で使用できる代替変数については、Oracle のド キュメントを参照してください。
その他のパラメータ:「send」節および「PARMS」節

このセクションで説明するパラメータを「send」または「PARMS」のいずれかのコマンドで使用して、コマンド・ラインから実行するバックアップ・ジョブに対して NetVault Backup オプションを設定します。このセクションでは、「send」および「PARMS」節の動作について説明します。

• 「send」節:「send」節で指定されたパラメータは特定のジョブに適用されます。

```
send '< 変数 >=< 値 >';
```

```
以下は入力例です。
```

```
run { allocate channel ch1 type 'SBT_TAPE'
send 'NV_TARGET_MEDIA=Mid' }
run { allocate channel ch2 }
```

この例では、「NV_TARGET_MEDIA」コマンドは、SBT_TAPE チャネル「ch1」のみに影響します。

「send」節は Run ブロック内で使用され、構文内で「allocate」コマンドの直後で指定されます。

```
run {
  allocate channel c1 type 'SET_TAPE';
  send 'NV_VERIFICATION=TRUE';
  backup
  tablespace USERS;
  release channel c1;
```

 「PARMS」節:「PARMS」節で指定されたパラメータは、Oracle[®] インスタンスから実行されるすべての ジョブに適用されます。

PARMS="ENV=(**< 変数 >=< 値 >**)"

以下は入力例です。

run { allocate channel ch1 type 'SBT_TAPE' PARMS="ENV=(NV_TARGET_MEDIA=Mid)" }
run { allocate channel ch2 }

この例では、コマンド「NV_TARGET_MEDIA」は、「SBT_TAPE」チャネル「ch1」と、もう一方の Run ブロックに設定されたその他すべてのチャネルに影響します。

「PARMS」節は Run ブロック内で使用され、構文内で「allocate」コマンドの直後で指定されます。

run {
 allocate channel c1 type 'SBT_TAPE'
 PARMS="ENV= (NV_VERIFICATION=TRUE)";
 backup
 tablespace USERS;
 release channel c1;

「send」および「PARMS」で使用可能な変数

以下の表で、「send」節と「PARMS」節で使用可能な変数を説明します。

表 3. 変数

変数	説明
NETVAULTCLIACCOUNT NETVAULTCLIPASSWORD	これらの変数を使用して、バックアップまたはリストアを実行する NetVault Backup ユーザーおよびパスワードを設定します。これらの変数 は、バックアップまたはリストアを実行する、NetVault Backup のデフォ ルト・ユーザーまたはデフォルト以外のユーザーにパスワードが定義され ている場合に設定されます。
	例:
	send 'NETVAULTCLIACCOUNT=default'; send 'NETVAULTCLIPASSWORD=<パスワード>'; PARMS="ENV=(NETVAULTCLIACCOUNT=default, NETVAULTCLIPASSWORD=<パスワード>)";
	NETVAULTCLIPASSWORD 変数の使用は、セキュリティ・リスクを伴いま す。NetVault Backup「nvpluginaccess」ユーティリティの実行で説明して いる nvpluginaccess ユーティリティを使用することをお勧めします。 DellNETVAULTCLIPASSWORD 変数が実装されている場合、NetVault Backup のパスワードがプレーン・テキストで表示されます。
NV_ADVANCED_OPTIONS_SET	この変数を使用して、作成された 詳細設定オプション のテンプレートを指定します。これは、バックアップ中に NetVault Backup 詳細設定オプションの特定セットをターゲットとする Oracle [®] RMAN CLI バックアップで使用されます。このパラメータは、[設定] ダイアログ・ボックスで指定された [CLI バックアップ詳細設定セット]より優先されます。
	例:
	<pre>send 'NV_ADVANCED_OPTIONS_SET= my_advanced_options_set_name'; PARMS="ENV=(NV_ADVANCED_OPTIONS_SET=my_advanced_options _set_name)";</pre>
	詳細設定オプションについて詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニス トレーターズ・ガイド』の セレクション・セット の説明を参照してくださ い。
	解決方法としては精度が低いため、NetVault Backup では個別詳細設定 (NV_VERIFICATION など)と同時に詳細設定セットのテンプレート指定を サポートしていません。この手順を RMAN CLI プロンプトから実行した場 合、バックアップ・ジョブが失敗し、エラー・メッセージは何が発生した かを表示する場合があります。
NV_AUTO_LABEL_MEDIA	この変数を使用して、ジョブに対するメディアが他に存在しない場合に、 任意のブランク・メディアに自動的にラベルを付けて使用します。以下の 値を指定できます。
	• True
	• False
	例:
	send 'NV AUTO LABEL MEDIA=TRUE';

send 'NV_AUTO_LABEL_MEDIA=TRUE';
PARMS="ENV= (NV_AUTO_LABEL_MEDIA=TRUE)";

変数	説明
NV_BACKUP_LIFE	この変数を使用して、ターゲット・メディア上でのバックアップの有効期 間を制御します。以下の値を指定できます。
	 count {full days weeks years}
	中括弧内のパラメータは省略可能です。Count とともに full を指定する と、保存されるバックアップの世代数が指定されます。このパラメータは デフォルトです(count とともに何も指定しない場合、バックアップの有 効期間にわたりバックアップのバージョン数が指定されます)。Days、 weeks、または years は、それぞれバックアップが削除されるまでに保存 される日数、週数、または年数を指定します。
	例:
	<pre>send 'NV_BACKUP_LIFE=2'; PARMS="ENV=(NV_BACKUP_LIFE=2)";</pre>
NV_BACKUP_SERVER	この変数を「PARMS」節に使用して Oracle インスタンス全体に対するデ フォルト NetVault Backup サーバーを確立します。
	例:
	PARMS="ENV=(NV_BACKUP_SERVER=NVSERVER)"
NV_GROUP_LABEL	この変数を使用して、特定のメディア・グループをそのグループ・ラベル に基づいて選択します。この変数は、「NV_TARGET_MEDIA」変数ととも に使用する必要があります。それ以外の場合は、無効になります。
	例:
	<pre>send 'NV_TARGET_MEDIA=Group Label, NV_GROUP_LABEL=Group_2'; PARMS="ENV=(NV_TARGET_MEDIA=Group Label,NV_GROUP_LABEL=Group_2)";</pre>
NV_JOB_PRIORITY	この変数を使用して CLI タスクに対する NetVault Backup ジョブ優先度を 設定します。優先度レベルは「1」(最高優先度)から「100」(最低優先 度)で入力できます。このパラメータを指定しない場合、優先度はデフォ ルトの「30」になります。
	例:
	<pre>send 'NV_JOB_PRIORITY=5'; PARMS="ENV=(NV_JOB_PRIORITY=5)";</pre>
NV_JOB_TITLE	この変数を使用して、ジョブにタイトルを指定します。この変数は、ジョ ブ単位ごとに「send」コマンドとのみ使用することをお勧めします (「PARAMS」節とともに適用した場合に、後続のすべてのジョブにこの ジョブ・タイトルが指定されることを回避するため)。Dell
	例:
	<pre>send 'NV_JOB_TITLE=Backup_1';</pre>
NV_MID_LABEL	この変数を使用して、特定のメディアをそのメディア・ラベルに基づいて 選択します。この変数は、「NV_TARGET_MEDIA」変数とともに使用する 必要があります。それ以外の場合は、無効になります。
	例:
	<pre>send 'NV_TARGET_MEDIA=Mid, NV_MID_LABEL=Media_1'; PARMS="ENV=(NV_TARGET_MEDIA=Mid, NV_MID_LABEL=Media_1)"</pre>

変数	説明
NV_NETWORK_COMPRESSION	この変数を使用して、バックアップ・データをネットワーク上に転送する 前に圧縮します([詳細設定] タブの [ネットワーク圧縮] オプションと 類似した機能です)。以下の値を指定できます。
	• True
	• False
	例:
	<pre>send 'NV_NETWORK_COMPRESSION=True';</pre>
	<pre>PARMS="ENV=(NV_NETWORK_COMPRESSION=False)";</pre>
NV_ORIGINAL_NV_CLIENT	この変数は 「PARMS」 節と併用して、バックアップが実行された NetVault Backup クライアント・マシン名のマシン名を確立します。
	例:
	PARMS="ENV=(NV_ORIGINAL_NV_CLIENT= <nv b="" クライアント・マシン<=""></nv>
	名 >) "
NV_POSTSCRIPT	この変数を使用してバックアップ・ジョブの完了後にスクリプトを実行し ます。実行するスクリプトは、Oracle データベース・サーバーの 「…\netvault\scripts」サブディレクトリに保存する必要があります(「…」
	は、NetVault Backup のインストール場所へのフル・パスです)。
	例:
	<pre>send 'NV_POSTSCRIPT=C:\NetVault\scripts\p2.txt'; PARMS="ENV=(NV_POSTSCRIPT=p2.txt)";</pre>
NV_PRESCRIPT	この変数を使用してバックアップ・ジョブの実行前にスクリプトを実行し ます。実行するスクリプトは、Oracle データベース・サーバーの
	「\netvault\scripts」サブディレクトリに保存する必要があります(「」 は、NetVault Backup のインストール場所へのフル・パスです)。
	例:
	<pre>send 'NV_PRESCRIPT=C:\NetVault\scripts\p1.txt'; PARMS="ENV=(NV_PRESCRIPT=p1.txt)";</pre>
NV_RESET_ENV_PARMS	この変数を使用して、run ブロックで 「PARMS」 節を使用した後に Oracle 環境をリセットします。
	例:

send 'NV_RESET_ENV_PARMS=TRUE'
PARMS="ENV=(NV_RESET_ENV_PARMS=TRUE)"

	説明
NV_REUSE_MEDIA	この変数を使用して、特定のメディアを再利用可能として設定します。以 下の値を指定できます。
	• Never
	• Any
	 With same group label as target media
	この値を Never に設定すると、再利用可能なメディアはバックアップで使

用されません。このパラメータの値を Any に設定すると、事前に再利用可能として指定されたメディアがバックアップで使用されます。With same group label as the target media に設定すると、指定したグループ・ラベルを含み、事前に再利用可能として指定されたメディアがバックアップで使用されます。

例:

send 'NV_REUSE_MEDIA=Any';
PARMS="ENV=(NV_REUSE_MEDIA=Any)";

変数	説明
NV_RESTORE_SOURCE_SET	この変数を使用して、Oracle RMAN CLI リストアに使用するために作成し たリストア・デバイス・ソース・セットを指定します。この変数により、 リストア時に、デバイスおよびデバイス・オプションの特定の NetVault Backup セットを対象にすることができます。NetVault Backup のデフォル ト設定である任意のデバイスを使用する場合は、このオプションを使用し ないよう注意してください。 この変数を使用するには、[リストア・オプション]タブの[リストア・ ソース]オプションで作成したリストア・デバイス・ソース・セットを指 定する必要があります。このとき、NetVault Backup バックアップ・ター
	ゲット・セットは使用しないよう注意してください。これは、NetVault Backup バックアップ・ターゲット・セットがバックアップ中に指定した ターゲット・デバイスによって使用されるためです。NetVault Backup リ ストア・デバイス・ソース・セットは、リストア中にソース・デバイスと デバイス・オプションのセットを指定するために使用されます。
	この変数は、RMAN CLI 内で「send」または「PARMS」節を使用して設定 L.ます。
	 「send」の使用:このパラメータ指定は特定ジョブに限り適用します。
	send '< 変数 >=< 値 >';
	例:
	<pre>run { allocate channel ch1 type 'sbt_tape'; send 'NV_RESTORE_SOURCE_SET= my_device_options_source_set_name'; restore tablespace 'TEST1'; }</pre>
	 「PARMS」の使用:このパラメータ指定は、Oracle インスタンスから実行するすべてのジョブに適用します。
	PARMS="ENV=(< 変数 >=< 値 >)
	例:
	<pre>run { allocate channel ch1 type 'sbt_tape' PARMS="ENV=(NV_RESTORE_SOURCE_SET= my_device_options_source_set_name)"; restore tablespace 'TEST1'; }</pre>
NV_SCHEDULE_SET	この変数を使用して、Oracle RMAN CLI バックアップに使用するために作

この変数を使用して、Oracle RMAN CLI バックアップに使用するために作成したスケジュール・セットを指定します。これを使用して、既存スケジュール・セットをバックアップ中に指定または再利用することができます。

例:

send 'NV_SCHEDULE_SET=my_schedule_set';
PARMS="ENV=(NV_SCHEDULE_SET=my_schedule_set)";

スケジュール・セットついて詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニス トレーターズ・ガイド』を参照してください。

変数	説明
NV_TARGET_MEDIA	この変数を使用して、ターゲット・デバイス内のメディアを設定します。 以下の値を指定できます。
	 Any not in a group: グループ・ラベルが割り当てられていないメ ディアを対象とします。
	 Any:利用可能なメディアを対象とします。
	 MID:メディア・ラベルに基づいて特定のメディアを対象とします (この変数とともに NV_MID_LABEL 変数を使用し、利用可能なメ ディア名を指定する必要があります)。
	 Group Label: グループ・ラベルに基づいて特定グループのメディ アを対象とします(この変数とともに NV_GROUP_LABEL 変数を使 用し、利用可能なグループ・ラベルを指定する必要があります)。
	例:
	<pre>send 'NV_TARGET_MEDIA=Any'; PARMS="ENV=(NV_TARGET_MEDIA=Mid, NV_MID_LABEL=Media_1)";</pre>
NV_TARGET_SET	この変数を使用して、作成された Target Set を指定します。これは、バッ クアップ中に特定の NetVault Backup デバイスを対象とする Oracle RMAN CLI バックアップに使用されます。NetVault Backup のデフォルト設定であ る 任意のデバイス を使用する場合は、このオプションをそのままにしま す。このパラメータは、[設定] ダイアログ・ボックスで指定された CLI バックアップ・ターゲット・セットより優先されます。
	例:
	<pre>send 'NV_TARGET_SET=my_target_set_name'; PARMS='ENV=(NV_TARGET_SET=my_target_set_name)";</pre>
	ターゲット・セットについて詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニス トレーターズ・ガイド』の セレクション・セット の説明を参照してくださ い。
NV_VERIFICATION	この変数を使用してバックアップ・ジョブの完了を確認します。以下の値 を指定できます。
	• True
	• False
	True を設定した場合、データ転送が確認され、NetVault Backup ジョブ・ ログに「Backup job has verified successfully. (パックアップ・ジョブの
	検証に成切しました。)」 というショブ・メッセージが追加されます。
	例:
	<pre>send 'NV_VERIFICATION=TRUE'; PARMS="ENV=(NV_VERIFICATION=TRUE)";</pre>
RMAN 環境のリセット	

「PARMS」節を使用した後に、以下のいずれかの構文を使用して RMAN 環境をリセットします。

send 'NV_RESET_ENV_PARMS=TRUE'
PARMS="ENV=(NV_RESET_ENV_PARMS=TRUE)"

① **重要:NETVAULTCLIACCOUNT** 変数および **NETVAULTCLIPASSWORD** 変数を設定した ターミナル・セッ ションまたはウィンドウを閉じます。

NetVault Backup メディア名の照会

本プラグインを使用して実行される RMAN CLI バックアップの場合、SQL*Plus を使用して、RMAN バックアップ・ピースが格納されている物理メディアを特定できます。以下の例は、Oracle[®] SQL*Plus を使用してメディア情報を照会する方法を示します。

例

SQL*Plus は、以下の形式を使用してメディア情報を表示します。

• メディアに NetVault Backup で識別されるバーコードがある場合の形式:

(tape_barcode) tape_media_label

RMAN CLI のサンプル出力

```
SQL> select handle, media from v$backup_piece;
[...]
HANDLE
MEDIA
oml4dtid_1_1
(05A999L3) medialabel
```

• メディアに NetVault Backup で識別されるバーコードがない場合の形式:

tape_media_label

RMAN CLI のサンプル出力

```
SQL> select handle, media from v$backup_piece;
[...]
HANDLE
MEDIA
okl4dri2_1_1
(NONE) medialabel
```

media フィールドに表示される文字列には次のような特徴があります。

- tape_barcode は、括弧内に表示されます。
- tape_media_label がない場合、メディア・ラベルはデフォルトで「MMS NetVault Backup Tape」
 になります。
- バックアップ・ピースが複数のテープにまたがっている場合は、1つのテープの情報だけが表示 されます。

- 文字列は 60 バイトまでで切り捨てられます(英字の場合で 60 文字)。バーコードは通常 6 バイト または 8 バイトですが、メディア・ラベルの長さはさまざまです。メディア・ラベルを妥当な長 さにすると、文字列全体を確実に表示できます。
- NetVault Backup WebUI から RMAN バックアップを実行する場合の形式

MMS NetVault Backup Tape

Sample output:

```
SQL> select handle, media from v$backup_piece;
[...]
HANDLE
------
MEDIA
NVSERVER:#376:NVCLIENT:792_709294286:RMAN INCRMTAL LVL 0 ORCL_1264468284
MMS NetVault Backup Tape
```

CLI ベースのリストアを実行する

この形式のリストアは、RMAN CLI ユーティリティを使用して実行します。このユーティリティを使用することで、バックアップの作成方法に関わらずリストアを実行できます(本プラグインまたはコマンド・ラインから実行できます)。RMAN コマンドについて詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Reference Guide』を参照してください。

 ・1 重要:この形式のリストアは Oracle データベース・サーバー上のターミナル・セッションからローカルで 開始されますが、必要に応じてジョブの進捗状況を NetVault Backup WebUI の [ジョブ・ステータス] ページで監視できます。ただし、NetVault Backup サーバーが制御しているデバイスに含まれるメディアか らデータをリストアする場合に限られます。

10

Oracle[®] RAC 環境におけるプラグインの 使用

- Oracle RAC: 概要
- 参考資料
- 配備計画の定義
- ライセンス取得
- RAC 環境へのプラグインのインストール
- プラグインの設定
- データのバックアップ
- RAC 環境におけるデータのリストア

Oracle RAC: 概要

Oracle[®]では、Real Application Clusters (RAC) オプションを、以下のように定義しています。 「サーバー・クラスタ間で単一データベースの透過的なデプロイをサポートし、サーバー・クラスタ 間で単一データベースの透過的なデプロイをサポートし、ハードウェアの障害や計画停止への耐障害 性を提供します。クラスタ上で実行する Oracle RAC により、可用性、スケーラビリティおよび低コ ストのコンピューティングの点で、Oracle の最高レベルの可能性を提供します。Oracle RAC は、あ らゆる種類のメインストリームのビジネス・アプリケーションをサポートします。サポートには、オ ンライン・トランザクション処理(OLTP)、意思決定支援システム(DSS)および OLTP/DSS 混合環境 をサポートする Oracle 固有の機能が含まれます。さらに SAP、PeopleSoft、Siebel および Oracle E-Business Suite などの製品パッケージだけでなく、カスタム・アプリケーションも含まれます。」

Plug-in for Oracle では、限られた Oralce バージョンと RAC 環境でのプラットフォームをサポートしています。マルチ・インスタンスの RAC 環境では、インストール、設定、バックアップおよびリストア手順が異なります。本ガイドのこのセクションでは、Oracle RAC 環境で本プラグインがどのように動作するかについて詳細に説明します。マルチ・インスタンスの RAC 環境とシングル・インスタンスまたは従来の非 RAC 環境での本プラグインの設定および使用方法については、「相違点」のみを取り上げています。

 重要:以下のセクションで示されていない限り、本プラグインを使用したマルチ・インスタンスの RAC データベース用に実行するバックアップとリストアは、シングル・インスタンスのデータベースで実行す るバックアップとリストアと同じです。

サポートされる Oracle のバージョンと RAC 環境でのプラットフォームのリストについて詳しくは、 『Dell NetVault Backup 互換性ガイド』を参照してください。

参考資料

RAC 環境での本プラグインの設定時および使用中に、以下の Oracle[®] RAC ドキュメントをすぐに利用 できるよう準備しておくことをお勧めします。

- [Oracle® Clusterware and Oracle Real Application Clusters Administration and Deployment Guide]
 - 「Overview of Oracle Real Application Clusters Management Tools」
 - 「Starting and Stopping Instances and Oracle Real Application Clusters Databases」
 - 「Oracle Clusterware Command-Line Reference」
 - Oracle 11.2 : http://download.oracle.com/docs/cd/E11882_01/rac.112/e16795/toc.htm
 - Oracle 11.1 : http://download.oracle.com/docs/cd/B28359_01/rac.111/b28254/toc.htm
 - Oracle 10.2 : http://download.oracle.com/docs/cd/B19306_01/rac.102/b14197/toc.htm
 - Oracle 10.1 : http://download.oracle.com/docs/cd/B14117_01/server.101/b10825/toc.htm
- ASM を使った『Oracle Database Administrator's Guide』
 - Oracle 11.2 : http://download.oracle.com/docs/cd/E11882_01/server.112/e17120/toc.htm
 - Oracle 11.1 : http://download.oracle.com/docs/cd/B28359_01/server.111/b28310/toc.htm
 - Oracle 10.2 : http://download.oracle.com/docs/cd/B19306_01/server.102/b14231/storeman.htm#g1040709
 - Oracle 10.1 : http://download.oracle.com/docs/cd/B14117_01/server.101/b10739/toc.htm
- 『Oracle Database Utilities』、ASM コマンドライン・ユーティリティ
 - Oracle 11.2 : http://download.oracle.com/docs/cd/E11882_01/server.112/e16536/toc.htm
 - Oracle 11.1 : http://download.oracle.com/docs/cd/B28359_01/server.111/b28319/toc.htm
 - Oracle 10.2 : http://download.oracle.com/docs/cd/B19306_01/server.102/b14215/asm_util.htm#SUTIL016
 - Oracle 10.1 : http://download.oracle.com/docs/cd/B14117_01/server.101/b10825/toc.htm

配備計画の定義

Plug-in for Oracle をマルチ・インスタンスのデータベース環境に配置する場合、RMAN ベースのバッ クアップが RAC データベース唯一のバックアップ方法であることを除き、シングル・インスタンス のデータベース環境に配置する場合とほぼ同じです。RAC 対応データベース用のいずれかのインスタ ンスをホスティングするノードのいずれかに本プラグインがインストールされます。すべての RMAN ベースのバックアップとリストアは、本プラグインがインストールされている1つのノードから操作 します。以下のセクションでは、RAC 環境で本プラグインがどのように RMAN バックアップとリスト アを実行するかを説明します。

RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス

図 4. RAC 環境用 RMAN バックアップ・プロセス



- 1 NetVault Backup WebUI でバックアップ・ジョブを定義します。
- 2 Plug-in for Oracle がジョブの定義を、対応する RMAN バックアップ・コマンドに変換します。
- 3 RMAN が Oracle[®] データベースのデータファイルからデータを読み込むバックアップ・コマンドを実行します。
- 4 RMAN が Oracle Media Management API を使用して NetVault Backup サーバーの管理下にあるバックアップ・デバイスからバックアップを保存します。
- 5 RMAN がリカバリ・カタログ・リポジトリにバックアップ・メタデータを保存します。

RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス

図 5. RAC 環境用 RMAN リストア・プロセス



- 1 NetVault Backup WebUI でリストア・ジョブを定義します。
- 2 Plug-in for Oracle がジョブの定義を、対応する RMAN リストアおよびリカバリ・コマンドに変換します。
- 3 RMAN がリカバリ・カタログ・リポジトリからバックアップ・メタデータを読み込みます。
- 4 RMAN が Oracle[®] Media Management API を使用して NetVault Backup サーバーの管理下にあるバック アップ・デバイスからバックアップを読み込みます。
- 5 RMAN が Oracle サーバーにデータファイルをリストアし、データベースをリカバリします。

ライセンス取得

シングル・インスタンスまたは非 RAC 環境での本プラグインのライセンス取得は、マルチ・インス タンスまたは RAC 環境での本プラグインのライセンス取得と異なります。

- シングル・インスタンス環境では、エディションに対応した Plug-in for Oracle ライセンス1つで、単一のデータベース・サーバーにある Oracle[®] データベースの個数に関わらずバックアップとリカバリが可能です。
- マルチ・インスタンスまたは RAC 環境では、RAC データベースに対応した Plug-in for Oracle ライセン ス1つで、単一の RAC 環境で単一のデータベースのバックアップとリカバリが可能です。このガイドラ インは、RAC 環境にあるインスタンスまたはノードの数に関わらず適用されます。単一 RAC 環境に5つ のデータベースを構築している場合、RAC データベースに対応した Plug-in for Oracle ライセンスを5つ 購入する必要があります。

また、各 RAC 環境には、それぞれラインセンスが必要です。たとえば、プロダクション RAC 環境に 5 つのデータベースと、テスト RAC 環境に 1 つのデータベースが構築されている場合、プロダクショ ン環境に 5 つのライセンスと、テスト環境に 1 つのライセンスが必要となります。

RAC データベース対応 Plug-in for Oracle ライセンス・キーを取得する場合は、 https://support.software.dell.com/licensing-assistance にアクセスします。

RAC 環境へのプラグインのインストール

このセクションで説明されている追加の手順または異なる手順を完了する前に、プラグインのインス トールと削除およびプラグインの設定などの前のセクションで説明されている情報を確認します。

- RAC 設定の要件
- インストールの前提条件
- プラグインのインストール

RAC 設定の要件

マルチ・インスタンスの RAC 環境に対する Plug-in for Oracle のサポートは、以下の条件を満たす環境に限られます。

- サポートされている RAC 環境に関する Oracle[®] のバージョンとプラットフォームについては、『Dell NetVault Backup 互換性ガイド』を参照してください。
- Oracle Clusterware がクラスタ・ソフトウェアとして使用されている
- Oracle Clusterware データファイル、制御ファイル、SPFILE、ログ・ファイルおよびアーカイブ・ログ・ ファイルが共有ストレージに格納されている
- ASM ファイルシステムが共有ストレージに使用されている
- 制御ファイルの自動バックアップが有効になっている
- リカバリ・カタログ・データベースが、RMAN リポジトリの格納先として強く推奨されている
- 単一または複数の RAC データベースが、同一 RAC 環境内でサポートされている

図 6 および図 7 では、サポートされる単一または複数の RAC データベース・デプロイに関する概要 が示されています。



図 6. サポートされる単一データベースのデプロイメント



図 7. サポートされる複数データベースのデプロイメント

インストールの前提条件

Plug-in for Oracle を RAC 環境にインストールするには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Oracle[®] RAC 環境が整っている: RAC 設定の要件で示されているとおり、Oracle RAC 環境が正しく設定 されている必要があります。
- NetVault Backup サーバー・マシンを別に用意する: NetVault Backup サーバーとして使用するマシンが 適切に設定されている必要があります。このマシンは、Oracle RAC 環境の外部に設置し、RAC 環境内の ノードおよびホストへのネットワーク接続を行う必要があります。
- リカバリ・カタログ・サーバーを切り離す: RMAN リポジトリは、Oracle RAC 環境と別に構築された サーバーのリカバリ・カタログ・データベースに格納することをお勧めします。詳しくは、RMAN リポジ トリの作成を参照してください。
- その他の前提条件:上記の RAC 固有の要件に加えて、前提条件で指定されている事前要件を満たす必要 があります。
- Oracle 11g Release 2: Oracle 11g Release 2以降を使用する RAC 環境について、RAC データベース内の すべてのノードでスナップショット制御ファイルが共有されている必要があります。スナップショット 制御ファイルは、ASM インスタンスや共有ドライブなどの共有ディレクトリに保存されている必要があ ります。また、スナップショット制御ファイルの位置は、RMAN パラメータと呼ばれるスナップショット の制御ファイルの管理下にあります。Oracle 11g Release 2において、このパラメータはデフォルトで各 RAC ノードのローカル・ファイルシステム内に格納された固定ファイルを参照します。ご使用の環境が

この設定に該当する場合、このパラメータが共有ディレクトリを指し示すよう変更する必要があります。 そうでない場合、制御ファイルを含む RMAN バックアップが「ORA-00245: 制御ファイルのバックアップ が失敗しました」メッセージを伴って失敗する場合があります。

パラメータ値を確認し、必要であれば変更する場合は、以下の手順を実行します。

1 現在設定の確認:

SHOW ALL;

CONFIGURE SNAPSHOT CONTROLFILE NAME TO '/u01/app/oracle/product/11.2.0.2/
salesdb/dbs/snapcfsalesdb.ora'; # default

2 パラメータが固定ローカル・ファイルへ設定されているが、これを共有ディレクトリに変更したい場合、以下に類似したコマンドを使用して変更します(以下の例では ASM が使用され、そのASM インスタンス名として FRA が使用されています)。

RMAN> CONFIGURE SNAPSHOT CONTROLFILE NAME TO
 '+FRA/salesdb/snapcfsalesdb.ora';

RAC 環境における制御ファイルの自動バックアップの有効化

RAC 環境では、制御ファイルの自動バックアップが必要です。詳しくは、制御ファイルのバックアッ プ・タイプを参照してください。シングル・インスタンスの RAC データベースについて詳しくは、 制御ファイルの自動バックアップ有効化を参照してください。

本プラグインがインストールされる予定のノードで、RMAN コマンドライン・ユーティリティから以下のコマンドを実行することで、マルチ・インスタンスの RAC データベース用に自動バックアップ 機能を有効にすることができます。

- リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。
 たとえば、カタログ・データベースに接続するには、以下のコマンドを実行します。
 > rman TARGET / CATALOG rman/<パスワード>@<接続用カタログ ID>
- デフォルト・デバイス・タイプを "SBT_TAPE" に設定します。
 CONFIGURE DEFAULT DEVICE TYPE TO 'SBT TAPE';
- 3 デフォルトのデバイス・タイプ用に並行処理を設定します。

CONFIGURE DEVICE TYPE 'SBT TAPE' PARALLELISM 1;

- 4 制御ファイルの自動バックアップ用にチャネルを割り当てます。
 - CONFIGURE CHANNEL 1 DEVICE TYPE 'SBT_TAPE' CONNECT 'SYS/<パスワード>@< ローカル・インスタンスの接続 ID>';
- 5 制御ファイルの自動バックアップを有効にします。

CONFIGURE CONTROLFILE AUTOBACKUP ON;

6 RMAN の設定を確認して制御ファイルの自動バックアップが有効になったことを確認します。

SHOW ALL;

① 重要:本プラグインが異なるノードに再配置されている、または SYS パスワードが変更されている 場合、この処理を本プラグインがインストールされているノードから再実行します。処理を再実行 すると、制御ファイルの自動バックアップが正常に完了します。

プラグインのインストール

マルチ・インスタンスのデータベース環境への Plug-in for Oracle のインストールは、シングル・インスタンスのデータベース環境とほぼ同様です。RAC 対応データベース用のいずれかのインスタンスをホスティングするノードのいずれかに本プラグインがインストールされます。すべての RMAN ベースのバックアップとリストアは、本プラグインがインストールされている1つのノードから操作します。プラグインのインストールは2ステップの手順です。

1 NetVault Backup クライアント・ソフトウェアをインストールします。

NetVault Backup クライアント・ソフトウェアを RAC 環境で選択したノードにインストールする場合、選択したノードのマシン名に対して、RAC 環境全体を表す名前を NetVault マシン名として指定する必要があります。たとえば、NetVault Backup クライアント・ソフトウェアがインストールされているノードのマシン名が RAC_NODE_1, RAC_NODE_1 となっている場合、これを NetVault マシン名として指定することはできません。この場合、PROD_RAC など、RAC 環境全体を現す包括的または仮想的な名前にする必要があります。

2 Plug-in for Oracle をインストールします。

RAC 環境の選択したノードに NetVault Backup クライアント・ソフトウェアをインストールしたら、プラ グインをインストールします。手順は、NetVault Backup クライアントのインストール時に、NetVault の マシン名として指定された包括的または仮想的な名前に対応する NetVault Backup クライアントにインス トールされることを除き、シングル・インスタンスのデータベース環境に本プラグインをインストール することと同じです。

プラグインの設定

マルチ・インスタンス RAC 環境で Plug-in for Oracle を設定する場合、以下のセクションで指定する 項目を除き、シングル・インタンスの RAC 環境で本プラグインを設定する場合とほぼ同じです。

- デフォルト属性の設定
- RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレクトリの特定本プラグインへのデータベース追加

デフォルト属性の設定

- **NetVault Backup** (RAC 環境での RMAN バックアップに必須): Oracle[®] データベース・サーバーが NetVault Backup クライアントとして追加された NetVault Backup サーバーの名前を指定します。
- [NetVault Backup サーバーからリストアを実施する](RAC 環境での RMAN バックアップに必須): Oracle データベース・サーバーが NetVault Backup クライアントとして追加された NetVault Backup サー バーの名前を指定します。
- [CLI **バックアップ / 自動バックアップ用のターゲット・セット**]: RMAN バックアップ用デフォルト・ ターゲット・セットの定義で指定されたバックアップ・ターゲット・セットの名前を指定します。

RAC 環境における Oracle SID とホーム・ディレクトリの特定

マルチ・インスタンスの RAC 環境で、srvctl config database コマンドを使用してローカル SID と Oracle[®] ホームを特定することができます。

SID と Oracle ホームを確認するには

- ターミナル・ウィンドウから本プラグインがインストールされているノードに Oracle ソフトウェアの所 有者として接続します。
- 2 以下のコマンドを実行します。

srvctl config database

RAC 環境のすべてのデータベースのリストが表示されます。

3 < データベース名 > で示されている、現在本プラグインに追加されているデータベースで以下のコマンド を実行します。

srvctl config database -d <データベース名>

RAC 環境の各ノードについて、ノード名、ローカル Oracle SID、およびローカル Oracle ホームが、以下の形式で表示されます。

<ノード> <ローカル Oracle SID> <ローカ racle ホーム>

以下の例では、「faro」ノードに Plug-in for Oracle がインストールされ、Oracle SID が「10rac3」お よびローカル Oracle ホームが「/home/o10g/db」であることが示されています。

例

```
faro:/home/ol0g => srvctl config database
ol0grac
ol0rac
faro:/home/ol0g => srvctl config database -d ol0rac
lisbon ol0rac1 /home/ol0g/db
evora ol0rac2 /home/ol0g/db
faro ol0rac3 /home/ol0g/db
faro:/home/ol0g =>
```

本プラグインへのデータベース追加

Plug-in for Oracle にマルチ・インスタンスのデータベースを追加する場合、以下の相違点を除いて シングル・インスタンスの非 RAC データベースに追加する場合とほぼ同じです。

- [Oracle SID]: ターゲット RAC データベースのローカル SID を入力します。ローカル SID とは、本プラグ インがインストールされているノード上のターゲット RAC データベース用インスタンス名です。
- [パラメータ・ファイル・パス]:マルチ・インスタンス RAC 環境では、初期化パラメータの動的管理方法として、本プラグインに SPFILE を使用する必要があります。SPFILE は、ASM の共有ストレージに格納する必要があります。SPFILE は制御ファイルの自動バックアップに含まれるため、RAC 環境でこのフィールドはブランクのままにしておきます。
- [制御ファイルの自動バックアップを使用する]: RAC 環境では制御ファイルの自動バックアップが必須 のため、このオプションを選択します。

詳しくは、プラグインの設定を参照してください。

データのバックアップ

RMAN ベースのバックアップは、マルチ・インスタンスの RAC データベース用にサポートされている 唯一のバックアップ方法です。RMAN は内部で RAC を認識し、データベースがマルチ・インスタンス の RAC データベースであることを自動的に識別した後、選択したデータをバックアップします。

RAC 対応データベースのいずれかのインスタンスをホストとするノードの1つにプラグインをインストールすると、この1つのノードからすべての RMAN ベースのバックアップとリストアが実行されます。

パラメータ・ファイル・ノードは [NetVault Backup 選択] ページでは選択できません。

バックアップ用データの選択、バックアップ・オプションの設定およびジョブのファイナライズと実行について詳しくは、RMAN バックアップの実行を参照してください。

ノード障害後のバックアップ実行

RAC 環境で、本プラグインがインストールされたノードに障害があり、そのノードが次に予定されて いるバックアップに使用できない、あるいはできなくなりそうな場合、本プラグインを RAC 環境内 の他のノードに再配置します。

1 NetVault Backup クライアント・ソフトウェアをその他のノードにインストールします。

RAC 環境で、NetVault Backup クライアント・ソフトウェアをその他のノードにインストールします。インストール処理中は、NetVault Backup クライアント・ソフトウェアがインストールされた元のノードのインストールに使用した NetVault マシン名と同じ名前を使用することに注意します。つまり、元のノードのインストール中に指定した NetVault マシン名が PROD_RAC だった場合、他のノードの NetVault マシン名として PROD_RAC を使用する必要があります。

2 Plug-in for Oracle をインストールします。

RAC 環境の選択したノードに NetVault Backup クライアントをインストールしたら、プラグインをインストールします。手順は、NetVault Backup クライアントのインストール時に、NetVault のマシン名として 指定された包括的または仮想的な名前に対応する NetVault Backup クライアントにインストールされることを除き、シングル・インスタンスの非 RAC 環境に本プラグインをインストールすることと同じです。

- ・本プラグインを再配置した環境で使用し続ける場合や、45日以上使用し続ける場合は、
 https://support.software.dell.com/licensing-assistance にアクセスして再配置用の RAC データ

 ベース対応 Plug-in for Oracle ライセンス・キーを取得してください。
- 3 本プラグインを他のノードにインストールしたら、[Oracle データベースを編集する] ダイアログ・ボッ クスで [Oracle SID] フィールドを更新します。

ターゲット RAC データベースのローカル SID を入力します。ローカル SID とは、本プラグインが再配置 されたノード上のターゲット RAC データベース用インスタンス名です。詳しくは、データベース情報の 編集を参照してください。

バックアップ用データの選択、バックアップ・オプションの設定およびジョブのファイナライズと実行について詳しくは、RMAN バックアップの実行を参照してください。

RAC 環境におけるデータのリストア

RMAN は RAC を認識するため、それに従って選択したデータをリストアします。Plug-in for Oracle を、RAC が有効になっているデータベース用のインスタンスの1つをホストとするノードの1つにイ ンストールした場合、すべての RMAN ベースのリストアが、本プラグインがインストールされている 1つのノードから操作されます。このリストア・プロセスは、以下の例外を除き、シングル・インス タンスの非 RAC 環境へのリストアに類似しています。

- RMAN リストア時のリストア対象データの選択フェーズで、プラグインが動作しているインスタンスの Oracle[®] SID と等しい Oracle SID を持つノードから、バックアップ・セットを選択することがあります。 また、前回バックアップが実行されたその他の RAC ノードの Oracle SID からバックアップ・セットを選 択する必要があります。ノード障害後のリストア実行については、ノード障害後のリストアの実行を参 照してください。
- リストア・オプションの設定フェーズ中にターゲット・データベースの認証が必要な場合、リストアを実行中のプラグインが配置されているローカルの Oracle インスタンスに対して利用可能な値にターゲット・データベースの認証詳細を設定する必要があります。詳しくは、格納先の詳細を参照してください。

リカバリ用データベースの準備、リストア用データ・アイテムの選択、リストア・オプションの設定、ジョブのファイナライズと実行および使用するデータベースのオープンについて詳しくは、 RMAN リストアの実行を参照してください。

① **重要**:プラグインが他のノードにリロケートされマルチ・インスタンスからバックアップが実行された場合、[セレクション・セット作成]ページでデータを選択するときに、現在の OracleSID を使用します。

以降のセクションで、RAC 環境で使用可能なその他の RMAN リカバリ・タイプについて説明します。

- データベース全体の同一 RAC 環境へのリカバリ
- RAC 環境での SPFILE のリストア
- RAC 環境での制御ファイルのリストア
- RAC 環境での障害復旧の実行
- ノード障害後のリストアの実行
- RAC 環境でのデータベースの複製

データベース全体の同一 RAC 環境へのリカバリ

このタイプのリカバリは、現在の制御ファイルや SPFILE は損なわれていないが、すべてのデータファイルが損傷しているか、失われた場合に実行します。完全リカバリを実行することも、データベースを特定時点にリカバリすることもできます。以下は、RAC 環境下でのデータベース全体のリカバリ・プロセスの概要です。

- ターミナル・ウィンドウから Plug-in for Oracle がインストールされているノードに Oracle[®] ソフトウェアの所有者として接続します。
- 2 ローカル・インスタンスに ORACLE_SID 環境変数を設定します。

export ORACLE_SID = < **D**-*hu* **SID**>

- 3 SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。
 - SQLPLUS SYS AS SYSDBA
- 4 ローカル・インスタンスのシャットダウン SHUTDOWN ABORT;
- 5 NOMOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。

STARTUP FORCE NOMOUNT;

- 6 ローカル・インスタンス用に CLUSTER_DATABASE 初期化パラメータを無効にします。
 ALTER SYSTEM SET CLUSTER DATABASE=FALSE SCOPE=SPFILE SID='< ローカル SID>';
- 7 ローカル・インスタンスのシャットダウン SHUTDOWN ABORT;
- 8 SQL*Plus を終了します。
- 9 すべての RAC インスタンスをシャットダウンします。

> srvctl STOP DATABASE -d **<データベース名>** -o abort

10 すべての RAC インスタンスがシャットダウンしたことを確認します。

>srvctl STATUS DATABASE -d **<データベース名>**

11 SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

12 SQL*Plus で、MOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。

STARTUP MOUNT;

- 13 [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択] ページで、すべてのテーブルスペースを含む利用可能な 最新のバックアップを選択して、[次へ] をクリックします。
- 14 [セレクション・セット作成] ページで、[データベース全体] ノードを選択して、[プラグイン・オプ ションの編集] をクリックします。
- 15 [リストアオプション] タブをクリックし、利用可能なオプションを選択します。
 - 読み取り専用データファイルをリストアおよびリカバリ・プロセスに含めるには、[読み取り専用 データファイルを確認して、必要に応じてリストアします]および[読み取り専用データファイ ルを確認して、カレントでない場合は、リカバリします]を選択します。読み取り専用ファイル は、完全リカバリに必要な場合のみ含められます。これらのファイルが損傷していない場合は、 RMANによって除外されます。
 - リストアされたアーカイブ・ログのうち Oracle が不要と見なしたものを削除するには、「不必要なリストア済みアーカイブ・ログを削除する」を選択します。
- 16 データベースに対してリカバリを実行、つまりデータベースを最新の状態または特定時点まで再構築するには、[リカバリを実行する] タブで以下のいずれかのオプションを選択します。
 - [完全なリカバリを実行する]:データベースを最新状態(つまりアーカイブおよびオンライン REDO ログで使用可能な)最後にコミットされたトランザクションまでリカバリします。
 - [データベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する]:特定時点(つまり特定の時刻、 ログのシーケンス・ナンバー、または SCN)にデータベースをリカバリします。
- 17 [リカバリ・カタログ] タブで、[カタログの使用] オプションを選択してリカバリ・カタログの接続詳 細を指定します。
- 18 [クライアント指定]、[スケジュール]、[詳細設定]の各タブに入力し、ジョブを開始します。

RMAN は、使用可能なフル、増分、またはアーカイブ・ログのバックアップのうち最適なものを自動的に 選択し、データベースのリストアとリカバリを実行します。

- 19 ターミナル・ウィンドウから Plug-in for Oracle がインストールされているノードに Oracle ソフトウェアの所有者として接続します。
- 20 SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

21 ローカル・インスタンス用に CLUSTER_DATABASE 初期化パラメータを有効化します。

ALTER SYSTEM SET CLUSTER DATABASE=TRUE SCOPE=SPFILE SID='<ローカル SID>';

- 22 ローカル・インスタンスのシャットダウン SHUTDOWN ABORT;
- 23 SQL*Plus を終了します。
- 24 すべての RAC インスタンスを起動します。

>srvctl START DATABASE -d <データベース名>

25 すべての RAC サービスを起動します。

>srvctl START SERVICE -d < T-9×-748 >

26 すべての RAC インスタンスが実行中であることを確認します。

>srvctl STATUS DATABASE -d **<データベース名>**

 ① 重要:データベース全体のリストアを完了したら、[NetVault Backup 選択] ページでデータベース 全体を選択し、フルまたは Level 0 増分バックアップの実行をお勧めします。

RAC 環境での SPFILE のリストア

制御ファイルの自動バックアップはマルチ・インスタンス RAC 環境で必須のため、自動バックアッ プが実行されると、SPFILE は制御ファイルを使用してバックアップされます。SPFILE は、以下の詳 細ステップを使用して自動バックアップからデフォルトの場所にリストアされます(詳しくは、以下 の手順を参照してください)。インスタンスがサーバー・パラメータ・ファイルを使用してすでに開 始されている場合、既存のサーバー・パラメータ・ファイルの上書きはできません。SPFILE の非デ フォルトの場所へのリストアについて詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Basics』ガ イドを参照してください。

- 1 ターミナル・ウィンドウから Plug-in for Oracle がインストールされているノードに Oracle ソフトウェアの所有者として接続します。
- 2 ローカル・インスタンスに ORACLE_SID 環境変数を設定します。

export ORACLE SID = < **D**-*h******h***SID**>

3 SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

- 4 ローカル・インスタンスのシャットダウン SHUTDOWN ABORT;
- 5 NOMOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。

STARTUP FORCE NOMOUNT;

6 ローカル・インスタンス用に CLUSTER_DATABASE 初期化パラメータを無効にします。

ALTER SYSTEM SET CLUSTER_DATABASE=FALSE SCOPE=SPFILE SID='< **D**-**D***h* **SID**>';

- 7 ローカル・インスタンスのシャットダウン SHUTDOWN ABORT;
- 8 SQL*Plus を終了します。
- 9 すべての RAC インスタンスをシャットダウンします。

> srvctl STOP DATABASE -d **<データベース名 >** -o abort

10 すべての RAC インスタンスがシャットダウンしたことを確認します。

>srvctl STATUS DATABASE -d <データベース名>

11 RMAN を起動し、ターゲット・データベースとリカバリ・カタログに接続します。

> rman TARGET / CATALOG rman/<パスワード>@< 接続用カタログ ID>

12 FORCE NOMOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。

STARTUP FORCE NOMOUNT;

13 SET DBID を使用して、ターゲット・データベースのデータベース識別子を設定します。

RMAN は、ターゲットに接続するたびに DBID を表示します。保存された RMAN ログ・ファイルを調べる か、カタログを照会するか、または制御ファイルの自動バックアップのファイル名からも、DBID を特定 できます。DBID は、[詳細] ダイアログ・ボックスまたは [バックアップ・コンテンツ] タブでも利用で きます。

SET DBID **<DBID>;**

14 SPFILE の自動バックアップをリストアします。

SPFILE をデフォルトの場所にリストアするには、以下のコマンドを実行します。

```
RUN {
ALLOCATE CHANNEL CH1 TYPE 'SBT_TAPE';
RESTORE SPFILE FROM AUTOBACKUP;
}
```

15 FORCE オプションを付けてインスタンスを起動します。

STARTUP FORCE;

- 16 RMAN を終了します。
- 17 SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

18 ローカル・インスタンス用に CLUSTER_DATABASE 初期化パラメータを有効化します。

ALTER SYSTEM SET CLUSTER DATABASE=TRUE SCOPE=SPFILE SID='< $\Box - \hbar \nu$ SID>';

- **19 ローカル・インスタンスのシャットダウン** SHUTDOWN ABORT;
- 20 SQL*Plus を終了します。
- 21 すべての RAC インスタンスを起動します。

>srvctl START DATABASE -d <データベース名>

- 22 すべての RAC サービスを起動します。
 - >srvctl START SERVICE -d < T-9×-X48
- 23 すべての RAC インスタンスが実行中であることを確認します。

>srvctl STATUS DATABASE -d <データベース名>

RAC 環境での制御ファイルのリストア

制御ファイルのリストアは、下記の場合に限って実行する必要があります。

- 現在使用中のすべての制御ファイルのコピーが、メディア障害またはユーザーによる偶発的な削除に よって失われたり、損傷または使用できなくなった場合
- Oracle®のカスタマー・サポートが制御ファイルのリストアが必要と判断した場合

制御ファイルの自動バックアップはマルチ・インスタンス RAC 環境で必須のため、以下の手順に 従って、制御ファイルを自動バックアップからリストアします。

- 1 ターミナル・ウィンドウから Plug-in for Oracle がインストールされているノードに Oracle ソフトウェアの所有者として接続します。
- ローカル・インスタンスに ORACLE_SID 環境変数を設定します。
 export ORACLE SID = < ローカル SID>
- SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。
 SQLPLUS SYS AS SYSDBA
- 4 ローカル・インスタンスのシャットダウン SHUTDOWN ABORT;
- 5 NOMOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。 STARTUP FORCE NOMOUNT;
- 6 ローカル・インスタンス用に CLUSTER_DATABASE 初期化パラメータを無効にします。
 ALTER SYSTEM SET CLUSTER DATABASE=FALSE SCOPE=SPFILE SID='< ローカル SID>';
- 7 ローカル・インスタンスのシャットダウン SHUTDOWN ABORT;
- 8 SQL*Plus を終了します。
- 9 すべての RAC インスタンスをシャットダウンします。

```
> srvctl STOP DATABASE -d <データベース名 > -o abort
```

10 すべての RAC インスタンスがシャットダウンしたことを確認します。

>srvctl STATUS DATABASE -d **<データベース名>**

11 RMAN を起動し、ターゲット・データベースに接続します。

>rman TARGET /

12 FORCE NOMOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。

STARTUP FORCE NOMOUNT;

13 SET DBID を使用して、ターゲット・データベースのデータベース識別子を設定します。

RMAN は、ターゲットに接続するたびに DBID を表示します。保存された RMAN ログ・ファイルを調べる か、カタログを照会するか、または制御ファイルの自動バックアップのファイル名からも、DBID を特定 できます。DBID は、**[詳細]** ダイアログ・ボックスまたは **[バックアップ・コンテンツ]** タブでも利用で きます。

SET DBID **<DBID>**;

14 制御ファイルの自動バックアップをリストアします。

前回の自動バックアップから制御ファイルをリストアするには、以下のコマンドを実行します。

```
RUN {
ALLOCATE CHANNEL CH1 TYPE 'SBT_TAPE';
RESTORE CONTROLFILE FROM AUTOBACKUP;
ALTER DATABASE MOUNT;
RESTORE DATABASE;
RECOVER DATABASE;
}
```

15 RESETLOGS オプションを付けてデータベースをオープンします。

ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS;

- 16 RMAN を終了します。
- 17 SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

18 ローカル・インスタンス用に CLUSTER_DATABASE 初期化パラメータを有効化します。

alter system set cluster_database=true scope=spfile sid='<ローカル sid>';

19 ローカル・インスタンスのシャットダウン

SHUTDOWN ABORT;

- 20 SQL*Plus を終了します。
- 21 すべての RAC インスタンスを起動します。

>srvctl START DATABASE -d <データベース名>

22 すべての RAC サービスを起動します。

>srvctl START SERVICE -d <データベース名>

23 すべての RAC インスタンスが実行中であることを確認します。

>srvctl STATUS DATABASE -d <データベース名>

 重要:自動バックアップから制御ファイルをリストアしたら、[NetVault Backup 選択] タブでデー タベース全体を選択し、フルまたは Level 0 増分バックアップの実行をお勧めします。

RAC 環境での障害復旧の実行

障害復旧には、共有ストレージに含まれている現在の制御ファイル、すべてのオンライン REDO ロ グ・ファイル、すべてのパラーメータ・ファイルおよびリカバリ・カタログの障害後にマルチ・イン スタンス RAC データベースのリカバリとリストアが含まれます。障害復旧を実行するために最低限 バックアップ・セットに、すべてのデータファイル、バックアップ後に生成されたアーカイブ REDO ログと自動バックアップに含まれている制御ファイルが少なくとも1つ必要です。

スタンバイ RAC 環境または個別の RAC 環境で使用しているターゲット・データベースのコピーを作 成することが目標の場合は、これらの手順を使用するのではなく、この目的用に特化されている**複製 データベース**のバックアップ・タイプを使用します。詳しくは、RAC 環境でのデータベースの複製を 参照してください。

① 重要:テスト・リカバリを実行する場合は、データファイルのリストア中にリカバリ・カタログに接続しないよう注意してください。接続すると、RMANによって、リストアされたデータファイルに関する情報がリカバリ・カタログに記録されます。これは、以後プライマリ・データベースをリストアおよびリカバリする際に障害になります。リストアする必要のあるすべてのバックアップのRMANリポジトリ・データを制御ファイルに保持しきれないないため、リカバリ・カタログを使用する必要がある場合、カタログをエクスポートして別のスキーマまたはデータベースにインポートし、リカバリ・カタログのコピーをテスト・リストアに使用する必要があります。そうしないと、カタログで、リストアされたデータベースが最新のターゲット・データベースと見なされます。

以下の手順では、ソース・データベースと同じ RAC 環境に障害復旧を実行する手順を詳しく説明し ます。この手順は、共有ストレージの完全なメディア障害が発生した場合、損傷した共有ストレージ を同じ構成で再構築するか、元の共有ストレージの構成を模倣して新しい共有ストレージを設定する 際に使用します。

以下の障害復旧手順のバリエーションについて詳しくは、『Oracle[®] Database Backup and Recovery Advanced User's Guide』の「Performing Disaster Recovery」セクションを参照してください。

前提条件

リカバリ・カタログを使用せずに障害復旧を実行するには、以下の条件を満たす必要があります。

- Oracle[®] RAC 環境が整っている:ユーザー管理バックアップの実行で示されているとおり、Oracle RAC 環境が正しく設定されている必要があります。さらに、RAC 環境に、損傷の起きた RAC 環境に存在した ものと同じ Oracle データベース・ソフトウェアの同じバージョンがインストールされる必要があります。 ORACLE_HOME も、元のノードと新しいノードで同じである必要があります。データベースを新規作成す る必要はありませんが、共有ストレージ用に Oracle Net Services と ASM を設定する必要があります。
- NetVault Backup ソフトウェアと Plug-in for Oracle のインストール: RAC 環境用に以前定義した NetVault マシン名を使用して、RAC 内のノードの1つに同じバージョンの NetVault Backup ソフトウェ アと本プラグインをインストールする必要があります。デフォルト属性の設定で示されているとおりプ ラグインのデフォルト属性が定義されていることを確認してください。
- ソース・データベースの DBID を特定する:損傷したデータベースの DBID を特定します。本プラグインの初期インストールの一部として DBID が記録されなかった場合、NetVault Backup のバイナリ・ログでソース・データベースの RMAN ベースのバックアップを調べることにより、DBID を特定できます。DBIDは、[詳細]ダイアログ・ボックスまたは[バックアップ・コンテンツ]タブでも利用できます。
- SPFILE が存在する必要のあるデフォルトの場所:以下の手順を実行する前に、ASM 共有ストレージにデフォルトの場所が存在する必要があります。デフォルトの場所を作成し忘れると、SPFILE のリストア中に「ORA-17502: ファイルの作成に失敗しました。」というエラーが発生する結果になります。さらに、SPFILE の場所は SPFILE パラメータとともに PFILE 内に記述されている必要があります。
- すべてのテーブルスペースのバックアップを使用可能にする:すべてのテーブルスペースの最新のバックアップがあることを確認します。

ディザスタ・リカバリを実行するには

- 1 RMAN を起動し、ターゲット・データベースに接続します。
 - > rman TARGET /
- 2 SET DBID を使用して、ターゲット・データベースのデータベース識別子を設定します。

RMAN は、ターゲットに接続するたびに DBID を表示します。保存された RMAN ログ・ファイルを調べる か、カタログを照会するか、または制御ファイルの自動バックアップのファイル名からも、DBID を特定 できます。DBID は、**[詳細]** ダイアログ・ボックスまたは **[バックアップ・コンテンツ]** タブでも利用で きます。

SET DBID **<DBID>**;

3 FORCE NOMOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。

STARTUP FORCE NOMOUNT;

4 SPFILE の自動バックアップをリストアします。

SPFILE をデフォルトの場所にリストアするには、以下のコマンドを実行します。

```
RUN {
ALLOCATE CHANNEL CH1 TYPE 'SBT_TAPE';
RESTORE SPFILE FROM AUTOBACKUP;
```

5 FORCE NOMOUNT オプションを付けてローカル・インスタンスを起動します。

STARTUP FORCE NOMOUNT;

6 制御ファイルの自動バックアップをリストアします。

前回の自動バックアップから制御ファイルをリストアするには、以下のコマンドを実行します。

RUN { ALLOCATE CHANNEL CH1 TYPE 'SBT_TAPE'; RESTORE CONTROLFILE FROM AUTOBACKUP; }

7 データベースをマウントします。

ALTER DATABASE MOUNT;

8 Block Change Tracking を無効にします。

SQL "ALTER DATABASE DISABLE BLOCK CHANGE TRACKING";

- 9 [リストア・ジョブ作成 セーブセットの選択]ページで、すべてのテーブルスペースを含む利用可能な 最新のバックアップを選択して、[次へ]をクリックします。
- 10 **[セレクション・セット作成]** ページで、ソース NetVault Backup クライアントとデータベースに移動して、**[データベース全体]** ノードを選択して、**[プラグイン・オプションの編集]** をクリックします。
- 11 [リストア・オプション] タブをクリックして、[読み取り専用データファイルを確認して、必要に応じ てリストアします]および[読み取り専用データファイルを確認して、カレントでない場合は、リカバリ します]を選択して、読み取り専用データファイルをリストアおよびリカバリ・プロセスに含めます。
- 12 障害復旧シナリオでは、リカバリを実行する必要があるため、[リカバリを実行する] タブで、[データ ベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する] オプションを選択します。
 PIT リカバリはデータベースを指定した時刻、ログ・シーケンス番号または SCN にリストアします。障害 が発生した時刻あるいはログ・シーケンスが不明な場合は、SCN オプションの使用をお勧めします。Dell
- 13 [リカバリ・カタログ] タブで、[カタログの使用] オプションを選択解除します。
- 14 [クライアント指定]、[スケジュール]、[詳細設定]の各タブに入力し、ジョブを開始します。

RMAN は、使用可能なフル、増分、またはアーカイブ・ログのバックアップのうち最適なものを自動的に 選択し、データベースのリストアとリカバリを実行します。

15 RMAN で、Block Change Tracking を有効化します。

SQL "ALTER DATABASE ENABLE BLOCK CHANGE TRACKING";

16 RMAN メタデータを更新します。

CROSSCHECK ARCHIVELOG ALL;

- 17 RMAN を終了します。
- 18 すべての RAC インスタンスを起動します。

>srvctl START DATABASE -d <データベース名>

19 すべての RAC サービスを起動します。

>srvctl START SERVICE -d <データベース名>

20 すべての RAC インスタンスが実行中であることを確認します。

>srvctl STATUS DATABASE -d <データベース名>

① **重要**:ディザスタ・リカバリを完了したら、[NetVault Backup 選択] ページでデータベース全体を 選択し、フルまたは Level 0 増分バックアップの実行をお勧めします。

ノード障害後のリストアの実行

マルチ・インスタンスの RAC データベースにメディア障害が発生したり、プラグインがインストー ルされているノードに障害とデータの損傷が同時に起こっている場合、RAC 環境内の他のノードに本 プラグインを再配置して、RMAN ベースのリストアとリカバリを実行する必要があります。本プラグ インの再配置手順は、以下の2つのステップで構成されます。

1 NetVault Backup クライアント・ソフトウェアをその他のノードにインストールします。

RAC 環境で、NetVault Backup クライアント・ソフトウェアをその他のノードにインストールします。インストール処理中は、NetVault Backup クライアント・ソフトウェアがインストールされた元のノードのインストールに使用した NetVault マシン名と同じ名前を使用することに注意します。つまり、元のノードのインストール中に指定した NetVault マシン名が PROD_RAC だった場合、他のノードの NetVault マシン名として PROD_RAC を使用する必要があります。

2 Plug-in for Oracle をインストールします。

RAC 環境の選択したノードに NetVault Backup クライアントをインストールしたら、プラグインをインストールします。手順は、NetVault Backup クライアントのインストール時に、NetVault のマシン名として 指定された包括的または仮想的な名前に対応する NetVault Backup クライアントにプラグインがインストールされることを除き、シングル・インスタンスのデータベース環境に本プラグインをインストール することと同じです。

Plug-in for Oracle を他のノードにインストールしたら、リストア手順は以下の相違点を除いてシングル・インスタンスの非 RAC 環境でリストアを実行するのと似ています。

- RMAN リストア実行中のリストア対象データの選択フェーズでは、再配置直前に本プラグインが当初イン ストールされていたインスタンスの Oracle[®] SID と等しい Oracle SID を持つノードを [セレクション・ セット作成] ページから選択し、そのノードからバックアップ・セットを選択します。
- リストア・オプションの設定フェーズでは、ターゲット・データベースの認証の詳細で、本プラグイン が存在している他のノードのローカル・インスタンス用に適切な値をします。詳しくは、格納先の詳細 を参照してください。

リカバリ用データベースの準備、リストア用データ・アイテムの選択、リストア・オプションの設定、ジョブのファイナライズと実行および使用するデータベースのオープンについて詳しくは、 RMAN リストアの実行を参照してください。

RAC 環境でのデータベースの複製

複製データベースを使用するとソース・データベースの複製またはクローンを作成することができ、 これはバックアップおよびリストア手順全体によってソース・データベースが影響を受けることのな いよう特殊な目的のために使用されます。RAC環境で、Oracle[®]はマルチ・インスタンス・データ ベースの他のマルチ・インスタンス・データベースへの複製をサポートしていません。一方、Oracle は、シングル・インスタンスのデータベースをマルチ・インスタンスのデータベースに変換すること で、マルチ・インスタンスのデータベースからシングル・インスタンスのデータベースへの複製をサ ポートしています。詳しくは、『Oracle Real Application Clusters Installation Guide』を参照してくだ さい。

同一 RAC 環境への複製データベース・バックアップのリストアは、シングル・インスタンス環境で 複製データベース・バックアップのリストアを実行することとほぼ同じです。以降のセクションで は、この違いについて説明します。

前提条件

補助的値を使用した PFILE の更新:元のデータベースがマルチ・インスタンスのデータベースの場合、非 RAC 複製手順で示されたとおり PFILE を更新するのに加え、以下の更新手順が必要です。

1 RAC 関連パラメータ・エントリの先頭に、「#」(番号記号)を挿入してコメント・アウトします。

以下は、RAC 関連パラメータの例です。

• .cluster_database_instances = N

- .cluster_database=TRUE
- < データベース / インスタンス名 >.cluster_database=TRUE
- < インスタンス名 >.instance_number=N
- < インスタンス名 >.thread = N
- < インスタンス名 >.undo_tablespace = '< テーブルスペース名 >'
- 2 以下のパラメータを追加します。
 - <補助インスタンス名 >.undo_tablespace='<UNDO テーブルスペース名 >'
 - < 補助インスタンス名 >.thread = 1

リストア後の手順

非 RAC 環境におけるデータベースの複製で定義されている複製データベースのリストア手順が完了 したら、シングル・インスタンスのデータベースからマルチ・インスタンスのデータベースへの変換 を実行できます。これを行うには、『Oracle Real Application Clusters Installation Guide』の 「Converting to Oracle[®] Real application Clusters from Single-Instance Oracle Databases」で説明され ている手順の1つを使用します。

フェイルオーバー・クラスタ環境でのプ ラグインの使用

11

- Oracle サーバー・フェイルオーバー・クラスタリング:概要
- プラグインのインストール
- プラグインのライセンス
- プラグインの設定とデータベースの追加
- データのバックアップ
- データのリストア

Oracle サーバー・フェイルオーバー・クラス タリング:概要

Oracle[®] フェイルオーバー・クラスタリング(アクティブ / パッシブ)は、Oracle サーバー・インス タンス全体の高可用性を確保することを目的に設計されています。たとえば、フェイルオーバー・ク ラスタの1つのノードで、ハードウェア障害またはオペレーティング・システム障害が発生した場 合、あるいは計画されたアップグレードを行う際に、クラスタ内の別のノードにフェイルオーバーす るよう Oracle サーバー・インスタンスを設定できます。

フェイルオーバー・クラスタは、1 つ以上のノード(ホスト)と1 つ以上の共有ディスクで構成され ます。IP アドレス、共有ストレージ、およびアプリケーション(この場合、Oracle)などのノードに よってホスティングされるさまざまなリソースを組み合わせて**クラスタ・サービス**と呼ばれるグルー プを構成します。ネットワーク上では、仮想サービスはアプリケーションを実行中の単一のコン ピュータとして認識されますが、現在のノードが使用不可になった場合はノード間でのフェイルオー バーが可能です。

 ① 重要: NetVault Backupの用語において、クラスタ・サービスを仮想クライアントと呼びます。基本的に、 Plug-in for Oracle における仮想クライアントとは、Oracle サーバー・フェイルオーバー・クラスタ環境の クラスタ・サービスを指します。

Plug-in for Oracle は、Oracle サーバー・フェイルオーバー・クラスタリングをサポートしています。 プラグインはフェイルオーバー・クラスタ・ネットワーク名によって、Oracle サーバー・クラスタ・ サービスを管理している現在のノードを特定し、それをバックアップ対象とすることができます。

このセクションでは、プラグインの設定と使用が、フェイルオーバー・クラスタ環境と従来の環境で どのように異なるかを説明します。このセクションは、標準の手順を説明するセクションを反映させ るため、以下のような構成になっています。

- プラグインのインストール
- プラグインのライセンス
- プラグインの設定とデータベースの追加
- データのバックアップ
- データのリストア

重要な注意事項

- 以降のセクションで説明していない場合、本プラグインを使用したクラスタ・データのバックアップお よびリストア手順は、従来の Oracle[®] サーバー・データのバックアップおよびリストア手順と同様です。
- ・ 以降のセクションでは、フェイルオーバー・クラスタ環境で本プラグインを使用する場合に必要な、 Oracle 固有の設定についてのみ説明しています。NetVault Backup のアプリケーション・クラスタ・サ ポートを使用して Oracle サーバー・以外の関連データ / ファイルのバックアップ / リストアを管理する 設定手順については説明していません。このプロセスは本プラグイン固有のものではありません。この 手順について詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。
- 次のセクションに進む前に、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』のすべてのクラ スタ関連情報を確認し、ここで説明する内容が Oracle サーバー・フェイルオーバー・クラスタ機能とど のように関連しているかを理解しておいてください。

プラグインのインストール

プラグインをインストールするには、以下のセクションを使用します。

- インストールの前提条件
- ソフトウェアのインストール

インストールの前提条件

Plug-in for Oracle をクラスタ環境にインストールするには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Oracle[®] フェイルオーバー・クラスタリング環境を展開する:正しく構成された Oracle クラスタリング 環境が必要です。
 - 重要:フェイルオーバー・クラスタリング機能のサポートは、Oracle フェイルオーバー・クラスタ リング機能を使用する Windows Server[®]上でテストされ、データベースのデータ・ファイルおよび ログを含む共有ストレージと Oracle (v6.5) 2 ノード・クラスタ構成を採用します。クラスタリン グ機能を異なる構成で使用する場合、実際の運用環境に配置する前に、バックアップおよびリスト アをテストします。
- NetVault Backup サーバー・マシンを別に用意する: NetVault Backup サーバーとして使用するマシンが 適切に設定されている必要があります。このマシンは、Oracle サーバー・クラスタの外部に設置し、ク ラスタ内のノード(ホスト)へのネットワーク接続を行う必要があります。

ソフトウェアのインストール

クラスタ環境へのプラグインのインストールは、従来のインストール方法とは異なっています。この プロセスは、NetVault Backup サーバーに**仮想クライアント**を作成することで完成します。仮想クラ イアントとは、クラスタ内のノードのグループで、NetVault Backup サーバーからは、1 つのクライア ントとして認識されます。仮想クライアントは、1 つのクラスタ・サービスをバックアップする場合 に作成します。

仮想クライアントの作成

前述のとおり、仮想クライアント作成プロセスは、本プラグイン固有のものではありません。この手順について詳しくは、『Dell NetVault Backup アドミニストレーターズ・ガイド』を参照してください。ただし、仮想クライアント作成プロセス中は、以下の点を考慮する必要があります。

- 仮想クライアントに名前を付ける: NetVault Backup 仮想クライアント名として、Oracle[®] データベース に割り当てられた仮想サーバーのネットワーク名を使用することをお勧めします。仮想クライアント名 として Oracle データベースまたはクラスタ環境に関連する名前を設定しておけば、NetVault Backup 仮 想クライアントが作成された Oracle データベースをより簡単に識別することができます。
- 関連するクラスタ・ノードのみを仮想クライアントに追加する:仮想クライアントの作成時に含めるホストを、バックアップおよびリストア対象の Oracle データベース・サーバーに関連するクラスタ内のノードに限定します。

仮想クライアントの作成後、プラグインはすべての指定クラスタ・ノードに転送され、ローカルにインストールされます。インストールされた Plug-in for Oracle を仮想クライアントから使用して、共有データをバックアップ / リストアできます (クラスタ内で共有設定したデータのバックアップおよびリストアのみ)。

プラグインのライセンス

Plug-in for Oracle をクラスタ環境で使用する場合のもう1つの違いとして、使用ライセンスがあり ます。本プラグインは、共有データのバックアップおよびリストア**のみ**をサポートしています。この ため、Oracle[®] データベース・サーバー・フェイルオーバー・クラスタ環境で必要な仮想クライアン トのクラスタ・アプリケーション・ライセンスは1つのみです。

ライセンス・キーの入手などの手続きについて詳しくは、『Dell NetVault Backup インストレーション・ガイド』を参照してください。

プラグインの設定とデータベースの追加

フェイルオーバー・クラスタ環境への Plug-in for Oracle の設定は、シングル・インスタンス、非ク ラスタ環境へのプラグインの設定とほぼ同じです。ただし、データベースの追加については以下の例 外があります。

- [Oracle SID]:ターゲット Oracle[®] データベース用クラスタ内のアクティブ・ノードへのローカル SID を 入力します。このローカル ID は、ターゲット・データベース用ローカル・ノード上の Oracle インスタン ス名です。
- [制御ファイルの自動バックアップを使用する]:このオプションを選択することをお勧めします。
- [PFILE 利用法]: ターゲット Oracle データベースのクラスタ・ノード内のローカル・インスタンスが、 SPFILE ではなく PFILE を使用する場合、[RMAN 詳細] タブの [SPFILE のバックアップに RMAN コマンド を使用] オプションを選択解除する必要があります。[データベースの追加] または [データベースの編 集] オプションからこのタブにアクセスし、[Oracle インスタンス詳細] タブの [パラメータ・ファイ ル・パス] ボックスに利用可能な情報を入力します。

詳しくは、「プラグインの設定」および「データベースの追加」を参照してください。

① **重要**:異なるノードにフェイルオーバーが発生した場合、[**データベースの追加**]オプションを使用してア クティブ・ノード(フェイルオーバー・クラスタ実行先)上のプラグインへ Oracle データベース情報を追 加します。この情報を入力する必要があるのは一度だけです。以降のフェイルオーバーでは、本プラグイ ンは自動的にこの情報を取得します。

データのバックアップ

仮想クライアントで使用するように設定した Plug-in for Oracle によるバックアップは、比較的簡単 です。[NetVault Backup 選択] ページで、仮想クライアント・ノードを開き、[Plug-in for Oracle] を開きます。次に、バックアップ内で Oracle[®] サーバー・インスタンス(またはその配下のコンテン ツ)をインクルージョン用に選択します。

データのリストア

仮想クライアントへのデータのリストアは、従来の NetVault Backup クライアントに対してリストア を実行する場合と同様の方法で行います。Plug-in for Oracle を使用したリストアに使用可能なすべ てのオプションは、フェイルオーバー・クラスタリング環境でも使用できます。また、データも同様 の方法で選択します。両者の違いは、[セレクション・セット作成] ページで、リストア可能な仮想 クライアントのバックアップが、バックアップ中に使用していた個々の NetVault Backup クライアン トまたはノードではなく、仮想クライアント名下に表示される点です。リストア・ジョブを開始する と、NetVault Backup はすべてのメンバー・クライアントと通信し、フェイルオーバー・クラスタを 管理しているマシンを特定し、このマシンをリストア対象として指定します。

① **重要: [設定]** ダイアログ・ボックスの [NetVault Backup クライアントからのバックアップをリストア する] フィールドには、フェイルオーバー・クラスタの仮想 IP に変換されるネットワーク名を含める必要 があります。そうしないとリストアは失敗します。[設定] ダイアログ・ボックスの使用方法について詳し くは、プラグインの設定を参照してください。

さらに、NetVault Backup 仮想クライアントを、非クラスタ化(スタンドアロン)NetVault Backup ク ライアントヘリストアすることもできます。

仮想クライアントへデータをリストアする場合は、[リストア・ジョブ作成]ページの[クライアント指定]リストで利用可能な仮想クライアントを選択することを Dell はお勧めします。

記載されているすべてのリストア実行手順は、仮想クライアントのリカバリでも使用できます。 NetVault Backup 仮想クライアントのリストア手順について詳しくは、「データのリストア」の各セク ションを参照してください。

12

Oracle[®] Data Guard でのプラグインの使用

- Oracle® Data Guard:概要
- 配備計画の定義
- システム構築
- Data Guard 環境へのプラグインのインストール
- データのバックアップ
- データのリストア

Oracle[®] Data Guard:概要

Oracle の Oracle Data Guard は、「企業データに対する高機能のデータ保護と障害復旧を約束します。 Data Guard は包括的な一連のサービスを提供し、1 つ以上のスタンバイ・データベースの作成、管 理、監視を行い、Oracle データベースのプロダクションが災害やデータ損傷から保護されるように します。Data Guard はこれらのスタンバイ・データベースをプロダクション・データベースのコ ピーとして管理します。プロダクション・データベースが機能停止により使用できなくなると、Data Guard は任意のスタンバイ・データベースをプロダクション側に切り替え、機能停止に関連するダウ ンタイムを最小限にします。プロダクション・データベースは、従来のバックアップ、リストア、お よびクラスタ技術と一緒に使用することが可能で、高いレベルのデータ保護とデータ機能を提供しま す。

Data Guard を使用すると、管理者がオプションで、リソース集中型バックアップとレポートの操作 をスタンバイ・データベース・サーバーへ開放することで、プロダクション・データベースのパ フォーマンスを向上できます。また、バックアップがプライマリまたはスタンバイ・データベース・ サーバーのどちらから行われたかということには関係なく、プライマリまたはスタンバイ・データ ベース・サーバーのいずれのリカバリに対してもバックアップを使用できます。

Plug-in for Oracle が、Data Guard 環境でサポートしている Oracle のバージョンは限られています。 Data Guard 環境では、インストール、設定、バックアップ、およびリストア手順が多少異なります。 このセクションでは、本プラグインが Data Guard 環境でどのように動作するかについて説明します。

サポートされる Oracle のバージョンと Data Guard 環境でのプラットフォームの全リストについて詳 しくは、『Dell NetVault Backup 互換性ガイド』を参照してください。

本プラグインの RMAN バックアップ方法は、Data Guard 環境でサポートされている唯一のバックアップ方法です。後続のセクションで説明がない限り、プラグインを使用した、物理またはスタンバイ・データベースに対するバックアップとリストアの手順は、非 Data Guard データベースでの実行手順と同様です。

配備計画の定義

Data Guard 環境の保護とリカバリの計画方針を決定することは、Data Guard 環境での本プラグインの正しい配置と使用に不可欠です。システム構築の詳細説明のとおり、すべての計画方針は、サポートされているすべての使用方法に有効です。

- プライマリのみからのバックアップ
- プライマリおよびスタンバイのバックアップ
- スタンバイのみからのバックアップ

プライマリのみからのバックアップ

最も簡単なバックアップ計画としては、プライマリ・データベース・サーバーからすべてのバック アップを実行することです。このバックアップは、プライマリ・データベース・サーバーまたはスタ ンバイ・データベース・サーバーのうちの1つをリカバリする場合に使用できます。これが有効な計 画である一方で、リソース集中型バックアップ・オペレーションは、プライマリ・データベース・ サーバーのデータベース・パフォーマンスに影響します。この計画により、本プラグインがプライマ リ・データベース・サーバーにインストールされます。Plug-in for Oracle は、リストアのターゲッ トになっている場合に、スタンバイ・データベース・サーバーにインストールする唯一の要件になり ます。

プライマリおよびスタンバイのバックアップ

スタンバイ・データベース・サーバーに対してリソース集中型バックアップ・オペレーションを開放 することは、多くの場合、Data Guard を展開するドライバの1つになります。Oracle[®]のバージョン は、スタンバイ・データベース・サーバーに対して開放できるバックアップ・オペレーションのボ リュームを決定します。

- [Oracle 10.2.x]:制御ファイルとSPFILEのバックアップをプライマリ・データベース・サーバー上で実行する必要がありますが、データファイルとアーカイブ REDO ログ・ファイルのバックアップはスタンバイ・データベース・サーバーに対して開放できます。また、バックアップがプライマリまたはスタンバイ・データベース・サーバーのどちらから行われたかということには関係なく、プライマリまたはスタンバイ・データベース・サーバーのいずれのリカバリに対しても、データファイルとアーカイブ REDO ログ・ファイルのバックアップを使用できます。詳しくは、『Oracle 10.2.x Data Guard Concepts and Administration』の「RMAN to Back Up and Restore Files」セクションを参照してください。
- [Oracle 11.x]: データファイル、アーカイブ REDO ログ・ファイル、制御ファイル、SPFILE のバック アップは、プライマリとスタンバイのデータベース・サーバー間で互換性があります。これは、すべて のバックアップをスタンバイ・データベース・サーバーの1つから実行できることを示します。また、 バックアップがプライマリまたはスタンバイ・データベース・サーバーのどちらから行われたかという ことには関係なく、プライマリまたはスタンバイ・データベース・サーバーのいずれのリカバリに対し てもバックアップを使用できます。詳しくは、『Oracle 11.x Data Guard Concepts and Administration』 の「Using RMAN to Back Up and Restore Files」セクションを参照してください。

Oracle 11.x では、スタンバイ・データベース・サーバーで実行するバックアップのすべてが必要で はありませんが、Oracle 11.x 環境の有効な計画は、10.2.x 環境の要件を模倣することです。10.2.x 環境では、データファイルとアーカイブ REDO ログ・ファイルのみがスタンバイ・データベース・ サーバーに対して開放され、制御ファイルと SPFILE のバックアップはプライマリ・データベース・ サーバーから実行されます。

Oracle 10.2.x と 11.x の有効な別の計画は、プライマリ・データベース・サーバーから制御ファイル と SPFILE のバックアップを実行し、データファイルとアーカイブ REDO ログ・ファイルのバック アップは、プライマリ・データベース・サーバーとスタンバイ・データベース・サーバー間で交互に 実行することです。たとえば、Level 0 の増分バックアップは、スタンバイ・データベース・サー
バーで週1回実行し、Level1の増分バックアップは、プライマリ・データベース・サーバーで毎日 1回実行します。また、制御ファイルと SPFILE の毎日のバックアップは、プライマリ・データベー ス・サーバーで実行します。

Oracle の MAA (Maximum Availability Architecture)のベスト・プラクティスでは、プライマリ・ データベースとスタンバイ・データベースの両方が停止した場合や、スイッチ・オーバーおよびフェ イル・オーバーについてサイトのプラクティスを新たに導入しなくてもよいようにする場合に、プラ イマリとスタンバイ・データベースの両方でバックアップを行い、MTTR を減少させることを推奨し ています。

この計画では、プライマリ・データベース・サーバー、およびバックアップを実行するスタンバイ・ データベース・サーバーのうち少なくとも1つに Plug-in for Oracle をインストールします。

 Oracle 11.x 以前の Oracle のバージョンでは、SPFILE のバックアップが他のスタンバイ・データベースで 使用できる想定になっていました。ただし、実際には、すべてのスタンバイ・データベースで同じ SPFILE を使用することはできません。したがって、RMAN により、あるデータベース・サイトで作成された SPFILE バックアップを別のデータベース・サイトで使用できないようにしています。この制約は、 COMPATIBLE 初期化パラメータが 11.0.0 に設定されている場合にのみ発生します。

スタンバイ・データベースは、SPFILEのバックアップを除き、特定の1つのスタンバイ・データベースに 対してバックアップ・オペレーションを開放できます。ただし、COMPATIBLE初期化パラメータが11.0.0 に設定されている場合、SPFILEはディスクにバックアップすることができ、バックアップがテープまたは NetVault Backupメディアに書き込まれるスタンバイ・サイトでは、手動でカタログに追加することもでき ます。SPFILE バックアップ・セットに保存された追加メタデータにより、RMANで、バックアップ・セッ トの SPFILE が含まれるデータベースを認識できます。したがって、テープまたは NetVault Backupメディ アからのリストア実行中に適切な SPFILE バックアップが選択されます。

バックアップ先の計画

Oracle[®] 10.2.x Data Guard 環境にプライマリ・サーバーとスタンバイ・サーバーの両方についてバックアップ計画を実装する場合、バックアップ格納先の計画定義の詳細のとおり、付随するバックアップ先について計画します。

RMAN がリカバリ・カタログにバックアップ・メタデータを保存するため、プライマリ・データベー ス・サーバーから FRA に実行するバックアップでは、結果として、RMAN バックアップ・ピースが作 成されて、バックアップがリカバリ・カタログに登録されます。翌日、スタンバイ・データベース・ サーバーから実行されるバックアップが、FRA にも実行される場合、バックアップ中に作成された RMAN バックアップ・ピースもリカバリ・カタログに登録されます。

この週の後半で、FRA のバックアップがスタンバイ・データベース・サーバーからテープへ実行され ると、FRA-to-Tape バックアップは、この FRA に対するプライマリ・データベース・サーバーのバッ クアップにより作成されたバックアップ・セットへのアクセスを試行します。プライマリおよびスタ ンバイ・データベースは FRA を共有しないため、FRA-to-Tape バックアップは失敗します。RMAN は、FRA-to-Tape バックアップを実行しているスタンバイ・データベース・サーバーからアクセスで きないプライマリ・データベース・サーバーで、バックアップ・セットのアクセスを試行します。

したがって、Oracle 10.2.x Data Guard 環境について、FRA-to-Tape バックアップはプライマリ・ データベース・サーバーまたはスタンバイ・データベース・サーバーのいずれかで実行し、両方では 実行しないことを推奨します。Dell

Oracle 11.x Data Guard 環境では、Oracle パラメータ db_unique_name により、リカバリ・カタロ グで元のバックアップを FRA に対して区別できるようになります。FRA-to-Tape バックアップを選択 する場合、RMAN は、FRA-to-Tape バックアップを実行するデータベース・サーバーの FRA で、バッ クアップ・セットをバックアップします。

テープへのバックアップについて詳しくは、バックアップ・オプションの設定を参照してください。 このオプションついて詳しくは、Flash Recovery Area (FRA) バックアップを参照してください。

スタンバイのみからのバックアップ

Oracle[®] 11.x をはじめ、データファイル、アーカイブ REDO ログ・ファイル、制御ファイル、SPFILE のバックアップは、プライマリとスタンバイ・データベース・サーバー間で互換性があります。これ は、すべてのバックアップをスタンバイ・データベース・サーバーの1つから実行できることを示し ます。このような計画では、プライマリ・データベース・サーバー、およびバックアップを実行する スタンバイ・データベース・サーバーのうち少なくとも1つに Plug-in for Oracle をインストールし ます。リストアのターゲットになっている場合、プライマリ・データベース・サーバーに本プラグイ ンをインストールすることが要件となります。たとえば、スタンバイ・データベース・サーバーの バックアップを使用してプライマリ・データベース・サーバーをリカバリする場合、プライマリ・ データベース・サーバーに本プラグインをインストールする必要があります。

 プライマリ・データベース・サーバー上で制御ファイルと SPFILE のバックアップを実行する必要があり ますが、Oracle 10.2.x に限って、データファイルとアーカイブ REDO ログ・ファイルのバックアップをス タンバイ・データベース・サーバーに対して開放できるため、スタンバイのみのバックアップ計画は Oracle 10.2.x Data Guard 環境をサポートしていません。

システム構築

Oracle Data Guard 環境での Plug-in for Oracle のサポートは、物理スタンバイ・データベースに対し て制約があります。ロジカルおよびスナップショットのスタンバイ・データベースはサポートしてい ません。物理スタンバイ・データベースは、プロダクション・データベースのコピーで、トランザク ションの整合性が保たれています。スタンバイ・データベースのすべてのリファレンスは、物理スタ ンバイ・データベース参照します。

本プラグインは、Data Guard システム構築の以下のタイプをサポートしています。

表 4. サポートしている構築

プライマリ・データベース・サーバー設定

物理スタンバイ・データベース設定

シングル・インスタンス	>	シングル・インスタンス
マルチ・インスタンス RAC	>	シングル・インスタンス
マルチ・インスタンス RAC	>	マルチ・インスタンス RAC

Data Guard 環境で本プラグインをシステム構築することは、プライマリ・データベース・サーバー、 および選択したバックアップ計画に基づいたスタンバイ・データベース・サーバーのうちなくとも1 つに本プラグインをインストールする必要があります。バックアップ計画の選択について詳しくは、 配備計画の定義を参照してください。

- シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・インスタンス
- シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・インスタンス RAC
- マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・インスタンス RAC

シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に 対するシングル・インスタンス

シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・インスタンスでは、プライ マリ・データベース・サーバー、およびスタンバイ・データベース・サーバーのうち少なくとも1つ に本プラグインがインストールされています。

図 8. シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するシングル・インスタンス



シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に 対するマルチ・インスタンス RAC

シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・インスタンスでは、プライマ リ RAC データベース環境、およびスタンバイ・データベース・サーバーのうち少なくとも1つに本 プラグインがインストールされています。

図 9. シングル・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・インスタンス RAC



マルチ・インスタンスの RAC 環境における本プラグインのシステム構築について詳しくは、配備計画の定義を参照してください。

マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築 に対するマルチ・インスタンス RAC

マルチ・インスタンス Data Guard のシステム構築に対するマルチ・インスタンスでは、プライマリ RAC データベース環境、およびスタンバイ・データベース・サーバーのうち少なくとも1つに本プラ グインがインストールされています。

図 10. マルチ・インスタンス RAC Data Guard のシステム構築に対するマルチ・インスタンス RAC



マルチ・インスタンスの RAC 環境における本プラグインのシステム構築について詳しくは、配備計 画の定義を参照してください。

Data Guard 環境へのプラグインのインストール

以下のセクションで説明されている追加の手順または異なる手順を完了する前に、プラグインのイン ストールと削除およびプラグインの設定などの前のセクションで説明されている情報を確認します。

- インストールの前提条件
- プラグインのインストール

インストールの前提条件

Plug-in for Oracle を Data Guard 環境にインストールするには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- 適切な Oracle[®] Data Guard 環境:正しく設定された Oracle Data Guard 環境が必要です。サポートされている Data Guard 環境に関する Oracle のバージョンについては、『Dell NetVault Backup 互換性ガイド』を参照してください。
- 適切な Oracle RAC 環境:マルチ・インスタンスのプライマリまたはスタンバイ・データベース・サー バーを含む、Data Guard 環境については、RAC 設定の要件で指定された Oracle RAC 設定の要件を満たし ていなければなりません。
- NetVault Backup サーバー・マシンを別に用意する: NetVault Backup サーバーとして使用するマシンが 適切に設定されている必要があります。このマシンは、Data Guard 環境の外部に設置し、Data Guard 環 境内のノードおよびホストへのネットワーク接続を行う必要があります。
- リカバリ・カタログ・サーバーを別に用意する: RMAN リポジトリは、Data Guard 環境の外部にある サーバー上のリカバリ・カタログ・データベースに保存することをお勧めします。プライマリ・データ ベースのみが、リカバリ・カタログに登録されます。詳しくは、RMAN リポジトリの作成を参照してくだ さい。
- 制御ファイルの自動バックアップを有効にする:制御ファイルと SPFILE の自動バックアップは、以下の 条件を満たすデータベースで有効にする必要があります。
 - プライマリのみのバックアップ計画:制御ファイルと SPFILE の自動バックアップをプライマリ・ データベース・サーバーで有効にします。
 - プライマリおよびスタンバイのバックアップ計画:
 - Oracle 10.2.x: プライマリ・データベース・サーバー、およびバックアップを実行しているすべてのスタンバイ・データベース・サーバーで制御ファイルと SPFILE の自動バックアップを無効にします。手動制御ファイルと SPFILE のバックアップは、プライマリ・データベース・サーバーで実行されます。
 - Oracle 11.x: バックアップを実行しているすべてのデータベース・サーバーで制御ファイ ルと SPFILE の自動バックアップを有効にします。たとえば、Level 0 の増分バックアップ がスタンバイ・データベース・サーバーで実行され、Level 1 増分バックアップがプライマ リ・データベース・サーバーで実行される場合は、プライマリ・データベース・サーバー とスタンバイ・データベース・サーバーの両方で自動バックアップを有効にします。
 - スタンバイのみのバックアップ計画:バックアップを実行しているスタンバイ・データベース・ サーバーで、制御ファイルと SPFILE の自動バックアップを有効にします。

詳しくは、制御ファイルの自動バックアップ有効化を参照してください。

- フラッシュ・リカバリ領域を推奨: Data Guard 環境には、フラッシュ・リカバリ領域を有効にすること をお勧めします。詳しくは、『Oracle Database Backup and Recovery User's Guide』の「Configuring the Flash Recovery Area」セクションを参照してください。
- **Flashback Database を推奨**: Data Guard のスタンバイ・データベース・サーバーには、Flashback Database を有効にすることをお勧めします。詳しくは、Flashback Database の有効化および『Oracle

Data Guard Concepts and Administration』の「Using Flashback Database After a Role Transition」セク ションを参照してください。

 その他の前提条件:上記の Data Guard の前提条件に加えて、前提条件で指定されている非 Data Guard 固有の前提条件を満たす必要があります。

RMAN 設定のオプション設定

以下の設定は、Data Guard 環境ではオプションです。

保存ポリシー

RMAN の保存ポリシーは、RMAN が古いとみなした、つまり必要がなくなったので削除するとマーク したバックアップ・セットとコピーについて、持続性のあるポリシーを指定します。時間の経過とと もに、RMAN は、保存ポリシーの指定条件に従って古いとみなしたバックアップ・セットとコピー マーク付けを行います。RMAN は、空き領域が必要になると、FRA で古いバックアップ・セットとコ ピーを自動的に削除します。RMAN は、NetVault Backup バックアップ・メディアなど、FRA 領域外 の古いファイルは自動的には削除されません。

プライマリ・データベース設定

 リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をプライマリ・ターゲット・デー タベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。
 たとえば、カタログ・データベースに接続するには、以下のコマンドを実行します。

> rman TARGET / CATALOG rman/<パスワード>@<接続用カタログ ID>

2 保存ポリシーを設定します。

CONFIGURE RETENTION POLICY TO RECOVERY WINDOW OF <n> DAYS

アーカイブ・ログの削除ポリシー

RMAN のアーカイブ・ログ削除ポリシーは、以下の条件の両方を満たしている場合に、アーカイブ REDO ログを削除できるように指定します。

- アーカイブ REDO ログは、必要なスタンバイ・データベースに適用されています。
- アーカイブ REDO ログは、BACKED UP ... TIMES TO DEVICE TYPE 削除ポリシーで不要とされています。
 この BACKED UP ポリシーが設定されていない場合、この条件が常に満たされます。

オプション設定

- スタンバイ・データベースで、アーカイブ REDO ログ・ファイルのバックアップを取得する場合:
 - プライマリ・データベース設定:
 - a リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMANをプライマリ・ ターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。
 たとえば、カタログ・データベースに接続するには、以下のコマンドを実行します。
 > rman TARGET / CATALOG rman/<パスワード >@< 接続用カタログ ID>
 - b 削除ポリシーを設定します。

CONFIGURE ARCHIVELOG DELETION POLICY TO APPLIED ON STANDBY

- バックアップを実行するスタンバイ・データベースの設定:
 - a リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をバックアップを 行うスタンバイ・ターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに 接続します。

b 削除ポリシーを設定します。

CONFIGURE ARCHIVELOG DELETION POLICY TO NONE

- バックアップを実行「しない」スタンバイ・データベースの設定:
 - a リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、バックアップを実行しないスタンバイ・ターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに RMAN を接続します。
 - b 削除ポリシーを設定します。

CONFIGURE ARCHIVELOG DELETION POLICY TO APPLIED ON ALL STANDBY

- プライマリ・データベースで、アーカイブ REDO ログ・ファイルのバックアップを取得する場合:
 - プライマリ・データベース設定:
 - a リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をバックアップ実行中のプライマリ・ターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。
 - b 削除ポリシーを設定します。

CONFIGURE ARCHIVELOG DELETION POLICY TO NONE

- スタンバイ・データベース設定:
 - a リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をスタンバイ・ ターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。
 - b 削除ポリシーを設定します。

CONFIGURE ARCHIVELOG DELETION POLICY TO APPLIED ON STANDBY

バックアップの最適化

RMAN バックアップの最適化は、同じファイルがすでにバックアップ・メディアにバックアップされ ている場合、RMAN がデバイス・タイプへファイルをバックアップすることを回避します。ただし、 RMAN は、バックアップの最適化によって、バックアップ中にすべてのファイルがスキップされた場 合にエラーを通知しません。

バックアップを実行するスタンバイ・データベースの設定

リカバリ・カタログ・データベースが開いていることを確認し、RMAN をバックアップを行うスタンバイ・ターゲット・データベースおよびリカバリ・カタログ・データベースに接続します。
 たとえば、カタログ・データベースに接続するには、以下のコマンドを実行します。

> rman TARGET / CATALOG rman/<パスワード>@<接続用カタログ ID>

2 バックアップ最適化を設定します。

CONFIGURE BACKUP OPTIMIZATION ON

 「重要:データベースがロールを変更するスイッチオーバーまたはフェイルオーバーでは、対応する CONFIGURE コマンドを新規のプライマリおよびスタンバイ・データベースで再実行する必要があ ります。

プラグインのインストール

Data Guard 環境で、本プラグインをプライマリ・データベース・サーバーにインストールする必要 があります。オプションで、本プラグインを1つ以上の物理スタンバイ・データベース・サーバーに インストールすることもできます。サポートされている Data Guard のシステム構築について詳しく は、システム構築を参照してください。

1 NetVault Backup クライアント・ソフトウェアをインストールします。

本プラグインをインストールする各 Oracle[®] データベース・サーバーに NetVault Backup クライアント・ ソフトウェアをインストールします。

2 NetVault Backup クライアントを NetVault Backup サーバーに追加します。

NetVault Backup サーバーの WebUI から、[**クライアント管理**] ページを開きます。プライマリおよびス タンバイ・データベースにインストールされた NetVault Backup クライアントを [NetVault Backup クラ イアント] リストに追加します。

3 Plug-in for Oracle をインストールします。

Data Guard 環境のそれぞれの必要なシステムにインストールした NetVault Backup クライアント・ソフトウェアでは、同様に各システムに本プラグインをインストールする必要があります。手順は、非 Data Guard のシングル・インスタンスまたはマルチ・インスタンスのデータベース環境に本プラグインをインストールする方法と同じです。

データのバックアップ

RMAN ベースのバックアップは、Data Guard 環境でサポートされている唯一のバックアップ方法で す。RMAN は Data Guard で、Data Guard 環境のプライマリ・データベースと物理スタンバイ・デー タベースを介し、透過的に動作するメタデータの使用により認識されます。

Data Guard 環境でのバックアップの実行は、非 Data Guard 環境のシングル・インスタンスまたはマ ルチ・インスタンスのデータベースのバックアップを実行する方法とほとんど同じです。以降のセク ションでは、この違いについて説明します。

- ユーザー定義のバックアップ・タグの作成
- 制御ファイルと SPFILE の手動バックアップの実行

バックアップ用データの選択、バックアップ・オプションの設定およびジョブのファイナライズと実行について詳しくは、RMAN バックアップの実行を参照してください。

ユーザー定義のバックアップ・タグの作成

プライマリとスタンバイ・データベース・サーバーに互換性のあるバックアップを使用し、プライマ リおよびスタンバイ・データベース・サーバーの両方で、バックアップの Data Guard 計画を実装す る場合、リストア中にバックアップ・ソースを選択することが推奨されることがあります。たとえ ば、プライマリ・データベース・サーバーとスタンバイ・データベース・サーバーを対比させて、リ ストアします。[ユーザー定義のバックアップ・タグ]オプションでは、バックアップのソース(プ ライマリ・データベース・サーバーまたはスタンバイ・データベース・サーバー)を示すバックップ にタグを割り当てられます。リストア中、[ユーザー定義のバックアップ・タグ]は[リストア・オ プション]で指定され、利用可能なサーバーでバックアップのみがリストアに使用されていることを 確認します。

この機能を使用するには

- 1 [NetVault Backup プラグイン・オプション] ページで、[RMAN バックアップ・オプション] タブをク リックします。
- 2 [**ユーザー定義のバックアップ・タグ**]オプションを選択し、タグ名を入力します。

このオプションでは、バックアップ・セットのタグ名を作成します。ターゲット・ファイル・システム のファイル名には、サポートされている文字のみを使用する必要があります。たとえば、ASM では、内 部で使用されるハイフン(-)をファイル名に使用できないため、バックアップをASM ディスク・グルー プに保存する場合、タグ名にはハイフンを使用できません(weekly-incremental など)。

制御ファイルと SPFILE の手動バックアップの実行

プライマリおよびスタンバイのバックアップ計画が展開されている Oracle[®] 10.2.x Data Guard 環境、 または制御ファイルと SPFILE のバックアップがプライマリ・データベース・サーバーで実行する唯 ーのバックアップである Oracle 11.x Data Guard 環境では、手動で制御ファイルと SPFILE のバック アップが実行されます。

制御ファイルと SPFILE を手動でバックアップするには

1 制御ファイルと SPFILE の自動バックアップが無効になっていることを確認します。

詳しくは、データベースの追加でステップ5を参照してください。

- 2 選択ツリーで、[パラメータ・ファイル] と [制御ファイル] のノードを選択します。
- 3 [NetVault Backup **プラグイン・オプション**] ページの [**バックアップ・オプション**] タブで、以下のオ プションを選択します。
 - [バックアップメソッド] セクションで [RMAN] を選択します。
 - 「バックアップ格納先」セクションで、[テープ (NetVault Backup メディアにバックアップ)]または[ディスクとテープ両方 (FRA にバックアップし、次に NetVault Backup のメディアにバックアップ)]を選択します。この手順により、障害復旧の目的で、バックアップ・メディアに制御ファイルと SPFILE が保存されます。
 - [バックアップメソッド] セクションで [フル] を選択します。
- 4 [スケジュール]、[ターゲット・ストレージ]、および[詳細設定]リストを使って、その他の必要なオ プションを設定します。
- 5 [保存] または [保存 & 実行]の、どちらか適切な方をクリックします。

データのリストア

バックアップを実行したデータベース・サーバーにバックアップをリストアする Data Guard 環境で、 リストアを実行する場合、Data Guard 環境でリストアを実行することと非 Data Guard 環境の間に差 異は**ありません**。シングル・インスタンス環境について詳しくは、RMAN リストアの実行を参照してく ださい。マルチ・インスタンス環境について詳しくは、RAC 環境におけるデータのリストアを参照し てください。

Data Guard 環境内の代替データベース・サーバーにバックアップをリストアする Data Guard 環境で、 リストアを実行する場合、以下のセクションの相違点を除き、このリストアは、同じデータベース・ サーバーにリストアする操作と同様になります。

- Data Guard 環境で代替サーバーに対するリストアの設定
- Data Guard 環境で代替サーバーに対してリストアする
- データベース全体のプライマリ・データベース・サーバーへのリカバリ

Data Guard 環境で代替サーバーに対するリストアの設定

プライマリまたはスタンバイ・データベース・サーバーでバックアップを実行する場合、バックアッ プ・インデックスは、バックアップを実行したデータベース・サーバーの NetVault Backup クライア ント名で、NetVault データベースに保存されます。代替データベース・サーバーにリストアするに は、リストアの代替(ターゲット)サーバーのプラグイン設定で、NetVault Backup クライアントの ソース名を指定するように変更する必要があります。

NetVault Backup クライアント・オプションからのバックアップを設定するには

- 1 [ナビゲーション] パネルで、[**バックアップ ジョブ作成**] をクリックして、次に [セレクション] リス トの隣りにある [新規作成] をクリックします。
- 2 選択ツリーで、代替またはターゲット Oracle[®] データベース・サーバーとして設定された NetVault Backup クライアントを開き、[Plug-in for Oracle] を選択します。
- 3 [アクション] リストから、[設定] を選択します。
- 4 【設定】ダイアログ・ボックスの [NetVault Backup クライアントからのバックアップをリストアする] フィールドに、代替またはターゲット・データベース・サーバーの NetVault Backup マシン名を入力します。

本プラグインでリストアを実行する場合、このフィールドは、元のバックアップを実行した NetVault Backup クライアントを示します。

Data Guard 環境で代替サーバーに対してリストアする

代替データベース・サーバーにバックアップをリストアする Data Guard 環境で、リストアを実行す る場合、このプロセスは、同じデータベース・サーバーにリストアする操作とほとんど変わりませ ん。以降のセクションでは、この違いについて説明します。

[ユーザー定義のバックアップ・タグ] オプションを使用したバックアップをリストアするには

- 1 **[リストア・オプション]** タブで、**[ユーザー定義のバックアップ・タグからリストア / リカバリ]** チェッ クボックスを選択します。
- 2 リストアするデータベース・サーバーのバックアップ・セットに対応するタグを指定して、関連する フィールドを入力します。

バックアップを代替データベース・サーバーにリストアするためには

[リストア・ジョブ作成] ページで [クライアント指定] リストを使用して、リストアの代替または ターゲット・データベース・サーバーの NetVault Backup マシン名を選択します。

データベース全体のプライマリ・データベース・サー バーへのリカバリ

このタイプのリカバリは、現在の制御ファイルと SPFILE に損傷がない状態でも、すべてのデータ ファイルがプライマリ・データベース・サーバー上で損傷していて、スタンバイ・データベース・ サーバーのバックアップをリカバリに使用する場合に実行します。完全リカバリを実行することも、 データベースを特定時点にリカバリすることもできます。

スタンバイ・データベースのバックアップから、データベース全体をプライマリ・データベース・ サーバーにリカバリする手順の概要は、以下のとおりです。

1 **[リストア・ジョブ作成-セーブセットの選択]**ページで、スタンバイ・データベース・サーバー上の**す** べてのテーブルスペースを含む利用可能な最新のバックアップを選択して、**[次へ]**をクリックします。

- 2 [セレクション・セット作成] ページで、[データベース全体] ノードを選択して、[プラグイン・オプ ションの編集] をクリックします。
- 3 [リストアオプション]タブをクリックし、次に以下の項目を選択します。
 - [プレリストア・オプション] セクションで、[データベース全体のリストア] を選択します。
 - [リストアオプション] セクションで、[ユーザー定義のバックアップ・タグからリストア / リカ バリ] を選択し、スタンバイ・データベース・サーバーの [ユーザー定義のバックアップ・タグ] を指定します。
- 4 データベースに対してリカバリを実行、つまりデータベースを最新状態または特定時点まで再構築する には、[リカバリを実行する] タブの [リストア・タイプ] セクションで以下のオプションのうち1つを 選択します。
 - [完全なリカバリを実行する]: データベースを最新状態(つまりアーカイブおよびオンライン REDO ログで使用可能な)最後にコミットされたトランザクションまでリカバリします。
 - [データベース・ポイント・イン・タイム・リカバリを実行する]:特定時点(つまり特定の時刻、 ログのシーケンス・ナンバー、または SCN)にデータベースをリカバリします。
- 5 [リカバリ・カタログ] タブで、[カタログの使用] オプションを選択してリカバリ・カタログの接続詳 細を指定します。
- 6 プライマリ・データベース・サーバーの Oracle[®] SID が、スタンバイ・データベースの Oracle SID と異な る場合は、[デスティネーションの詳細] タブを選択して、すべてのフィールドを入力します。 プライマリ・データベース・サーバーの [ターゲット・サービス]、[Oracle SYSDBA ユーザー名] と [Oracle SYSDBA パスワード] を入力します。
 - 重要: Data Guard 環境では、プライマリ・データベースとスタンバイ・データベースに、同じデー タベース名と同じ DBID が使用されています。ただし、Oracle SID は、データベース・サーバーを 差別化する目的で、同じでない場合があります。
- 7 **[クライアント指定]** リストで、プライマリ・データベース・サーバーの NetVault Backup クライアント 名を選択します。
- 8 [スケジュール] および [詳細設定] リストの記入も含めたリストア手順を続行します。

詳しくは、ジョブのファイナライズと実行を参照してください。

RMAN は、使用可能なフル、増分、またはアーカイブ・ログのバックアップのうち最適なものを自動的に 選択し、データベースのリストアとリカバリを実行します。



Α

- NetVault Backup 10.x サービス (netvault-pgsql) が Windows で開始しない
- データベースを追加できない
- バックアップが失敗した
- バックアップ・ジョブのハングアップ
- リストアが失敗した

NetVault Backup 10.x サービス (netvaultpgsql) が Windows で開始しない

Windows[®] イベント・ビューアに以下のメッセージが表示されているかどうかを確認します。PDT FATAL: lock file "postmaster.pid" already exists (PDT FATAL: ロック・ファイル「postmaster.pid」 はすでに存在しています)

NetVault Backup 10.x は PostgreSQL データベースを使用しています。PostgreSQL データベースが開始しない場合、NetVault Backup を開始することはできません。この問題に対処するには、ログで参照されている場所にある「postmaster.pid」を削除して、NetVault Backup サーバーを再起動します。詳しくは https://support.software.dell.com/netvault-backup/kb/122475 を参照してください。

データベースを追加できない

不具合

データベースをプラグインに追加しようとすると、以下のエラーが表示される。

Invalid Credentials. (認証情報が無効です。) Unable to configure plugin to connect to this database. (このデータベースに接続するプラグ インを設定できません。)

考えられる原因

LDAP の障害により、データベースへの接続が確立できない可能性があります。

解決策

LDAP を無効にして、再度データベースの追加を試行します。

バックアップが失敗した

このセクションでは一般的なエラーとその解決方法について記述します。この表に記載されていない エラーが発生した場合は、NetVault Backup ログから Oracle[®] データベースのエラー番号を取得し、 Oracle のドキュメントで関連するトラブルの解決手段を参照してください。

表 5. バックアップ障害のトラブルシューティング

エラー	説明
ORA-00245:制御ファイルのバッ クアップ操作が失敗しました。	Oracle [®] 11g Release 2 以降を使用する RAC 環境について、RAC データベー ス内のすべてのノードでスナップショットの制御ファイルが共有されてい ることを確認します。CONFIGURE SNAPSHOT CONTROLFILE NAME TO パラ メータを確認して、現在の設定を識別することができます。詳しくは、イ ンストールの前提条件を参照してください。
ORA-O1031:権限が不足しています。	[Oracle データベースを追加(または編集)する]ダイアログ・ボックス の[Oracle SYSDBA ユーザー名]フィールドに指定されたユーザーは、 SYSDBA 権限を持つ、Oracle パスワード・ファイルに含まれる、あるいは ORA_DBA OS グループのメンバーである必要があります。さらに、Oracle パスワード・ファイルで SYSDBA ユーザーが指定されている場合、本プラ グインの[設定]ダイアログ・ボックスで[Oracle のパスワード・ファイ ルを認証に使用する]オプションが選択されている必要があります。
データベースに接続できないか、 ORA-01034 : Oracle を使用できま せん。	[Oracle データベースを追加(または編集)する] ダイアログ・ボックス の Oracle SID フィールドで指定された Oracle インスタンスが OPEN 状態 である必要があります。バックアップを実行するには、このインスタンス が OPEN 状態でなければなりません。
ORA-01123:オンライン・バック アップを開始できません。メディ ア・リカバリが有効ではありません。	Oracle インスタンスが「 <i>前提条件</i> 」で指定されたように archivelog モード で実行されていません。
RMAN-06062: SPFILE を使用してイ ンスタンスを起動しなかったた め、SPFILE のバックアップはでき ません。	[Oracle データベースを追加(または編集)する]ダイアログ・ボックス で[制御ファイルの自動バックアップを使用する]または[SPFILEのバッ クアップに RAMN コマンドを使用する]オプションのいずれかが選択され ていない場合、データベースを SPFILE で起動する必要があります。SPFILE ファイルを作成してから SPFILE を使用してインスタンスを再開するか、 [Oracle データベースの編集]オプションを使用してこれら2つのオプ ションを選択解除してから[パラメータ・ファイル・パス]フィールドで PFILE へのパスを入力します。
RMAN-06180:増分バックアップ には Enterprise Edition が必要で す。	Oracle 9i では、増分バックアップのサポートは Oracle Enterprise Edition に限られます。Oracle 9i の Oracle Enterprise Edition 以外のエディション では、[累積増分] および [差分増分] バックアップはサポートされていま せん。[バックアップ・タイプ] に [フル] または [増分レベル 0] を選択 します。
RMAN-06181:複数チャネルを使 用するには Enterprise Edition が 必要です。	Oracle 9i では、バックアップおよびリストア中の複数のチャネルのサポートは Oracle Enterprise Edition に限られます。Oracle 9i の Oracle Enterprise Edition 以外のエディションの場合は、[チャネル数]が「1」に設定されていることを確認します。

表 5. バックアップ障害のトラブルシューティング

エラー	説明
すべてのデータのバックアップに 失敗しました。	SYSDBA パスワードが Oracle サーバーで変更された場合、本プラグインの データベース設定で更新する必要があります。詳しくは、保存したパス ワードの消去を参照してください。
「specification does not match any datafile copy in the repository (指定した値がリポジトリ内のど のデータファイルにも一致しませ んでした)」または「specification does not match any backup set in the repository (指定した値がリポ ジトリ内のどのバックアップ・ セットにも一致しませんでした)」 エラーが発生し、Flash Recovery Area のバックアップに失敗しまし た。	Flash Recovery Area のバックアップは実行されましたが、[ディスク] または [ディスクとテープ両方] のバックアップ格納先で実行された前回の バックアップ用リカバリ・ファイルを FRA が確認することができません。 Flash Recovery Area バックアップ・タイプのバックアップを実行する前 に、FRA をパックアップ格納先として使用する必要があります。

バックアップ・ジョブのハングアップ

不具合

制御ファイルがロックされ、バックアップ・ジョブがハングアップし以下のログが出力される。「Log Message: Starting Control File and SPFILE Autobackup at <date>. (ログ・メッセージ:制御ファイル と SPFILE の自動バックアップを開始しました。<日付>)」またはこのジョブがキャンセルされ、後 続のバックアップ・ジョブがログに以下のエラー・メッセージ付きで完了しました。「ORA-00230: operation disallowed: snapshot control file enqueue unavailable. (ORA-00230: 処理不可:スナップ ショット制御ファイル・エンキューが使用できません。)」

考えられる原因

- Plug-in for Oracle が正しく設定されていない、つまり[設定] ダイアログ・ボックスの [NetVault Backup サーバー] フィールドが設定されていない。
- 制御ファイルの自動バックアップが本プラグインの正しい設定で有効になっていない。

解決策

- 1 ハングアップしたバックアップ・ジョブをキャンセルします。
- 2 制御ファイルのロックを解除します。
 - a SQL*Plus を起動してローカル・インスタンスに管理者権限で接続します。

SQLPLUS SYS AS SYSDBA

b 制御ファイルのロックを検証し、以下のクエリを使用して障害となっている SID を取得します。

SELECT s.SID, USERNAME AS "User"
FROM V\$SESSION s,V\$ENQUEUE_LOCK l WHERE l.SID = s.SID
AND l.TYPE = 'CF' AND l.ID1 = 0 AND l.ID2 = 2;

以下の例では、障害となっている SID は 133 です。

```
SQL> SELECT s.SID, USERNAME AS "User" FROM V$SESSION s,
V$ENQUEUE_LOCK 1 WHERE 1.SID = s.SID AND 1.TYPE =
'CF' AND L.ID1 = 0 AND 1.ID2 = 2;
SID User
```

133 SYS SQL>

c 以下のクエリを使用して SID に対応するプロセス ID (SPID)を取得します。

SELECT s.sid,p.spid
FROM v\$process p, v\$session s
WHERE p.addr = s.paddr order by s.sid;

以下の例では、障害となっている SPID は 3184 です。

d SQL*Plus を終了し以下の OS シェルでプロセスを停止します。

Kill -9 <spid>

例:

SQL> exit Disconnected from Oracle Database 10g Enterprise Edition 10.2.0.1.0 - 64 bit Production With the Partitioning, Real Application Clusters, OLAP and Data Mining options izmir:/export/home/o10g => kill -9 3184 izmir:/export/home/o10g =>

 [NetVault Backup サーバー] フィールドと [NetVault Backup サーバーからリストアを実施する] フィールドがデフォルト設定の構成で説明されているデフォルト属性で定義されているか確認します。

リストアが失敗した

表 6. リストア障害のトラブルシューティング

	エラー	説明
•	 ORA-19511: メディア・マネージャでエラーが発生しました。 エラー・テキスト:SBT error=7011, errno=1, sbtopen: system error 	NetVault Backup サーバーと [NetVault Backup サーバーからリスト アを実施する] の設定が「デフォルト設定の構成」で説明されている デフォルト属性で定義されているか確認します。
•	 ORA-19511: メディア・マネー ジャ・レイヤでエラーが発生し ました。エラー・テキスト:SBT error=7063, errno=0, sbtopen: i/o error 	
•	 ORA-27007:ファイルのオープンに失敗しました。 ORA-27012:ファイルの読み取りに失敗しました。 	

表 6. リストア障害のトラブルシューティング

エラー	説明
 RMAN-03002 : Duplicate Db コマンドが < 日_時 > で失敗しました。 RMAN-03015 : 格納されているスクリプト Memory Script でエラーが発生しました。 RMAN-06054 : 不明のログを要求するメディア・リカバリ : thread < 番号 > scn < 番号 > 	Oracle [®] 9i では、RMAN がバックアップ・ストリームで使用可能なロ グ以外のログを適用しようとするため、本プラグインの クローン・ データベース 操作がエラーで終了する可能性があります。
RMAN-06054:不明のログを要求するメ ディア・リカバリ: <n> seq 40 scn <n></n></n>	このエラーは、 クローン・データベース 操作の実行中に発生すること があります。このエラーは、古い制御ファイルに新しいアーカイブ・ ログの記録がないことが原因で発生します。RMAN コマンドの ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS を実行すると、データベースがオンラ インになります。
警告()データ・プラグイン() が終了コード 5 で失敗しました。	この警告は、Oracle 11g データベースでブロック・メディア・リカバ リが選択された場合に表示されます。「失敗」メッセージが表示され ても、リカバリは正常に終了しており、Oracle でリカバリしたデー タへのフル・アクセス権が許可されています。 コード5は、Oracle 11gから発行される警告であり、リカバリが必要 であることをユーザーに通知します。ブロック・メディア・リカバリ の実行中に、本プラグインはすでに RMAN リカバリ・コマンドを含ん でいるので、このメッセージは無視できます。



Α

Automated Storage Management (ASM)

Oracle[®] データベース・ファイル専用の垂直統合されたファイル・システムおよびボリューム・マネージャ。

D

Data Guard

人的エラー、環境災害、またはデータ損傷などの計画外の事象や日常の保守作業のための計画ダウンタ イムによる損失を回避または最小化する分散コンピューティング・システム。

F

Flashback Database

データベース全体を以前の一貫性のある SCN まで戻すこと。データベースのフラッシュバックは従来の メディア・リカバリとは異なり、物理ファイルをリストアせずに、変更されたデータ・ブロックの保存 済みイメージを使用して現行のデータファイルを過去の状態にリストアします。

0

Oracle Clusterware

Oracle データベースと統合された、ポータブルなクラスタ管理ソリューション。

R

Real Application Clusters (RAC)

サーバー・クラスタ間で単ーデータベースの透過的なデプロイをサポートし、ハードウェアの障害や計 画停止への耐障害性を提供します。

Recovery Manager (RMAN)

Oracle データベースのバックアップおよびリカバリに適したユーティリティです。RMAN バックアップ では、最大限の信頼性が得られると同時に、バックアップ計画の定義時に最大限の柔軟性が提供されま す。Oracle の RMAN ツールで使用可能なバックアップ・タイプとオプションがサポートされます。ま た、人的オペレーションおよびデータベース管理者のスキルにあまり頼ることなく多数のリカバリ・シ ナリオを処理できます。

また、バックアップ、アーカイブ・ログ、およびそれ自体のアクティビティに関する多数のメタデータの記録を管理することにより、バックアップ計画に関連する管理作業を軽減します。この情報は、 RMAN リポジトリと呼ばれます。リストア・オペレーションでは、RMAN でこの情報が使用されるため、 多くの状況でリストアに使用するバックアップ・ファイルを特定する必要がなくなります。

resetlogs

データベースを開くためのメソッド。不完全リカバリまたはバックアップ制御ファイルを使用したリカ バリの後に必要になります。OPEN RESETLOGS は、ログのシーケンス・ナンバーを1にリセットし、オ ンライン REDO ログを消去します。

OPEN RESETLOGS オペレーション前のバックアップは有効なままのため、OPEN RESETLOGS オペレー ションの後に実行したバックアップと一緒に使用することにより、データベースの損傷を修正できます。

S

System Global Area (SGA)

高速なアクセスのためにデータを格納するメイン・メモリ内の領域。

あ

インスタンス

バックグラウンド・プロセスとメモリ・バッファの組み合わせ。

か

完全リカバリ

コミットされたトランザクションを失うことなく、データベースを最新の状態にリカバリします。通常、完全リカバリは、メディア障害によって1つ以上のデータファイルまたは制御ファイルが損傷した 場合に実行します。

さ

差分増分バックアップ

Level1 または Level 0 の最後のバックアップ以降に変更されたすべてのブロックをバックアップする増 分バックアップ。差分バックアップは、増分バックアップのデフォルト・タイプです。差分増分バック アップを使用したリカバリでは、プラグインは、リストアされたテーブルスペースのバックアップ以降 に実行されたすべての Level 1 の差分増分バックアップを適用する必要があります。

システム変更番号(SCN)

特定時点にコミットされたデータベースのバージョンを定義するスタンプ。Oracle は、トランザクションがコミットされるたびに一意の SCN を割り当てます。

た

データ ベース識別子 (DBID)

データベースを識別するために内部的に一意に生成される番号。Oracle では、データベースの作成時に 自動的にこの番号が作成されます。DBID は、障害復旧シナリオで必要になります。

データベースの Point-in-Time リカバリ (DBPITR)

データベース全体を過去の特定の時刻、SCN、またはログのシーケンス・ナンバーにリカバリすること。

は

バックアップ・セット

1つ以上のデータファイル、制御ファイル、SPFILE、およびアーカイブ REDO ログ・ファイルのバックアッ プ。各バックアップ・セットは、バックアップ・ピースと呼ばれる1つ以上のバイナリ・ファイルで構成 されます。デフォルトでは、各バックアップ・セットは1つのバックアップ・ピースから成ります。

バックアップ・ピース

RMAN によって生成されるバックアップ・ファイル。バックアップ・ピースは、RMAN のみが作成またはリ ストア可能な専用形式で作成され、バックアップ・セットと呼ばれる論理コンテナに保存されます。

複製データベース

RMAN の DUPLICATE コマンドを使用して、ターゲット・データベースのバックアップから作成される データベース。

フラッシュ・リカバリ領域(FRA)

制御ファイルのコピー、オンライン REDO ログのコピー、アーカイブ REDO ログ・ファイル、フラッシュバック・ログ、RMAN バックアップなどのリカバリ関連ファイルの格納のために使用可能なオプションのディスクの場所。FRA 内のファイルは、Oracle データベースと RMAN によって自動的に管理されます。

ブロック・メディア・リカバリ

RMAN を使用して、影響を受けたデータ・ファイルはオンラインのままで、データ・ファイル内で損傷 または破損したブロックのみをリカバリします。

並行処理

複数のチャネルを割り当て、同時に複数の RMAN バックアップおよびリカバリ・オペレーションを実行 すること。1 つのジョブで複数のバックアップ・セットをパラレルに読み取りまたは書き込むことがで きます。チャネル数は、バックアップ・デバイスのドライブ数以下 (<=) である必要があります。

や

ユーザー管理によるバックアップ方法

基本的に、データベースを構成するファイルのバックアップとリストアは、ホストの OS コマンドと SQL*Plusのバックアップおよびリカバリ関連機能を組み合わせて使用することによって実行されます。

6

リカバリ

データファイルのリカバリとは、リストアされたデータファイルのコピーに、データベースのアーカイ ブおよびオンライン REDO ログに記録された変更を適用することです。リカバリという用語には、しば しばリストアおよびリカバリの両方のプロセスが含まれます。

リストア

テープ、ディスク、またはその他のメディア上のバックアップ場所からデータファイルまたは制御ファ イルを取得し、データベース・サーバーで使用できるようにすることです。

累積増分バックアップ

Level 0 での最後のバックアップ以降に変更されたすべてのブロックをバックアップする増分バック アップ。累積増分バックアップでリカバリしている場合、適用する必要があるのは最新の累積増分バッ クアップのみです。

ログのシーケンス・ナンバー (LSN)

REDO ログ・ファイル内の一連の再実行記録を一意に識別する番号。Oracle は、1 つのオンライン REDO ログ・ファイルに記録してから別のログ・ファイルに切り替えるときに、自動的に新しいファイルにロ グのシーケンス・ナンバーを割り当てます。

Dellについて

Dell はお客様の声を大切にし、常に製品やサービスの向上に努めております。詳細については、 http://software.dell.com/jp-ja/を参照してください。

Dell へのお問い合わせ

製品に関するご質問および製品のご購入: 03-5908-3511

E メール: info.jp@software.dell.com

テクニカル・サポート用リソース

テクニカル・サポートは、有効なメンテナンス契約が付いた Dell ソフトウェアをご購入のお客様、 およびトライアル版をご使用のお客様がご利用いただけます。サポート・ポータルにアクセスするに は、https://support.software.dell.com/ja-jp/ に移動してください。

サポート・ポータルには、問題を素早く自力で解決するために役立つ自己支援ツールが用意されており、1年中毎日24時間ご利用いただけます。また、サポート・ポータルでは、オンライン・サービス・リクエスト・システムを使用して、製品サポート・エンジニアに直接連絡することもできます。

サポート・ポータルでは次のことを実行できます。

- サービス・リクエスト (ケース) の作成、アップデート、および管理
- ナレッジベース記事の参照
- 製品に関するお知らせの入手
- ソフトウェアのダウンロード試用版ソフトウェアを入手するには、http://software.dell.com/trials にア クセスしてください。
- 入門ビデオの閲覧
- コミュニティ・ディスカッションへの参加